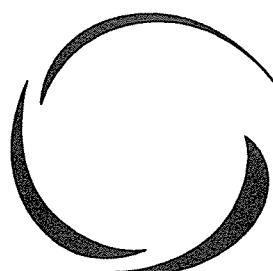


C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

菊地清明 オーラルヒストリー

元国連大使、元外務審議官

〈上巻〉



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

菊地清明・オーラルヒストリー

目次

第 1 回 仙台一中・第一高等学校時代

仙台に生まれる	7
仙台一中へ	11
校風と名物校長	12
アイドル先生と英語教育	14
東北の風土・気質	17
一高へ	18
戦前のエリート教育	19
記憶に残る恩師	21
——竹山道雄先生とドイツ語	21

第 2 回 一高・東大・海軍時代

続・一高	27
太平洋戦争直前の一高生	28
——ソルゲ事件・汪兆銘・ヒトラー・ユーゲント	28
東大法学部の頃	30
海軍対潜学校で鍛えられる	32
馬公特別根拠地隊司令部へ	34
澎湖島で終戦をむかえる	36
復員、東北終戦連絡事務局に勤める	39

第 3 回 外務省入省

高文試験・外務省採用試験	45
外交官に必要な資質	49
外務官吏研修所での研修	51
——外交官としての心得を学ぶ	51
調査局二課へ	54
戦後最初のアメリカ研究	56
占領行政の一面	57
——外交団との接触はディレクティブ違反か?	57
調査局の陣容	59
戦後経済に思う	61

第 4 回 ガリオア留学時代

ガリオア留学でワシントンへ	65
留学生活のスタート	68
——SAISの学生として	68
留学中に出会った人々	72
一九五〇年のワシントン	74
——朝鮮戦争・マッカーシー旋風	74
SAISで培った人脈	76
経済局第三課時代	78
——米州担当に戻る	78

日米通商航海条約の準備作業	79
本当の外交とは	82

第 5 回 在英大使館・パキスタン大使館時代

外務省と通産省	89
——ココム、産業政策をめぐる	
対日講和条約は寛大か？	91
——日米加漁業条約・日米民間航空協定	
一九五二年、在英大使館へ	92
プロトコールの本場、英国と日常生活	93
皇太子殿下の訪英	95
パキスタン転勤	97
——第二の貿易相手、カラチへ	
貿易振興と政府の民間支援	98
五〇年代のパキスタン事情	100
イギリスの植民地統治に思う	103
重光外相時代	104
——外務省の「御三家」	

第 6 回 欧米局一課時代

重光葵と吉田茂	111
ガリオア・エロア返済問題	113
日米査証協定交渉	116
ペルー、ボリビアへ	120
——大統領就任式特派大使に随行	
対米協調と日本の自主性	121
ガット加盟と日本	123
鳩山、岸内閣の対米姿勢	124
一九五〇年代後半の経済協定	126
政党出身外務大臣、その付加価値とは？	127

第 7 回 在米大使館書記官時代

在米大使館時代	133
——経済貿易担当書記官として	
対日輸入制限対策に走りまわる	134
アメリカの通商政策	136
——六〇年代と八〇年代の違い	
アンチ・ダンピング法問題	138
ワシントンは「顔」と「コネ」の社会	139
日米の技術格差	140
訴訟社会、アメリカの実情	141
輸出拡大と在米大使館	142
ケネディ大統領就任式	143
大統領としてのアイゼンハワーを再評価する	144
大使の仕事とは？	145
ワシントンから見た日米関係	146
草創期の戦後対米外交	148

第 8 回 大平外相秘書官時代 その 1

大平外相秘書官として	153
秘書官の職務とは？	155
秘書官の任期と役割分担	159
宏池会の人びと	160
大平外相の外交手法	162
——ノーチラス号香港問題・周鴻慶事件	
オーソドックスな外交	163
六〇年代前半の日米関係	165
利子平衡税交渉	166
キューバ危機への対応	167
大平正芳のソ連観	169

第 9 回 大平外相秘書官時代 その2

大平外相の国連演説……………173

欧州訪問の印象
——クリスチャンとしての大平正芳……………174

一九六二年の日韓・日中問題……………175

国際経済のなかの日本
——ドル防衛・輸入課徴金……………178

北欧三国公式訪問
——英国貴族の趣味にふれる……………180

中共との摩擦……………182

大平外相の新機軸……………183

戦後アジア外交
——ビルマ・インドネシア……………185

一九六〇年代の日米関係
——タメージコントロールの手法……………186

大平政策研究会について……………187

大平正芳の人物論・政治思想……………188

第 10 回 米国カナダ課長・ドイツ大使館時代

米国カナダ課長を志願……………195

対米加経済ミッシヨンの派遣……………197

利子平衡税交渉
——米国カナダ課長として……………198

輸出自主規制の功罪……………199

ベトナム戦争の経済的影響……………201

「巻き込まれ論」と世論動向……………203

日米貿易経済合同委員会について……………205

ドイツ大使館の総括参事官として……………206

東欧情報収集に専念する……………207

日独戦後復興を比較して……………209

米国カナダ課の陣容……………212

第 11 回 ドイツ大使館・在米大使館時代

ドイツの戦後
——諜報機関と治安維持機構の存在……………217

西ドイツの東方政策……………218

「プラハの春」と情報収集……………219

二度目の在米大使館勤務
——化合織の対米輸出規制交渉……………222

「糸と縄の取引」
——沖繩返還交渉……………224

アメリカの二元外交に用心！……………225

ニクソン大統領の評価……………228

キッシンジャー外交とは？
——訪中問題・対日外交……………229

ニクソン政権とケアム・ドクトリン……………231

一九七〇年代前半のアメリカ……………232

菊地清明

オーラルヒストリー

第1回

仙台一中・第一高等学校時代

開催日：2001年6月28日

開催時刻：午後2時30分

終了時刻：午後4時40分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

股野 景親（元スウェーデン大使）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

有限会社ペンハウス 戸部芳珠子

■ 仙台に生まれる

佐道 (オーラル・ヒストリー・プロジェクトの説明、記録の保管方法、公表の仕方等々)。

股野 鹿島平和研究所かどこかで、こういうインタビュを既にされていらつしやいます。

菊地 実は、この様なインタビュは三回目ぐらいなんですよ。最初は、渡邊昭夫先生にやつてもらった。東大の図書館で三回やりました。それから、二回目は、いま進行中なんだけど、鹿島平和研究所で。だんだん僕もこのインタビュに馴れてきました。ですから、今回は、過去の記録なんか全部読み返したら、時々間違ったことを言っているの、それを訂正方々、いまままで特にカバーしなかつたようなところをお話ししたいと思います。

いま佐道先生のお話のなかで、いふなれば口上がありました、僕の経験からいいますと、戦後の日本外交に関する限り、いわゆるほとんど秘密というのはないんです。ですから、どうしても出してもらいたくないというようなのは、ほとんどありません。むしろ、戦後の日本外交の最大の特徴は、秘密がなかつたということ。つまり、秘密外交はやれなかつたということです。おそらく唯一の例外は、佐藤栄作総理と若泉敬君の合作、「糸と繩の取引」でしょう。

武田 沖繩ですね。

菊地 あれぐらいなもので、あれ以外は日本外交の機密というのはないんです。ないというよりも、むしろ、よく情報と諜報というのが対比されますね。戦後の日本外交には、情報はあつても、「諜報」はなかつたですよ。むしろ、諜報を取ることを非常にデイスカレッジ(反対)されたという傾向がある。それは特に社会党が政府攻撃の材料に、諜報活動というのを悪の如く宣伝しましたからね。これが重なって、日本外交というのは非常にオープン

になつてゐる。ですから、こういう記録を取る場合でも、ほとんど秘密というのはないと思います。ただ、皆さん方がおそらく追求しておられるのは、そういうサブスタンス(実質的なもの)よりも、むしろその当時を取り巻く雰囲気的なもの、歴史というか文面に表れない雰囲気的なものを、われわれがもしお伝えできれば、それがいいのだと思います。例えば、僕が渡邊昭夫さんと菊地努さんの二人からインタビュを受けたんですけども、その時はガリオア援助が中心でした。ガリオア(返済協定)のことは、僕は担当官でやつたもんですから、これは、いわば戦後日本外交史のなかでのちよつと秘の部分なんですよね。実際は、あんまり秘じゃなかつたんですけど、秘だと思われた部分。そういうことでやつた。その場合でも、僕が心掛けたのは、学者がいろいろな資料を読んでもわからないような、その当時の国内の雰囲気とか、国会との関係だとか、そういうものを中心にお話ししていると思います。

それから、僕が準備していろいろ考えたのは、僕の前にオーラル・ヒアリングをやつた人がいるので、その人との重複関係とか、そういうことはあまり気にしなくていいんですかね。

佐道 全く気にしないで。

股野 全くございませぬ。

菊地 なんとなく無駄なような気がする。

股野 いえいえ、とんでもない。そのへんは、全くご自由に。

菊地 それならいいんですけれども、例えば、戦後の経済外交だけを見れば、僕も経済外交をずいぶんやつた方ですけども、やつぱり宮崎(弘道)君なんかの方がいろいろ詳しいですからね。彼は実際に最初から最後まで経済担当ですからね。そういう人には、とても情報の量においては僕はかなわないわけですが、それはいいんですか。

佐道 全くそこは気になさらないで。

股野 やつぱり自分で手掛けられたことの話というのは、余人をもつては語れないお話なんですね。ここは本当にそうでございます。

菊地 じゃ、そういう了解で。

股野 ありがとうございます。

佐道 例えば、大使は何回お聞きする予定だとか、そういうことを予め決めているものではなくございません。

菊地 進行に応じてね。

佐道 はい。大使のお時間の許す限り。

菊地 いや、いま、僕は今ずいぶん暇ですよ。

佐道 私どもは、やつぱり当時の文章を読んでみまして、時代をおいて私どもが読んでいる読み方でいいのかとか、さつき大使は、当時の「雰囲気」というふうにおっしゃいましたけれども、われわれが認識しているよりも、問題の違う側面ですとか、あるいは、この問題は非常に重要だったけれども、これは全然顧みられていないとか、そういった問題もありましたら、是非そういったことも含めてご指摘していただいたりとか、本当に当事者でないとかわからないことを含めてお話をいただければ、大変私どもにとつては参考になります。

菊地 それから、もうひとつ、これは記録を外してください。僕

が「尋問」を受ける立場だけれども（笑）。

武田 そういうものではございません。

菊地 尋問する方々のバックグラウンドを一言ずつ教えていただければ、特にご専門がなかったかということ、それから、もうひとつは、こう言つてはいかにかんかもしれんけれども、学歴とかを教えていただければ……。

股野 学歴とかは紙であるんじゃないか。

菊地 それは書物であるかもしれないけれども。

佐道 いますぐにそれがないので、ちよつと。

菊地 ほんとに簡単に一分ずつでいいんです。僕がお話する時も、非常に参考になるんじゃないか。

井上（自己紹介）。

菊地 細谷千博さんは僕の先輩です。

井上 さきほどお話がありました菊地努氏は大学院の先輩です。

菊地 先輩ですか。

井上（自己紹介）。

菊地 わかりました。

佐道（自己紹介）。

股野 とても外務省はお詳しいです。

菊地 そうですか。滅多なことでは言えませんな。

武田（自己紹介。重光葵の研究をしていると告げる）。

菊地 重光さんといえば、僕のところは、家内の関係で、外務省の重光晶さんのお家の方と関係があります。なんかそんなんで、うんと遠いんですけど。

股野 ここは余談が許されるところなんで、余談をひとつ申し上げますと、重光葵さんの息子さんがいらいらっしゃいますよね。実は、私がいま活動するのをサポートしていただいている前田建設の一族のなかの前田信治さんという方が去年亡くなられたんですが、亡くなられる前に、私に時々ご相談があったのは、この息子さんと学校で一緒だったので懇意である。それで、重光さんの息子さんの方が湯河原の奥のほうに別荘がある。

武田 いま記念館がございます。

股野 そこに大変な文書がある。これをなんとかきちつとしたいんだということ、いろいろ相談を受けているんだというお話で、前田さんも財界のほうの方にお話しになって、これは歴史的なものだから何かできないかと。ところが、難航しているんだということ、私に言っておられましたけど、とにかく湯河原に置いておくのはもったいないという史料はたくさんいまでもあるんだそう

ですね。いま、まだ息子さんがご健在だからいいけど、だんだんお歳でしょう。そういうものをどうするかというのは、ある意味で国の問題ですよ。

菊地 伝記が出てますよね。『勇断の外相』。

武田 小説家の阿部牧郎さん。この間、岡崎（久彦）さんも『重光・東郷とのその時代』を書かれました。

菊地 あの人と近いのは、外務省では奈良（靖彦）さんなんだよ。奈良さんの奥さんが三信ビルのオーナーの娘さんなんだ。

武田 林彦三郎さんですか。

菊地 その人が重光さんの最大のドル箱。

股野 サポーター。

武田 そうです。

股野 奈良靖彦さん。

菊地 奥さんは道子さんというんだけど、彦三郎さんの一人娘さんです。

股野 おもしろいですね。

武田 それは是非、伊藤先生と私でインタビューを（笑）。

菊地 それで、重光さんが一時、林さんの別荘に住んでいたのかな。

武田 林さんと重光さんのお宅は材木座で鎌倉で一緒だったんですね。

菊地 その関係で、僕はそこへ行ったことがあります。

股野 いや、余談じゃなくて、これがやっぱり研究者の側にはまさにゴールド・インフォメーションなんですね。

武田 林彦三郎さんは、ずっと私はどうしても調べられなかったです。たぶん興信録で人名索引。

菊地 あの人はセルフメイドマン（自力で成功した人）だよ。全くのセルフメイドマンだ。

股野 奈良大使の夫人とは存じませんでした。

菊地 外務省に入って、僕は最初に行ったのが駐英大使館。一九五二年七月です。その時、僕は外交官補といたんですが、その時すでに奈良靖彦さんといういまお話ししている人は、二等書記官でいたんですね。そこへ、林彦三郎さんがお嬢さんの道子さんを連れて、ずっとヨーロッパの在外公館を回って歩いたんです。道子さんのお婿さん探します。僕は結婚してましたけれども、独身の人もいて、そのうち、奈良さんがいちばん年長。われわれの兄貴分だったんですよ。その奈良さんに白羽の矢が立った。われわれはそのあと奈良さんをずいぶん冷やかしたものです。

武田 こんなところで林さんのお話が聞けるとは。

股野 つい先刻、国際問題研究所の月例懇談会がありました、奈良大使と私はレギュラーでいつも出ていました。

菊地 僕も前出ていたんだけどね。

佐道 奈良大使はまだお元気ですか。

股野 ええ、必ず何かご発言があります。

佐道 講談社インタビュナショナルかなんかの。

菊地 お父さんが講談社の役員だったんです。ですから、奈良さん自身も退官後、講談社の顧問をやっているはずですよ。外務省としては非常に異色な外交官。異色だという点は、彼は本省では課長以上のポストをやらなくて、ずっと在外公館だけ。われわれは、「あんたは人工衛星だ」と言った。全然着陸しない。

股野 しかし、極めて切れ味のいい有能な。

菊地 あの人は一橋出身で、英語がものすごくうまい。

股野 特に大使の頃に、私は奈良さんが書かれた電報を東京で拝読する立場にいたんですけども、切れ味のいいおもしろいものでした。それで、有名なのはカナダのトゥルドー首相との対話です。ああいう対話を相手国の首相とできる大使。

菊地 それはトゥルドーが最初じゃないんです。リー・クアンユ（シンガポール首相）との関係もそう。彼は外務省の異才だね。

股野 そうですね。異才であり、逸材であることも間違いない。

菊地 ちょっと余談が先行した。

股野 これがこのオーラルのいいところなんです。つまり、本論と外れているかの如くありながら、実は、日本の外交を勉強をするうえでの人脈構成がいろいろここで。

菊地 ここに、人脈とか外務省の人事の一端が表れているわけですよ。外務省というところは、だいたい在外勤務と国内勤務とが普通同じぐらいの長さ。本省の局長、外審、次官なんかをやる人は、どうしても国内が長くなります。

股野 これで、一応お三方の自己紹介をいただきました。

菊地 ありがとうございます。

井上 大使のお生まれになったところぐらいから、是非。

菊地 僕は宮城県仙台市で生まれて、僕の両親は両方とも教員なんです。で、教育一家に育ったわけですが、生まれが大正十一年（一九二二）十二月一日ですね。子どもの時はなんということはありません。小学校は仙台の小学校へ行きました。それから、昭和十年（一九三五）に宮城県仙台第一中学校。通称仙台一中というところへ行つたんですけれども、そこから僕は幸いにして四年から一高へ来たもんだから、四年間そこにいました。中学時代から始めたほうがいいですかね。小学校はなんといいことはないですよね。

股野 いやいや、小学校で何かご記憶があることを。

菊地 小学校でただひとつ記憶があるのは、小学校の五年生の時、皇太子殿下がお生まれになった。それで、「皇太子様お生まれになった」という歌ができました。祝砲が轟いたということはよく覚えてます。それが、ある程度、大事件というか、非常に大喜び、大騒ぎしました。それが小学校じゃないですか。

佐道 ご兄弟というのはいらっしゃいますか。

菊地 兄弟は、僕は姉が一人と弟が二人。次の弟は一橋ですし、

三番目の弟は法政へ行きましたけど、非常に不幸なんですけど、これが両方亡くなったんです。ですから、いま姉と僕だけです。

当時、郡視学というのがあつたんですね。僕の母方の祖父（有馬深治）が、この郡の視学官というのをやっています。漢学者だったんですね。

股野 シガクはどういう字ですか。

菊地 視学は監視の視。

股野 それから、学問の学。カンは監ですか。

菊地 いや、普通の官です。

股野 官庁の官ですか。

菊地 戦前、視学というポストがあつたんです。県視学とか、郡視学とかね。いまでいえば、それは教育委員みたいなもんですね。

井上 視学委員というのはありますね。視察の視に学で、文部省が各大学に来て、視学委員の視察だということでみんな緊張して、その言葉はありますね。

菊地 視学というのは監察だね。

股野 郡の監察ですか。

菊地 郡内の小学校、中学校教育の監察をやる人。県、郡、町村とある。ちよつと皆さんと世代が違うんだよね。

股野 いまはもう、郡というものは行政単位ではほとんど意味がない。郵便単位ぐらいでしょう。ちゃんと郡があつたんですね。

菊地 なぜ祖父の名前を出したかという、僕の名前の清明というわりと漢語的な名前ですが、それを付けてくれたのが、その祖父なんです。中国では、四月三日に清明節というのがあるでしょう。清明節というのは、春が来たといって、お祝いをするらしいんですね。だから、僕は中国人に自己紹介する時は、ジューデー・チンミン（菊地清明）と言います。

それから、父方の実家は、仙台じゃなくて、栗原郡若柳町とい

うところですか。若柳町というのは、ご存じない方は多いと思えますけども、昔、蚊帳の生産地で有名なところですよ。隣の町が有名で、築館町です。代議士でいえば、長谷川峻とか、大石武一さんなんかが出たところですよ。僕の父親は、大石武一さんのお父さんの倫治さんと仙台二中で同級生でした。

■仙台一中へ

菊地 中学校のほうへ移りますと、僕が行ったのは、仙台一中というんです。仙台一中というのは、よく「あなたは仙台一中ですか。仙台二中ですか」と聞かれるんですけども、実は、最初は仙台一中しかなかった。それが、途中で、分校みたいに仙台二中というのができた。戦前のわれわれは自分の中学校を非常に自慢したものですよ。いい中学校に入るには、大変な競争がありました。仙台一中というのは、県下ではもちろんいちばん古くて、初代校長というのが大槻文彦という人なんです。彼は『言海』という辞書の著者の大槻文彦さんです。彼が初代の校長でして、大変な碩学を迎えたというので、仙台一中というのは非常に名声があつたわけです。そのほかに、伊達藩には養賢堂（一七三六年創立）というのがあります。藩校としては有名で、著名な学者や教育者を輩出させた。大槻文彦さんの先祖の大槻玄沢や高野長英などはその出身ですよ。

股野 そのご出身なんですか。

菊地 はい、大槻文彦さんはあとです。

股野 里帰りされた。

菊地 大槻文彦さんが初代校長（明治二十五年―二十八年）。中学校の先輩としては、皆さん方の世代はご存じかどうか知りませんが、吉野作造。日本の政治学史には必ず出てくる人。彼は仙台市じゃなくて古川町の出身。それから、ほとんど同時代で、劇作

家の真山青果。彼も仙台市です。東二番町小学校を出た。それから、戦後非常にもはやされた「最後の海軍大将」井上成美。彼は明治四十年かの仙台一中の卒業生なんです。ただ、これは非常におもしろいケースで、さつき一中から二中に分かれたと言ったでしょう。井上大将は一中に入って、四年生の時、二中に移って二中を卒業して、海兵へ入った。戦後では、あなた方も御存知なのは、東大の憲法の教授の樋口陽一。芸能界では、井上ひさし、それから、菅原文太。ぐつとくだつて菊地清明がいるわけです。

股野 いやいやいや。さきほどのヨウケンドウというのはどういう字ですか。

菊地 養う賢人の。

股野 これが藩校ですね。

菊地 藩校だった。有名ですよ。中学時代の話をちよつと続けますと、あの頃の中学というのは、だいたいその土地にあるナンバースクールと称する（旧制）高等学校、一高、二高、三高から八高まであつた。その高等学校に入るのが目標。もちろん中学生ライフというのはありますよ。五年間ですから、長いですから、中学生生活はあるんだけど、そこが最終の人は、だいたい七割ぐらいですね。あとの三割は、高等学校、専門学校に進むわけでしょう。それで、その場合に、その土地のナンバースクールに。ナンバースクールというのはわかりますか。

武田 わかります。

菊地 ナンバースクールに入れることに非常に熱心で、中学生も四年生、五年生になると、高校受験に熱心になる。われわれの時代は、一中と二中で、今年はどうちがが多く仙台の二高に入ったかということ競争するわけです。で、盛んに競争させまして、去年は一中が勝った、今年は二中が勝ったというようなことで、それがまた、校長先生はじめ、先生方が、いまの大学の受験競争みたいにやらせたわけです。僕の時、だいたい一中が勝っていた

んです。だいたい一年間に、三、四十人は一中から第二高等学校に入っていたと思います。

■校風と名物校長

菊地 それから、仙台一中というのの校風が、非常に変わってまして、さきほど言った養賢堂以来の校風、伝統を伝えているわけでしょうか。その頃、小平高明校長という人がいまして、全国でも「名物校長」だったんです。有名な教育県である長野県出身の人でして、この人をわれわれは「仁丹」というあだ名で呼んでいました。なぜ仁丹かというと、彼は祝祭日には必ず大礼服を着て、山高帽を被り、勲章を付けて出てくるわけです。それがちようにど昔の仁丹の広告にそっくりだったんです。そういう時代です。必ず祭日には、「御真影の奉拝」という儀式があったんです。御真影の奉安所というのが各中学に必ずあり、その前を通る時には、必ずお辞儀をして通る。小平校長からは、われわれは修身を教わった。この人は学識の豊富な人として、われわれ多感な中学生に對して、修身、哲学と、いろいろ教えてくれたんですよ。そのレベルは、いまにして思えば、かなり高かったような気がします。例えば、いまでも思い出すのは……。こういう話でいいんですか。

佐道 もちろんです。

菊地 彼が最初に「ラール・プー・ラール」(Lat pour Lat)と言う話をしてくれた。「ラール・プー・ラール」はわかります？「芸術のための芸術」。つまり、大正、昭和時代の「ラール・プー・ラール」という芸術至上主義があった。そろそろ軍国主義が華やかになるんですけども、同時にそれに対抗するような芸術耽溺主義(テレタンティズム)があった。つまり、実学だけが学問じゃないし、「ラール・プー・ラール」と同じく、全く研究のための研究というか、そういうものも人間の営みとしては尊いのだ

と。いまでも思い出すんですけども、小平校長は、ある科学者がいて、これは女性の前で失礼だけでも、「蚤の金玉を研究する」という人があっても、これは大事なことなんだ」という話を、われわれにしてくれたんです。中学生でしょう。へええーと思うわけです。そういう全く普通の社会と違う純粹な学問の世界とか、科学の世界とか、芸術の世界はあるんだということを教えてくれました。

他方、小平校長は、われわれに非常に勉強を強いた。「学術選手権」という制度をしきまして、各学期ごとに全生徒の試験の成績を貼り出す。各課目について、いい成績を取った数で順番をつけるわけです。それで、一等になった人に「学術選手権」ということで、文房具やら、彫刻だとか、そういうものを賞品としてくれるわけです。同時に、運動ももちろんさせました。僕は中学時代、剣道を少しやってみました。もちろん教練(軍事教練)もありました。

教練で思い出しましたが、僕は昭和十年(一九三五)に中学校に入ったわけですけど、もうその頃はかなり軍国的な風潮が高まった頃です。中学生はゲートルを巻いて登校した。ところが、この小平校長は、「一中の生徒には絶対ゲートルを巻かせない」ということを言い出した。これは反骨精神というか、反軍精神だったんですね。ただ、配属将校の手前、あからさまに言えないので、「ゲートルを巻くと、生徒の足の血行を悪くする。育ち盛りの子どもにゲートルを巻かせちゃいかん」と。だから教練の時は巻く。だけど、登下校にまでゲートルを巻かせるのは、自分は反対であると最後まで頑張ったんです。そういう校風でして、われわれは、まあまあいい学校だったなと思っています。

一九九三年に仙台一中の創立百周年記念祭をやりました。一八九二年の創立です。だから、かなり古いほうです。それで、話は前後しますが、そういうふうなゲートルなんかは巻かせな

ったけども、他方、映画は観ちゃいかん、一人で喫茶店に入っちゃいかん、もちろん変な本は読んじやいかんということ、非常に厳しかった。ですから、僕なんかは、例外的だったのかもしれないが、小学校時代は『少年倶楽部』とかなんかをいろいろ読んだのに、中学校に入ると、あんまり教科書以外の本を読まなくなりました。

武田 雑誌とかそういうやつですね。

菊地 雑誌ね。

股野 中学校に入学されたのは昭和何年ですか。

菊地 十年です。

股野 昭和十年四月ですね。日支事変のちよつと前ですね。

菊地 今覚えていることは、昭和十一年（一九三六）の二・二六事件。それはもちろん僕は仙台ですから、ニュースとか新聞とかで知るだけ。ただ、僕がなぜ鮮明に覚えているかというと、そのあとに、東京から石田名香雄君というのが転校してきたんです。石田名香雄君というのは、この前の前の東北大学学長です。二・二六事件の当時の情景を、雪の降った日だというようにことや、兵隊さんが剣付き鉄砲で赤坂の界限にいたという話をしてくれました。

佐道 二・二六の翌年の十二年（一九三七）が日中戦争の始まりになるんですけれども、このあたりは何か。

菊地 それで、十三年（一九三八）に南京が陥落したでしょう。

あの時には確か南京陥落を祝う提灯行列をやらされた。

武田 仙台ですか。

菊地 仙台で。ご承知の方はあると思いますが、仙台は「軍都」といわれたんですよ。というのは、第二師団があるんです。学都であると同時に軍都であったわけです。第二師団というのは非常に精強な師団で、満洲へ行って、それから、最後にはガダルカナルに転進させられた非常に精鋭の師団であり、かつ、犠牲者が非

常に多かった師団です。昭和十二年の南京陥落の時は、われわれは夕方、校庭に呼び集められまして、そこで提灯をもらって、もうちよつと寒かったですよ。あれは何月ですか。

武田 十二月ですね。

菊地 寒い時でしたね。提灯行列をやったんです。

佐道 日中戦争などが始まって、全体の雰囲気少し変わったとか、そういう印象はございますか。

菊地 徐々にですね。雰囲気はだんだん緊張していくということはあると思いますけれども、盧溝橋事件が始まったからといって、特にすぐどうという話ではなかった。校長以下、割とリベラルな空気があったんでしょう。

佐道 校長先生のほかに、大使が特に印象に残っておられる先生は。

菊地 校長先生をなぜ覚えているかというと、こういうこともあった。僕が四年から第一高等学校に合格したら、僕はその頃、いわゆるマーヴェリック（はぐれ者）で、みんなが二高を受けるのに、僕だけが一高を受けたというので若干、天邪鬼？

武田 やはり二高に行くのが当たり前なんですか。

菊地 そうです。さっき言った二高に入る数を仙台二中と競争している時でしょう。ですから、僕が抜けるということは、本当はルール違反なみなんです。

佐道 しかし、一高に入ればすごいじゃないですか。

菊地 ところが、一般の人はそういうふうに見ない。例えば数学の先生なんかは、「君は英語はよくできるらしいけれども、君の数学では一高は無理だな」とか何とか言われまして……。それは四年生の時ですから、どうせ落っこちてもいいと思つて受けた。合格を見て仙台一中にあいさつに行ったら、小平校長が会いたいという。校長は、「君はよくやつた。一中から一高に行くのは大正何年以來だ」と言うんです。それは確かかどうかわかりません

けど……。彼は一中の校長を二十三年やったわけですから、古いことは知っている。「そうですか」と言って、最初はルール破り扱いされていたのが、今度は褒められる羽目になった。

■アイドル先生と英語教育

菊地 そのほかの先生で思い出すのは、中澤九万夫先生という英語の先生です。われわれが入学した同じ年の九月に赴任してきた。中澤先生は、その頃の東京高師（東京高等師範学校）の英語科卒業の秀才で、本当は東京の中学校にと言われたのを断って、仙台一中へ来たということでした。彼は長身で美男子。時には、その頃オーデイロンと言ったかどうか知らんけれども、そういうものを匂わせて、派手なネクタイなどをしてくるスマートな先生だった。ところが、これはあとから知ったんだけど、厳格なる小平校長とはあまり……。

武田 合わない（笑）。

菊地 合わない。小平校長というのは、よく授業中、授業を視察に来るわけです。ところが、ほかの先生の場合は、立ち上がって挨拶するが、中澤先生だけはいちばん若い先生なのに、校長が入ってきても座ったままで立ち上がりもしない。あとから怒られたらしいけど、われわれ若い中学生にとっては、ものすごい人気者だった。しかも、英語が非常によくできた。僕は非常に彼に感化されました。僕は小学校の六年生の頃からプライベートに英語を習い始めていたものですから、中澤先生に目をつけられた。ところが、この人にとって悲劇的なことは一生独身だったんです。そんなスマートな人で独身なのは、妹さんが身体障害者だったからです。その妹さんのために結局、一生独身で暮らされた。非常にスマートな英語の先生と、そういった妹さんのために結婚しないで一生を過ごす先生。小平校長みたいな目上の者に反骨精神を示

す先生。そんなことが重なって、彼はわれわれのアイドル的存在でした。

ですから、僕ら同級生はいまだに中澤先生の話をしています。僕自身は忘れてしまっていたのですが、同窓生の一人が思い出させてくれたことが一つあります。ちよつとこれは自慢話になるかもしれませんが……。ある授業の時に、中澤先生と僕がある英語の問題について議論になったというんです。僕はその頃英語研究の雑誌なんかをわりと……。

武田 『英語青年』。

菊地 『英語青年』かな。『英語研究』というのもあった。

武田 『英語研究』はその前です。

菊地 あんなのを読んでいたもんですから、中学生としては、かなりの英語に関する知識を持っていたのでしょう。ある授業で中澤先生と議論になった。結局、そのあとで、中澤先生が、「この前、菊地と議論をしたことは、あれは菊地のほうが正しかった」と皆の前で言ってくれたというんです。それをもう僕自身は忘れていたんだけど。

僕は、中学は四年間だけでしたけれど、非常に充実していましたね。僕は弁論部というのに入ったんです。弁論部は日本語の弁論と英語の弁論部もあるのです。それで、われわれは東北地方にある各専門学校の英語弁論大会に遠征した。僕は福島高商（現・福島大学）の弁論大会へ行き、僕より二年先輩の松田彰さん（後に東北電力副社長。僕が退官してから大変お世話になる）が岩手医専（現・岩手医大）に「遠征」した。彼は一等になって、僕のほうは三等かなかでした。当時、福島高商には、ゲーテンピーさんという英国人の先生がいました。審査員でした。僕はどちらかというところ、中学時代は英語少年という方でした。

なぜ僕が英語に興味を持ちはじめたかというところ、それには経緯があります。僕の母は先生ですから、師範学校の当時、国語とか、

漢文だとか、書方とかはよくできたらしいが、英語は苦手だったらしいですね。そこで、そうは言いませんでしたけど、自分の子どもにだけは、英語で苦労させたくないと思っただけでしょうか。英語のプライベートな塾みたいなのが昔あったんですよ。仙台は外国人が多いですから、東北学院だとか、宮城女学院だとか、ミッシェンスクールも多い。それで、外国人がたくさんいるものから、小学校六年の時から僕は英語の塾へやらされた。それで、だんだん英語が好きになった。それで、一高にも、それから、東大にも、外務省にも、英語のお陰で入れたという感じはあると思います。

佐道 英語だけじゃないと思いますけど、しかし、その年代で英語をやっておられる人というのは、大使の学ばれた学校でもほかにはいらつしやらなかったんじゃないですか。

菊地 小学校時代？

佐道 ええ。

菊地 あまりないでしょうね。

武田 何人ぐらいの塾だったんですか。

菊地 それは一人対一人です。僕が行く時は、誰もいないわけですよ。

井上 マンツーマンで。

菊地 マンツーマンです。

井上 外国人教師とやることになっていたんですか。

菊地 その塾の先生（遠藤先生）は大学出じゃないんだけど、いわゆる昔の苦学青年ですよ。『英語青年』だとか、そういうものを読んでいて非常に研究心の強い人で、僕によく高等なことで教えてくれました。

（旧制）中学時代、僕は英語については若干自信があったつもりが、一高へ入ってみたら、驚きました。僕より数段上のがいたんですね。彼はあとから高名な英語学者になりますが、彼と話し

ていると、ミドル・イングリッシュかオールド・イングリッシュの話とかができるわけだ。また、ベールウルフ（Beowulf）八世紀初めの上代英語の叙事詩）とかの話もする。彼は杉山（忠一）君という男です。彼はその後、東大教養学部で英語の教授になりました。もう一人は田所（文雄）君。彼は、一高の入学試験で英語で満点を取った。これは当時としては珍しいことらしい。だから、中学校の先生の思い出となれば、中澤先生のことと、それにまつわる英語のことです。

井上 中澤先生が学生達から支持されていたというのは、ただ、ハイカラというんじゃないかと、ある種、政治的なリベラルな雰囲気みたいなのが支持されていた。

菊地 そうですね。ある程度、あの頃の中学生というのは抑えつけられているわけでしょう。非常に窮屈な雰囲気のところにいる先生がワッと来たわけですよ。しかも、東京の雰囲気をただよわせている。だから、非常に生徒は彼になびいた。しかも、彼は野球もうまくて、野球でわれわれをずいぶん鍛えてくれた。だから、その頃の中学生が憧れているものを、彼はすべて持っていた。しかも独身。歳もわれわれとそう変わらない。

彼は今でいう「英語にどっぷり漬けて学ぶ英語教育」で、イメージ、教室のドアを開けて入って出るまで、中澤先生は英語以外一切喋らない。彼は外国へ行ったことがないにもかかわらず。当時は、ディレクト・メソッド（直接教授法）ということで、ちょうど東京高等師範あたりが始めたらしい。それから、もう一人、諸石先生という人もいました。諸石先生は宮城女学院の先生も兼ねていたので、この人も英語で授業（会話）をしていました。

股野 宮城女学院はミッシェンスクールですか。

菊地 ミッシェンスクール。宮城女学院は有名な学校ですよ。校舎は、例の帝国ホテルを設計したフランク・ロイド・ライトがつ

くつた。ライトがつくつた建物がちなみに日本に三つあります。

一つは帝國ホテル、一つは首相官邸、もう一つが宮城女学院。

股野 今でもありますか。

菊地 戦争中壊された。それで、現在郊外のほうへ。

股野 一応……。

菊地 壊されたんですよ。僕の女房なんかはえらく嘆いています。

股野 明治村にも行かなかつたんですね。

菊地 行きません。

佐道 ちなみに、奥様は宮城女学院のご出身で。

菊地 そうです。しかも、これは本当にパースナルな。

股野 まだ、御結婚の話はまたあとで（笑）。まだ中学生ですから、奥さんの話は、もうちょっとあとで伺いましょう。

菊地 僕の中学の同級生が、宮城女学院で僕の女房に教えたという因縁もあります。荒井（武）君という人ですけどね。さて、さっきのイマージョン式は、僕は非常に進歩的な教授法だと思いません。ところが、僕は東京の一高へ来て一つのカルチャーショックを受けたんです。日本人の英語で、日本人との英会話がよくできたはずなのに、一高で、最初にベルという英国人の教授の授業があった。イギリス人で体の大きい、オックスフォード大学の数学科を出たという。その人が最初の授業で教壇から、大きな体をゆすりながらわれわれに話し始めた。タイプカル（典型的）なキングズ・イングリッシュだった。ところが、それが全然わからないうエツ、こんなはずじゃなかったな、と思つて、横浜一中から来た内田札次郎君に、「君、わかつたか」、「うん、わかつたよ」と言うんですよ。それで、ええつ、やつぱり田舎の中学から出てくるというのは、これだけのハンディがあるのかなと思つたんです。その一日目は大変なショックでした。一週間たつて、また、その先生の授業になつた。そしたら、今度はわかるんですね。これについては、英語の学者に、こういう現象はよくあるのかどう

か、聞いてみたいと思つていますが……。

井上 英語のことでもう少しだけお聞きしたいんですが、ちょうど日中戦争が拡大しているなかのことなので、普通ですと、日中戦争が拡大すると、中国語の会話の本がベストセラーになつたりして、中国に行つて一儲けしようという人も含めて、中国語勉強ブームが出るとか、あるいは、日中戦争の拡大のなかで排英運動が起こつていたりして、イギリスとの関係が緊張するなかで、英語をそうやって学ばれているというのは、やつぱり英語というのはエリートにとっては当然のことで、一中とか、東京の一高に行くような人達にとっては、英語の素養というのはそういう短期的な情勢とかに関係なく、当然身につけてなきやいけないような位置づけだつたんでしょうか。

菊地 英語が敵性語だとか何とかいうことになつたのは、実際に太平洋戦争が始まつてからです。早くても、昭和十六年の初め頃からです。それまでは、高等教育では英語を敵視するとか、英語を学んじやいかんということとは全然ありませんでした。他方、中国語が奨励されたことも事実なんです。僕が高等学校の時は、漢文の授業で「論語」「十八史略」とかなんかを読まされた。それと同時に、われわれは「白話」（ペイホワ）とも言つただけど、そういう中国語の「時文」（現代語）もやりました。麓保孝という漢文の教授がいますが、この人は戦後、東大教養学部の先生として残つたと思いますが、プリントでわれわれに北京官話を教えてくれた。というのは、われわれの時代はまだ漢文の時代でしょう。漢文はなんと中学校の五年間と高等学校の三年と八年もやるんですから、それはものすごいものでした。中国人以上に漢学（古典）をやるわけです。いわゆるチャイニーズ・クラシックス（四書五経）。クラシックスの勉強というのは、英国の大学の伝統でもある。英国の大学生は必ず古典ギリシア語、ラテン語をやるように、クラシズム、古典研究というものがある。英語を排斥

することは全然ありませんでした。仙台一中の先輩である井上成美中将は、終戦近くになってからも、海軍兵学校の校長として、最後まで兵学校の生徒に英語の勉強をやめさせなかったという話はあまりにも有名な話です。われわれの時代、中学、高等学校時代までは、英語を排斥するという空気はありませんでした。われわれの一高時代には、英語会（ESS）というのもありました。

■東北の風土・気質

佐道 中学校時代の先生のお話を伺ったんですけれども、大使の友人関係といえますか、友人、知人でその時以来の交友が今までも続いているとか、そういう。

菊地 それはさきほど東北大の学長になった石田名香雄君の話をしましたが、それ以外は、私達、在京一中会というのがありまして、これが今でも毎月第一水曜日に一水会というので会っています。だけでも、われわれの時は中学校の四年生になりますと、組の編成替えが行われ、一組が高校受験、二組が陸士・海兵受験、それから、三組がその他、例えば専門学校と分かれるでしょう。

股野 高等商業は違いますか。

菊地 そうそう、高商も入るんです。高商というのも専門学校なんです。それから、高等工業というのもありました。そういうふうに分かれました。

股野 三年ですか。四年ですか。

菊地 四年生から。というのは、高等学校、軍関係の学校は四年から受験できましたから。組によって授業の重点が違ってくるわけですよ。陸士（陸軍士官学校）や海兵（海軍兵学校）希望の人は理科、数学に強くするとか。僕らの仲間からは、かなりの数が陸士、海兵に行きました。彼らは復員後、それぞれ実業界、学界に入りました。

さきほど中国の話がありました。仙台一中は満洲国からの留学生を受け入れていたんです。僕の時、満洲の大連から、楊肇文という人でした。彼は中学への留学生だけど、われわれより三つか四つ年上、ちよつとおっさんという感じで、初め日本語はたどたどしいわけです。でも、われわれは一所懸命彼を助けてあげて、戦後もわれわれは彼と連絡を取っていた。彼は戦後、文化大革命の時、迫害を受けて、そのうち解放され、大連の工務部かなんかに勤めて、二、三年前に亡くなりました。この人とは、ずっと連絡がありました。満洲とか、中国という存在は、雰囲気としては学内にもクラスのなかにも持ち込まれていたのです。

楊君について、僕が覚えているのは、中学校の講堂で日中戦争の戦況とかなんとかに関する講話みたいなものがあった。配属将校が、楊肇文君をわざわざ立たせて「いま抗日、毎日の運動が満洲で起きている。これはどう思うかを皆に話してみろ」というようなことを言うんです。これは、われわれは彼に気の毒だと思いました。

その頃、満洲に建国大学（大同大学の後身）というのができたんです。建国大学にわれわれのクラスから二人ぐらい行きました。僕の従弟、有馬有恒も行きました。

〔註〕有馬氏は、建国大学医学部入学。戦後、宮城県加美郡中新田町で医師を開業する。

さきほど井上先生のお話と関係があると思いますが、東北地方というのは冷害で有名でしょう。それで、僕の小学校時代、その当時は知らなかったですけども、あとで話を聞くと、東北の農村の貧しい子女が東京に売り飛ばされたとか……。

武田 昭和の初めぐらい。

菊地 昭和の初めですね。僕が小学校へ入ったのは昭和四年（一九二九）ですから、考えてみれば、ちよつと大恐慌の時ですね。東北もだんだん悪くなって、満蒙開拓団が送られた。満蒙開拓団には東北からだいたい行つたんです。風土的に寒いところから寒い

ところというので、わりと抵抗がなかったんじゃないでしょうか。仙台という所は、ご承知のように伊達藩で、幕末には佐幕でしたから、その後、薩長政権になってからは、ある程度反体制的な気分を持っている。そこで、明治政府はこれをなだめる意味もあつたのか、例えば第一師団を東京に置けば、第二師団は仙台に置く。第一高等学校を東京に置くと、第二高等学校は京都じゃなくて、仙台に置くというような慰撫政策をとつた。大久保利通なんていうのは、わりと東北地方と関係があつたようですね。仙台港（閉上港）の築港なんていうのには。

股野 それで、ナンバーツーが仙台にあるわけですね。師団もそうだし、高等学校もそうである。なぜ京都が二にならんかなと。なるほど明治政府の慰撫政策ですね。

菊地 というのが僕の推理です。他方、東北の人は逆に、東京に出て来る、「笈を負うて京に上る」という言葉は、われわれは子どもの時から教わつたもんです。例えば佐藤紅緑が描いたような田舎の少年の心情とか心術とかいうか、ひとつのエトスがありました。僕は東北出身だということで、ここにいる武田先生も福島県ですけど、東北にはそういう無骨なところ、反体制的なところがあるんです。これが岩手県になると、反体制のまた反体制になる。というのは、伊達政宗というのは南部藩を痛めつけたんですよ。反体制に対する反対だから体制側になる（笑）。それで、結局、岩手県は山口県と並んで、日本で一番多くの宰相を出しているわけですよ。おもしろい歴史です。

股野 反伊達なんですね。

菊地 そこまで言わないとしても。

股野 しかし、やっぱり伊達にやられたという気持ち。

菊地 伊達には繋がらないで、飛び越えて中央に。

股野 反伊達とは言わないんですか。

菊地 反伊達とまではいかない。僕の推量ですが……。

股野 そうですか。わかりました。

武田 例えば私は福島。

菊地 伊達郡だね。

武田 私は伊達郡の梁川町というところの生まれです。築館町のすぐ隣ですね。お話を聞いていて、いや、昔よく聞いた話だと。一高よりも二高で、二高に行くのが当たり前で、エリートというのは二高に行くものであつてというのは、本当に昔からよく聞いています。

■一高へ

佐道 一高に入られるわけですけども、それまでは東京に行かれたことは何回か。

菊地 一回だけ。僕の母方の叔父が鉄道省の技官でした。高橋豊太郎というんですけども、彼が東京にいたんで訪ねて行きました。外務省に入つて、最初の頃は高橋叔父のところから通っていました。その高橋の息子、僕の従弟ですけど、それがいま文芸評論家で名の知れている高橋英夫です。ご存じですか。

佐道 はい。ああ、そうですね。

菊地 彼は僕の七つ違いの従弟です。彼が一高に入ったのも、僕が一高だつたからだど、どこかに書いています。彼には『偉大な暗闇』という岩元禎先生のことを書いた著書がある。

武田 夏目漱石の中に出てくる『偉大なる暗闇』。

菊地 そう。話は戻るけれども、さきほど井上先生のおっしゃつた英語とか外国語に対する雰囲気というのは、年代によつてかなり違いますから、注意しておいたほうがいいですね。英語が敵性語だとか、「鬼畜米英」とかいうのは、その頃はまだなかった。こう言つては少しオーバーですけど、あーいうスローガンみたいなものは、ある日突然出て来る。これはわれわれの実体験です。

これはむしろ「鬼畜米英」なんていう過激な言葉を発明しなくちゃいけないほど、当時の日本人は米英に対して敵意をあらわさなかつたため、ひとつの敵愾心を煽るためのシヨック・セラピーです。それをあたかもずっと以前からあつたかのように言ったのは、戦後の評論家たちです。新しいイデオロギーというものは、えてして突如としてやって来る。異常に強烈にやって来るもんなんです。それがイデオロギーというものですよね。

佐道 一高は当然寮に入られるわけですね。

菊地 そうです。

佐道 ご両親のもとを離れて、そういうふうにお暮らしになるのは初めてということになるわけですね。

菊地 そうですね。それこそ、「笈を負うて」ね。本当に行李を持っていききました。行李って知ってますね。

佐道 はい。

菊地 それで、一高の寮に入りました。一高の寮というのはご承知かもしれないけど、廊下を挟んで自習室と寝室と二つに分かれていまして、あの頃としてはかなり贅沢なスペースを取っていた。一室に十二人ぐらい、それでも当時としては、かなり余裕のある生活でした。われわれの時までは食事は食堂で食い放題。われわれの卒業の年になって初めて、食事が盛りきりになったのかな。それまでは、「給仕！ メシ持って来い」と叫んで……。われわれにとつて、あの食堂の食事が最大の楽しみでしたから。ことに運動部の選手なんていうのは、くたくたになって帰り、風呂を浴びて、それから食堂に入ってきて飯を食うわけです。

佐道 一高に入学されたのは昭和何年ですか。

菊地 十四年（一九三九）四月。レギュラーに入ったわけです。ちようど欧州で第二次大戦が始まった年ですね。

佐道 旧制高校を出られた方々にお話をお伺いすると、皆さん、旧制高校時代のことを懐かしく、いちばん大きな影響を受けたと

か、友人達もその時にできたのがいちばん大きい財産だとかというお話があるんですけども、大使はいかがですか。

菊地 全くその通りです。一高の話をするとものすごく高潮する。われわれの間には「一高オンチ」というのがいますが、多かれ少なかれ一高の卒業生は、みな一高オンチなんです。一高のことは前のインタビュウに出ました？

股野 ええ、ある程度は出てますけれども、考えてみると、正式にインタビュウは。

菊地 海原さんは？

佐道 海原治さんですか。一高時代のお話は少し出ました。

菊地 あの人は年次がだいぶ違うけどね。あまりでていなければ、一高の話をするいい機会なんだけど、それはいいかしら。

股野 結構だと思います。

佐道 もちろん。

菊地 それで、僕も一高の話をするには、情熱なくしては語れない方で、そういう意味では、皆さん方を退屈させるかもしれない。

股野 どうぞ。

■戦前のエリート教育

菊地 一高というのは戦後なくなつた。旧制高校はみななくなつたわけですけども、これに対してはいろんな議論があつて、あれはよかつた、戦前の高等教育のバックボーンだったとか。戦前のエリート教育の最先端で、あれがなくなつたんで、戦後教育はだめになつたというような言い方をする人が多い。旧制高等学校を復活する運動なんていうのもあるんですよ。米占領軍が来て、六・三・三制を導入した時に、旧制高校というのはなくなつたわけですが、これをなくすなということで、安倍能成文相、それか

ら、その次の天野貞祐文相等（いずれも一高卒業）は、かなり抵抗したんだけど、あえなく潰れたわけですよ。不思議なことに共産党の不破（哲三）にしろ、上田耕一郎にしろ、彼らも一高です。戦前の共産党の幹部というのは一高出身が多かった。志賀（大正十一年卒業）。

井上 志賀義雄。

菊地 あとから話しますが、ゾルゲ事件の。

井上 伊藤律ですか。

菊地 伊藤律。それから、ゾルゲ事件のなんとか秀実。

井上 尾崎秀実（大正十一年卒業）。

菊地 みな一高です。ですから、共産党からは一高の悪口は出ない？

武田 そうですね（笑）。

菊地 他方、岸信介（大正六年卒業）とか、ああいう人達も一高です。一高の功罪を論ずる人が多いと思うけども、なにしろあの時代に、ああいうリベラルアーツ教育というか、学校ではある程度のアテンダンス（出席）は要求されますけれども、全然勉強しなくてもいいわけです。寮で朝起きてから寝るまでなんもしなくていい。それが三年間続くわけでしょう。しかも同輩と一緒に二十四時間起居を共にする。もちろん運動部の人は共に運動で心身を鍛える。全く自由で、「自らを治める」という「自治」でしょう。もつとも、出席が悪いと落第するけども、落第も一回、「裏表」計六年間までできるんですよ。続けて二回落第すると、放校になるわけけども。裏表六年、実際やった人は、例えば佐藤正二さん（外務事務次官）。出席も「代返」というのがある。ですから、一高時代に伸びる人はものすごく伸びる。煩悶に煩悶を重ねる人もいます。藤村操じゃないけども、自己破滅、自殺する人もいます。だけでも、一高には自治があり、自由であったということは間違いない。われわれは中学校の四年から入るも

のもいるし、五年から入るのもいる。

武田 大人と子どもみたいなもんですね。

菊地 そうなんです。そういうのがお互いに切磋琢磨するわけですから。青春の時代のひとつの生活様式。本を読むことと運動すること以外、やることはないわけです。それでも、その頃の一高には、他の高等学校は知りませんけれども、いわゆる「軟派」というのは、あまりいなかっただように思います。せいぜい渋谷の百軒店へ行ったり、喫茶店へ行つて女の子としゃべるとか。駒形屋という呑み屋へ行ったりする程度。それより、天下国家を憂い、専ら哲学書を読み、文学を語るといふ生活。それで、「友情」というものが育まれ、自由というものを大事にする。他方、寮歌にうたわれているように、ひとつのエリート意識というか、「この国民をいかにせん」とか、「乃公出でずんば」とか、「この蒼生を如何にせん」といふような気概がある。そういうふう非常に情熱的な、張りつめたスクールライフ、寮生活というものがありました。もちろん日夜、悶々として、全然授業に出て来ないという生徒もいました。

しからば、その当時の一高生の国家観とか、戦争観とか、人生観とか、世界観というのはなんだったのかということになりますと……。人生観、世界観というのも畢竟、自分で自らを探究する。ノウ・ザイセルフ（汝自身を知れ！）ですね。だから、一高では「馬鹿になれ」ということがよく言われました。それから、「価値の転換」。価値を転換しろと。今までいろいろ、親から教わり、学校で教わった、その価値を全部一度引っくり返してみろと。そのためには「馬鹿になれ」といふような話です。

武田 それは先輩から言われるんですか。

菊地 先輩から言われる。夜、「ストーム」にやってきて説教される。寮で寝ていると、（上級生が）酒を飲んできて、われわれを叩き起こす。一頻り暴れたあとで、われわれに説教したり問答

したりする。「お前はなんで一高へ来たんだ」ということから始めて、「お前なんか来るところじゃない」とかなんとか言われました(笑)。

そういうことで、一高生はお互いに切磋琢磨した。反戦だったか、反国家だったか、反軍だったかということになれば、僕はそこまでいってなかったと思う。やはり普通の(旧制)高校生として、やはり日本という国にわれわれは帰属しているんだということと……。主体としては「国」がある。その国を愛する。この国民を、「いかにせん」(寮歌)という愛国心というか、憂国の志があった。ただ、われわれはいま戦後振り返ってみて、われわれは、結局、この「くに」のために戦争へ行つた。そのために死んだ。僕の一高同級生で非常に優秀な人ほど死んだ。ちなみに、寮歌というのは、校風のシンボルみたいなもんだけど、一高の寮歌というのは四百ぐらいある。われわれが覚えるのはせいぜい百五十ぐらいだけだね。

武田 それだけ覚えればすごいですね。

菊地 それでも一所懸命覚えるんですよ。寮歌のなかに、「天皇」とか、スメラギ皇とかいうことは出て来ない。つまり、一般的な「くに」「くにたみ」なんです。日清戦争に勝った日本、日露戦争に勝った日本ということですよ。日露戦争のあとには、例の藤村操などが出てきた。懐疑派というのか、リベラルな思想が出てきた。彼は「巖頭之感」とかと残して、華嚴の滝に飛び込むわけでしょう。その頃の一高にも、僕は感激もし、びつくりもしたんですけど、「勝ちの悲しみ」ということを聞いた。勝利後の悲哀というんだな。中学「四修」の若僧の僕にとつては、これは本当に精神的なショックでした。これこそ価値の転換でした。勝利の悲哀と演説したのは、確かに有名な文学者……。

武田 徳富蘆花。

菊地 この「勝ちの悲しみ」というのは、日露戦争が終わって、

戦勝気分が高揚している時に、一高というキャンパスの中では勝ちの悲しみという演説があった。つまり、勝利は喜ぶべきことじゃないくて、むしろ悲劇だと。現に日露戦争のあとは大変な不況が来ましたからね。一部の人を除いて、われわれが考えた「国」というのは、特に「皇国」だとか、「八紘一宇」だとかいう「皇国史観」とは無縁であつたと思います。以上が僕の見た一高の校風です。

■記憶に残る恩師

—竹山道雄先生とドイツ語

菊地 それから、さきの御質問にありましたが、「記憶に残る先生」の話に移りましょうか。やっぱりいちばん記憶に残るのは、同級生の誰に聞いてみても、まず竹山道雄先生。われわれは文甲(文科甲類)二組というんだけど、竹山道雄先生には一年生の時にドイツ語を教わって、二年生の時には、われわれの組主任だったんです。そのころ竹山先生のお宅まで伺ったことがあります。ヘルマン・ヘッセの『デミアン』を教科書に使って、それから、先生にはドイツ文法も教わった。ドイツ文法のテキストは英語の原書でした。そういう時代でした。竹山さんはドイツに留学しており、非常にドイツ語に優れた人。彼と並び称された片山敏彦ってご存じ？僕は両方から習いました。非常に幸運だったんですが、片山敏彦さんには、アルベール・シュヴァイツァーの『レーベン・ウント・ツァイト』とかを教科書で使いました。竹山先生の学殖の深さ、それから、われわれに対する指導というのは非常によかったです。これの現代的な意味で言えば、竹山先生も片山敏彦も当時から明らかに反軍、反戦だったんですね。授業の合間、合間に、「君達はみんな新聞に出ていることを信じているかもしれないけれど、実際はそうじゃないんだよ」とか、そういうことをチラ

ツとわれわれに言ってくれました。この人達は、かなり批判的なベラルな人達なんだなということを肌で感じていた。ただ、われわれ一高生自体がリベラルですから、とりたててこの人は大変な反戦論者だなどみるような雰囲気はありませんでしたけども。

武田 そういふ先生は珍しいほうなんですか。

菊地 いや、珍しくないですよ。それは口に出して言うか言わないかの違いだけなんです。だから、その人達は、われわれ学生に向かつてそういうことを時々チラツツと言うわけです。

武田 かなり勇気のある。

菊地 勇気のある人です。それで、竹山道雄さんは戦後『ピルマの豎琴』を書くわけですけど。あの映画には「ああ玉杯」を歌う場面が出てきます。

ドイツ語の試験は独文和訳でしょう。僕は文甲ですから、第二外国語でドイツ語が非常に好きになり一所懸命やりました。ドイツの独文和訳の試験の時に、竹山先生が独文英訳でもいいというんで、僕はいたずら半分、英語で答案を書いたことを覚えております。

武田 それは至難の業じゃないでしょうか(笑)。

菊地 いや、そうでもないんです。それほど自由闊達な、それこそリベラルアーツの雰囲気であつたと思います。これはよく言われることですけども、当時の高等学校の教材は目茶苦茶難しいのね。さつきの『デミアン』なんていうのはやさしいほうでね。三年になつたから、ドイツ語の桂寿一先生は、われわれにカントの『実践理性批判』を読ませるわけですよ。あの頃、レクラム文庫というのがあつて、レクラム文庫を自分の背の文だけ読んだというのがある、当時の一高生にとつての心意気だつたんだ。僕の在学中(昭和十四年から十七年まで)の一高では、英語よりもドイツ語のほうがポピュラーだった。もちろん日独枢軸の時代ですから、だから、僕も英語に劣らずドイツ語にも力を入れました。ああ、皆さんはレクラム文庫は知ってますか？

武田 名前だけですな。

菊地 小さくて茶色の文庫本です。目茶苦茶みんなが本を読みました。本を読まない議論ができませんからね。とにかく寮の夜を過ごすのは議論を交わすしかないんです。要するに「だべり」ですよ。だべりだけでも、そういう年頃ですから、どうしても哲学の話になり、例えば、「お前、あの『愛と認識の出版』を読んだか」とか、西田幾多郎の『善の研究』を読んだか」とか、「阿部次郎の『人格主義』を読んだか」とかということ……とにかく哲学を読んでなければ相手にされない。

佐道 大使も哲学書が中心ですか。

菊地 手あたりしだい読みましたね。それから、僕はさつき言つたように、小説、文学の類を中学校では読んでないでしょう。ですから、ほかの東京の中学校を出てきた連中に追いつこうと、目茶苦茶読みました。毎日図書館へ行つて本を読んだ。あとは飲みに行く。まあ、飲みに行くといつても、われわれの場合はコーヒートかなんとかを飲みに行くんですけど、ちよつとお金が国許から送つて来た時などは、「ガタヤ」とわれわれは呼んだ駒形屋なんかにも行きました。それから、帝都線の一高前駅を下へ降りていったところに、呑喜というおでん屋があつたし、喫茶店もありました。われわれの前後の人では、文学界では、中村真一郎だとか、白井健三郎というのがちよつと前ですね。それから、加藤周一がその前かな。加藤周一は医学部なんです。ちなみに加藤周一の一高に対する定義が非常におもしろいのでちよつと紹介します。

加藤周一によると、高等教育の目的というのは三つある。一つは、社会・国家のニーズのために学問をする。実際世の中の役に立つ学問というのがあるわけですね。それは法律かもしれないし、エンジニアで技術かもしれない。第二は本当の「研究のための研究」。つまり、人類の知恵を増すための研究。実際役に立つかど

うかはわからないけども、将来役に立つかもしれないよというベ
ーシックなサイエンスのほうです。第三は、自分自身のための人
格の達成というか、セルフ・リアライゼーションというか、自己
実現、自我の発達、発展のための学問です。加藤周一によれば、
一高は第三番目のためだと。これをリベラルアーツという人もい
る。一高はそのリベラルアーツを学ぶ場所だ。戦後、このリベラ
ルアーツを教える、学ぶ場がなくなったというのが彼の説なん
です。

佐道 まだ一高のお話で伺いたいこともいろいろあるんですけども、ちよつと時間が来てしまいました。

菊地 一高のことで、どうしても言わなくちゃいかんことが何か
あったかなあ。

佐道 もしよろしければ、次回、また一高のお話から。

股野 次回に一高のお話を引き続きしていただいて結構です。ま

た、いろいろ思い出されるでしょうから。

菊地 そうですね。

佐道 交友関係とか、大使のご経験とかを中心に、一高のお話か
ら次回伺うということにさせていただければと思います。

菊地 はい。もう二時間たったね。

股野 はい。二時間超えました。

武田 あつという間でございました。

股野 しかも、その間、お休みになつてなかつたですよ。

菊地 お茶も飲めなかつた。

股野 大変な密度ですよ。

菊地 いや、あなた方があまりけしかけるものだから(笑)。

佐道 ありがとうございます。

(終了)

菊地清明

オーラルヒストリー

第2回

一高・東大・海軍時代

開催日：2001年7月31日

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時10分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

股野 景親（元スウェーデン大使）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■ 続・一高

菊地 一高時代のことをもつと話してくださいとお話ですの
で、きょうは一高の続きをやりましょう。前のインタビューでは、
一高出身の人は海原（治）さんだけです。

佐道 ほかにもいらつしやることはいらつしやるんですけど、ほ
とんどサラッと流されたという感じです。

股野 宮崎（弘道）さんも、本野（盛幸）さんも一高ではありま
せんね。

菊地 いや、一高というのはわりと珍しいんですよ。

股野 手島（冷志）さんが一高。

菊地 手島さんが僕の二年後輩ね。

股野 手島さんも、一高時代の話はあまりされなかつたんです。

菊地 われわれの時が、おそらく一高が最後に花開いた時だから、
ちよつとお話したほうがいいと思います。

佐道 もし、よろしければ、そろそろお願いします。

菊地 一高時代に習った先生で、僕は竹山道雄先生を挙げました。
そのほか、林健太郎さんにも習ったんです。林健太郎さんは、ち
ょうど東大の助手から一高の助教授になったばかりの時で、われ
われが彼の最初の生徒でした。林さんは、最初は講義でも俯い
ちやって顔を上げないんです。えらいシャイな人だなあと感じたこ
とがあります。もちろん西洋史の講義です。

ちょうど僕が二年生の時、橋田邦彦校長から安倍能成校長に替
わったんです。その時期に遭遇しましたので、その話をちよつと
します。ご存じかもしれませんが、橋田邦彦さんという人は、確
か生理学の教授でして、その頃、比較的時流に乗っておられて、
「科学スル心」などということを出しました。二語熟語に
「スル」というのを付けるのが、その頃から流行り始めたんじや
ないかと思えます。非常に真面目な校長先生でした。それが近衛

内閣ができて、近衛内閣の文部大臣に任命され、そのあとに
来たのが安倍能成校長です。彼は京城大学から来たんだと思いま
す。彼はその頃から既に一高生の間で有名だったものですから、
われわれ一高生が東京駅まで大勢、護国旗（一高の校旗）を持っ
て迎えに出たことを覚えてます。それほど安倍能成先生というの
は人気のある先生でした。一高生が必ず口にする華嚴の滝に投身
自殺した藤村操と一高時代、親友だったということとか、夏目
漱石の弟子だったというようなことで、われわれは非常に安倍能
成先生を尊敬し、慕ったものです。ずいぶんわれわれの仲間は先
生のお宅（目白だと思えます）まで押しかけて行って、いろんな
お話を伺いました。安倍能成さんは有名な哲学者ですので、橋田
邦彦先生の「科学スル心」から「哲学する心」に変わったとい
うことでしょうか。

それから、僕の一高の時の同級生とかその前後の人達のことを、
あるいは興味があるかもしれませんが……。われわれの同年では、
身近なところでは、松永信雄君、山崎敏夫君、僕と、この三人が
たまたま外務省に入ったんです。それが一九八六、七年頃になり
ますと、松永君が駐米、山崎君が駐英、僕が国連ということ、
一高の同級生三人が主要国の大使になった。これは全くの偶然で
すけれども……。

そのほかの同年年では、法務大臣になった三カ月章。東大法学
部の民事訴訟法の教授です。それから、役人ではたくさんいます
けども、例えば吉瀬（維哉）大蔵次官とか、宮崎（仁）経企庁次官
とか、そういう各省の次官もだいぶ出ました。そのほかは、異色
では、日産自動車社長の久米豊（理科）。あなたの方の間では有名
だと思えますが、神島二郎（立教大学）も一緒でした。神島二郎
は例の丸山真男に対抗して、一つの学派を立ち上げた男です。彼
は浪人三年かで一高に入ってきた「おっさん」という感じでした。
われわれの前の昭和十六年卒業には、外務省でいえば、大河原

良雄さんとか、学者でいえば、細谷千博というのがいます。政治家では、大蔵省から政治家に転身した山下元利。彼は寮の委員長でした。

われわれの前には、寮の委員長は大和田啓氣、農林省に入り非常に有力な官僚で次官（大和田氏は官房長）まで上がりました。副委員長は東大の経済学部教授になった古谷弘。それに、石川吉右衛門なんていう人もいました。

一高の時のことでもう一つ追加したいのは、その頃は、一高には「特設高等科」というのがあったこと。その頃の朝鮮、台湾、シナ、満洲、蒙古からも来た留学生を普通の試験じゃなくて、特別の試験で入学させる制度がありました。寮生活は一緒ということとです。一高の特設高等科というのは歴史があつて、そのなかで有名な人で、苗劍秋という方をご存じかしら。戦後、台湾に行き、それから、中国に行つて非常に活躍し、蒋介石とか周恩来とも非常に親しかつた人です。そういう人達が特設高等科から出ているわけです。もちろん特設高等科でなく本科のなかにも、朝鮮から来た人がいました。僕のクラスにも、王益権という人がいました。

一高というのは日本全国から生徒が集まつて来る、関東周辺からがだいたい半分ぐらい、あとの半分は、全国各地から来る。「外地」から来るのも割と多かつたんです。その頃、満洲の大連とか旅順とか、そういうところから来る人が多いんです。例えば、清岡卓行なんていうのは旅順から一高へ来て、途中で帰つて小説家になつた人です。『アカシヤの大連』とかを書いた。僕はちょっと統計を見ましたら、東北地方から来た人よりも、外地から来た人のほうが多かつた。

佐道　そういう統計がきちんとあるんですか。

菊地　ありますね。ある一定の瞬間風速みたいなものですけどね。ここで脱線させていただきますと、ひとつ社会的に非常におもしろい現象は、戦後の日本の再建、復興に寄与した人のなかには、

意外と外地出身の人が多いことです。そういうことはお気づきになつたことはありませんか？　例えば大来佐武郎とか、満鉄調査部から来て、野村総研にいた、防衛大学で……。

股野　佐伯（喜一）さんですね。

菊地　そう、佐伯さんとか。外地出身で戦後伸びている、というと語弊があるかもしれませんが……。もっと身近なところでは、わが同僚の岡崎（久彦）君は大連生まれです。ただし、これは日本に限ったことじゃないんです。皆さん、政治学者の研究テーマとして、ひとつ博士論文ぐらい書かれてもいいんじゃないかと思つたのですが、植民地、外地からの出身の人が、本国において大成するというケースは、イギリスの場合も、フランスの場合も多いんですね。イギリスの場合は、インディアン・シビル・サービス（インド政庁）の人達の子弟達。それから、フランスの場合は、コロンと称して、アルジェリアとかの北アフリカに行つたフランス人の子弟が、意外と本国で成功しているんです。

■太平洋戦争直前の一高生

—ソルゲ事件・汪兆銘・ヒトラー・ユーゲント

菊地　この前ちょっと触れましたけれども、一高はやつぱりベラリズムの伝統を持つてました。その頃、巷間よく言われたことは、「朝日新聞と岩波書店と一高が、自由主義の牙城だ」と。非常に自由主義的である。しかし、反国家とか反軍というようなことまでには至らなかつたと思います。これはわれわれの時代の一つの語り草になっているんですが、僕が一高へ入る一年前（一九三八年）ですが、ナチス青年団、ヒットラー・ユーゲントが一高を訪ねて来たことがあるんです。彼らが訪問を終えて一高の正門を出ていった途端に、後ろから一人の一高生が、「馬鹿野郎！」と叫んだんです。その時は配属将校等の軍関係者、ドイツ大使館の連中、おそらく外務省の人もいたんだと思います。当時の一高

内の雰囲気としては、われわれの間では「馬鹿野郎！」というのはしよつちゅう口走る言葉なので、それほど悪気はないんですが、それでも今をときめくヒットラー・ユーゲントに対して放つたというのが問題になった。陸軍とか文部省がこれを問題にして、おそらく校長先生か教頭が謝りに行ったんじゃないかと思っています。

もう一つ、昭和十五年（一九四〇）頃だと思いますが、僕は二年生で中寮十二番室に入っていた。同室に松田右近君という、あとから国鉄に入って、かなり上のほうまで行った人がいまして、彼が夜遅く帰って来て、「俺はいま尾崎秀実に会ってきた」というんです。その時は別に気にしなかったのですが、その後数カ月たつて（十月）、ゾルゲ事件で尾崎が逮捕された。僕は松田右近君に「なぜ君は尾崎秀実に会いに行ったんだ」と尋ねたら、彼もその動機をあまりよく覚えてないんです。誰かに薦められて、一高の先輩だということで会いに行ったと。松田右近君は京城出身で、尾崎も満鉄調査部にいた。そんな関係で、会いに行ったということでした。

いよいよ昭和十六年（一九四一）十二月八日に、太平洋戦争が勃発するわけです。その時の一高生の反応ですが、やっぱり来るものが来たか、ということでした。戦争の勃発と緒戦の勝利、真珠湾攻撃の成功の発表が一緒になったものだから、皆大喜びにひたり、あまり深くは考えなかつたんです。しかし、その前の年あたりから、一高生の中から徴兵年令に達した連中は、かなり徴兵されていった。ですから、われわれも既に若干の緊張感を持っていたわけです。

われわれはその時、全寮茶話会を開いた。一高の生徒は、「護国の精神」ということを歌っていますから、ジンゴイズムではない、静かな愛国心、国を護るという精神は強い。一高の校旗は柏葉旗というんですが、同時に、「護国旗」とも呼ばれる。国を護る旗ですから、一高の校風というのは基本的には護国ということ

でした。一般的な自由主義的な空気、それから、教練をよくさばるといふ雰囲気だったんですが、それでも戦争になると、同じ十二月中だったと思いますが、われわれは護国旗を先頭に、皇居、靖国神社、明治神宮へと銃を持って武装行進をした。戦勝を誓うということでした。

それから、紀元二六〇〇年というのに、われわれは一高の二年生の時に遭遇したわけです。二六〇〇年というのも非常にオースピシヤス（吉兆）というか、めでたいという年だといって。それと同時に、昭和十五年には、士気の高揚というか精神作興ということを政府としてはやったわけです。これも記憶していることなんですが、その時に、ちょうど南京の国民政府ができて、汪兆銘が日本に來たんです。その話はこの前しましたか？

武田 してないですね。

菊地 汪兆銘が来て、われわれ一高生の代表が東京駅まで迎えに行ったんです。

佐道 迎えに行くようにという指示があったんですか。

菊地 そうですね。おそらく教練の時間かなんかに行つたんじゃないんでしょうか。そういうことがありました。それから、僕その後の人生——外務省に入ること若干影響したことが一高時代にあったとすれば、あれは二年生ぐらいの時だと思っています。僕は英語会（ESS）というのに属していましたが、英語会の主催で芦田均さんを講師に招聘したことがあります。僕は幹事役として芦田均さんを訪ね、いろいろ彼の外交上の経歴を聞かされました。彼がベルギーの公使かなんかをやっていた当時、ちょうど満州事変が起きて、満州事変を起こしたことに對して、ヨーロッパのみる目は非常に厳しかった。それを彼が任国政府に對して説明するのに苦労したという話などいろいろしてくれました。芦田均さんという人は、もちろん軍国主義に反対ですが、一応日本軍の満洲進出をある程度対外的に説明しなくちゃいけないので非常

■東大法学部の頃

佐道 もしよろしければ、そろそろ大学に入るあたりを。

菊地 その頃は、一高から大学に入るのは、ほとんどフリーパスという状況で、確か法学部なんかも入学試験は外国語と論文だけだったんじゃないですか。

昭和十七年（一九四二）四月に大学に入りました。僕は本郷西須賀町というところに下宿しておったんですが、朝、大学へ歩いて行きましたら、突如、上空を飛行機（B25）が飛んできました。敵機だということは、初めは信じられなかったです。

佐道 東京初空襲。

菊地 初空襲。あれは四月十八日ですかね。僕はそれに遇ったんです。

佐道 それをご覧になったわけですか。

菊地 ええ、見た。本郷の東大の真上を飛んでいった。その後、大学でも、防空演習をやるようになり、われわれのように大学に近いところの下宿している学生は、みんな駆り出されるわけです。校庭で焼夷弾を消す演習の時、バケツ・リレーなんていうのをやらされた。そのバケツ・リレーのいちばん端っこにいたのが丸山真男、その人です（笑）。彼はその頃、法学部の助手でした。

股野 空襲は四月十八日です。

佐道 入学してすぐですね。下宿はご自分でお探しになったんですか。

菊地 そうです。その頃は、だいたい東大の周辺に探すんです。僕は山崎（敏夫）君と近くの下宿でした。だから、銭湯へ行くのも山崎君と一緒に（笑）。

佐道 同じ銭湯？

菊地 同じ銭湯へ行っていた。

佐道 下宿は賄い付きというやつですか。

に苦勞したという話でした。「自分も関東軍が錦州を攻略する以前までは一所懸命、日本軍の行動を弁護した。これは自衛の措置だと。しかし、錦州までに至っては、これはもう自分としては弁護しようがない」、と思つて、本国にその旨を電報したという。

もう一人は、須磨弥吉郎さんが一高に講演にやつて来ました。彼はその頃、上海の総領事だつたと思います。彼が倫理講堂でわれわれ一高生に対して講演をした。彼は独眼流で天井の一隅を見やりながら、われわれ一高生に、日本が南京・上海でやっていることをいろいろ話してくれた。当時の中国では、抗日、反日運動が燃え盛つていた。そういうことをいろいろ説明したあとで、彼は「China is not a country. China is a history」（中国は国家に非ず歴史たるのみ）と英語で言つてのけたんです。僕は非常にその表現に感銘を覚えました。中国というものは一体なんなのかという説明をするのに、多くの学者達は苦勞しているわけですから、私も、「シナ」というのは現在じゃなくて過去なんだ、歴史なんだと言つた。これは中国人にとっては最も耳の痛い話かもしれないけども、中国を勉強する人にとっては、これは一つの重要な視点ではないかと思ひました。ちよつと長くなりましたけれども、以上が一高時代のことです。

佐道 配属将校は何人かいるわけですか。

菊地 配属将校という制度は、ご承知のとおり、一九三〇年代の軍縮時代に、大量の軍人が退職した。当世風に言えば、「天下り」です。全国の中高等学校に予備役軍人が配属された。一高には確か二人ぐらいいたんじゃないですかね。小林（弥三郎）という陸軍大尉が一人、確か熊野（利助）中佐というもつと階級の上の人もいました。その頃は、もう退役の人だけじゃなくて、現役の将校も来ていたようです。各地の高等学校で、配属将校というのはよく生徒の目の敵にされた。

菊地 それは賄い付きでしたね。ただ、日曜だけがつかないんです。だから、日曜だけは外食しました。岡田さんという人のうちでした。その後、訪ねてみましたけど、まだありません。

佐道 大学からも紹介してくれたりとかは。

菊地 その頃は別にそういうことをしませんでした。まだ、余裕があつたんでしょうね。もちろん頼めば、紹介してくれたと思います。

佐道 十七年ということですが、その頃は、大学は授業とかはきちんとしていました。

菊地 きちんとやりました。十七年四月の時点まではちゃんとしていました。ただ、高等学校で三年間のんびりやっていたのが、大学に入ると、その頃の大学、ことに法学部では、できるだけ多くの「優」を取り、高文を受けて、いい中央官庁に入るとというのがだいたいの法学部の学生のコースだった。東大というのは膨大な高級官吏養成機関ですから。末広巖太郎先生とか、我妻榮とか、穂積重遠とか、栗栖（三郎）先生とか、高柳賢三とか、あの頃の有名な教授が綺羅星の如くおりました。経済学部は舞出長五郎とかですね。ただ、僕が入った十七年は平賀肅学のあとでして、いわゆる左翼系の教授はもういませんでした。

佐道 大使ご自身が法学部を選ばれたのは、やっぱり将来は官界に入ろうと。

菊地 そうですね。ただ、はつきりとは決めていなかったんです。僕はわりと勉強が好きなので、大学へ入ってから、政治学というのは面白いんじゃないかなと思えました。それで、矢部貞治先生のところへ行つて、「研究室へ入れてください」と頼んだんです。そしたら、研究室へ入れてもらいまして、政治学の本などを読みました。当時、東大にはあまりゼミはなかったんですけど、安井郁（国際法教授）のゼミナールに入れてもらいました。ところが、それは国際法のゼミナールじゃなくて、当時、ド

イツでもはやされた政治学者でカール・シュミット（Carl Schmidt）の著書『法哲学』をテキストにしたゼミナールでした。法哲学序説みたいなもんですから、実は安井郁の守備範囲じゃなかったと思うんだけど、彼はナチス寄りの学者カール・シュミットをテキストに使った。われわれは、時々、彼の自宅へ呼ばれました。その頃は、まさか戦後、彼が「原水協」の旗振りになるとは思ってもいませんでした。しかし、われわれ学生の仲間では、当時から彼はなんとなく軽いとみられ評判はよくなかった。彼は大阪大学出身で、確か九鬼周造の娘さんを貰っているんですね。ですから、若干貴族ぶつたところもあった。われわれ学生は彼のうちへ押しかけては、いろいろその当時あまりなかったような御馳走に与つたわけです。そんなこともありまして。

試験期が近づきますと、試験の為に読む本の分量が多いわけです。ことに欲張つて単位をたくさん取ろうとすると、勉強が大変。これはちょっと高等学校とか中学校の試験勉強とはわけが違うな、とフツと気がついてみたら、周りの人は政治学だの、カール・シュミットなんていうのは振り向きもせず、ひたすら「優」を取ろうと、教科の勉強ばかりしているわけです。例えば民法とかなんとかいうのは、条文がたくさんあるし、難しいですからね。当時、物権法は、川島武宣なんて非常に輝いている教授がいました。僕もやっぱり現実的な勉強をしないといかんということになりました。しかし、同時に、いままでの一高時代に読んだ哲学とか文学というのとあまり異質な世界なので、戸惑いを感じたことは事実です。それで、僕は政治学なんかに行つたんじゃないかと思えます。しかし、いまから考えてみると、僕はその頃はスランプに陥つていたような気もします。精神的に、なんとなく不安で、好きな学問をするならいいですけど、あまり好きでもない法律の勉強をというので、それが重なつたんでしょうか。

大学の二年生になりましたら、だんだん戦況が厳しくなる。も

うミッドウェイでしょう。

佐道 ミッドウェイは十七年（一九四二）です。

菊地 そろそろ戦局が怪しくなってきたという感じが、うすうすわかったわけです。それで、「学徒戦時動員体制確立要綱」というのが六月に出ます。つまり、学生の徴集延期の停止です。これは文科の学生だけが対象でした。理科の学生は動員されない。その代わり、彼らも残ったが勉強ができたわけじゃなくて、ほとんど勤労動員に動員されたようですね。理科の学生はなぜ残したかということ、総力戦、科学技術戦争ですから、理科系は残そうということだったんだと思います。現に、われわれが一高を卒業した年あたりから、確か高等学校の理科の生徒の定員を倍にしたはずです。科学技術とか理科学系統に政府が非常に力を注いで、人材養成をやったんです。

それで、僕は動員されて、海軍に入るわけです。

佐道 東大は仮卒業ということ。

菊地 仮卒業ですね。復員で、昭和二十一年（一九四六）四月に帰ってきましたら、我が家に、「法学部学士試験に合格したこと」を証明する」という、内田祥三総長の名前で、一片の卒業証書、正式には「学士試験合格証書」ですけれども、それを送ってきました。ですから、そこで本卒業。その日付けは十九年（一九四四）になってましたので、われわれは十九年正式卒業ということになります。僕はそれで卒業したんですが、東京に家のある人は、戦争から帰ってから多くは復学したようです。僕は在学中、必要な一定の数の単位を取っていて認定されたので、復学の必要は認めませんでした。

佐道 実質一年半。

菊地 そうです、実質一年半ですね。ですから、僕はよく冗談に言うんですが、親に大学へ行く学費をいちばん節約してあげたと（笑）。

■海軍対潜学校で鍛えられる

股野 海軍はいつ入られたんですか。

菊地 海軍に実際入ったのは、十八年（一九四三）十二月です。確か七月に徴兵検査、十二月に横須賀の近くの武山海兵団というところに入団。われわれの一年前までは海軍では短期現役、主計科見習士官という制度がありました。二等水兵ですから、われわれは「ジョンベラ」といわれる水兵服を着せられたんです。カッター漕ぎをさせられる、二等水兵の厳しい冬の生活を一カ月ちよつとやりました。

佐道 なんで海軍に？

菊地 僕は別に海が好きだとか、泳ぎがうまいということじゃないんですけれども、陸軍には行軍というものがあるでしょう。あれが僕は嫌いで、同じ死ぬんなら、死ぬ前に苦勞しないで死んだほうがいいだろうと（笑）。もうひとつの理由は、海軍は昔から大学卒業生に対して待遇がよかったです。以前から主計見習士官という制度がありまして、海軍に入ると、直ぐ見習士官になって、卒業するとすぐ海軍主計中尉に任官した。みんなそれを知ってますから、ことに法学部の学生はみんな海軍を志願した。われわれの仲間は、ほとんど主計科試験を受けたんです。が、僕は落ちた。あとから聞きますと、これはと思う人が意外にも主計科を落ちていんです。つまり、あの十八年十二月の段階では、海軍当局としては、もう主計科士官はいらないと。主計科士官というのは、基本的には戦闘員ではないわけです。いま必要なのは戦闘要員だということで、兵科の士官の募集に重点が置かれた。それでわれわれが海軍兵科予備学生というのに大量にとられたわけです。われわれは兵科なんです。中でも花形は「飛行専修予備学生（第十四期）」でした。

われわれは海軍予備学生というのに回されたんです。海軍予備学生には、例えば航海学校とか、水雷学校とか、砲術学校とか、僕が行った機雷学校とかがありました。それから、もちろん飛行専修予備学生（十四期）。僕が行った機雷学校はその後、「防備学校」「対潜学校」と二度も名前が変わったんですけれども、そこはその頃、急速に必要が認識されつつあった対潜水艦の戦闘のための訓練をやる海軍術科学校の一つです。われわれ防備専修予備学生は、航海班と営所班の二つに分かれました。僕は営所班に配属された。航海班というのは、積極的に、海防艦とか駆潜艇とかに乗って、潜水艦をやっつける方です。われわれの営所班というのは、海岸に営所（水中聴音機の設置場所）をつくりまして、そこから電線（てんせん）を海中に敷設して、その先に機雷に繋がっているわけです。いまのように磁気機雷で、その上を潜水艦が通ると感じて自動的に爆裂するというものじゃなくて、営所から爆発のスイッチでコントロールするんです。九一式機雷の上を敵潜水艦が通過すると、ここでボンとスイッチを入れると、それが爆発するという仕掛でした。その後、磁気機雷というのができて、これが機雷の主流になった。

十九年（一九四四）の秋頃になりますと、航海班の仲間から、約六十名のものが、水上特攻隊（特殊潜航艇）に回されたんです。特殊潜航艇というのは「回天（後に震洋も）」と呼ばれるものです。秋も深まったある晩、昼間の訓練を終わり自習していたわれわれ学生に、突然、召集がかかって整列。「これから特攻隊要員を募集する。志願者は一歩前！」と区隊長が怒鳴る。みんなが一斉に一歩前に出る。これはもうなんと言うのか、反射的にみんなが出る。躊躇なく出る。そういう緊迫した雰囲気でした。僕も勿論出ました。いわゆる特攻精神ですな。「一歩出た」者から更に選ばれて、約六十名が二回に分かれて特攻隊の基地（回天・川棚）に行ったんです。ですから、われわれの仲間でも、ずいぶん

回天・蛟龍に行きました。なかでも、出井少尉というのが非常に名声をあげ、われわれの仲間では今でも語り草になっています。

戦死者の話で思い出しましたけれども、われわれ一高の時の同級生で、やっぱり戦死したのがかなりいるんです。僕のクラスでは、『きけ、わだつみの声』とか、戦後の学徒出陣にまつわる本によく出て来るのが二人いるんです。両方とも飛行将校です。一人は豊原令雄君。彼は庭球部で鳴らした男で、フィリピンのクラーク飛行場で戦死。それから、佐々木八郎君。彼は一高の登山部で、戦後の学徒兵達の思い出集には必ず出てくる人。彼は確か鬼界ヶ島の付近で戦死ということでした。対潜学校とか防備専修予備学生というのは、海軍でありながら陸上にいることが多い。安全だと羨ましがられたんですが、終わってみれば、われわれの仲間からだいぶ特攻隊に行くようになったのです。われわれ対潜学校で訓練を受けた四期予備学生は、総数約四百六十人です。

余談になりますけれども、なぜ防備専修予備学生、つまり、対潜水艦のための防備を専修する予備学生の制度というのがつくられたかと言いますと、それは音感が優れている者を選抜して、潜水艦のスクリー音を判別する能力を持つ者を養成するためだと言われています。水中聴音機（ソナー）で聞き分けるわけですから、艦底で聴音機を聞きながら、これが潜水艦の音か、ダイハツの音か、ディーゼル音か、ボンボン蒸気船の音かという音を聞き分けなければいけません。そのために、音感のいい者を「防備専修予備学生」として選抜した。

現に対潜学校に配属されてみますと、各大学から来ている。予備学生として来ていた。彼らは海軍予備生徒と呼ばれたんです。われわれのなかには、名士の子弟がぞろぞろいた。僕の隣が梅津美治郎陸軍参謀総長の息子。それに川越（茂）大使の息子。佐藤尚武大使の息子がいる。その他にも殿上華族の子弟もいる。僕は、そこで、ハハー、と独りで納得していました。

佐道 しかし、そういう方々は特攻隊というのは。

菊地 いま僕が言ったような連中は行きませんでした。彼らは僕と同じように営所班に回された。営所班というのは基本的には陸上勤務です。当時の校内の雰囲気を表す話として一つ。学習中のある晩、突如召集がかかって、「整列！」と。「特攻志願する者、一歩前！」と言われたあの時に、出なかつたのが一人いたんです。慶応大学出身の男です。その晩おそく、ものすごい鉄拳制裁の音が、われわれの自習室まで聞こえて来た。そういう時代でした。

武田 それは教官が殴るわけですか。

菊地 教官（海軍用語で分隊長）が殴る。われわれの教官には三種類ありました。一つは、海軍兵学校の出身者です。われわれは「ボンチャン」と呼んでいたんです。それから、もう一つは高等商船学校の出身者。彼らは操艦ができるので、早くから予備士官となる制度がありました。それから、われわれのような予備学生の先輩。われわれの前に三期、二期、一期といった。

対潜学校（久里浜にあった）では、「精神講話」という「坐学」があった。姫野大尉という教官がいた。彼は海兵出身のチャキチャキの少壮士官でした。この人はとても真面目な人でした。ある精神講話の授業中に、戦局もだんだん悪くなってきた時です。講義の最後に、突然、僕が指名されました。「菊地学生、貴様は何のために学問をやると思うか。学問する目的は何か」と聞く。僕は突然の指名にどきつとしましたが、「学問の使命は、全人類を幸福にするためにあるのだと思います」と答えたんです。そして、姫野教官は「違う。戦争に勝つためだ」と。そういうことがあったんです。

戦後、この姫野教官は海上自衛隊に入られた。われわれ対潜学校の四期海軍予備学生（略称、対潜四期）は、会をずっといまでもやっているんです。それには毎回当時の教官をお招きしている。去年の対潜四期会で、姫野教官が初めてあの当時のことを話して

くれたんです。「あの時にみんなに特攻隊に行ってもらった。あの時、自分は君達に特攻隊志願をさせる前に、自ら上層部に対して特攻隊を志願していたんです」と。そういう人がいた。ですから、海軍兵学校出身の「ボンチャン」のなかには、こんな立派な人がいた。われわれ海軍予備学生の仲間には、兵学校出に対する怨念みたいなものがあるんです（特に特攻隊に行つた人々の間で）。けれども、僕はそういう怨念は無用だと思います。

■馬公特別根拠地隊司令部へ

菊地 十九年（一九四四）十二月、僕が配属されたのは澎湖島の馬公というところでした。馬公特別根拠地隊司令部に配属されたんです。澎湖島というのは、台湾南部の高雄の沖五十マイルの所にある列島です。その先（中国側）には有名な金門・馬祖が横たわっている、つまり福建省の対岸です。馬公という所は、われわれ小学校の頃、地理の教科書で海軍馬公要港ということで習っていた。日本の北端は青森県の大泊。南端は澎湖島の馬公が海軍の要港ということになっていました。僕は「馬公特根発令（特別根拠地隊司令部付の略）」と聞いて、ああ、あの馬公かと思いました。

佐道 発令は何年ですか。

菊地 昭和十九年十二月。つまり、対潜学校卒業が十九年十二月です。それで、一路任地の台湾に向かったといえれば聞こえがいいんですが、実はその頃はもう乗船できる艦船が少なくなっておりまして、僕は最初、呉で船待ち。水交社でぼやぼやしていると、お前の乗る潜水母艦改造の空母龍鳳（一万五千五百噸）が下関にくるから、そこへ行けという。そこでまた若干船待ちをして、やっと乗船できました。対潜学校出身の同期の者が五、六名一緒に乗り込んだ。舟山列島に沿って、中国東岸に接岸しながらずっと南に下がり、基隆の対面のところまで行って、そこから東に直角

に反転して基隆港に入ったんです。なぜ接岸で行くかというのと、潜水艦にやられるからです。潜水艦は浅いところには入れませんから。しかし、ちょうど基隆に向かって転回中、潜水艦の雷撃を受けました。龍鳳は雷撃を受けたが回避、他の輸送船がやられました。

われわれのような便乗員の戦闘配置ですが、僕は下の船底にある水中聴音機（ソナー）で、敵の潜水艦の音を探知するという任務でした。僕は英語ができるということ誰かが言ったらくて、「お前、向こうの潜水艦の通信を傍受しろ」ということになったんです。それで、僕は船底へ行って電話につきますと、向こうは「カンバイ、カンバイ」と連呼しているんです。それがなんのとか全然わからない。俺の英語力では、やっぱり軍事用語はわからないのかと思ってがっかりした。しかし、しばらくしたら、「ああ、コンボイ（convoy）じゃないか」と。われわれはもう敵に見つかっているんだと（笑）。それで、すぐブリッジ艦橋に報告しました。基隆からは汽車で台北へ行って、朝陽号という将官用のホテルと称するものに入れられた。台湾総督府の真ん前にありました。われわれ少尉になりたての士官ですが、羊羹は出てくるわ、バナナは出てくるわ。すっかり目を回しちゃったのです（笑）。

佐道 内地とは全然違う。
菊地 内地とは全然違う。僕は幸か不幸か、復員するまでずっと台湾にいたもんですから、食糧にはその時以来、苦労しないで過ごしました。

股野 基隆到着は二十年になりますか。年が明けてましたか。

菊地 明けてました。二十年（一九四五）です。

股野 二十年一月。

菊地 ええ。元旦だったというのもちよつと記憶にあります。それから、陸路、汽車で台北から新竹、台中、台南と通って高雄に着いた。高雄から馬公まではダイハツ、車のダイハツじゃないで

すよ。船のダイハツで。

股野 舟艇みたいな。

菊地 ポンポン蒸気船に毛の生えたようなもの。五十マイルの海域を潜水艦の襲撃を避けて、夜陰に乗じて行きまして、馬公に到着した。そこに終戦まで正味八カ月いました。

股野 一月中に任地に到着されていた？

菊地 「馬公というのは非常にいいところだよ」と聞かされて行ったんですが、確かに以前は良好な湾に囲まれていて、大艦隊の泊地としては非常に適しているところだったんです。ところが、われわれの行く一カ月前に、水交社は空襲でやられていた。それでもまだ海軍水交社らしいところは、少しは残ってました。

股野 何艦隊の停泊地として。

菊地 泊地ですから何艦隊でも泊まる。僕は、八カ月ですからあまりやる時間はないんです。馬公は特別根拠地隊司令部ですから、一応海軍少将が司令官で、K大佐という先任参謀がいて、そのK大佐付きの副官（正式名「先任参謀付」）みたいなことを僕がやった。ですから、実際上はデスクワークでした。下士官兵と接触する機会は、唯一、僕は海軍体操が好きだったもんだから、毎朝の海軍体操の指導です。一段と高いところへ上がって、体操を指導したぐらいです。あとは参謀室で、主として海軍軍令部から来る暗号情報電報の翻訳。「ロ」暗号という暗号書で翻訳をするわけです。ですから、後で外務省へ入ってからも、暗号翻訳は海軍でやってきたことなので、あまり変わったこととは感じませんでした。暗号を翻訳などしていると、四月頃から沖繩海戦が、慶良間島攻略から始まりまして、軍令部からは沖繩の戦況について毎日電報がくる。僕はその情報電報をまとめて、翌朝の朝礼の時に、下士官兵に対して、いまこういう状況になっているという「講話」をするんです。僕が沖繩海戦についての暗号電報を翻訳している時に、電報のなかに、敵の米軍の飛行機同士が空中衝突して、二

機が鈍揉み状態で落ちてくるのを日本軍の兵士が見ている、「万軍哄笑す」と書いてある。わかりますか？

股野 万軍が高笑いをしたと。

菊地 その通り。僕は暗号書を引きながら、日本海軍の暗号も大したもんだなと感心。「哄笑」というような語が海軍「口暗号」のなかに入ってるんです。いまで言えば、パソコンの変換のなかに入っていたわけです。遺憾ながら、海軍の口暗号は例の山本司令長官の戦死の時に盗まれたんです。

佐道 沖繩にも海軍の部隊がいましたから。

菊地 牛島中将？

佐道 太田実少将が海軍。

菊地 あ、太田。

佐道 牛島は陸軍です。そのところに、海軍の陸戦隊の司令官として太田実さんがいらつしやった。

菊地 で、あの電報を打ったわけだ。

佐道 そういう電報とかも入ってききましたか。

菊地 それは覚えていません。実は、当時、澎湖島を含めて台湾にいたわれわれ海軍（陸軍もそうだと思いますが）は、米軍は台湾に上陸してくるものだとばかりと思っていた。特に、ハルゼー中将（米海軍司令官）の話として、米軍は台湾に上陸するよりも、澎湖島のほうがいいと考えているらしいと。われわれは内心、穏やかでない。しかし、そのうちに、澎湖島はおろか、沖繩へ真っ直ぐ行ってしまった。

佐道 空襲とかは頻繁にありましたか？

菊地 空襲はありません。だから、僕の戦争体験というのは防空戦闘だけです。馬公に対する攻撃はものすごいものでした。馬公は台湾と同じぐらいの泊地能力を持っているわけですから、散々爆撃されました。戦闘になれば、司令部は塹壕というか、大きなベトン盛土の防空壕に入りまして、そこへ司令官以下集まって指

揮する。僕の戦闘配置は、その頃、日本でも電探（レーダー）ができた頃で、澎湖島の付属島嶼のいちばん南のほうの島にある電探基地から司令部に送ってくる敵機来襲の情報（位置）を、時々刻々図面（二百哩半径）に記入していくことでした。悲劇は、戦い済んで日が暮れて、われわれが防空壕の外へ出てみると、そこにはわれわれの頭上で高射砲陣地で敵機と戦っていた水兵さん達の戦死姿が累々と、それはもうかわいそうでした。

インドネシア人というのは、ダイビングがうまい。帝国海軍はインドネシアに侵攻してからは、潜水夫に随分インドネシア人を採用した。彼らに乗せた船が馬公の近くまで来まして、爆撃でやられて、船もろとも沈んでいる。僕が朝海岸を散歩していると、海岸にインドネシア人の死体が打ち上げられている。全部ダイバーとして徴用されたインドネシア人。

前に申し上げた台北から高雄まで赴任の途中、新竹に立ち寄りしました。新竹は製糖工場で有名なところ。そこで捕虜を使っていた。その捕虜が豪州人（オーストラリア人）。製糖工場で砂糖きびを大きな箒みたいなもので振り分けていました。また将校パイロットでしょうか、彼らは営倉というか、牢屋へ入れられているのを目撃しました。

■澎湖島で終戦をむかえる

菊地 終戦の玉音放送というのは、僕は馬公で聞きました。雑音は入りましたが、まあまあ聞けた。僕の役目は、それを聞き取って下士官兵全員に教えることでしたので、必死になって聞いたことを覚えています。

佐道 お聞きになった時の感想はどうでした？

菊地 正直言ってホッとしたことです。その一日か前か、どうも降伏しそうだということはチラホラ入っていた。だから、

全然予想しなかったというより、ホッとしたというのが本音でしょうね。われわれは法学部卒業ですから、国際法の陸戦法規も一応知ってますから、ああ、これで捕虜になるのか、どういう待遇を受けるのだろうかなどと考えてました。

佐道 実際に、日本の海軍の艦隊はほとんど壊滅しているとか、そういうのはもうご存じだったんですか。

菊地 いや、知りませんでした。ただ、薄々、内地から来る人が時々いて、いまは連合艦隊の司令部が日吉かなんかにいるとかね。しかし、よく知りませんでした。

股野 原爆投下の情報は入りましたか？

菊地 原爆というのは特殊爆弾ということで入りました。

股野 広島も長崎も両方、地名も明らかにして。

菊地 ええ。

股野 それから、ポツダム宣言受諾というような情報は海軍に入らないですか。

菊地 よく覚えていません。馬公というのはものすごい田舎です。澎湖島はかつてペスカドーレスと呼ばれた。ペスカドーレスというのはスペイン語でフィッシャーマン（漁夫）ということなんです。最初は確かポルトガルに占領されて、その前にはオランダに占領されるなど、数奇な運命を辿ったところなんです。漁業が若干あるだけ、あとはなんにもない。できるものは落花生だけ。島民は毎食、落花生を食べていました。僕は生まれて初めてゆでた落花生なるものを食べた。

佐道 どうですか。おいしいものですか。

菊地 まあ、あまりおいしいとは言えなかったね。戦後、職業軍人に対する批判はいろいろ出ましたけれども、職業軍人といってもピンからキリまであったと思います。敗戦で自決した軍人というのは、阿南大将とか、大西滝治郎中将とか、いろいろいるわけです。だいたい三百五十人ぐらい自決したといわれていますね。

玉石混合と言いましたが、僕は「石」の方、嫌なところを見せつけられた事件が一つありました。それは、馬公で終戦になりました時に、前にも話したK大佐が、降伏したと聞いた途端に、馬公の特産である珊瑚を全部買い占めたんです。僕は最初何をするかわからなかった。「菊地少尉、ここにはいずれ中国海軍、ないしは米軍がわれわれの降伏の「接收」にやってくる。その時の賄賂用だ。それに今買っておけば、今後、高く売れるかもしれない。軍事費の足しにもなる……」と。いままで「海軍精神」とか「帝国海軍」とか言って、われわれを説教していた人が、こういうことをやるのかと一驚した。前から対岸の媽宮の料理屋にもよく行っていた。その後、中国の捕虜となり使役（強制労働）に服させられた下士官の間から、彼に対する不穏な動きが出て来て、僕がその間の調停に動いたということもありました。

佐道 大使の略歴を拜見すると、二十一年（一九四六）四月に召集解除となってますけれども、それはそこで復員をして来られた。菊地 復員したということです。

佐道 二十年八月に終戦になって、二十一年四月までずっと馬公に。菊地 いや、八月終戦で、十月か十一月に高雄に移送されたんです。高雄ですつと船待ちをしていた。高雄では一応、左營にあった高雄根拠地隊司令部付になる。高雄には第九〇一航空隊が大岡山というところがありました。これは戦争末期の段階においては最南端最大の海軍基地でした。戦後、僕は松下電器に入ってから、高雄へ行ってみましたら、そこは中国唯一の海兵隊、海兵師団の基地になっていました。馬さんという司令官が歓迎してくれました。

佐道 その基地がいわゆる収容施設みたいになつたわけですか。

菊地 ええ。馬公では最初に接收に来たのは、実は米国海軍でした。米国海軍がわれわれの全部武器を接收した。例えば僕が係わっていた「衛所」にある水中聴音機なんていうのは、全部パンパ

ンとスイッチを入れて、破壊して行った。

股野 それは馬公での出来事？

菊地 馬公のことです。われわれが後生大事に敵潜水艦が来たらバンとスイッチを押すんだと、常日頃、保守、点検していた聴音機が何機かありました。米海軍のマイン・オフィサー（機雷士官）というのが来ました。僕もマイン・オフィサーの端くれだから、通訳かたがた案内した。彼らは次々と聴音機のスイッチを入れていく。ところが、あにはからんや。一つも爆発しない。腐食していたのです。僕は直接の担当じゃなかったけど、毎日、一生懸命訓練していたのが、この体たらくでした。

股野 腐食してたんでしょかね。

菊地 腐食していた。それが帝国海軍の最後です。

佐道 見事な最後ですね。

菊地 馬公での接収の状況はというと、接収に來た中国の唯一の海兵隊と称する軍隊は、なんと日本式の傘を下げて草鞋を履いているのです。それが中国唯一の海兵隊でした。われわれのほうがずっと装備は上なわけです。

それから、僕は連絡官レンコウ官というのになった。捕虜だけでも、中国はちゃんと法規を守っていて、陸戦法規で、「士官」は使役に従事させてはいけないことになっている。僕は士官ですから、使役につかないのみならず、連絡官レンコウ官というこんな大きなバンド（腕章）を貰い、連絡と称して馬公とは対岸の媽宮（街の側）へランチで往復を許される。僕が乗船すると、そこに座っている勝者であるはずの中国の兵隊さんが思わず（？）立ち上がって僕に敬礼するんです。そういう力関係でした。今度は高雄に移りました。「集中營」という捕虜生活とは名ばかりで通常の生活をしていました。ただし管外に出ることは禁止。

ここでちょっと、敗戦時における、台湾の人達の日本人及び日本の軍隊に対する態度と、朝鮮人の日本に対する態度との比較と

いう話をしたいと思います。台湾人のわれわれに対する態度は全く好意的で、敗戦前と全く変わりませんでした。そのことを皆さん戦後の人はあまり知らない。台湾の人というのは、李登輝さんのように日本語をよくしゃべり、日本の統治に対しては、不満を持っていない。高砂族という原住民がいるわけですけども、日本は彼らに対してもよく面倒をみてやりました。高砂族のなかから、巡査が出たり、兵隊さんにとられたりということは、彼らにとって名誉だったのです。ちなみに、沖繩は島津藩の態度が必ずしも万全でなかったもので、沖繩の人はああいふメンタリティーになったのかもしれませんが、台湾に対する当時の日本の植民地政策というのは、僕は非常な成功例だったと思います。僕がガリオア留学中、バークレー・キャンパスでクラーク・カーという教授の「Japan's colonial policy for Korea and Formosa」という講義を聞いた。日本の台湾植民地政策は成功、対朝鮮政策は失敗、という話を聞いて、僕はひそかに合点が行きました。

日本の台湾に対する植民地政策と朝鮮に対する政策とは非常に違っていた。もちろん相手の国民性も違いますから、致し方ないんだけど、台湾に対しては、後藤新平以来、非常に優秀な人が総督となり、その後は専ら海軍の将官が台湾の総督になった。つまり、台湾は海軍の「株」だったわけだ。朝鮮は陸軍の「株」。伊藤博文が最初ですけども、その後はずっと陸軍が行った。途中で齋藤実という提督が総督となりましたが、これは例外的な人事だったんです。その時に朝鮮の人がなんと言ったかというのと、「今度の齋藤実という海軍の将官が来るのは困る。陸軍の人でないとなかなか非難攻撃ができない」と。

股野 ちょっと話を遡って恐縮ですが、さきほどの基隆に向かわれる船中で傍受された。「コンボイ」と聞こえた。その肉声が聞き取れたわけですか。

菊地 そうです。彼らはお互いに通信をしているわけです。

佐道 集中營のほうなんですけども、それは海軍の人達が。

菊地 集中營は、さっき言ったように、「捕虜収容所」なんです
が、牢屋に入れられたという感じはしなかった。ただ、われわれ
は構内から出てはいかんということです。

佐道 そこは海軍の人達だけが集められた。

菊地 そうですね。

佐道 陸軍は別にあつたわけですか。

菊地 馬公、高雄には陸軍はほとんどいなかったのではないです
か。陸軍は憲兵が若干いた。馬公も憲兵が一人、大尉かなんかが
いまして、これが威張っていて、われわれ海軍の水兵さんも取り
締まる。憲兵というのは嫌な存在だなと思ってました。

■復員、東北終戦連絡事務局に勤める

佐道 二十一年（一九四六）四月に復員されるわけですね。台湾
は日本人が植民でたくさん行っているわけですね。その人達も一
緒に帰るといことになるわけですか。

菊地 これは軍事上の必要からだと思えますけれども、連合国側
は軍人を優先させたわけです。もちろん軍関係の民間人（軍属）
もいました。LST船の船倉にぶちこまれて送還された。これは
窮屈で狭いもんでした。でも高雄と呉の間をですから、航海中、
兵隊さんたちは余興とか演芸大会とかをやりながら、われわれは
帰ってきたわけです。

佐道 今度は沈められる心配はないですね。

菊地 もういくら苦しくても、生命の危機はない。船の底で「り
んごの唄」を聞きました。呉に到着したら、進駐軍にDDTをぶ
っかけられる。それから、汽車に乗って、僕は東京を通過して仙
台に帰ったわけです。台湾から呉までは、従兵さんが付いてきて
くれました。海軍には、士官に従兵というのが付くんです。従兵

というのはサーバント・セーラー、これは英国の伝統です。僕の
時は、佐藤兵曹という福岡出身の人でした。その人は呉まで一緒
について来てくれた。呉で僕は東北に帰り、彼は九州に帰りました。
彼は荷物なんかを持ってくれました。僕は本当にいまもって
彼には感謝しています。

佐道 その後、お会いになったことは。

菊地 それはさすがに会わないな。九州と東北とはね。

佐道 原爆が落ちた広島をご覧になったというか、入らなかつた
でしょうか。

菊地 着いた頃はてんやわんやですから、原爆の話なんていうの
もあまり聞きませんでした。

佐道 台湾に向かわれたのが十九年末で、二十年に着かれるわけ
ですけども、東京大空襲とかは二十年ですから、本当に本土が
徹底的な被害にあう前に立たれたわけですね。

菊地 そうですね。

佐道 戻られて、本土の被害というのを車窓からご覧になったと
思うんですけども、それはどういうふうに思われましたか。

菊地 あまり記憶にありません。第一、仙台も大空襲があつたと
いうことは聞いていましたから、僕のうちが残っているのか残つ
てないのかというのが、最大の心配の種でした。あの時は蚊帳な
んかを持って帰りました。

佐道 台湾から。

菊地 内地には蚊帳がないからといわれましてね。これから夏に
向かうのに蚊帳がないと困るだろうというので、蚊帳を持って帰
ったことを、不思議といまでも覚えてます。

武田 どのぐらいの荷物を持って来られるんですか。

菊地 いまのバックぐらいですね。内地にいた軍人は、軍の物資
を家へ持ち帰ったという話は聞きましたけど、僕のように外地に
いた者は、それは全然ない。

股野 現金は支給されるんですか。

菊地 現金はもらいました。だから、お金のことで心配しなかつたような気がします。

佐道 呉から仙台に戻られるのに、どれぐらいの時間がかかったんですか。

菊地 それはあまりよく覚えてません。トラブルがあつたようにも記憶してません。復員列車ですから、一応セットアップされてました。

股野 一般の汽車とは違って復員列車で。

菊地 ええ。

股野 そうすると、例えば上野で東北線に乗り換えるということではなくて。

菊地 それは乗り換えました。

股野 復員列車という列車が走っていた。

佐道 戻られて、ご家族はご健在でした？

菊地 はい。仙台の駅に降り立ったのが二十一年四月です。それで、僕のところは北三番町百五十一番地というんですけれども、とにかく仙台駅の周りが全部焼け野原です。自分のうちの方向へだんだん歩いていくと、うちの近くの「上杉山通り」というあたりまで行くと、だんだん家が残っているんです。ああ、これじゃわが家も大丈夫だなど思つて行つたら、案の定残ってました。ガラッと玄関の戸を開けて入つたら、母が喜んで出てきました。その頃は新円切換の直後ですから、家は細々と生活している。親父なんかはもちろん退職しているわけですが、田舎のほうまで出かけて行って、コメを調達してきたとかなんとかいふ話をしました。

僕は一カ月か二カ月ブラブラしていたんでしょかね。そして、僕の家近くの米軍の第九軍団司令部というのがあるといふことがわかつたんです。ちょうどNHKの仙台放送局の近くです。そこへアルバイトの口を探しに行つてみた。そうしたら、いまち

ように辞めた日本人がいる、明日から来てくれということになりました。第九軍団司令部の通訳に雇ってもらつたんです。これは当時としては給与はいいし、わが家はもう両親の恩給だけでしたので、助かりました。「アメリカ英語」なるものに接して、いろいろ勉強になりました。ある時、ちよつと若い、賢そうな大学出のようなサージェントがいます、彼が誰かと話している。僕の方をちよつと指して、「He is an educated kid」と言っている。そんなことを半年ぐらいしている時に、第九軍団司令部の受付の前を通つたのが竹内春海という人なんです。竹内春海さんという人は、その後、外務省で僕の課長になる人です。非常に僕は影響を受けた人です。この人はちよつとハーバードで戦前の「在外研修」を受けたエリート中のエリートです。それが東北終戦連絡事務局の中心となって活躍していた。ある時、彼は僕を見つけて、「君は誰だ」と。僕はこういうわけだということをやつたら、いや、仙台終戦で手伝つてくれんか、ということになって、僕は、東北終戦連絡事務局の「囑託」というのになつたんです。ところが、そのうちに、戦前にあつた高等文官試験が復活するということが発表された。それを受けてみようかと。というのは、僕は大学の頃、高等文官を受けようと思つていたもんですから、これはいい機会じゃないかということ、高文の受験準備に取り掛かつた。だから、仙台終戦に勤めながら試験準備をやつたということです。

佐道 終戦では具体的にはどういふ……。

菊地 終戦では、主として翻訳と通訳でした。その頃、終戦のいちばんの大きな仕事は、米軍が調達をする米軍軍用の資材、主として材木とか、石炭だとか、そういう資材のプロキユアメント（調達）命令を発するわけです。その頃は、徴発（requisition）とは言わないで、プロキユアメント・デマンド（調達要求）と言つていました。終戦は調達の発給を受けたら、それをまず県庁、市町村役場に伝達する。それで、あそこにいるんな米軍基地（バラ

ツク)がありました。キャンプ・シメルプフェニツヒなんていう基地が多賀城にあった。その時の局長さんが大江晃さん。その後、タイの大使になった方。彼は僕の一高の先輩。それから、深井龍雄さん、それにさっきの竹内春海さんがいた。それで、竹内春海さんという人に僕は憧れたというか、外交官を夢見る者として、竹内さんという人は輝ける星みたいな存在でした。

〔註〕竹内氏は新潟県長岡市出身。東京商大中退。昭和十三年(一九三八)外務省入省。敗戦後は、河辺虎四郎中将一行がマニラのマッカーサーと交渉に行った時に通訳として同行した。駐イタリア大使。

その後、僕は外務省に入って、最初に研修所へ行ったのですが、研修所卒業の際、片山首相にあいさつに行った。その時、片山哲さんの秘書官をしていたのが、その竹内さんでした。彼は、その後、北米局長、フィリピン大使になり、最後はイタリア大使で引かれる。イタリア大使から退官の時に、僕は彼に非常に恩義を感じていたので、彼のお世話しよう。ちょうどその時、APO(アジア生産機構)の事務総長の関守三郎さんが辞めることになった。僕は経済協力局長室から、関守さんの後はどうですかと、竹内さんに国際電話をかけた。僕は竹内さんは断るんじゃないかと思っただけですが、翌日受けると言ってきた。ここでなぜ竹内さんのことを長々と話したかというと、ここにいる股野さんは竹内さんの英語の発音そっくりの発音をするので、竹内さんのことを思い出したので。そう言われたことがあるでしょう。

股野 竹内さんと言われたことはありませんが、戦前、外務省で英語の達人と言われた人達に、私の話す英語が外交官としてはいいんだと言われたことは本当にあります。

菊地 竹内春海さんのことが、ちょっと長くなりました。

股野 外務省に入る前に、試験の話ですが、昭和二十一年度の試験なんです。そうすると、何月ですか。

菊地 先ず高文試験の筆記試験が十一月。

股野 終連に。

菊地 まだ終連にいるんです。席は置いたままでした。

股野 終連に行き始めたのは何月なんですか。

菊地 二十一年の五月か六月ですね。

股野 夏前ですか。

菊地 ええ。

股野 それで、高文試験復活の話聞かれて、筆記試験まで半年ぐらい勉強をされました？

菊地 そうですね。それで、あの時は、試験のため受験者全部を中央に集められるなんてことはできませんから、東北大学で僕は試験を受けました。その時に、憲法と国際法と英語と国際私法を取ったのかな。これらの科目は準備するのが易しいから。口頭試問は二十二年(一九四七)四月、品川の司法研修所でした。

股野 年が明けて、二十二年四月になってからですか。

菊地 口頭試問はそうです。それは筆記試験の採点に時間がかかるわけです。

佐道 口頭試問が終わったらすぐに結果が出るわけですか。

菊地 出ました。

佐道 時間になりましたので、きょうは、外務省にお入りになるというところで終わらせていただいて、次回、この補足のところの質問をさせていただきながら、いわゆる外交官生活スタートというところからお話をまた聞かせていただければと思います。

菊地 高等試験の話、外交試験のことはちょっと僕もお話したいと思いますので。

股野 これは次回お願いします。

菊地 われわれはちょうど戦後復活した最初の高文試験ですから、われわれのクラスとしては、これを大事にしているわけです。佐道 このお話を是非次回。

(終了)

菊地清明

オーラルヒストリー

第3回
外務省入省

開催日：2001年9月6日
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時15分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ペンハウス 戸部芳珠子

■ 高文試験・外務省採用試験

武田 いま、菊地大使からみせていただいたのですが、まさに大使が便乗された空母の龍鳳の本です。

菊地 きょうはいろいろ資料を持ってきましたから、また、あとからその時々に応じて回覧します。

武田 これは非売品というものなんでしょうかね。

菊地 そうです。

佐道 これは乗り込んでおられた方？

菊地 その吉田兵曹という人が書いたんですね。それを読むと、龍鳳はいちばんよく戦い、かついちばん傷ついて、何回も復活したという赫々たる戦歴のある空母です。

佐道 吉田さんという方が発行人になっていて、しかも吉田印刷という。

菊地 自費出版ですね。しかし、よく調べてあります。戦記物でいちばん有名なのは、吉田満君が書いた(『戦艦大和ノ最期』)ですけれども、彼はわれわれと一緒に学徒兵です。

井上 質問事項に添った形で取捨選択していただいて、お話をいただければと思います。最初は、前回の補充で東北終連時代のエピソードのようなお話、あるいは占領軍のご印象などを中心としたところで、もう少しお話しただければと思いますが、いかがでしょうか。

菊地 質問状をいただきました。ただ、東北終戦連絡事務局に勤めたのは、僕はいわゆる囑託ということで、本官ではありませんので、あまりお話しできるようなことはありません。地方の終戦連絡事務局の最大の仕事は、その地区にある米軍団司令部から出るいろんな指令、特に物資調達の指令を受け取って、それを各県市町村に流して、調達を実行するということでした。僕はそれを脇で見ながら、これがいわゆる「間接統治」というものかと。

それから、思い出となることといえば、東北終連のなかには、大江(晃)局長以下、戦時中あまり外交がなかった時代の人達が復帰してきて、仙台で終戦連絡事務局をやっているわけです。彼らが僕の接する最初の外交官でしたので、僕はいろんな彼らの外交上の経験なるものを聞きました。で、そのなかには、いわゆるキヤリアの外交官でない人でも、例えばスペイン語の留学生出身の横山信一さん。この人は東北出身なので、自ら志願して東北終戦連絡事務局へ配属された人ですが、快男児でした。一九三五年ですかな。スペインの内乱の時に、彼はスペインに留学していて、サラマンカ大学なんか知りませんが、革命軍の兵士と一緒にあって、外交官の身でありながら従軍をしたという話をしていました。

そのほか、宮川さんという人。ハーバード大学出身の、インテリの日系二世で、米軍からも非常に尊敬を受けていました。東北終連では、僕はそんなことで、いわばアルバイト半分、高文の試験準備半分でした。一九四七年四月に外務省試験を受けたわけですが、それまでずっと東北終連に席は置いてました。

有名な四七年二月一日のゼネストは、宮城県庁のなかにあった東北終戦連絡事務局のなかで経験。本当に緊迫した空気が漲りました。マッカーサーのスト中止命令が出て、われわれは本当にホッとしました。革命の前夜のような感じでしたから。一月三十一日にスト中止命令が出たのでしたかね。

武田 そうですね。

佐道 東北のほうでも、食糧事情とか、そういうのは。

菊地 東北はなんといっても農村地帯ですから、食糧事情は東京ほど悪くなかったです。それでも、終戦連絡事務局の職員は、みんなは下宿住まいですから、かなり苦しかったんじゃないかと思えます。

武田 日常的に進駐軍の方とは接触があつて、常に英語で話され

ていたわけですか。

菊地 そうですね。僕の英語の勉強にはなりました。

佐道 占領で来ている人達ですから、純粹の軍人さんはもちろんいらつしやったかもしれませんが、もともと文官だけ占領のために、というような形でいらつしやった方々も多いんじゃないかと思いますが。

菊地 そうですね。ただ、アメリカの制度では、そういう文官も一応コレスポンディング・ランク（相当官等）というか、みんなカーネル（大佐）とかなんとかと官等を与えられていました。例えば有名な総司令部のカーネル・ケイデイズ。この人はもともと弁護士です。ただ占領軍当局との話は、僕が調査局第二課に配属された時に、接触というか、いろいろ話を聞いたりしましたので、その時にお話ししたいと思います。

井上 昭和二十二年（一九四七）四月、戦後第一回目（高文）試験を知られて入省されるということですが、この間のご様子についてのお話をいただければ。

菊地 僕が高文試験を受けるということを思い立った話は、この前しました。ここで、簡単に外交官・領事官試験の歴史をちょっとふり返ってみたいと思います。

そもそも外交官・領事官試験というのは、明治二十七年（一八九四）に始まった。最初は四人ぐらしか採用しなかつたようです。最初の人のなかには、あまりわれわれの知っている人はいないんですが、ただ、文人外交官として鳴らした堀口久萬一がいました。第四回には、幣原喜重郎がいるんです。これは明治二十九年（一八九六）後期になりますかね。大正七年（一九一八）になりますと、外交官試験というのが高等文官試験のなかに（高等試験外交科試験として）取り入れられます。第一次大戦が終わった頃です。一九二〇年と一九二一年の外交官試験では、驚くべきことに、一挙に三十七名も採用しているんです。それで、ずっと昭

和十七年（一九四二）までやってきました。いわゆる外交官試験というのはそれだったわけですね。昭和十七年になりますと、外交官試験というのが行政科試験と統合される。ですから昭和十七年以降は、外交官試験というのもなくなくなっています。昭和十九年（一九四四）になりますと、戦局で高等試験停止。文科の学生は全部いなくなり、残っている者は病氣だとか、丙種合格とか、丁種合格とか、そういう徴兵検査ではねられた人達が残っているわけですね。しかし、それでも外務省は採らざるを得ないということで、十九年には「任用資格の特例による採用」というものを始めています。二十年（一九四五）は、同じ特例採用で第一期に十二人、第二期に六人を採っている。ですから、昭和十九年と昭和二十年の一期と二期の採用というのは、「特例採用」ということでした。この人達はどうしたかというのと、外務省に入ってから、もう一回篩にかけられた。つまり、試験をしたわけですね。ですから、例えば十九年のクラスはその後もすこく減っている。二十年組の第一期は十二人採って、六人になつちやつた。第二期は六人採って、六人が全が本採用になっています。われわれの時には、昭和二十一年（一九四六）で、高等文官試験の行政科試験と司法科試験が復活したわけですね。その時も、外交官試験というのはなかつた。それで、われわれは、まず行政科試験を受けたわけですね。

ついでですが、外交官試験がその後どうなつたかということをご話してしまいますと、二十三年（一九四八）、つまり、われわれの二年あとには、外務省は独自に「外交官領事官採用試験」というものを正式に始めたんです。この時は高文はもうありません。高文はわれわれの時に復活してすぐなくなつた。われわれとその次だけだと思えます。

武田 そうですね。

菊地 二十三年に、外務省は「外交官領事官採用試験」をやつて、

それが、ずっと続いて、昭和三十三年（一九五八）になりますと、「外交官領事官採用上級試験」というものになります。翌年の三十四年（一九五九）には、外交官・領事官という言葉は廃止されて、「外務公務員採用上級試験」になります。それがずっと続いてきて、今年（二〇〇一年）になって、外務公務員の上級試験は廃止になった。それで、一般の公務員の上級職第一種から採用するということになったんだと思います。以上が外交官・領事官試験の歴史のあらましです。

ご質問にあるんですが、僕と同期入省者はこの六名です。戦前、外務省は年に二十数名、四十名、時には五十名も採った年があるんですけども、われわれの年はたった六名。ここに書いてある大川（美雄）君は三高、東大。それから、橋敬一君というのは、変わった経歴の持ち主でして、「通信官吏練習所」を卒業、船乗りとして中南米航路で中南米へ行ってみて、やっぱり外交官になろうと思ったという。僕よりも四つぐらい年上なんですけども、彼は外交官試験を受けて、見事に通ったわけなんです。彼はこういう変わった経歴なので、入省の採用試験の時も、試験官の一人の朝海浩一郎さんは、この橋君に対して、「君は変わった経歴のようだけど、どうして外務省を受ける気になったんですか」と。これはお定まりの質問ですが、橋君が答えて曰く、「私はいろいろどこを受けようかと考えましたけれども、外務省がいちばん学歴というものを重視しない。学歴に拘らない、ということを知って、外務省を受けることにしました」と。それがいたく朝海さん感激させまして、その後、朝海さんは機会あるごとにこの話をしました。朝海大使は日本経済（『日本経済新聞』）の「私の履歴書」にも、この話を書いているんです。

僕は、あとで外務省の人事政策の話をしようと思いますが、外務省というものがいかに学歴とか、学閥とか、そういうものにかかわらないか、もちろん試験は通らなければいけませんけども、試験

の前のいろんな学歴とか閥だとか、そういうものは全然問わない省なんです。

橋君は、その後も僕と調査二課の時も、ロンドンの大使館でも一緒なんです。そのロンドンにいたのが、さっきの朝海公使なんです。ですから、朝海公使は「ああ、橋君、来たか」ということでした。橋君というのは、その後、ロサンゼルス総領事、ガーナ大使とか、ジョルダン大使になった。ジョルダン大使の時に、ジョルダンのフェイソウ国王の日本公式訪問、国賓としての訪問がある時に、先行して日本に帰ってきた。不幸にも病気になるまで、そのまま日本に残って、肝硬変で亡くなりました。ジョルダンの王室から非常に丁重な扱いを受けて、勲章ももらったはずですよ。

武田実君は一橋出身。彼は陸軍からの復員組。松岡康弘君は北海道小樽高商、一橋大出身。平野文夫君は五高、東大。平野（民雄）東大校長の従弟です。

われわれの同期はこういうことです。ほかの期の人の話は、あまりする気はありませんけども、御質問状にありますので……。十九年組というのは、そういうふうな病弱とかの人が多かったもので、十九年組からは局長は、宮崎弘道君一人しか出ていない。彼とはインタビューしたでしょう。それから、二十年の前期というのは、わりとビンテージがよくなくて半分脱落。後期には、例えば松永信雄君とか山崎敏夫君とかは、それぞれ駐米大使、駐英大使になったんです。彼らはなかに入ってから篩にかけられて、かなり厳格な試験をされたようです。われわれのクラスからしてみれば、われわれの先に「特例」で入った連中で、追試験合格がわれわれより後の人が、われわれの先をずっと行くというのは、正直いつて釈然としなかつたんですけれども……。

佐道 基本的な質問なんですけれども、高等試験の行政科で入られるわけですよ。

菊地 僕の時はね。

佐道 行政科で、しかし、目指すところは外務省であると。それは行政科に合格した者のなから、特に外務省志望者ということだ。

菊地 そう。それから、外務省の採用試験を受けるわけです。

佐道 また別に採用試験ということになるわけですか。

菊地 はい。僕は四七年四月に高等文官試験に合格し、すぐその足で、僕は外務省と商工省を志願した。両方に願書を出しました。結果的には、外務省のほうが先に合格通知があったもんですから、商工省の口頭試問（面接）には行きませんでした。外務省では、四月二十一日に面接試験。その時は、萩原（徹）さん、寺岡洪平さん、法華津（孝太）さんという人達が試験官でした。

佐道 錚々たる方々ですね。

菊地 そうです。外国語の試験があつて、まず、英作文の課題は「My native place」。それから、英会話は勝部（俊男）さん（昭和五年組）、寺岡さん、それから、東大の英法教授の高柳賢三さん。それが二時間ぐらいありました。それから、ディクテーションとというのがあつて、これが朝海浩一郎さん。朝海浩一郎さんの名前前から知ってましたけれども、ディクテーションを読みあげるわけですが、僕なんか聞いて、「なんだ、この人は。あんまり英語の発音うまくねえな」なんて（笑）冷やかしていたもので。あの人は、英国留学の「在外研修員」で、スコットランドへ行っているんです。ですから、スコットランドの訛りがあつたのかどうか知りませんけれども……。

その時、一緒に口頭試問を受けた人で覚えているのは、このほかに柳井（乃武夫）君。柳井君は外務省の柳井（俊二）次官、駐米大使の兄さんです。それから、吉崎英男君。彼は後、通産省。この二人は受けたんですが、口述で通らなかつた。柳井君は運輸省へ行つて、持ち前のフランス語を活かして、確か国鉄からパリ

駐在になりました。吉崎君は通産省で国際派で鳴らした。在米大使館では一緒でした。退官後はテキサス・インストルメント社の日本会社の会長になりました。そういうところですよ。それから、国際法の試験は、僕は確か田岡良一さんだったと思います。ほかに横田（喜三郎）先生、大沢先生。

佐道 同じ年の受験者で試験員が違つたわけですか。

菊地 違います。あれは内閣かどこかが試験官を依頼するわけです。ちよつと前後しますけれども、高文のほうの口述試問は、品川の司法研修所でやりました。高文受験の際ユニークだったのは、憲法を選択した者は、その時、新旧両憲法を勉強した。試験に両方の問題が出るというんですね。だから、大日本帝国憲法と日本国憲法の両方を勉強した。日本国憲法はその頃、草案（憲法改正要綱）が三月か四月に発表になつていた。それを新聞を切り抜いて、一所懸命勉強した。口頭試問では両方の質問が出ました。ちなみに、宮沢（俊義）東大教授が「今回の新憲法は革命であるかどうか」ということで、学術的な論争を巻き起こしていたわけですが、僕なんかは、これは当然革命じゃないかと。天皇主権を否定したのなら、これはもう革命以外のなものでもない、と割り切つてました。僕は高文行政科試験では、後で外務省試験を受けるのに都合のいいように、憲法とか経済学の他に行政法と国際私法をとりました。僕の高文試験の準備期、国会では金森徳次郎國務大臣を中心とする憲法論議が続いているわけです。それを毎日克明にフォローして勉強しました。

佐道 新憲法の草案が発表されて、議会で審議をされて、しかし、新聞に審議の様子は出るとは思いますが、ちゃんとした解説書などがまだあるわけではないし。

菊地 ない。新聞の解説記事を読むだけです。

武田 当然、皆さんがそうですね。

菊地 ですから、昭和二十一年の高文試験を受けた人は、そ

う非常にユニークな経験をしているわけですね。

武田 試験の対策ということですが、なかなか難しいですね。

菊地 逆にいえば、あるいは楽だったのかもしれないですね。まだ定説もないし、学説もないしね。

佐道 しかし、パイオニアといえばパイオニアです。まったく何もありませんから、経験が活かされるわけでもないし、難しかったんじゃないかと思いますが、ほかの科目は外交官試験で、例えばいまもある外交史ですとか、そういうものはだいたい変わらない科目がありましたか。

菊地 ええ。ただ、僕らのときは、基本的には高文に合格したあとの外務省の採用試験は、あくまでも補助的なものです。知識というよりは、人物をみるのが主でした。外務省の場合は、語学力もみえます。戦後は、むしろディベートの形式をとったりしてまして、ユニークな採用方法をしているようですね。外務省の試験でユニークなことは、明治二十七年（一八九四）に外交官・領事官試験ができて以来、外務省の外交官試験というのは資格試験兼採用試験なんです。他省の場合は、まず高文を通る。これで資格を取った。それから、各省がまた個別に試験をやって、そこで採用するという二段構えなんです。外務省の場合は、一回の試験で採用してしまうわけなんです。ですから、よく最近、外務省の人の略歴に東大中退とか書いてあるでしょう。あれは東大四年の時に試験を受けて、合格すれば、それで採用されますから、もう大学に行く必要がないわけなんです。ですから、彼らは中退ということになる。日本の大学は外国と違って、ディグリー（学位取得）というものを重視しない、ディグリーを取る必要がなければ、もう行かなくていいわけです。

佐道 確かに外務省の採用試験は、ほかの省庁に比べると大変ユニークだと思いますし、外交というのは国内の行政と違った意味合いがありますから、独自のいろんな方法でのリクルートという

のは、当然行われることになると思いますが、大使ご自身は、外交官試験とか、外交官の採用のあり方について、最後に結論のところまでということもありますけども、いまちようど試験をご自身も受けられて、後進もそうやって育ててこられたということ、外交官試験というのは今度一本化されるんですけども、どうなんでしょうか。やっぱり別個に考えるべきものということでしょうか。

菊地 僕はいわゆる資格試験的な意味では、一本にするというのはかまわないと思うんです。まず、資格を取ってから、さらに外務省が志願者のなかから独自に採用をするということならいいと思うんです。外務省が独自の見地から、特に外交官として要求される資質というものに重点を置いて、一般の上級試験一種の合格者から採用するということは、僕は構わないと思います。

■外交官に必要な資質

菊地 然らば、外交官として必要とされる資質は何かというと、ハロルド・ニコルソンの言を借りるまでもなく、やはりインテグリティ、誠実であること。それから、やはり、人物がよいこと、対人関係に問題がないということだと思えます。俺は外務省に入ったら、専ら「外交戦略」だけをやるんだという人がいたら、それはまたそれでいいと思います。外交交渉をやったり、相手国民に対する広報宣伝活動をやったりするためには、やはり、ある程度そういう仕事に向いた人が必要であることは間違いないわけなんです。ですから、そういう意味では、学閥も、財閥も必要じゃない。昔は、外交官にとって必要な資質のなかに、「容姿端麗」なんていうことがあったようですけども……。最近の人を見て御覧なさい。とても恐ろしい顔をした人がいくらでもいる（笑）。

佐道 外交官の方とお会いする機会も結構ありますけども、ほか

の省庁の方に比べて、外国暮らしが長い方ということなんでしょ
うけど、皆さんいろいろお洒落であったり、ちよつと装いが違っ
たりということが結構多い。

菊地 多かったです。しかし、いまは千四百万人の日本人が毎
年外国へ行くようになってからは、その差はほとんどなくなりま
した。ことに、商社、メーカーの人々。これほど多数の人が外国
生活を経験するようになってからは、外交官というもののユニ
クさというのは、ほとんど失われているんじゃないですか。われ
われの時代だって、横浜正金銀行とか、日本銀行だとか、三井物
産、三菱商事、ああいうところの人達なんかは、外交官よりも外
交官らしい嗜みのある人達がかなりいました。例えば、僕がロン
ドンにいた時、松平さん（東京銀行）という人、松平恒雄さんの
息子さんですけども、この人は外交官にしたら素晴らしいとい
うような人でした。それから、例えば白州次郎も容姿端麗だし、し
かも、スポーツマンだしね。

外交官というものは、いま盛んに機密費の問題で騒がれてます
けれども、外交官というものが何か特殊の人種であるかの如く見
るのはもう時代遅れです。ことにアメリカのような民主的な国で
は、外交官というのは、一部の人にとっては憧れの対象かもしれ
ませんが、一般の人達にとっては、どつちかというところ、「ジョー
ク」の対象であるかもしれない。アメリカの場合は、重要な国の
大使ポストというのは「金で買える」わけです。大統領選挙の時
に多額の献金をした人が、駐英大使等になるわけですから、外交
官のプレステージ（名声）というものはあまり高くない。つま
り、アメリカでは、ことに大使のポストもパトラーネージ（論功行
賞）の対象になっているというところは、外交官（大使）の地位を
低いものにしていきます。彼らは自分の言葉で外交ができるわけ
ですから。

しかし、これからは田中眞紀子さんじゃないけども、大使をど

んどん民間から採用すべしと。しかし、外務省は、他の省と比べ
て民間から採用する先例をつけているんです。例えば、戦後の最
初の駐米大使は、新木栄吉さんという日銀の人。インド大使の西
山勉さんというのは正金銀行の人でした。ことに、吉田茂の時、
既に盛んに民間の人を——彼は外務省の後輩は嫌いですから——
大使に任命しました。

佐道 本題に戻して、試験を受けられて、錚々たる方々が試験官
で並ばれた。さつき朝海さんの英語のお話がありましたけれども、
ほかに何か印象に残った方々はいらつしやいますか。

菊地 あまりありませんね。その時の人事課長は、寺岡洪平さん
という人でしたけど、寺岡洪平さんのお嬢さんがバーバラさん、
料理の。

佐道 料理の研究者ですね。

菊地 あの人のお父さんです。お母さんはハンガリー人なんです。
戦争になって、寺岡洪平さんは奥さんと別れ別れになったんです。
それが戦後平和が克復されて、寺岡さんは奥さん探しを始める
と。いろいろ連合軍なんか頼んで、遂に再会するという美談の持
ち主です。その人が人事課長のあと、ペルー大使になりました、
その時に僕が、大統領就任式というのでペルーに行つたことがあ
ります。あとは思い出す試験官はありません。

佐道 朝海さんのお名前は前からご存じだったということですか
けれども、それはなぜですか。

菊地 戦時中は、外務省の人事というのは、課長クラスまで全部
新聞に出たもんです。それで、僕は大学の頃から外務省に関心を
持つてましたから、今度は西欧一課長に誰がなったとか、アメリ
カ局長は誰になったかなんていうのは、関心を持って見ていまし
た。朝海さんは何課長だったんですかね。僕は古内広雄さんとい
うのが旧制中学校の先輩でいまして、僕が大学の頃、彼が欧亜局
第一課長でドイツ担当なんです。それは飛ぶ鳥も射落とすよう

に颯爽としてました。当時は枢軸華やかなりし頃ですから。朝海さんの名前なんか知っていた。

武田 あと、商工省も希望されたというのは理由があったんですか。

菊地 それは滑り止めですな(笑)。それで、商工省関係では石炭の国家管理が喧しかった頃で、「石炭三千万トン生産目標」というようなことを喧しく言っていました。いわゆる「傾斜生産方式」というのが唱えられた頃だと思います。で、馬公特別根拠地隊司令部で主計長をやっていた中野秀雄さんという人が、当時、秘書課長をやっていました。それで、僕は彼のところに行つて、「商工省を受けたいと思いますので、宜しくお願いします」と言つたら、「大歓迎だ。時に、口頭試問では、いまの石炭の生産目標はいくらかというのには必ず聞かれるから、君はそれを覚えておきなさい」と教えてくれたんです(笑)。

佐道 では、そんなに好意的に考えていただいたのを、やつぱり行きませんかと言うのは(笑)。

菊地 行かなかつたわけです。

武田 大使は囑望されていたのに。

■外務官吏研修所での研修

— 外交官としての心得を学ぶ

佐道 早速、決まつて、研修を。

菊地 研修所ですが、われわれはおそらく、正式に外務省の試験を通じて直接研修所に入った最初の組です。正式の名前は、外務官吏研修所というのかな。

武田 そうですね。

菊地 これは一九四六年、前年に設置されているわけです。研修所に行ってみましたら、研修員は、いるわいるわ、復員で帰つて

きた人が全部そこへ押し込められていたんです。なぜかというところ、例えば昭和十三年(一九三八)以降の入省の人は、外務省に入つて、大半の人はすぐ兵隊にとられていたわけです。その人達は、ほとんど外交の経験がないわけでしょう。それで研修所にぶち込んで、短期、即席研修をやつたわけです。主として語学です。語学も、英語が主だった。当時研修所は大塚にありまして、例の義和団の乱の賠償金でできた東方文化研究所のなかにあつたんです。そこには安川壮さんなんかもいました。あの人は十三年の試験です。それが全部班に分かれてまして、二部というのがキャリアの組。それから、書記生試験に通つた人達の組もありました。そこで、われわれは各種語学の他、教養、外交官としてのエチケットということ、ソーシャル・ダンスを始め、茶の湯までやらされました。それは徹底したものです。ワインの講義もありました。佐藤信太郎さん(大正十四年組)という古い人がいまして、この人がエコール・フランセーズの人なので、われわれにワインの講義をしてくれました。だから、いまでもワインの味見などをみると、これは、われわれは五十年前にやつたことだと思つたりしてね(笑)。

武田 それは授業のような感じでやるわけですか。

菊地 それはちゃんとした授業の一部なんです。極めつけは、研修終了前の秋の「国内研修旅行」というものです。これは「外交官補旅行」として戦前からあつた制度です。外交官になるには、まず国内を知らなくちゃいけない。国内を知らないで外国へ行つても意味がない。日本のことを聞かれて、答えられないようじゃ外交官は務まらないというので、官補旅行というのは、戦前から外交官養成のためのマスト(必須)だったんです。それにまつわつたいろんな珍談、奇談があるわけです。旅行中、酔っぱらつて引率の指導官をぶん殴つたとか、いろんなことがあるようですけれども、われわれもその国内研修旅行に出ました。主として古寺

巡礼です。奈良、京都、ずっとあのへんを回った。森教授という東大の美術史教授が例年ずっと付いて回ってくれました。僕なんか昔から、和辻哲郎の『古寺巡礼』なんかを読んできましたので、非常におもしろかったです。京都では、二條陣屋に泊められたり……。最高級のところに泊まって、日本を訪れる外国人にひけをとらないような一つのライフスタイルを経験して、それで海外に出ていく。外務省に入るやつは貧乏人もいますから、そんなことは知らないが多い(笑)。それで、あまり驚かないようにと。

佐道 何日間ぐらいですか。

菊地 それは十日か二週間ぐらいでした。これは、やつぱりわれわれの研修所の最後の圧巻でした。それから、先生としては、英語の先生は、二世の女性の先生、それから、三浦和一さん(大正十三年組)という古い外務省の先輩、この人がわれわれに公文を英文で書く練習、交換公文の書き方とか、ノート・ヴェルバール(口上書)の書き方とか、そういう(外交)公文の書き方を教えてくれました。それから、アメリカ人の二世によるパブリック・スピーキング(演説)の授業。外交官というのは方々へ行って、外国語で講演をしなくちゃいけませんから、パブリック・スピーキングのやり方、これは後々まで非常に参考になりました。

もう一人、注目すべき人はブライズ博士という人。イギリス人の俳句の研究者で、一流の文学者なんです。この人は、バイニング夫人と共に、当時の皇太子殿下の英語の先生だったんです。われわれに英語だけじゃなくて、一般的な英国式の教養というものを教えてくれました。ブライズさんが有名になったのは、一九四六年一月に昭和天皇が「人間宣言」というのを出しますね。あの時の「人間宣言」の草案は、当時の学習院長の山梨勝之進さんが書いたことになってるんですが、その英文案はブライズ博士が書いたんです。その上、当時の司令部教育課長ヘンダーソンと打ち合わせをして書き上げたということになってます。これは非

常に日本人にとっても幸せだったと思うのは、ブライズさんという人は非常に温厚な人で、しかも俳句の研究者ですから、日本的な教養というものをちゃんと心得ている人です。その人が、そういう「人間宣言」の英文を書いたということは、日本のために幸せだったんじゃないかと思えます。

佐道 直にそういう方と接せられて、どういうご印象ですか。やつぱり温厚な紳士ですか。

菊地 そうです。温厚で、イギリス人ですから、ウィットとユーモアに富んでまして、われわれにとってもいちばん楽しい授業でした。

佐道 具体的には授業は英語……。

菊地 英語の文法とかじゃなくて、英語でのディスカッションというか。

佐道 外務省の試験を受けて入られた方に、いまさら文法とか、そういうのはあれでしょうから(笑)。マナーはイギリス式のもの学ばれるわけですか。

菊地 そうです。エチケット(礼儀作法)をいろいろ学び、ディナーとかランチョンの時の招待状の書き方とか、そういうものを学びます。外務省では、こういうことを一括してプロトコール、儀典と呼ぶんですけど、プロトコールというのは、外交官として大事なことです。それを研修所でみっちり仕込まれるわけです。それから、例えば自動車やエレベーターの乗り方とかね。今でこそ、日本ではそういうエチケットというのは、一般にも普及しましたけれども、その頃、日本人というのは、西洋式のエチケットというのに馴染みがなかった。スープをズルズル音をたてて飲んだり、初歩的なエチケット上のミスをやっていた。例えば、日本人は平気で人前でゲップをしますが、ソサエティ(社交界)ではゲップをしちゃいけない。それから、ハクシオンもいけない。日本人はハクシオンは平気で人前でやりますが、欧米人は、

ハクシヨンは無理してずっと抑える。健康上はあまりよくないと思うけども、われわれもそれを守っています。僕は太平外務大臣の秘書官になった時、太平外務大臣はもちろん、大平夫人に対しても、いろんなエチケットのレクチャーをする機会がありました。大平さんにしても、始めはスープは音をたてていました。それから、一部の日本人は、公式のディナーでも、英語でリン・オーパー・ザ・プレートという、皿に覆いかぶさって食べる人がいます。これは、欧米のエチケットでは大変見苦しいことなんです。必ずそり反ってこうやって食べる。食べ物のところは口を持っていくんじゃないくて、食べ物を持っていくというのが彼らのやり方です。そういうことは教えられなければなかなかわかりませんからね。それから、服装。ディナージャケット、(ブラックスタイ、) ホワイトタイ、それから、モーニング。われわれの頃は、フロックコートはもうなくなっていましたけど。勲章の付け方とか。また、偉い人に話し掛ける場合の「Your Excellency」とか、宗教家でしたら、「Your Worship」とか。イギリスでは貴族に対して、例えばデュークに対しては、「Your Grace」とよび掛けるとか、そういうようなつまらんようなことですけども、いろいろ儀礼上のきまりがあるわけです。ことに英国サービスの外交官の間では、そういう儀礼が非常にやかましかったです。

あとから僕もロンドン大使館に行つて、松本(俊一)大使のプロトコールをやりますけども、その時も、研修所で習ったこと、それから、ロンドンへ行つてから現場で学んだことを、いろいろ実践する機会がありました。

佐道 そういう意味で、国際社会で仕事をしていくうえで、かなり具体的かつ実用的なトレーニング。

菊地 そうですね。

それから、研修所では先輩のお話を聞くことが非常に重要です。先輩のお話を聞くうえで、何よりも所長さんの話が第一です。最

初の所長は松嶋鹿夫さんです。僕の時佐藤尚武さん(明治三八年組)になってました。松嶋鹿夫さんという人は、戦前は通商局長をやつてました。通商局長というのは今の経済局長ですが、僕は外務省に入る前から名前だけは聞いてました。彼は「外務省職員略歴」に載つてない。実は松嶋さんは高文合格後、中国の税関吏となり、大正九年(一九二〇)、外務省に入られた人です。ちなみに外務省にはそういう人はいるんです。例えば、松本俊一さんという駐英大使(戦時中の外務次官)をやつた人は、大蔵省出身ですし、駐伊大使のあと侍従長をやつた三谷隆信さんは、内務省出身です。ですから、前にちよつとお話ししたように、外務省というのは、戦前からほかの省、また民間から自由に外交官、大使を採用しているのです。よくマスコミなどでは、外務省は閉鎖的だということを言つてますけども、外務省というところは、実は人事については閉鎖的である余裕なんかないんです。外交には優れた人材を必要としますから、とてもそれを外務省で独占することなどできないし、そのつもりもないのです。

僕が研修所に入った時の所長、佐藤尚武さんは有名な人で、この人は吉田茂、広田弘毅の一年前の試験の人で非常に古い人なんです。僕は最初あいさつに行つた時に、いろいろ話があつたあとに、「実は、私はご令息の小次郎君とは海軍で一緒でした」という話をした。佐藤尚武さんという人は昔の東京高商出身、フランス語の人で、端整な外交官を絵に書いたような人でした。戦後、参議院議長になられた。この人がいろんな戦前の話をエピソードを交えながらわれわれにいろいろお話ししてくれました。所長は途中で堀内謙介さんに替わりました。堀内謙介さんは、斎藤博さんのあとに駐米大使をやつた方で、外務省の年次でいえば、重光、芦田と同期の明治四十四年組ですね。いま流にいえば、「花の四十四年組」というところでしょうか。堀内謙介さんは地味な方でしたけども、いろんな話をしてくれました。所長の講話の他、毎

週、各界の専門家、有識者を呼んで話を聞くわけです。これは役に立った。例えば僕がいまでも覚えてるのは、仁科博士が来て、原子力の話をしてくれました。戦争中、日本の原子爆弾の開発がどこまでいっていったかとか。われわれは、本当に研修所の毎日毎日が楽しみでした。勤務とはいえ、仕事はなく講義を聞くだけの話ですから、それは楽しいものでした。これが約七カ月続きました。

佐道 印象に残ったお話とかはございますか。

菊地 特に具体的には……。僕はそれまでいろんな本を読んできましたから、大半は知っていることでしたけれども、直接当事者から聞くのはおもしろかった。ただ、初めて聞いたというふうな話はあまりなかったと思います。

佐道 佐藤さんや堀内さんのような、かなりの長老という方の方に、例えば、中堅クラスの方とか、そういう方も来られましたか。

菊地 実務の研修のためには、例えば西堀（正弘）さんとか若い事務官（昭和十五年組）が来て、司令部に出す覚書（memorandum）の書き方、公文（official letter）の書き方を訓練してくれました。そういう実務訓練もあるわけです。それから、経済学も勉強するし、いろんな商品学も若干やったんじゃないかと思えます。商品知識。

佐道 経済学はどなたが。

菊地 経済は誰が来ましたかね。中山伊知郎、小島清さんあたりかな。まあ、その頃の有名な人が来た。外務省研修所に話をしに行くということが、その頃、わりといいことになってましたからね。

佐道 皆さん、寮にお入りになるわけですか。

菊地 はい。東京にうちのある人は自分のうちから通いますけども、僕の場合は、前にお話した叔父のうちの江古田にありまして、

そこから大塚の研修所へ通ってました。四七年の五月というのはまだ食糧事情もよくありませんでした。さっき話した武田君なんというのは、陸軍の軍服のまま来ていました。

佐道 交通事情は。

菊地 交通事情はまあまあ回復してました。江古田から西武線で池袋まで来て、それから、「省線」で大塚まで。

佐道 江古田におじさまがいらつしたわけですか。

菊地 ええ。江古田にいたんです。僕のおじというのは、この前ちよつと話したと思えますけども、高橋豊太郎といって、建築学会では武藤清と並び称される人だったようです。その息子が前に話した高橋英夫という文芸評論家です。西行のこと、ブルーノ・タウトのことを書いたり。

佐道 ホイジングの翻訳をされたり。

菊地 そうそう。「ホモ ルーデンス」という。彼は東大の独文科です。

佐道 全然話は違いますけれども、江古田といえば、帝銀事件の現場の近くですね。

菊地 そうです。僕はその時も本省調査局二課でした。

■ 調査局二課へ

菊地 調査局二課の話をしましょうか。調査局二課というのが、僕の配属された課でした。その頃、松岡君は終連かな。それから、武田君はまず総務局経済課、それから貿易庁へ行つたんです。橘君は貿易庁にそれぞれ配属された。

佐道 本省勤務になられたのは大使だけですか。

菊地 いや、武田君は本省総務局です。松岡君は「終連」の連絡課、大川君は衆議院の渉外部。僕の課長は近藤晋一さんでした。ここに表をいただいたんだが、これは武田さんが書いたの？

武田 調べて書いてみました。

菊地 これは何でみました？

武田 これは大蔵省の職員録です。

菊地 大蔵省の職員録？これはだいぶ違っています。僕が調査局へ行った時は、局長はちょうど法華津孝太さんから、松平康東さんに替わる時でした。

武田 二十二年十二月。

菊地 二十二年（一九四七）十二月。ちょうど法華津局長は一週間ぐらい。法華津さんという人は、その後辞められて、北洋漁業の社長さんになりました。それから松平康東さんにかわった。松平康東さんという人は、その後国連大使になって、辞めてから神社庁の総裁になった。

〔註〕松平康東氏は、国連大使当時、日本も国連協力（PKO）のため自衛隊の海外派遣を認めるべきだと提言して、問題にされた。

松平さんがしばらくやってから、与謝野秀さんにかわったんです。で、与謝野秀さんはもちろん与謝野鉄幹の息子で、その息子が今の与謝野薫ですよ。僕は松平康東さんと与謝野さん両方が局長でしたけれども、その頃は末席の事務官ですから、局長とはほとんど接触はありませんでした。しかし、与謝野さんというのは一高の先輩でもあるんで、時々お話は伺ってました。

佐道 どんなご印象でしたか。

菊地 とてもスポーツマンでして、一高の陸上運動部、確かランナーなんです。背が高くて非常にスマートな人でした。この人は昭和二年（一九二七）の試験です。

当時の調査局には第一課から確か五課まであったと思います。一課が総務課で、二課が米州（北米、中南米）、三課がソ連及び東欧圏、四課が西欧、五課がアジア（中国）だったと思います。武田 地域別で分かれています。

菊地 地域別で分かれています。当時の調査局というのは、

実は名前は調査局ですけども、これは仮の姿でして、あとの地域局に当たるものです。ところが、当時はいわゆる「外交冬の時代」ですから、外交というのは全然存在しない。外交がないのに地域名を冠する課というのはけしからんというSCAP（連合国最高司令部）のご命令で、地域名を冠することはできなかった。そこで、一課、二課と数字で表しておいたわけです。ですから、平和条約後の五一年（一九五二）十二月には、調査局というのが廃止され、アジア局、欧米局というのになったわけです。五七年（一九五七）には欧米局のなかから、欧亜局が分かれる。一九六五年、アメリカ局は中南米を離して北米局になる。で、最近になってから、欧亜局というのが欧州・大洋州局（現在は、欧州局と、アジア大洋州局）になった。

さて第二課長は、近藤晋一さん。この人は僕が非常に尊敬する人でして、近藤さんもどういうわけか、わりと僕に目をつけてくれたんじゃないかと……。僕はいまもって感謝しているんです。この人は、戦前は、ニューヨークの総領事館にいて、非常なアメリカ通になった。スポーツマンでして、ジョン・サラセンにゴルフを教わったというのが、彼の自慢でした。彼と一緒にニューヨークにいたのが平沢和重、あとからNHKの解説をやった人です。近藤晋一さんの人徳ですかね、われわれの課には、わんざと人が集まってきた。アメリカ主管の課ですから、なんか情報があるんじゃないかと思つて、みんなが集まってくる。昔、アメリカにいた人とかです。

そのなかには、まず都留重人。この人は戦後非常に重用されて、経済安定本部の副長官をやった。「近藤君、近藤君」と言つて訪ねて来ました。それから、さつき言った平沢和重さん。福島慎太郎とか、大来佐武郎、ちよつと変わり種では、吉田健一さんなんかが来てました。

武田 吉田茂さんの息子さんの。

菊地 息子ですね。体の大きい人でした。当時、外交はないわけですし、SCAPとの連絡という仕事は、終戦連絡事務局の方でやっているわけで、調査局というのは調査研究専門でした。それで、調査としては、アメリカというか、米州全体の政治経済情勢を調査すること。特に、アメリカの国内情勢、外交政策を研究するということ。それから、SCAPに対して、いろいろワシントンにある極東委員会あたりから指令が出る、それから、国務省からもいろんな指示が出る。そういうものところ、どういう指令が出ているかということいろいろ調べるわけです。

当時は、情報鎖国時代、検閲時代ですから、資料といっても、あまり手に入らない。唯一、われわれがオフィシャル（公式）、かつオーセンティック（有権的）な資料として使っていたのは、US・ガバメント・ブレットイン（US Government Bulletin）というものでした。USGとわれわれは呼んでいました。これはアメリカの国務省が各在外公館に流している毎日毎日の情報電報なんです。非常に簡にして、要領を得た情報電報で、アメリカ大使館から（その頃はもちろん大使館と言わないで、ディプロマティック・セクションと言っていましたけど）われわれがもらってくるわけです。われわれは毎日、それを研究して、毎月の調査月報というのを出しておったわけです。

課の人員配置ですけれども、近藤晋一さんが昭和十年組の課長。首席事務官には、吉田健一郎さんという課長と同期の人がいました。この人は課長と同期なのに、ちよつと体を壊されました、首席事務官になった。その次が、例の竹内春海さん。その次は東郷文彦さん。下の方では、高杉幹二、大口信夫、それから、宮崎弘道、松永信雄、僕、浅羽（満夫）もいました。そのあと、例えば千葉一夫君だとか、さつき話した橘敬一君なんかも来しました。

僕の役割分担ですけれども、僕はアメリカの対外政治外交を担当しました。まず、アメリカの政治と経済に分けて、その各々を

対外と国内に分ける。僕がその頃やったことでも覚えているのは、ちよつどその前年に、トゥルーマン・ドクトリンの発表があり、ジョージ・F・ケナンの「Sources of Soviet Power」という有名な論文が出た。われわれ若い事務官にとっては、調査研究しなくちゃいかん資料は山とある。それから、ちよつど四八年（一九四八）からマーシャル・プランが実行されますね。対外援助法です。その対外援助法が、僕の最大の調査のテーマでした。

■戦後最初のアメリカ研究

菊地 そうは言うものの、実ははじめからそうだったわけではありません。最初、僕が課に行き、近藤晋一さんに「今度配属になりました」と言った。それから一週間か二週間しましたか、「菊地君、君も知っているように、今は外交なんて何もないんだよ。君はアメリカのことをよく勉強しているらしいから、この課に出て来なくていいから、日比谷にCIEの図書館がある、あそこへ毎日行って勉強しなさい」と。確か六カ月かなんか、いわゆる国内留学をさせられたわけです。まあ、国内留学といっているかどうかは知りませんが、僕は非常に感激しまして、毎朝、外務省には行かずに直接CIEの図書館に通いました。アメリカの調査といっても、さて何をやるか。いろいろ考えたんですが、これはおそらく近藤課長の示唆（「君、アメリカの政党の研究をしてみなさい」）もあつたんじゃないかと思うんですが、僕もそれはおもしろいということで、調査報告書のテーマは、「アメリカの政党の研究」と定めた。政党の最大の効用・機能はやっぱり大統領選挙なんですよ。ですから、結局、その中心である大統領選挙制度の研究ということにしました。ここに持ってきたんですが、それが「アメリカ政党の研究」。これはいわゆる調査で非売品ですけれどね。

佐道 一人でお書きになった。

菊地 そうです。

井上 これは戦後最初のアメリカの研究じゃないでしょうか。

菊地 戦後最初のアメリカ政党の研究だと自負しています。そうこうことで、われわれの課には多くのアメリカ研究家たちが集まりました。斎藤真、それから、岡義達、嘉治さんの息子とかですね。

佐道 嘉治元郎。

菊地 ですから、いわゆる戦後のアメリカ研究の草分けみたいなもんだつたんでしょう。そこには都留さんもいるし、アメリカのことを聞こうと思えばいくらでも聞ける人がいろいろ集っていました。坂西志保さんも、時々顔を出していました。中屋健一さんはまだ……。その頃の岩波の『世界』という雑誌に、「世界の潮」という欄がありました。あそこにわが調査局各課の課長さん、ないし事務官が分担して執筆していたんです。アメリカのことは近藤さん、ソ連のことは新聞欽哉さん、中国のことは、その頃、第五課長の田中三男さん（昭和七年組・吉田総理秘書官）と。だから、あの頃、いちばんオーソリタティブな（権威のある）アメリカ情報というのは、調査局二課にあってたということがいえるんじゃないでしょうか。

佐道 その当時の『世界』は信頼性があった（笑）。

菊地 その頃はまだあった。近藤晋一さんという人はわりと進歩的な人でした。おそらく「世界の潮」は、喜んで執筆依頼したのかもしれない。

これが本になる時は、もう僕はガリオア留学に行っていた。調査二課でやった仕事としては、さっきのケナンの論文を解説したり、トゥルーマン・ドクトリン、例のチャーチルが言った「ステッチンからトリエステまで、鉄のカーテンが降りた」と演説したミズリー・スピーチとか、マーシャル・プランとか——。われわ

れが研究するにはこと欠かないような時代だったと思います。

アメリカによる中国の「国共調停工作」が失敗する。そこで国務省は、ホワイト・ペーパー・オン・チャイナという龐大な調査報告書ものを出すんです。中国白書。それを分析して、外務省ではレポートのことを「調書」というんですが、調書を出せということで、これも僕にとつてはちよつとした仕事でした。いまでもこのホワイト・ペーパー・オン・チャイナというのは記憶に残っています。余談ですが、僕がこの前、大平記念財団賞の受賞式に行ったら、これをテーマにした本を書いた人が受賞していました。中国人の学者でした。実は僕の若い頃、ホワイト・ペーパー・オン・チャイナに関する報告書を書いたんだと彼に言ったら、是非訪ねて行きたいと言っていました。あの頃は、スチュワート大使が行き、それから、マーシャルが北京に行っても、結局、国共の調停には失敗する。それで、「Who lost China?」論争がアメリカ国内で盛んになった。その頃、国務省のなかには、いわゆる親中共派というのがあって、毛沢東の共産党はアグラリアン・リフォーマーズ（農村改革運動）だというふうに定義付けだったんです。アグラリアン・リフォーマーだから、アメリカの支援に値するということだったんだけど、結局、それが失敗したという経緯が、この中国白書につぶさに書いてあります。後に、僕はガリオア留学の先でポール・M・A・ラインバークという中国の専門家の「Far Eastern Seminar」というゼミをとるんです。そのゼミでも、この中国白書のことを思い出していました。

■ 占領行政の一面

— 外交団との接触はディレクティブ違反か？ —

菊地 僕は、調査二課には二年半ぐらい在籍したわけですけれども、この間、さつきちよつと話された、総司令部（SCAP）と

外務省との接触というものを、サイドからですけども、ずっと見ていたわけです。SCAPがどういふふうにビヘイブ（ふるまい）するか。いろんなことを思い出します。仕事の関係では、当時SCAPのダイレクティブ（指令）で、在京の各国のディプロマティック・ミッション（大使館はまだない）と外務省が接触することを禁じた。つまり、外務省は外交はやっちゃいかんと。対外折衝があったら、全部それは司令部を通してやれ、という建前だった。あとで、僕はこのダイレクティブに抵触することをやることになる。

SCAPは各省の課長以上の公務員に対して資格審査のための公職適格試験というものをやったわけです。それに落第した人は休職になるか、停職になるか。

佐道 厳しいですね。

菊地 あるいは地方に飛ばされるとか。外務省のなかには、「占領軍の試験なんか受けられるか」と言って、受験を拒否した人も何人かいました。そういう人は地方に回された。僕の聞いた話ですけれども、外務省でその試験をトップで通つたのは時の萩原（徹）条約局長。一番が東郷文彦課長。彼らは本当に外務省のエース秀才です。その頃、外務省のスタッフは、SCAPないしは地方終連へ行つて占領軍と交渉したわけですけれども、そのなかには気骨のある人がいた。例えば番徹夫さん（昭和十三年組）という人は、奈良の終戦連絡事務局について、詳細は知らないんですけども、占領軍が出したダイレクティブに対して、何か批判したらしいんですね。それで飛ばされた。そういう侍もいた。

次は僕自身のことですけども、僕はアメリカの対外政治担当だったんですが、同時に、カナダも担当していた。

佐道 それは対外政策というのではなくて、全部。

菊地 カナダの全体。当時、カナダというのは日本にとって大事な国です。カナダのディプロマティック・ミッションのチーフは

有名なハーバート・ノーマンです。僕はノーマンには会っていませんが、あとのガリオア留学でカナダを訪問して、ノーマンを訪ねたことがあります。

なぜ、僕がカナダ担当官の話をするかといいますと、実は四九年（一九四九）でしたか。カナダからかなりの重要人物が来るので、外務省としても、いろいろテイクケア（お世話）しなければならぬということがあった。僕は課長に「なんとか日程をとれ」と指示されたんで、在京のカナダ・ミッションに電話した。そして、ブリットという参事官が、いろいろ教えてくれた。そこまでは、よかつたんですが、その数日後に、SCAPのガバメント・セクション（民政局）のミス・ローブ（Miss Loeb）という女性が僕のところに電話をかけてきた。「あなたはなんでカナダのディプロマティック・ミッションと接触したのか。これはダイレクティブ違反であるよ」と。僕は外務省に入ったばかりで、「あーこれで俺はもう首か」と思いましたよ。思い余つてブリットさんに電話してみた。「実はSCAPのミス・ローブがこういうことを言っている。僕としてもどうしたらいいかと思っているんだ」と言ったら、彼曰く、「それは全然心配いらぬ。自分がミス・ローブに電話するから」と。その後はなんとすることもなく過ぎ、これで首が救われたんだなと思った。その後、あるパーティでブリットに会つて、「どうしておさまつたんですか」と聞いたら、「いや、なんでもないんだよ。かねて、われわれ外交団の仲間では、あのミス・ローブという係官を非常に嫌っている、彼女が外務省と各国のディプロマティック・ミッションのコンタクトを禁じている張本人だということを知っていた。これがいい機会だと思つて、彼女に電話して、自分が菊地と電話したことは確かだ。しかし、それは菊地が電話をかけてきたんじゃないんで、私の方からかけたんだ」と言ってくれたらしい。それで、万事もさまつた。陰湿なる占領行政の一面でした。マッカーサーあたり

が、大所高所で非常にいい占領政治をやっている蔭で、いろいろ陰湿なこともあった。占領行政の最悪の例は、検閲。あれは酷いですよ。民主主義を教えにやってきたSCAPが、最大規模の検閲をやったわけですから。

これは非常に個人的な生活の話になりますが、四十八年（一九四八）の春、まだわれわれの生活が厳しい時の話です。外務省のわれわれもいろんなアルバイトをしていた。経済安定本部で非常に活躍しておった東郷文彦さんが、僕の課に転動して来た。彼は首席事務官ですが、ある日、僕を呼んで、「おい、菊地君、ちょっと内職の話があるんだけど」と言うんです。「内職ってなんですか」と聞いたたら、「いや、経済安定本部から毎日膨大な資料を、ESS（経済科学局）に出さなくちゃいけないんだ。その翻訳、特に和文英訳をやるのに非常に人手が足りない。自分は安本時代をやっていたんで、今度こっちへ来てからも頼まれる。しかし、とても自分一人だけじゃできないんで、君、手伝ってくれんか」という。僕も、その頃、どうせ安月給ですから、「はい」と二つ返事で引き受けた。ところが、ますますその仕事が増える。僕はもちろんうちへ持って帰ってやる。それもだんだん間に合わなくなつて、「菊地君、すまんけど、役所が終わつてから、僕のうちへ来てくれんか」という。東郷さんのうちは例の東郷茂徳のうちで、麻布にあった二階建ての吹抜けの、バルコニーのある大きなうちでした。当時、東郷茂徳は戦犯ですから、その留守宅に伺つたわけです。東郷茂徳さんのドイツ人の奥さんにもお会いしました。それから、東郷文彦さんの双子の息子（東郷茂彦・東郷和彦）。五つか六つで小さかったですけどね。

■ 調査局の陣容

菊地 これは少し仕事の話になりますが、四八年（一九四八）十

一月、アメリカでは大統領選挙がありますね。トゥルーマン副大統領対デューイニューヨーク州知事。これには調査局二課に限らず、外務省全体、いや日本全体が注目した。どっちが勝つかと。大方の人は下馬評の高いデューイに賭けたんです。調査局二課としては、共和党のデューイ当選ということに予測を出していたのです。ところが、調査局第三課の曾野明さんという人がいまして、この人はソ連の専門家です。曾野さんはその後『文芸春秋』の「苦言諫言」をずっと書いた有名なソ連通です。「法眼・曾野」（ソ連専門家チーム）と言われた曾野さんのほうですけれども、この人がトゥルーマンが勝つと言い出したんです。米国のライバルであるソ連の担当課長が「トゥルーマンが勝つ」という。

武田 それは何か確信みたいなものがあつたんですかね。

菊地 選挙が終わつてみたら、見事彼の方が当たつたわけです。それで、われわれは、「曾野さん、どうしてあなたはトゥルーマンが勝つと思つたんですか」と言つたら、「いや、そんなことは簡単だよ。彼の名前を見なさい。彼はトゥルーマン（True man）じゃないか。「真実の男」だ。それをアメリカ人が買ったんだ」と。これが情報専門家の意見でした（笑）。

その後日本政府というか、自由党は非常にデューイをもてはやして、デューイを日本政府のロビーに使うんじゃないかというような話がいよいよ出てきた。あとになりますけれども、デューイ事務所というものを、日本のロビー活動に使おうということ、駒村さんという江商の社長をやった人がカウンターパートになって、確か年間十萬ドル——その頃の十萬ドルというのは大変なお金なんですよね——それでロビイスト契約を結んだはずですよ。そういう時代でした。

佐道 曾野さんは三課にいらつしたわけですか。

菊地 三課です。ソ連圏担当の課長でした。

佐道 別表の二のほうでは、曾野さんは二課長になって。

菊地 これは間違いですね。

武田 もう一度、ちよつと調べてみます。

菊地 このなかでは、三宅喜二郎さん、これは正しいと思います。それから、飯田藤次さんという人、彼は満鉄かなんかにいた人で、外部から入ってきた人です。二課のところの曾野明は抹消して、近藤晋一さんに。その次に竹内春海さん。それから、松永君というのは末席の事務方ですから。それから、ソ連課は安藤吉光じゃなくて、曾野明。二十四年（一九四九）頃は新関欽哉だと思いません。四課長、これは僕はよくわかりませんが、杉浦宏さんあたりだったと思う。それから、高橋學と書いてあるけど、これは覚です。吉浦さんという人もフランス語の人です。第五課を追加して、これに田中三男。その次に、吉川重蔵。それで、田中三男さんも、吉川重蔵さんも、五課長を終わったあと一課長になっているんです。ですから、この一課長の吉川重蔵さんというのは正しい。外務省の職員録を大蔵省でなく……。外務省の職員録はないのですか。外務省の職員録を大蔵省で調べるといふのは邪道ですから（笑）。

佐道 古い時代の人事録はなかなかよくわからなくて。

菊地 そうでしょう。

佐道 いまでもそうですけれども、大蔵省が各省庁の全体の職員録を出しているのです、それをもとにちよつと記録をつくってみてくださいけれども。

菊地 なるほど。

佐道 ちなみに、調査二課は、普通の書記官とか、そういう人まで入れるとだいたい何名ぐらいいましたか。

菊地 二課は大きかったですよ。中南米も含めていましたから、スペイン語の人達がたくさんいました。二十五名から三十名の間。

佐道 調査局のなかでも、二課がいちばん大きかった？

菊地 と思いますね。五課というのも人数的には多かったと思

ます。というのは、チャイナ・サービスというのは、ご承知のように戦前はものすごく人員的には多いですから。あるいは第五課の方が人数としては二課よりも多かったですかもしれない。

佐道 米州、ソ連圏、アジア、中国。いまでいえば、中近東、アフリカとかは入ってませんけども。

菊地 まだ独立してない（笑）。調査局は外交がないわけで、地域別の調査だけということで、ほとんど開店休業みたいなもんです。僅かに活気を呈しているのは調査局二課だけと。第一課というのが総務であると同時に、国連もやってまして、国連月報を出していました。調査月報の編集は一課でやりました。一課にいたのが、例えば御巫（清尚）とかが、よく原稿集めにわれわれのところに来てました。

武田 第二課では、USGブレテンを基本的な情報源。ほかの課はどうなんですか。

菊地 ほかの課のことは知りませんね。苦勞したんじゃないでしょうか。とにかく情報がシャットアウトされて、新聞情報、通信社しかない時代ですから、本当のオフィシャル・インフォメーション（公式情報）というか政府系の情報、インサイド・インフォメーション（内部情報）というのは全然入らないわけです。それがまた占領軍の目的でもあったのです。日本を完全に外界の情報からシャットアウトして、占領行政をやるという。だって、ディプロマティック・ミッションとの接触すら禁じたんですから。僕はその犠牲に危うくなりかけたわけだ（笑）。

武田 それから、もう一つ、調査局全体の機能は安本のどこかの機能とバッティングするようなことは。

菊地 安本というのは独自のソース（情報源）を持っているわけじゃありませんから……。調査局二課も独自のソースがないものだから、一所懸命それは探してました。主として、外国系の新聞記者との付き合い。これは近藤さんは後に情報局長をやった人で

すから、情報の専門家なんです。ずいぶん彼らから情報を集めたんだらうと思います。それから、この頃は、ちょうど芦田内閣、四八年三月から十月までは芦田内閣ですから。その時の外務政務次官に松本瀧蔵さんという人がいた。彼はハーバード大学出身の大変なインテリ二世でして、この人が占領軍とのコンタクト（接触）をよくやっていた。それから、あの頃、パッケナムとか、ポーンとか、有名な歴史に残るような腕利きの外人（米国）新聞記者がいたわけですが、こういう人達と接触して、SCAP関係の情報を探るとか、そういうことはよくやったんじゃないでしょうか。ただ、情報を取りすぎて、例えばSCAPのなかの対立に巻き込まれるようなこともあったらしい。例えば、経済問題について言えば、総司令部内のGSとG2との間、GSとESSとの間の確執とか。経済問題に関しては、渡辺武さんのオーラル・ヒアリングによく出ていますね。経済関係資料といっても、当時の日本は世界の経済に影響されるよりも、直接には占領軍の経済財政政策に影響されるわけですから。ドッジ・プランなんていうのは四九年でしょう。占領軍がどういう経済政策をとるか。デフレ政策をとるのか。賃金凍結をやるのかとか、そういう情報のほうが本当は必要な情報でした。

■戦後経済に思う

井上 個人的なことで恐縮なんですけど、ちょっと見ていただきたいんですが、これは昭和二十一年（一九四六）九月に調査局の名前で出ている報告書なんですけど、これは同時代的に何かご覧になったことがございますか。

菊地 これは例の大来（佐武郎）さんがやった委員会グループとさうね。これには僕は関係していません。これは非常に重要な文書なんです。これに関係したのは、われわれの仲間では越智啓介

君なんかが、大来さんたちと一緒にやった。これは大来さんが幹事役で、佐伯喜一さんとか、都留さんも入っていたと思います。その人達が戦後経済再建の調査をやったんです。笠信太郎は入っていますか。

井上 入っていたと思います。

菊地 これが実際の戦後の経済政策、有沢広巳とか、そういう人達がやった。大来佐武郎さんも非常に活躍したんです。確かに調査局のなかにあったのでしよう。そこで活躍した人々の中には、おもしろいことに満鉄調査部組がいる。この前、外地出身の人が戦後大いに活躍したという話をちょっとお話ししましたね。

井上 いま、重要というふうにおっしゃられたんですけども、重要という意味は。

菊地 つまり、戦後の再建にとって……。例えば傾斜生産方式（石炭生産目標三千万トンなど）なんていうのは、案外そういう人達から来ているのかもしれない。和田博雄のエコノミック・プランニングの思想も。

井上 表題は経済再建ということでもあるんですけども、なかはやはり外交再建というか、外交構想だと思んですけど、そういう点でもなんらかの意味での影響力というのはあったんでしょうか。

菊地 それはあったと思います。ただ、五〇年の末頃になりますと、外務省のなかでも、「特別調査委員会」とかなんとかできまして、平和条約の準備を具体的に進め出しますから、経済問題のほうは、朝鮮事変特需が、かなり多くの経済問題の解決をしてくれたと思います。この研究は戦後復興への一つのステップング・ストーン（足がかり）じゃないでしょうか。やっぱりこのステップを踏まないで経済復興はできなかった。ただ、基本的には、都留重人、それからESS（経済科学局）のなかのファインとか、コーエンとか、そういう進歩的な、ニューディールの、計画経済的な考えの人達が、その頃はまだ力を占めておったと言えるんじ

やないでしょうか。芦田内閣は、どちらかというところと進歩派のほうです。吉田茂も、和田博雄とか、有沢広巳とか、大内兵衛という学者、どっちかといえば中道左派的な人達を重用していきますから、当時の経済政策は計画経済とまでいかなかったも、政府主導型の、いわゆる産業政策型の手法になっていったんじゃないでしょうか。これはチャルマーズ・ジョンソンなんか盛んに指摘している、いわゆる通産省の行政指導、インダストリアル・ポリシー（工業政策）主導型の経済発展形態の走りですよ。

佐道 たくさんお話しさせていただいているものから、あつと言う間に時間になってしまいました、きょう、お送りしている質問項目で、留学の件はおそらくたくさんあると思いますので、これは次回に持ち越しということにさせていただきます。一応ちようど時間も過ぎておりますので、きょうはこのあたりでということ、どうもありがとうございました。

（終了）

菊地清明

オーラルヒストリー

第4回 ガリオア留学時代

開催日：2001年10月4日
開催時刻：午後1時55分
終了時刻：午後4時10分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）
股野 景親（元スウェーデン大使）
佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）
武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■ガリオア留学でワシントンへ

菊地 この前の補足から始めます。調査局第二課でアメリカ研究のグループができたというお話をしました。その関連で、その頃、東大のあるグループから、僕は東大に呼ばれました。おそらく僕がその頃研究していたアメリカの大統領選挙を絡めて、アメリカの政党政治の話をしたんだろうと思います。その時に、東大の学生が一人いまして、彼があとで外務省へ入ってきたんです。その人がある時、「菊地さんが東大に来た時、僕はあんたのレクチャーを聞きました。しかし、この若い事務官が外務省に入ってから一年かそこそこで、よくも厚かましくわれわれ東大生の前で講演しに来たな、と思った」と言うんですよ。その学生というのは後に参議院議員、衆議院議員になって、いま鹿島平和研究所の会長をやっている平泉渉さんです。それが平泉渉君とのおつき合いのきっかけで、いまでも僕は鹿島平和研究所の理事をやっています。

この前、外務官吏研修所の初代の所長は松嶋鹿夫さんという人で、この人は外務省の職員略歴に載ってないと言いましたね。ちよつと調べてみましたら、やはり行政科の高文は受けてる。それで、その後中国税関吏になって上海にいます。大正九年（一九二〇）に外務省に入った。

佐道 若い事務官が何を言いに来たんだというのはよかったですね（笑）。

菊地 ……。

武田 大使からお借りした『アメリカの政党』を少し拝見させていただいて、いや、このぐらいできれば、いまでも本当に通用するような中身じゃないかと思えます。

股野 先月は失礼をいたしました。先月の記録はおもしろく拝見をいたしました。武田さん、FASID（国際開発高等教育機構）のもありがとう。あれは歴代の経済協力局長と書いてあるけど、

全部あるんですか。

武田 FASIDに連絡してみないとわかりませんが。

股野 全部欲しいな。

武田 菊地大使を含めて二人分しかまだブックレットになってない。

股野 大使の前に誰かをやっているんですか。

武田 大使が一番最初でしょうかね。

菊地 あそこに高橋（一生）君というのがいまして、彼はIDC（国際開発センター）にいたのかな。前、IDCという機関がある。いまでもありますか。

股野 いまでもありますか。河合（三良）さんのところですね。

菊地 河合三良がやっている。

武田 私ももう一人の名前を失念したんですけれども、それも是非、股野大使のところにお送りします。

股野 はい、お願いします。それから、前回の記録で、ニューヨークで、デューイ事務所の連絡役をやった人の名前は駒村さんです。

菊地 駒村です。直しておいてください。

股野 駒村さんと河野洋平さんと何か関係があるんじゃないかな。

菊地 河野一郎と。

股野 したがって、洋平さんと。

菊地 いやあ、洋平はその頃……。

股野 いや、そうでもないですよ。もう丸紅にいて、私のニューヨーク時代に駒村さんはまだいまして、河野一郎さんが来て、洋平さんも来まして、だから、洋平さんがちょうどいたんじゃないかな。まあ、いずれにしろ、駒村さんです。非常に風格のある人です。

菊地 河野一郎が駒村さんを引っ張り出した。

佐道 河野さんはいろんなところで暗躍されていますから。

菊地 競争馬の輸入とかね。

佐道 河野さんは馬に纏わる話も多いですよ。

菊地 河野一郎と永田雅一と萩原吉太郎、この三人のグループ。そのグループがまた岸信介に結びついた。岸さんが巢鴨から出てきた時、「日本再建連盟」という政治団体をつくって彼の後援者になった。あとからお話ししますが、たまたま僕はそのグループとある縁ができました。

佐道 萩原さんはこの間お亡くなりになったんですね。

菊地 この前九十何歳かだね。北海道炭礦汽船の。

佐道 大変失礼ながら、もうだいぶ前にお亡くなりになったと思ったら、この間だったのでびっくりしちゃって。

菊地 あの人は怪物です。

佐道 そうですよ。ご存命であれば、早くお話を伺えるものならとつい思ってしまうんですが、そのお話はまたあとの楽しみにとっておくということで、早速、きょうの留学のあたりをお話を伺えればと思います。

向こうでつかれた先生とかは、若干前もお話が出てますけれども、そのほか、いろいろ接した方々も多いのじゃないかと思えますし、それから、アメリカ暮らしの様子ですとか、当時のアメリカの対日感情の問題とか、そういうことを含めてお願いします。

菊地 僕がアメリカに留学したのは、いわゆる「ガリオア奨学金」というものです。ガリオア留学というのは、アメリカの陸軍省の計画で、占領地における有為の青年をアメリカに留学させるために奨学金を与えるという計画です。ガリオアというのは、ご承知だと思いますけど、ガバメント・アンド・リリーフ・イン・オキユパイド・エリアの頭文字を取ってガリオアとした。もうひとつ、エロアというのがありますけども、これはエコノミック・リカバリー・イン・オキユパイド・エリアという。日本はガリオア援助

とエロア援助と両方を受けている。ガリオアの援助を受けたその返済協定の話はまたあとのひとつの大きなテーマになると思います。

【註】ガリオア (Government Appropriation for Relief in Occupied Area Fund) 占領地救済政府基金。エロア (Economic Rehabilitation in Occupied Area Fund) 占領地経済復興基金。

このガリオア奨学金で行ったわけです。実際行ったのは一九五〇年七月ですけども。募集がありまして、その頃の外務省の若い連中は、ほとんどみんな志願したんです。外務省の試験でいえば、昭和十六、七年組から二十四年ぐらまでの間の人達が多く受けたんでしょうかね。この年選考試験に通つたのは、外務省では、二十年組では橋正忠、二十一年では僕と大川(美雄)君、松岡(康弘)君。二十二年組がわりといなくて、二十三年がたくさん通つたんです。柳谷(謙介)、本野(盛幸)、中島敏次郎、千葉一夫、宮川(渉)と。これには口頭試問もありました。おそらく総司令部としては、外務省に関しては、これから育つ若い外交官に奨学金をやるということだったと思います。しかし、実際に蓋を開けてみましたら、昭和十年組の中川進さんとか、昭和十四年の須之部(量三)さんとか、そういうかなりの先輩もいました。岩間(龍夫)さん、昭和十五年組。十六年では、須磨未千秋さん。あの人は英語が非常にうまいですから、われわれのリーダー格でした。

渡航準備をいろいろするわけですが、その頃はまだ占領下です。旅券なんていうものはない。SCAPの発行する渡航証明書だけ。船待ちだということ待っていると、ある日、日曜日でしたかね。突如、うちへ電話がかかってきて、翌日、直ちに集合せよと。それで、飛行機でわれわれはアメリカに連れて行かれたわけです。

佐道 船ではなくて。

菊地 船ではなくて。その飛行機というのは、たまたま六月二十五日に朝鮮事変が勃発しましたね。それで、大量のアメリカの兵

隊さんを朝鮮に空輸したわけです。その送った飛行機の帰りが空なわけです。それにわれわれを乗せたんです。マッツ航空機という、ミリタリー・エア・トランスポート・サービスに。

佐道 普通の輸送機ですか。

菊地 軍の輸送機ですね。ただ、兵員の輸送機ですから、一応バンカーベンチみたいなのがありました。それが僕の初めて乗った飛行機です。アリエーシヤン経由で、最初の給油地はシエミヤというところ。シエミヤというので何か思い出しません？シエミヤに今アメリカがミサイル防衛(MD)の基地を置こうとしている、あのシエミヤです。戦争中に聞いた、アッツ、キスカを飛び越えて、そのシエミヤに立ち寄り、シアトルへ着いた。シアトルからサンフランシスコへ行って、フランシス・ドレーク・ホテルに入られました。これは、学生の身分にしては大変に立派なホテルでした。そこから今度は、みんなそれぞれ分かれたんです。

佐道 各大学に、各地域に。

菊地 数箇所あるオリエンテーションセンターというものに分かれた。われわれみたいにバークレー(ユニバーシティ・オブ・カリフォルニア)に留まったのがグループ。それから、シカゴのオリエンテーションセンター、ニューヨークのセンター。三つか四つに分かれたんですね。われわれは、バークレーにあるロックフェラーがつくったインターナショナル・ハウスに入れられて、約一カ月間オリエンテーションを受けたんです。そこから各大学に分かれた。

アメリカへ最初に渡った時の印象ですけれども、これは非常に新鮮であり、驚きというか、驚嘆というか……。シアトルに着きまして、シアトルの大厦高樓といえますか——アメリカ語でハイライズ・ビルディングと言うんですけれども、これがたくさんあることはある程度前から知ってましたから、これにはあまり驚きませんでした。いちばん驚いたのは四通八達のハイウェイですね。

ハイウェイの広さ、長さ、それから両側がまったく開けている光景ですね。これがアメリカの文明かと。これがアメリカのウエスト(西部)かというふうなことで、その時は僕はもう二十七才かな。もうロートル(老人)でしたけど、大変な新鮮な感激でした。

佐道 シアトルは何泊かされたんですか。

菊地 シアトルは一泊じゃないですか。五〇年七月ですけれども、在外事務所はもうできたのかしらね。ト部(敏男)さんがわれわれ外務省のものを迎えてくれました。

股野 シアトルで？

菊地 シアトル在外事務所長。それから、サンフランシスコへ行ったら、宇山さんが迎えてくれました。

股野 五〇年の？

菊地 五〇年の七月。まだできていないかな？

股野 講和の調印、署名する前ですね。しかも、一年前ですね。

菊地 調印の前です。「日本政府在外事務所」の設置を認められたのが五一年(一九五二)一月です。しかし正式の設置の前に、先遣隊が行っていました。

武田 鹿島出版社から出ている『日本外交史』の萩原徹さんの回想を読むと、一九五〇年に日本政府在外事務所というのが連合軍の指令に基づき設置されることになったと。

菊地 それじゃいいんですね。

股野 じゃ、あつてますね。

武田 それで、アメリカに五カ所設置された。その場所はちょっと書いてないんですけども。

菊地 アメリカは知ってます。ワシントン、ホノルル、シアトル、サンフランシスコ、ニューヨークの五つ。シカゴはあとからできた。

■留学生生活のスタート

—SAISSの学生について

菊地 日常生活のことを申し上げれば、アメリカの食べ物でいけばん感心したのは、もちろん食糧の豊富なことですから、特に感心したのは牛乳、カーネーション・ミルクでした。牛乳というのはこんなに濃くておいしいものかと。戦前は、日本の牛乳というのは薄くて、本当の牛乳をわれわれは飲んでいなかった。それから、食事の安くて量の多いこと。

佐道 ちなみに、生活費としてはいくら支給されたんですか。

菊地 オリエンテーションコースまでは、ホテルも何もかも向こう持ちですから。いわゆるスタイペンド（手当）と称するものだけ少しもらったかな。日本出発前の支度金はもらいました。それで、われわれは慌てて洋服なんかをつくったりしました（笑）。そのスタイペンドというのが、人によって非常に違っています。月謝はもちろん陸軍省が払うんです。IIE (Institute of International Education) というところが、実際は契約でやりました。IIEはニューヨークにありますが、僕が後に国連へ行ったら、われわれ国連の向かい側にありました。それが支払関係をやっていた。例えば、イエール大学とか、プリンストンとか、イースト（東部）のアイビリーグ大学に行った連中は、かなり潤沢だったようです。授業料のほかに、下宿するということが、ボード・アンド・ロジング（賄い付き下宿）の費用を支給された。対し僕の場合は、ジョーンズ・ホプキンス大学付属のスクール・オブ・アドヴァンスト・インターナショナル・スタディーズ (School of Advanced International Studies)、国際高等研究大学院（略称SAIS）というところへ行くんですが、そこでは僕はボード・アンド・ロジング、月謝はもちろん、全部IIE持ちなんです。それで、僕がもらった小遣いはわずか一日一ドル、一月

に三十ドルだけ。ボード・アンド・ロジングがついている。食事はものすごいいいんですよ。給仕付きで、カフェテリアじゃないんです。そういう意味では文句は言えなかったんですが、いかにせんポケットマネーは、たった一日一ドル。それで、歯磨きとかなんとかをみな買えというのです。

それでも意外と困らなかった。その頃最新封切りの映画館の入場料は九十八セントなんです。一ドルしない。昼飯は外で食べるとしても、一ドル以下で食べられるということですので、その頃の物価水準からいえば、ミニマム（最小限）は足せる。ところが、イエールとかなんとかに行った連中は余裕があったらしくて、例えば僕が柳谷君をイエールに訪ねて行ったんです。

股野 プリンストン。

菊地 ああプリンストン、なんと彼は中古の自動車を持っていて、車で僕のことを迎えに来てくれた。これはなんとという違いだろうと。

武田 それはその年その年の物価なんかを計算して。

菊地 初めからそう決めてあったらしいですね。僕のようにフルボード（全額賄い）付きの場合は、そういうふうに小遣錢だけにした。

佐道 本代とかそういうのも、全部そのポケットマネーから出されたんですか。

菊地 本代はあったかな。ですから、米陸軍省にしてみれば、別にアメリカに来て勉強してもらおうということよりも、アメリカというものが、アメリカ人の考え方を知ってもらうというようなことが目的ですから。しかも、一年でしょう。学問とか研究とか、そういうのが目的だとは考えられません。そこで、僕の場合はどうかといいますと、僕はまずオリエンテーション・コースへ行って……。こういう話でいいのかな。

股野 ええ。

菊地 オリエンテーション・コースへ行きました。が、僕は英語には若干自信があったので、英語のコースを取る必要がないと。たまたま加州大学（カリフォルニア州立大学）でサマースクールをやっていた。アメリカのサマーセッションというのは普通の講座と同じですから、僕はオーデイター（聴講生）と称して、講義を聞き回った。いまでも記憶に残っているのは、ハンス・ケルゼンの「Theory of jurisprudence」という講義。ハンス・ケルゼンといえば、我が東大の横田喜三郎大先生のまた大先生で、「純粹法学」ということを唱えた人です。ああ、この人がハンス・ケルゼンかと思いつながら、法哲学の講義を一所懸命聞きました。ドイツ語訛りの強い調子で講義をしました。アメリカ人はわかるかなと思つて、アメリカ人の学生の方をみると、ちゃんとノートを取っている。みんなわかるんですね。欧米人同士の語学というのは、本当に文章の構造が似てますから、少々発音が悪くても通ずるんですね。その点、われわれ日本人はハンディキャップだと思いません。それから、もう一人がクラーク・カーという人です。この人はこの前もちょっとお話しした。「日本の朝鮮・台湾に対する植民地政策」というのを講義していたんです。

いよいよオリエンテーションが終わりに近づくにつれて、各人の配属先の大学が発表されるわけです。だんだん順番に発表されて、僕のところに来ましたら、ユニバーシティ・オブ・オクラホマだと。一瞬オツと思いました。ああ、南部の田舎へ行かされるんだなど。最初はちよつとがっかりしたんですが、ちよつと考えてみますと、例えば極東裁判でA級戦犯の弁護を買って出たブレークニーだとか、ブレークモアというアメリカ人の弁護士は、二人ともオクラホマ州出身なんです。それを僕は知ってましたから、オクラホマというところは案外知日家がいるし、日本人に対する親近感もあるかもしれない。いわゆるサザン・ホスピタリティですね。これはひとつ勉強になるかもしれないと、そのつも

りで、ユニバーシティ・オブ・オクラホマのシラバスなんかを取り寄せまして、どの講座を取ろうかなどと考えていた。

ところが、出発の数日前になって、お前はオクラホマ行きは中止と。その代わり、最近ワシントンDCに非常にいい国際関係の大学院ができた、そのインディペンデント・グラデュエイト・スクール（独立大学院）に君は行きなさいと。これはまったくブレザント・サプライズ（うれしい驚き）でした。それはもうワシントンのほうがずっといいに決まっています。で、その頃、米陸軍省の方針で、ガリオア留学生は原則としてワシントンには配属しない、というのは、どうしても日本人が多いし、外国の留学生がワシントンへ行っても、本当のアメリカのクラスルーツ（草の根）のことはわからないという理由だったらしい。しかし、ワシントンに着いてみたら、ガリオア留学生は僕のほかに二人いました。一人は運輸省の林陽一さんです。林陽一は運輸省で、退職後全日空の顧問さんかになった。それから、もう一人は西宮信安（外務省昭和十七年入省）。僕がSAIS。林陽一さんがジョージタウンのスクール・オブ・フォーリンサービス。西宮さんが。

股野 信安ですか。

菊地 信安。GW（ジョージワシントン大学）でしたかね。学校の話をする前に、その頃のワシントンの雰囲気のお話をします。当時のアメリカ人がわれわれ日本人に対して、ホスタイル（敵意をもつ）だという感じは全然いたしませんでした。サンフランシスコ、バークレーにいた時は、もっぱら日系人がわれわれを飯などに呼んでくれたりして、一般のアメリカ人と付き合う機会はわりと少なかつたんですが、ワシントンへ行きましたら、日本人はそういけませんから、日本人以外と付き合った。アメリカ人は、一般は概して友好的でした。ところが、いろんなグループと会ってみるうち、われわれにいちばんホスタイルな態度を示したのは、まずフィリピンから来ている学生、それから、韓国から来ている

学生でした。彼らは、あからさまにわれわれに敵対的な態度を示しました。

それから、ワシントンにいる日系団体としては、マイク正岡の率いるグループ (Japanese-American League) といったと思います) がありまして、日系人のためにいわゆるロビー活動をやっていました。ダン井上 (上院議員) なんていうのもその頃からいました。マイク正岡ら二世のグループで強かったのは、フォーフォティセカンド部隊 (四四二部隊)、イタリー戦線で戦って表彰されたあの部隊に参加した日系二世達が、ワシントンで非常に力を持ってました。

佐道 スミソニアンの博物館に行っても、戦争のコーナーで四四二部隊のことがちゃんと顕彰してあるコーナーがございますよね。やっぱり、それだけ向こうでもインパクトがある。

菊地 そうなんです。あれは大変な犠牲者を出した部隊なんです。SAISのことですけれども、その頃は、SAISはあまり知られていなかった。いまでこそジョーンズ・ホプキンス大学の大学院ですけど、僕が行った一九五〇年には、まだインディペンデントなグラデュエイト・スクール (独立大学院) だった。SAISは一九四三年ぐらいだと思えますが、戦時中、フレッチャー・スクール・オブ・ロー・アンド・ディプロマシーにいたハルフォード・ホスキンスという教授が、外交官養成の機関としては、ボストンでは政治外交の中心からはちょっと遠いというので、ワシントンにこの種の大学院をつくらうということを考えた。たまたまクリスチャン・ハーターとか、ジョージ・ポール・ニッツェ、あとから国務次官補になったジョージ・マギー、彼は南部の石油財閥の關係の人でしたけど、こういう人達がホスキンスを応援しようじゃないかということになった。ワシントン市にちよつとした二階建てのビルですかね。オフィスビルというには小さいんですけども、それを買って、SAISと銘打って大学院を設立したの

です。ですから、最初の学生数はたった二十八名。場所はいまでも憶えてますけども、一九〇六、フロリダ・アベニュー。コネティカット・アベニューを北へ上って、フロリダ・アベニューを右に入つたところの右側に、こぢんまりとした茶色の煉瓦作りの建物がある。それです。僕は写真を持ってきました。

さて、SAISではどういうコースを取ろうかと考えた。せっかく来たんだから、MA (修士号) を取ろうということで、MAコースをねらった。だいたい一年じゃ、MAは普通取れない。とにかく取れるかどうかやってみようということで始めた。SAISの先生方は、その頃、デイン (学長) はフィリップ・セイアーという国際法学者。この人もフレッチャースクールから来た人なんです。つまりSAISというのは、フレッチャースクールの分身だと考えればいいわけです。SAISは最初の二十八名から、いまや五百名近くの学生数になっています。場所もマサチューセッツ・アヴェニューのブルッキング・インスティテューションの筋向かいにある大きな建物に移っている。僕の頃の教授陣としては、国際経済では、その頃全米の大学で使っている国際経済学のテキストブックの著者のリチャード・バーノンとか、その他キンドルバーガーもいました。国際機関というコースでは、フランシス・ウイルコックスという人 (後の国務次官補)。アメリカの国際関係の大学院では、西洋史というのは、非常に大事な講座なんです。これにはドクター・ヘインズ (Dr. John Haines)。経済学はジョン・ロフタスという人でした。なお僕のと最近までのSAISの学長は、ジョージ・パッカー、ロバート・ゼーリック、ポール・ウォルフオヴィッツと続きました。SAISはその頃からミドルイースト・インスティテュート (中東研究所) という研究所を持っていたんです。これは、初めから付属の研究機関としてミドルイースト・インスティテュートを持っていたというのは、その頃のアメリカでほとんど唯一だったと思います。いかに

オイル・インテレスト（石油利権）との関係が強かったか。オイル・インテレストの人達がファンド・レージング（基金）を引き受けてくれたのです。ですから、その頃から学生のなかには、エッセとかスタンダードオイルとか、そういう石油会社からの派遣学生がわりといました。今はミドルイースト・インスティテュートの他にライシャワー・センター（Raischauer Center for East Asian Studies）というのを付け加え、さらに、マサチューセッツ・アベニューの反対側にフォーリン・ポリシー・インスティテュートというナット・セーヤー（Nathaniel Thayer）がやっている付属研究所もできました。

もちろんSAISのいちばん強いところは、首都ワシントンにあるということです。ワシントンにあるということは、国務省とか国防省とかホワイトハウスというところから現役のばりばりの外交官、それから、国会議員とかが、簡単に講師に来てくれるという利点がある。僕の時も、ポール・ニッツェも、ウイリアム・フルブライト（上院議員）なんかもよく講義に来てました。アイゼンハワー・フランクという、国際経済協力問題では著名な学者・外交官なんかも、当時は現役の国務省の経済担当国務次官補代理でしたかね。そういう現役ばりばりの人々が、講義に来てくれるというところが、一つのSAISのいいところだったわけです。

SAISの宣伝ばかりして恐縮ですが、僕はMAを取るためには四つのコース、プラス外国語一つの単位を取る必要があるというので、確か国際関係と国際法と国際経済と、それから、ファースト・セミナーというのを取ったんです。それから、外国語は日本語でもよかったですけど、せつかくだからというのでフランス語を取った。僕は修士論文を書かなくちゃいけませんから、ファースト・セミナー——ドクター・ポール・M・A・ラインバーガーという人がその教授なんです——に参加した。このセミナーは彼の自宅で行ないます。これが非常にイン

テイメイトな（親しみやすい）雰囲気でした、彼の奥さんがまたSAISの博士課程の学生で、ジェネヴィエーブという女性も参加する。セミナーというよりも、ラインバーガー教授の独演会みたいなものでした。ラインバーガーという人は非常に変わった人でして、片目が義眼、容貌魁偉というか、背が高く。お父さんのラインバーガーは、ドクター・孫逸仙（孫文）の法律顧問だった人です。あとで須磨弥吉郎さんに聞いたら、彼は上海総領事をやっていたところ、ドクター・ラインバーガーのお父さんを知っていたと言っていました。ドクター・ラインバーガーというのは、中国語は完璧、ネイティブ・スピーカーです。そのうえに、なんとサイエンス・フィクション作家でもある。とにかくすごい人でした。僕は彼のセミナーに出て非常に参考になったのは、彼は論文の書き方を指導してくれた。コンビンシンクな（説得力のある）論文を書くためにはどう書いたらいいかなど。そういうことまで教えてくれたんです。

僕は修士論文のテーマとしては、手っ取り早いと思ってビルマを選んだ。その頃、ちょうどビルマには赤旗共産党、白旗共産党というのがあり、抗争を継続していた。イギリスの統治時代の話とか、アウンサン将軍やウ・ヌー等の運動とか、参考文献をいろいろ読んで論文をまとめました（あとで製本になる）。サブのテーマとしては、アルフレッド・マハンのシーパワーを選びました。結果がどうだったかということになりますが、結局、MAを一年でくれたんです。僕の場合は、おそらくお目益しだったと思います。ただ、僕が主張したのは、「東大のロースクールに行った」と言ったわけです（笑）。法学部をロースクールと訳したので、もうそれでこの人は十分のキャリアがあるんだろうということになったのでしよう。

それから、SAISに僕の後どういいう人が行ったかと言いますと、外務省では第二回目のガリオア留学で来た西田誠哉君。彼は

よく僕を冷やかすんですけれども、「僕は君のあとにSAIISに行ったら、ドクター・ラインバーガーからは、菊地はこうだった、菊地はああだった」と言われて、酷い目にあつたよ、君」と。少しあとから、若泉敬が行つた。彼があとで佐藤総理の特使をやることになるのは、その頃のワシントンで培つた人脈があつたからでしょう。それから、岡野加穂留。知つてる？明大の学長になつた人。

佐道 岡野さんはSAIISだったんですか。

菊地 SAIIS同窓会のいま役員をやっているんじゃないかな。僕は今、SAIISの同窓会長をやっています（名刺を配る）。あとからあげます。

股野 あとで、じゃ、コピーをください。

武田 在日同窓会会長。

股野 SAIIS同窓会長。

菊地 いまやSAIIS卒業生も大きな勢力になりました。現在の外務省儀典長の小林秀明君がそうだ。それから、内閣広報官をやつた宮脇磊介、いま、サイバーテロなんかで、ジャーナリズムで活躍している彼。ライシャワーセンターができてからは、センター所長のジョージ・パッカーは、例の「菊クラブ」（クリサンシマム・クラブ）のリーダーと目される人ですが、彼がライシャワーセンターの所長兼SAIIS学長になつてからは、非常に日本人の学生を呼び寄せました。日本側で最大のスポンサーは中山素平さん。それで、ライシャワーセンターのアドバイザー・カウンセルというのが東京にできた。僕はその理事です。アメリカ人でどういう卒業生がいるかというと、SAIISはまだ創立以来五十年、一九九三年に五十周年をやつたばかりです。その記念大会に僕も行きましたけども、その時はフルブライトがゲストスピーカーでした。卒業生は、他の古い大学に比べて数は少ないですが、いちばん有名なのはオルブライトですね。

佐道 マデリン・オルブライト。

菊地 それから、この前までEUの委員長をやっていたロモノ・プロデーイという人がいる。彼はSAIISのポロニア分校のプロフェッサーをやつた。それから、ごく最近になると、マイケル・グリーン（国防省日本課長）。それから、最近、テレビでよく金融や株の話なんかに出てくる在京のジェスパール・コールというのがいる。日本語が目茶苦茶うまい。

武田 わからないですね。

菊地 日本の金融財政の大家。彼もSAIISです。ですから、僕は方々でSAIISの卒業生に会います。例えば、僕はAIT（アジア工科大学院）の関係でよくバンコックへ行くんですが、この前バンコックのあるパーティーで、バンコックにいるアメリカ大使に会つたら、「僕もSAIIS卒業生だ」と言つてました。ですから、SAIISは最近ジョージタウン大学のスクール・オブ・フォーリンサービスとかフレッチャースクール以上に、国務省・国防省等に人材を出しているということになっています。もつとも最近では、ブルームバーグという今度ニューヨークの市長選挙に出る彼もSAIISなんです。彼は大変異色の人材なんですよ。彼はいまSAIIS（ジョンズ・ホプキンス大学を含む）の最大のスポンサーです。

■留学中に会つた人々

菊地 SAIISの内外でどんな人に会つたかというご質問がありましたね。その点では、僕はワシントンにあるSAIISに行つただけに、非常に恵まれたと思います。ラインバーガー教授はワシントン政界に非常に顔が広くて、彼はロバート・タフト（上院議員）のところをわれわれゼミ学生を連れていつた。ロバート・タフトなんていうのは、もう歴史上の人物でしょう。彼のセネー

ト・オフィス・ビルディング（上院会館）のオフィスへ行つたこと。それから、ラインバーガーのセミナーには、いろんな人が話しにきました。オーエン・ラティモアはジョーンズ・ホプキンス大学本校の方のウォーター・ハインズ・ペイジ・スクールのほうの国際関係の教授で、モンゴルが専門です。もちろん中国も専門。彼が時々われわれのセミナーに来て講義をする。ラインバーガーは最右翼で、台湾寄りなのに対して、ラティモアは最左翼で、中共よりです。ラティモアは、ご承知のように、五〇年のマツカーシー旋風で槍玉にあげられた人です。ラインバーガーは、蒋介石とか孫文の系統ですから国民党。最左翼と最右翼の両方の教授から、われわれは講義を受けたことになりました。

佐道 じゃ、ちょうどバランスがとれていい（笑）。

武田 「ひとつの中国」ですね。

菊地 エドガー・スノーは来なかつたけども、アグネス・メッドレーなんかは来ました。

佐道 われわれにとつては歴史上の名前が。

菊地 実際、僕達SAISの学生は、人とのコンタクトということには非常に恵まれてました。さきほど申し上げたインターナショナル・オーガニゼーション（国際機関）のコースのフランシス・ウィルコックス先生は、あとから国務省の国際機関担当国務次官補になった人です。この人がわれわれを国連へ連れていってくれた時、まず会ったのがエリノア・ルーズベルト夫人（フランクリン・ルーズベルト大統領未亡人）。その時は社会人権委員会担当の大使ですね。それから、たまたま国連のロビーにソ連のグロムイコ外相がいたんです。引率の教授が彼を捕まえて、グロムイコにわれわれがいろんな質問をした。それで、僕もこれほどんな人だろうと思って、「今度ECができたけども、ECをどう思うか」とグロムイコに質問したんです（笑）。

佐道 なんと答えました？

菊地 彼は、「あれは大したことはないよ」と（笑）。全然無視した態度でした。そのほかにいろんな人に会いました。あその大使をして、もう一人の大使アーネスト・グロスとか、フィリップ・ジェサップという有名な国際法学者で、アメリカの国連大使をやった人とか。それから、いまでも思い出しますけど、プレスコット・ブッシュ上院議員にも会いました。いまのブッシュ大統領のおじいさんに当る人です。だから、僕は三代のブッシュに会ってます。お父さんが、レーガンの副大統領の時は、ホワイトハウスで会ったことがあります。ワシントンにいたため議会のヒアリングズ（公聴会）にはよく行きました。これはその後の僕の在米大使館勤務では非常に助けになりました。在米大使館勤務になったら、元のSAISの友達がみないわけでしょう。僕のワシントンにおける活動がこれで大いにヘルプされたと思います。

ここでちょっとひとつ脱線させてもらいます、僕はやはりアメリカというものを本当に知るためには、アメリカの大学に留学する。大学でなくてハイスクールでもいいんですが、やっぱり留学することが本当にアメリカを知る所以だというのが、僕の信念です。そういう意味では、我が外務省でアメリカン・サービスという場合に、アメリカに留学（研究留学を含む）した経験があること、それから、アメリカに一定の期間勤務したことがあるというようなことで定義づけるべきではないかと思っています。

その頃、フレッチャースクールには松岡洋子さんがいたようです。

佐道 若い頃の松岡洋子さんはどういう感じですか。

菊地 あまりよく知りません。ちょっと脱線してます。僕はSAISでは唯一の外国人留学生じゃなかつたんです。僕のほかに、オックスフォード大学を出て、一九四八年の中東戦争、つまり、イスラエル独立後の戦争で、イスラエル軍将校として戦った経歴を持つダン・サミエルという男がいた。彼は僕と一つか二つぐら

いしか歳が違わない「老学生」でした。僕達はどちらも戦争に行っている。彼は英国統治時代のイスラエル（当時パレスチナ）のハイコミッシヨナー（高等弁務官）をやったロード・サミエルの一族なんです。だから彼は名門の出で。オックスフォード大学出身の連中は非常にIQが高いですから、こう言っただけで、アメリカ人の学生なんかを小馬鹿にしている。もう一人の外国人学生は、四八年（一九四八）のチェコ動乱で亡命してきた、ミラーという人です。彼はまったく苦学力行で、学校でも皿洗いや給仕をしながら学費を稼いでいたんです。もう一人は、ノルウェー人のフリスヴォルド。彼はノルウェーの留学生らしく、シッピング（海運）のコースを取ってました。恒例の金曜日の晩には、われわれはパーティをやるんです。学生用語でブル・セツション。ほんのパンチかウイスキーでやるんだけど、主としてパンチでした。女子学生もいますからね。そのパーティでダン・サミエルが、「おい、キヨ（僕のことをキヨと呼んでいました）、ちょっと来い。紹介する人がいる」というのでついて行っただけです。そしたら、女性なんです。だいたい彼はものすごいハンサムで、女性が食らいつきたくするような男性で、パーティにはいつも違う女性を連れてきた。それで、その女性を紹介してくれたんです。彼女はソーシャル・フォトグラフィアー（写真家）だと。えらい瘦せぎすで、目玉がギョロツとしていました。名前はその時はすぐ覚えたんですけど、言うつもりはありませんけども、ジャクリヌ・ブーヴィエ（Jacqueline Bouvier）という。あれは一九五〇年のクリスマスじやなかったかな。あの頃、後のケネディ大統領夫人はソーシャル・フォトグラフィアーとして、そういうビートというかな、そういう界限を遊弋していたのです。

佐道 輝いてました？

菊地 輝いてなかったです（笑）。服装だって大したことないし。

股野 目に印象がある？

佐道 目が離れている（笑）。

菊地 目が非常に印象的。それから、非常に瘦せぎすだという感じでした。ダンはその後も付き合っていたようだ。僕はその時の写真があるんで、写真を持ってこようと思ったら、こういう必要な時になると、そういう写真がみつからない（笑）。

佐道 是非忘れないようにしていただいて、出て来た時にまた持ってきてください。

菊地 ジャクリヌが、ケネディが死んでからオナシスへ行っただなんていうのは、僕はすごくよく判るような気がします。以上は脱線も大脱線ですが……。あとは留学中の話で。

■一九五〇年のワシントン

—朝鮮戦争・マッカーシー旋風

佐道 ちょうど講和の調印の直前ということになると思うんですけど、さっきも話に出ました大使館とかの開設の準備とか、そういうことがあったと思うんですけども、いわゆるそれに来ておられる方々との接触とか、そういうのは。

菊地 ええ。ワシントン在外事務所の最初の先遣隊は、確か黄田（多喜夫）さんだったと思います。その後に正式の在外事務所は武内（龍次）さんが所長。僕は先遣隊が来た時に、「お前、出て来い」と言われて駆り出されまして、デュボン・サークルの近くの仮事務所へ行っただけです。まだ、元の日本大使館の建物は返還されていない。ファー・イースト・コミッション（極東委員会）が使っていた。その時は鶴見（清彦）さんとか、通産省の松村さんという人がいました。松村さんの未亡人は宮中の女官長をやっておられた。それから、大蔵省は鈴木源吾さんです。それから、竹内春海さん。運輸省の栃内さんという人。それは在外事務所の開設の準備の段階です。僕は七月には帰っています。

帰る時は今度はリパティシップでした。バンクベッド（寝台）に寝させられて、航海はちょうど二週間かかるんですね。平和条約との関係はありません。ただ、サンフランシスコのオペラハウスで調印されたわけですが、パークレーにいた間に、なげなしの小遣銭で、オペラハウスに芝居を観に行ったことがあるんです。その時の出し物は「Oh My beloved country」（我が愛する祖国）という南アフリカの芝居で、黒人の俳優がやりました。学生（外交官補）の分際ですから、そういう大きな流れ（平和条約）とはあまり関係がありませんでした。

僕は一応MA（修士）を取って卒業ということになったのですが、IIEのほうから、留学を一年延ばしてよいから希望があれば申し出よという。それで、僕はちょうどアイゼン・フランク教授の「ソ連経済」という講義を取ってましたので、コロンビア大学のラッパン・インスティテュート（Russian Institute）に行こうと思ひまして、願書を用意した。そうこうしているうちに、本省の人事課長からの連絡で、「すぐ帰って来い」と。その時期は、本省では在外事務所というか——翌年から大使館になるわけですが——在外事務所の人をどんどん出している最中ですから、本省では人が足りない。それでわれわれには、すぐ帰って来いというわけです。外務省のわれわれは、それで、みんなが帰国した。そういう若干の余波はありましたけども、平和条約締結とは関係ありませんでした。吉田茂さんが単独で安保条約に調印したということとは不思議に憶えています。プリシディオ（サンフランシスコ）で。

股野 湾の向こう側ですね。

菊地 そうです。

井上 ちょっと関連して、小さな質問とややもうちょっと大きい質問で、ひとつは、一九五一年一月前後の数カ月間に松下電器の松下幸之助氏が全米を視察しているようなんですが、何かご記憶

はありますか。

菊地 いや、当時は僕は松下のまの字も関係なかったですから、ありませんね。

井上 あと、もうちょっと本質に入った質問で、朝鮮動乱の時期だったわけですが、SAISでは朝鮮動乱に何か関わって、セミナーですか、あるいは授業のなかで、朝鮮戦争について触れた教授がいたとか、そういうようなことはあったんでしょうか。菊地 あまりありませんでした。アメリカの大学院では、われわれ学生はディグリー（学位）を取るために汲々としているわけでしょう。アメリカ人の学生というのはものすごく勉強しますから。ただ、一つあるとすれば、五一年（一九五二）四月にマッカーサーがトルーマン大統領に解任されて帰国。ワシントン・モニユメントのあるあの広場で大歓迎会が開かれたことです。僕も野次馬よろしく観にいきました。それは熱狂的な歓迎ぶりでした。そのあとで、上下両院合同会議で、彼は報告会をやった。あの時の報告会で、マッカーサーが太平洋戦争は日本の侵略戦争ではない。アメリカもあの時日本がおかれたような状況にあったら、当然武器をとって戦ったであろう、という趣旨の演説をした。それは僕は直接聞いてません。あの演説は、日本では当時ほとんどブレイアップされませんでした。それは渡部昇一が歯軋りして悔しがるどころなだけけど。

僕はその当時もう二十七才の老学生でした。グラデュエイト・スクールでも、若い学生は二十才そこそこの人がいた。ただ、僕がそう「老学生」だという違和感を感じなかったとすれば、それはアメリカ人学生の中にもG Iベテラン（帰還兵）が多かったからです。いわゆるG Iビルオブライツ（復員兵特権）を利用して来た学生が多かったせいです。それから、さつきちよつとお話したように、石油会社の派遣学生もいた。見渡しても、あまり違和感を感じられませんでした。

きょうは、このあとの経済局三課時代に入るんですか。

佐道 是非入っていただければと思います。

股野 そうすると、ちょうど五〇年のおいでになった時というのは、朝鮮戦争が始まってまだ最初の混沌とした時ですね。

菊地 六月二十五日に起きたでしょう。われわれが行ったのは、七月の末ぐらいです。だから飛行機も生々しい。兵隊さんを運んできたのに乗っかって行っただけだから。

股野 しかも、かなりいわば米軍が退勢で。

菊地 あれは押し掛ける……。

股野 押し掛けるのは、仁川上陸は九月ですよ。ですから、アメリカに着かれた頃は、まだずいぶん押し込められて釜山の周辺に行っていた。そうとう緊迫感も日本ではありましたが、アメリカではどうですか。

菊地 ワシントンでは、そういうところを敏感に感ずるはずですが、けれども、僕の周囲では判りませんでした。

佐道 さつき、ラティモアさんが来られたというお話でしたけれども、例えば戦争中は日本が悪玉で、中国を応援という形になっていたと思いますが、ちょうどその朝鮮戦争を境に、中国が参戦をしてくるということで、アメリカの対中感情というののかなり厳しくなってきた部分あるんじゃないかと思うんですが、ラティモアさんが来られた時、大使がお感じになったアメリカの……。

菊地 「America is divided」(アメリカの世論は常に割れている)なんです。確かに中国の義勇軍が入ってきたということに、一般のアメリカ人は、おそらく非常に憤慨したと思うんですが、あの義勇軍の格好というのはみすほらしいものでした。それをアメリカ人は見えています。一九四九年にチャイナ白書を出して、「Who lost China?」(中国を失ったのは誰の責任か)でもすごく国論が割れている時です。それに、五〇年というのはちょうどマッカーシー旋風が荒れ始めた頃なんです。ですから、ワシントンの雰

囲気というのは、赤狩り一色。朝鮮事変よりも、国内での赤狩り一色。マッカーシーが、「国務省には五十七人(?)の共産黨員がいる」と告発。告発されたのはオーエン・ラティモアも入っているし、カナダ人のハーバート・ノーマン。日本の都留重人。都留重人は僕のいる間にワシントンに来ました。ですから、それが当時のアメリカ人の最大の関心事でした。

股野 ジョー・マッカーシーがいちばん勢威をふるっていた頃ですか。

菊地 最盛期です。ニクソン・マント法というのがあって、ノンアメリカン・アクティビティズ委員会というものができたんです。非米活動委員会。これが猛威をふるった時なんです。ですから、どうもいまのお話で僕もちよつと思ひ返しているんですが、どうも朝鮮事変の影よりも、マッカーシー旋風でワシントンはいっぱい。特に官界、国務省が標的にされているわけですから。

股野 例えば『ワシントンポスト』なんかも、そういう記事が。

菊地 そうです。こういうことがどうして起こり得るのかなと、僕なんかは非常に不思議に思いました。ノンアメリカン・アクティビティズの「ノンアメリカン」(非米)というのは、ものすごく広い広範な意味をもつ言葉でしょう。皆さんは、アメリカは昔から民主主義でございましたかと思ひ、「マッカーシー時代」なんていうのは、もうお忘れになつていくかね。アメリカが、共産党を合法化したのはつい最近でしょう。非合法化をやめたのは。

武田 まだ十年にならないぐらいですかね。

■SAISで培った人脈

菊地 僕はSAISに関しては情熱を持っているものですが、ついしゃべり過ぎてすみません。こんな小さい学校なのに。

股野 同窓会長であられれば当然です。

佐道 在日同窓会というのは何人ぐらいいらっしゃるんですか。

菊地 僕は数えてませんが、八十人ぐらいじゃないか。在京アメリカ大使館にはいつもたくさんいるんです。さつき言ったマイケル・グリーンなんていうのは、日本にいたんですからね。去年、僕はこの同窓会で講演したんです。それから、いちばん生々しいのは、つい先までディーン（学長）はウォルフヴォイツ。ちよつと回覧してください（SAIISの資料）。

佐道 いまも時々SAIISに行かれるんですか。

菊地 九三年（一九九三）と九五年（一九九五）に行きました。それから、さつきもう一人忘れたけど、日本経済新聞で国際問題の囲み記事を書いている伊奈君というのを知ってる？あれもSAIISです。

佐道 あつ、伊奈さんはそうでしたか。

菊地 伊奈久喜。

股野 伊奈さんもね。

佐道 よく存じあげております。

菊地 彼は学生というよりも、フェローだったかもしれない。

佐道 日経のなかでもかなり若く編集委員、論説委員になって。

菊地 そうそう。彼はまともですよ。

佐道 そうですね。

股野 なかなかそうそうたるメンバーですね。

武田 名簿のなかに大使のお名前も見えますね。これだけ小規模なんです。

菊地 僕が行った時は、まだ六、七年しかたつていなかった。ですから、非常にはりきつていた。コンパクトで、カマラドリ（仲間意識）というか、同志的結合というか、そういう感じがいっぱいでした。僕がワシントンのSAIISの寮でどう一日過ごしたかといえば、一つは勉強、一つはマッカーシー旋風をめぐる議会のフォロー、あとはラジオでオペラを聞いてました。フルに、

メトロポリタンオペラの放送をするんです。それから、時々映画を観に行くこと。それから、旅行をした。この前ちよつと言ったように、まずニューヨークへ行つて……。卒業する直前になってやつと旅行の金をくれたので、カナダまで足を伸ばし、オタワでは、ハーバード・ノーマン博士を自宅に訪ねたというのが忘れられない。

佐道 一年ぐらいとは言えないような貴重な体験と。

菊地 そうですね。考えてみると、たった一年なんです。だけど、それはそれは濃密な毎日でした。さつきのダン・サミエルですが、彼はロンドンの名家なものですから、僕が一九五二年夏にロンドン大使館に発令になった時、まず住宅を探すのにどうしようかと思つて、彼のところに手紙を書きました。彼がちゃんと彼のお父さんのうちと同じ通りのポーチェスター・テラスというところに、恰好のフラットを探しておいてくれて、新婚のわれわれは非常に助かりました。彼は今はニューヨークに住んでいます。これが、これも不思議な縁で、バンコックにあるアジア工科大学院（AIIT）の理事をダン・サミエルも僕と一緒にやっているんです。何十年ぶりにバンコックでまた会っちゃった。彼はSAISの後、ロイヤルダッチ・シエルのエクゼクティブ・バイス・プレジデント（副社長）ぐらいになり、最後はバンコックでのダッチシエルの社長になった。その縁で、AIITの理事に選ばれたようです。全く本当に不思議なめぐり合いですよ。あのジャクリーヌ・ブーヴィエから始まつて（笑）。

佐道 そこで培われた人脈がいまだにそうやつて。

菊地 そうですね。

股野 SAIISに行かれたことが、あとあとにいろいろずつといろんな縁を。

菊地 非常に感謝しています。そのあとにワシントン大使館に行つたということ。イギリス、パキスタン、それから、本省へ行つて、

それからまた、ワシントンでしょう。その時はまさにホームカミングみたいな感じでした。

〔註〕菊地氏は一九六九年、再度ワシントン大使館参事官を勤める。

股野 その後、オクラホマにはおいでになりました？

菊地 行かなかったなあ。

佐道 結局行かずに済みで。

股野 とうとう足を踏み入れずですか。

菊地 踏み入れずですね。そういえば、講演旅行にも行かなかつたな。州のキャピタルはオクラホマシティですよ。

股野 そうですね。

菊地 あれはアトランタの上かしら。

股野 いえ、だいぶ西です。ミシシッピの西ですから。オクラ

ホマに行つてれば、またどういいう人生を。

菊地 そう。本当に人生は変わつていたでしょう。

■ 経済局第三課時代 — 米州担当に戻る

菊地 経済局三課をまず済ませたいんですが……。

佐道 いろいろ職務内容とかも局によつて変わつたりしているということもあるんですけども、ちょうど大使が戻られた時の国際経済局第三課というのは具体的には。

菊地 経済局というの、そのちよつと前までは国際経済局という名称だった。その「国際」が取れまして、経済局となつて、局長は湯川（盛夫）さんでした。で、その下に永井三樹三（昭和十年組）さんとか、小田部謙一（昭和八年組）さんとか、錚々たる人がおりました。経済局第三課というのは米州担当です。北米、中南米全部です。その経済を担当する。職務内容としては、もちろん米国との経済関係の処理が最大の問題。まだ占領下です。平和条約の調印が九月で、僕はその直前に帰つてきたんです。

民間貿易が再開許可になったのが四九年（一九四九）、一斉に民間の人達が輸出入貿易を始めた。当時、何がいちばん儲かるかというのと、日本には何もない時ですから、輸入です。輸入するためには外貨が要る。外貨の取得、外貨割り当てを受けるというのが、商社マンの最大の仕事だったわけです。そういった民間貿易でした。

占領中ですから、外国と貿易するためには、その国と通商協定を結ばないといかんわけです。当時多くの中南米諸国と通商協定を結んでいました。お互い外貨節約のために、オープンアカウン卜勘定でお互いに受取り代金を預けあいをするんです。清算取引です。その他バーター取引というのもありました。そのオープンアカウン卜勘定を設けるために通商協定を結ぶ必要がある。この通商協定の締結ないしは延長というのが、当時の経済局三課の大きな仕事でした。

もちろん在京の米大使館との連絡もあるわけです。その時、米大使館にはボーリンジャーという経済担当の参事官がいました。課長は最初は福井政男さんという通産省から来た人。ちなみに僕は、僕の同期の前後を通じて一度も通産省に出向したことのない極めて珍しいケースなんです。僕は逆に外務省にいながらにして通産省の課長に仕えたことがあるという珍しい経験を持っています。首席事務官（外務省用語）は山本良雄さん、この人が主としてさっきのボーリンジャーさんと日米間の経済問題の処理をやられました。

僕が覚えていた案件では、ちょうどその頃、占領の終了を待ち構えて、アメリカの大企業、ことに戦前から日本に進出していた企業がカムバックする、投資を狙っていた。われわれが取り扱ったのは、シンガー・ソーイング・マシーン（シンガーマシンのケースでした。あれは戦前からあったものを復活したいというので、それを許可してくれという懸案だった。外国為替委員会や通

産省に申請するのですが、なかなか許可しない。そこで、ボーリンジャー参事官は外務省や関係官庁に来て、なぜ許可しないんだと抗議する。

この問題の背景に若干触れますと、確かに戦後の吉田外交は経済一本やりでした。外国からはほとんど資本を取り入れる、借款も取り入れるという方針ではあった。しかし、その頃通産省あたりが考えていたのは、確かにローン（融資）はいけれども、いわゆるフォーリン・ディレクト・インベスメント、いまでいうFDIはなるべく受け入れたくないというのが本音ですから、シンガールのケースも抑えられたのです。FDIは、外国資本の日本市場支配につながるというので、非常に慎重だったわけですね。占領時代、SCAPのアメリカ人担当者のなかには、案外とニューデューラーという社会主義的な考え方をする連中がいて、彼らは決してビッグビジネスの味方ではない。アメリカのビッグビジネスが日本市場に乗り込んで来て、日本市場を制するということに対して、あまり賛成でない。だから、彼ら自身が米国企業の対日投資を抑えてくれたという面もあるようです。

それから、もう一つの経済外交の目標は、貿易振興、ことに輸出振興は最大の眼目でした。最高輸出会議なんていうのができて、とにかく輸出というものが日本の経済にとって「最高善」であるという考えが広まった。「Export or die?」（輸出か死か）というのは、戦争直後ヨーロッパの一部で言われたことですが、日本も似たような意気込みでやった。それで、われわれ経済局三課も、一所懸命、通産省の市場一課、二課、三課と協力して、海外市場開拓というものに努力したわけです。

その時の成果品がここにある『アメリカ市場』なんです。これはアメリカの商務省が出版したのですが、『Selling the U.S. Market』という本。それを誰が言い出したのか憶えていませんが、これをひとつ経済局三課で訳して市販しようというになりました。

た。僕がその翻訳の監修を命ぜられた。それで、課内の英語の専門の課員のみならず、スペイン語の人達も動員して作業しました。その頃に見れば、結構いいアルバイトの種なわけです。最後に僕は全部監修する。それはアメリカの市場にどうやって売り込むかという当時のひたむきな努力の表れであつたわけです。

その頃は、皆さんはご承知かどうか知りませんが、アメリカ人のバイヤー（買付業者）というものがたくさん日本に来まして、それこそバイヤー様々と歓迎されました。バイヤーというのは、日本の商社・メーカーを相手に、綿製品とかシャツ、ブラウスの類を、こういう仕様でこういう綿を使って、こういうようなデザインで、こういうファッションでやれと、それこそ手を取り足を取って指導して、製品を安く買い上げる。それは日本の業界にとっては大変助かる。その大半のバイヤーというのは、ニューヨークにいるユダヤ人の商人でした。

■日米通商航海条約の準備作業

菊地 もう一つの仕事としては、さきほど言ったように、平和条約が結ばれ、通常の外交関係が開かれると、まず真っ先に必要になるのは、戦前に廃棄された日米友好通商航海条約の復活ということか、締結が必要なわけです。通商航海条約を結ぶことの重要性に關しましては、外務省のなかでは早くから問題意識があつて、「通商審議委員会」というのは、四七、八年の頃からもうできていました。こういうもの（「友好通商航海条約典型に関する研究」昭和二十四年・外務省、を示す）ができていた。そういうことで、僕が五一年（一九五二）に本省に帰ってきましたら、経済局長から号令がかかって、各課の若い事務官を集めて、日米通商航海条約草案の研究をせよと。それで、われわれ若い事務官は、一斉に作業を始めたわけです。小田部（謙一）経済局長が全般を取り

仕切ってた。われわれ若い事務官は、米友好通商航海条約の草案の各条項毎の資料集めをやったんです。僕はパテント（知的的所
有権）の条項の担当をさせられました。

この通商航海条約というのは、ご承知のように、一九五三年に最終的に締結されるわけです。この条約でいちばん問題になったのは、いわゆるエスタブリッシュメント関係、いわゆる投資・金融関係ですね。相手国のサービス産業（銀行、流通業）に対してどういう待遇を与えるかと。最恵国待遇があり、相互主義ありということ。日本がいちばん警戒したのは、日本の第三次産業がアメリカの資本に支配されるということでした。いまちようどAPECで問題になっているのと、同じ問題意識ですね。しかし、あれほど苦勞してつくりあげたこの条約は、その後はあんまり活用、援用されなくなる。七〇年代、八〇年代、日米間に多くの通商上・経済上の摩擦が起こった時に、日本政府からアメリカ側の要求は日米通商航海条約上おかしいじゃないかという議論をしたということを全く聞いたことはありません。ありますか。

一同 ないですよ。

菊地 股野さん、どうですか。

股野 あまりその話は聞かないですね。

菊地 僕は当時、本当に下っ端の下っ端ですよ。だけでも、あれほど苦心して締結した日米通商航海条約が、その後日米間であれだけの通商航海条約にかかわる問題が起きているのに、日本側ではこの条約を援用しない。僕は一度、林貞行君（経済担当外務審議官）と議論したことがあるんです。「どうして通商航海条約を、もつと日本政府（外務省）としては対抗の法律論拠として使わないんだ」と言ったら、「いや、菊地さん、条約は確かにできたんだけれども、その後、五五年に正式に日本がガット（GATT）に加入してからは、もうほとんど問題はガットにテイクオーバー（引受け）されたというような感じになったんです」と彼は言う。

それも理屈です。しかし、僕のポイントは、ガットはガットでよろしい。しかし、あれだけ八〇年代に日米経済摩擦と称する、ことにスパー三〇一条なんていう変なものまで出てきた時には、日本は通商航海条約のレター・アンド・スピリット（条文と精神）にも反するんじゃないかという議論をなせしないか、というのが僕の「ごまめの歯軋り」なんです。これはあとで経済外交全般についてお話しする時に、敷衍したいと思います。

経済三課にいた時に、僕が手掛けたことで非常にビビッド（鮮明）に記憶に残っていることがあります。ある日、在京の米国大使館から一つのシークレットという判子を押した文書が僕の課に届いた。普通の「秘」の文書はコンフィデンシャル。その時、初めて僕はシークレットという印判を押した外交文書に接した。その時、山本良雄首席事務官が「おい、菊地君、これを訳して、各省に極秘で通報してくれ」と。読んでみると、ココム（COCO M）の件なんです。アメリカは既に一九四九年にココムを作っており、五二年（一九五二）には更にチンコムを作っている。このノート（覚書）の主旨は、今度ココムというものがある。ついては、日本が、これに加入することを希望する、という文面でした。アメリカとしては共産圏（東側）に対して軍事物資、戦略物資が輸出されることを禁止するということで、各国の協調を求める。しかしこれは政府間の協定という形式はとらない。自由意志によるヴォランタリー（任意）な紳士協定とした。

〔註〕アメリカとNATOの国の間でできたココム（輸出管理機構）。コーディネイティング・コミッティー・フォー・エクスポート・コントロールというのは、戦略物資の対共産圏への輸出のための調整委員会。

当時、日本全体としては、一所懸命輸出を伸ばしたいと思っ
ている矢先です。共産圏とも貿易を拡げたいという時ですから、これはそうとう日本の貿易にとって制約要因になるんじゃないかという危惧もあった。だから、極秘にやっていた。極秘にやっても、これを通産省に渡すとなると、通産省としては、当然各輸出業者

に周知徹底させなくてははいけない。

一九五二年にできたチンコム（CHINCOM）というのは中国だけに對する特定のエクスポート・コントロール（輸出管理）のことです。これは朝鮮事變に對する中国の參戰があつたせいもあるんでしよう。チンコムのほうが一般のココム規定よりも嚴格。これをわれわれはチャイナ・デیفエレンシャル（中国差別）と呼んでいました。日本としては、中国と日中間貿易協定をやるうとしていた時ですから、これはまた困る。それでも、日米安保条約との關係もあり、これは日本としても加入するということになつた。

この問題は僕が後に外務審議官になり、サミットのシエルバの会合に行きましたら、再びこのココム問題に遭遇しました。その時は、ソ連からドイツに送る天然ガスのパイプラインを敷くというプロジェクトでした。これがココムとの關係でどうなるかと。ドイツのエネルギーに關する対ソ依存があまりに強くなるんじゃないかというので、特にアメリカが非常に危惧を表明した。ああ、あのココム、五二年にやつていたことが八〇年になってまた再びこりました。余談になりますが、ココムに似たものでアメリカの法律に、対敵通商取引法（Trading with the enemy Act）というのがあるんですね。これがまた日本と中国との貿易關係で問題になる。僕が在米大使館の貿易担当の書記官をやっている時に、ずいぶんこの対敵取引法の問題で、アメリカの國務省とか財務省とかと交渉しております。ついからですから申し上げてしまうと、日本は人のかつらをつくるのに、中国から人毛を輸入しているんですね。それをアメリカに輸出すると対敵通商取引法違反だということになるのです。人毛というので、なんとも複雑で嫌な問題でした。

それで、経済局三課關係は終わりです。たった一年間ですけれ

ども、その間プライベートには何をしておつたかということをし申し上げます。実はその間、僕はこういうものを訳したんです。さきほどからのラインバーガー先生が著した『心理戦争』。僕の先生なもんだから、著作権というか、コピーライトをもらいました。

ただ、それを僕の名前で出すのではネームバリューがないというので、ラインバーガーを御存知の須磨弥吉郎さんが、たまたまこの本を読んでいたので、息子の須磨末千秋さんを通じて、僕に訳さないかということになりました。僕はその時アメリカ留学から帰ってきたばかりで、外務省の赤坂の水川寮というところで、この『心理戦争』を訳出したのです。この『Psychological Warfare』という著書は、第二次大戦中はひとつの大きな戦術学であり、ソシヤル・サイエンス（社会科学）にまでなつたのです。心理戦術を利用した謀略宣伝の学問。ラインバーガーという人は戦争中は陸軍省で、サイコロジカル・ウォーフエアを指導した陸軍少佐でもあつたんです。

〔註〕この著書は既に各国語に訳され出版されている。

佐道 ずいぶんいろんなことをやつてらっしゃるんですね。

菊地 全く多才な、異才です。異能な人。

佐道 須磨さんのお名前ですけど。

菊地 實際は僕が訳しました。

佐道 ちゃんと印税をおもらになりました？

菊地 ええ、ただ、あまり売れなかつたとみえて。たつた一人、「君のあの本読んだよ」と言ってくれたのが、あとから防衛庁次官になつた丸山昂君。彼は警察庁にいる時に、上司から「この本を読め」と言われて、読んだとか。

佐道 ということは、警察關係のなかでは知られていたということですね。

菊地 そうです。あの頃は、サイコロジカル・ウォーフエアとい

うのは非常に重要だったんですね。ゾルゲ事件。それから、ちょうど僕が経済三課にいた時は、外務省の庄司某の事件というのがあったでしょう。ソ連大使館員から金をもらってやっていたというスパイ事件ですが、ロスト……。

佐道 ロストロボロフ。

菊地 ああいうことがありましたから、そういった問題意識はあったんじゃないかと思えます。

佐道 昭和二十年代後半は、そういう日本におけるスパイ絡みの事件というのは確かにいくつか起こっていますね。

ちよつと単純なあれなんですけれども、経済局で、通商協定とか、日米通商航海条約とかの研究をされて、その締結に向けて努力をされた。条約局との関係というのは。

菊地 条約締結は条約局の主管ですが、われわれ経済局としては、調査、研究の上、資料準備と実際の締結交渉ということ。もちろん、それには条約局も参加しているんですよ。

佐道 案文とかをつくるのは条約局とも一緒になって。

菊地 そうです。条約案文の審査は、条約局の主管。

佐道 これもまた単純なあれなんですけれども、日本も国交回復と同時に、アメリカを始め諸外国に在外事務所、大使館、総領事館などをつくっていくわけですから、外国も日本に大使館を開いたりするわけですよ。それは、それぞれの地域局が窓口になっていくわけですか。

菊地 国交がちゃんと回復されれば、外国政府が日本に公館を開くことは簡単で、手続的には外務省の儀典課に届ければよいわけです。平和条約で、いままで在京のディプロマティック・ミッション（外交使節団）と称していたのが、大使館に衣更えしただけですよ。

股野 前回の記録で、アメリカは、ディプロマティック・セクションとなってますが。

菊地 アメリカはディプロマティック・セクションです。それは総司令部のなかの一セクション。ところが、ほかの国、例えばカナダとかなんとかは、ディプロマティック・ミッションと称していたかもしれません。

■ 本当の外交とは

菊地 ご質問に、その頃の経済外交の印象はどうかというのがありました。経済外交という言葉そのものから始めると、これは誰がつくったのかというのは、必ずしもはっきりしていません。マスコミがつくったんだろうとか、吉田茂が言い出したんだといいます。僕をして言わしめれば、本当は外交には経済外交とか、軍事外交とか、漁業外交とか、そういうものがあつてはいけなわけです。外交というのは、オーバールールな国との関係をさす言葉でありまして、何々外交と分類するというのはおかしいことです。外交というのはあくまでも——英語に非常にいい言葉があるんですが——ホリスティックな、全体的なものであるということが本質です。これを平易に言えば、例えば対米交渉において、通産省事項に関して先方からいろいろな要求があると。それから、運輸省関係のこと、例えば日米民間航空の協定の問題について、アメリカからの要求があると。もちろんこつちからもいろいろな要求がある。そういうネゴシエーション（交渉）の総体を見て、例えばわが方から「今回は、通産省の関係はちよつと譲歩してもいいけれども、その代わり、運輸省の案件では、ひとつこつち側の言い分を認めてくれないか」というようなことを言う交渉が、実は本当の外交のテクニクなんです。各省に跨がる利益、異なった国益、「部分国益」を総合し、「国対国」の関係で見ることができるところに、外務省の権限があるはずですよ。それをできるのは外務省だけであり、先進国の外務省というのは、多かれ少なか

れそういうことをやっている。例えばアメリカの国務省とホワイトハウスの外交。いちばんいい例は、米国が沖縄を返還する代わりに、繊維交渉では日本は譲歩してくれと。これこそ国対国の本当の外交なんです。外交というのは、部分国益を総合して対外的にぶつつけるものだというのが、僕の信念です。そういう意味で、経済外交という言葉はあまり好きじゃないけど、議論を進めるために、ここではこの言葉を使います。

もし経済外交のご本尊が吉田茂であるとすれば、確かに「吉田外交」とか「吉田ドクトリン」といわれるものは、防衛は軽武装ですませて、それ以上は日米安保条約（米国）に頼る。そして、ひたすら経済発展の路線を突き進む。昔の言葉でいえば、国利民福ですね。まず、復興から始めて、さらなる経済発展を願うというのが吉田ドクトリンであるとすれば、五〇年代はまさにその政策が徹底して行われた時代だと思います。天谷（直弘）君が「町人外交」という言葉をはやらせました。高坂正堯とか、萩原延寿なんかの学者が言うように、フェネキア人的な行き方だとか。それはそれでよかったんじゃないかと思えます。五〇年代、六〇年代までは、確かにそういう吉田外交、吉田ドクトリンというのは、おそらく日本にとって唯一のサバイバルの道であったんじゃないかと思えます。ですから、それについては、われわれはあまり批判できない。ただ、中曽根さんあたりは、「確かに吉田外交はすぐれたものであったけれども、日本人に対して、国防意識とか、安全保障に対する観念を薄くした」というようなことを言っています。それはそれとして、この時代に限って言えば、やっぱり経済外交というものが非常に大事だし、その先端を走っていたのが外務省経済局だったんじゃないかと思えます。

それで、質問のなかに、その頃の各省との関係という話がありました。その頃は幸か不幸か通産省（一九四九年五月から）、それから、それ以前の貿易庁の主要なポストには全部外務省から

出向した。「外務省帝国主義」と言われたぐらい、通産省の市場一課長から三課長まで全部外務省から課長が行った。もちろん貿易庁時代は外務省全盛。経済安定本部も外務省から。というのは、当時は対SCAPの交渉が最大の仕事でしたから、言葉のできない人は仕事にならないというので外務省ということになる。それは確かに通産省の人達にとっては、まさに地団太を踏む思いだったでしょう。その後、例えば山下英明とか、ああいう人達がだんだん出てきて、通産省でも言葉のできる人が出てきた。

佐道 六〇年代ぐらいからということですか。

菊地 そうですね。それで、さきほどちょっと触れましたけれども、吉田ドクトリンということで、例えばあなたがこの前見せてくださった「特別委員会」とか、ああいうことで、とにかく戦後は経済復興優先ということで、そのためには「傾斜生産方式」だとか、それからいわゆる「制度金融」なるものを始める。輸銀（日本輸出入銀行）とか、長銀（日本長期信用銀行）とか、もちろん復興金融金庫ができて、日本特有の制度金融というものが始まった。それから、吉田さんは外資の取り入れには熱心と言いますけれども、さきほど話したように、直接投資じゃなくて、ローンを求めるということでした。それが八〇年代、九〇年代までに尾を引いているのです。それが後のストラクチャル・インペディメント（構造障害）と米国から言われるようになった哲学です。以上が五〇年代、六〇年代の経済外交で、ここ一般にはあまりよく知られてないことは、戦後日本は急速な高度成長を遂げましたが、これに最も貢献したのは他でもない農地解放の実施でした。農地解放によって、農村が豊かになり、ものすごい購買力が生まれ、ついには農村のほうが都市部より生活水準が上になった。こういうユニークな経済開発方式で、日本経済のテイクオフ（自立）が行われたこと。よく日本は輸出主導で発展したといわれます。確かにそういう面はあるけれども、同時に、国内市場が大き

かったからこそ大量生産がやれ、その結果輸出もできるようなったんです。国内市場がないところでは、大量生産も無理です。ここで農地解放の利益、利点がいかに戦後初期の日本経済のテイクオフに貢献したか。これは一部の学者は指摘しています。ただその墮落した形態が「農協さん」の海外慰安旅行になるということはありましたが（笑）。外交問題でもうひとつあるんですけど。

佐道 もしよろしければ。

菊地 さきほどの質問のなかで、平和条約の時にどういう気持ちでいたかということなんですが、一言、平和条約を締結する時にいちばん問題になったのは、いわゆる「全面講和」か「単独講和」ということでした。われわれの世代、ことに外務省にいたわれわれは、全面講和ということ、つまり、ソ連とか中国を全部含んだ講和ということはどうも夢物語である。ことに、ソ連のあの頃の対日妨害ぶり、それから、ソ連作成の平和条約草案なるものを見ても、こんなソ連と一緒にやったら平和条約はできっこない。当然、「単独講和」だという認識で一致していたんだと思います。そもそも「単独講和」という言葉はひどいですよね。五十何カ国とやって、なんで単独講和ですか。

井上 大多数講和ですね（笑）。

菊地 あれは多数講和なんですよね。それを社会党とか、いわゆる進歩的文化人とかは、自分の議論を有利にするために、多数講和のことを単独講和と歪曲論する。これは非常に日本のジャーナリズムとか、社会党の悪いところですね。

ちなみに日米安保条約については、よく条約の「非対称性」ということが言われますね。アメリカは日本を守る義務はあっても、日本はアメリカを守らなくていいので、これは非対称的だということ。しかし条約締結の経緯からみて、改定安保条約にあつては僕は非対称ということはない。もし本当に実質的に非対称だったら、アメリカの上院がこれを批准するはずがありません。仮に非対称だ

としても、アメリカが批准したということは、アメリカの上院として、それが許容範囲内であるということに認めたからこそ批准したわけでしょう。その二点を強調しておきたい。あとでその関係のことがあつたら、もつとエクスパンド（詳述）します。

佐道 重要な問題にもなりますので、また改めて是非。

股野 ちようどきようはここで切れ目がいいですから。

菊地 それからイギリスとパキスタンへ行くわけですよ。

佐道 その外地にいらつしやつた話、特に話題のパキスタンの問題もありますから、次回。

菊地 大使館は当時カラチです。僕はイスラマバードへももちろん行きました。

股野 イギリスへ行くのは赴任でございましょう。

菊地 赴任です。

股野 出張となつていくけど、赴任ですよ。だから、パキスタンも赴任ですよ。

武田 はい。

股野 いや、当時、金がなくて、出張の形式で赴任したのかなとちよつと思つたりしたんですが、そうではないんですね。あくまで正規の赴任ですね。

菊地 はい。「外交官補を命ず」ということでした。ちようど在外事務所から正式の大使館に切り換わつたその数カ月後にロンドンに行きました。これでこれを選んできたかと思いました。

股野 なお、どこで出てくるのかなと思つたんですが、ご結婚の話はいつ出てくるんでしょうか。

菊地 それはもう出てきちゃつたんです。

股野 S A I S の時は独身だったんですか。

菊地 独身です。

股野 これは法律上も独身？

菊地 イギリスへ行く直前に結婚したんです。

股野 じゃ、それは次回（笑）。SAISは本当の一人だったんですね。

菊地 チョンガー（独身の男）の老学生だったんです。

股野 いやいや、まだ二十八でしょう。若いですよ。

佐道 六十年安保の時はアメリカ大使館にいらっしやったわけですよね。

菊地 はい。

佐道 ですから、安保の話は、またそこらへんのあたりでもう一度ちよつと詳しくと思います。

（終了）

菊地清明 オーラルヒストリー

第5回

在英大使館・パキスタン大使館時代

開催日：2001年11月2日

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時15分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

股野 景親（元スウェーデン大使）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■ 外務省と通産省

— ココム、産業政策をめぐって

井上 きょうは、まず、経済局第三課時代のところから始めたいと思っております。質問の「1」に書いてありますように、具体的な職務内容ですとか、他省庁との交渉の様子ですとか、アメリカ大使館との接触の様子について、お話を聞かせただければと思っております。

菊地 実は、これをいただいたんですが、経済三課時代の話はだいたい話したつもりなんです。

井上 何か補足されるようなことは。

菊地 補足することもありませんが、ただ、この前、ココムのことをお話ししましたね。ココムは一九四九年の十一月にきて、僕が経済三課で、在京のアメリカ大使館から、ココムに対する「シークレット」と判子を押したレターを受け取ったのが一九五二年ですね。その五二年に、日本がアメリカに懲罰されて加入したと。それから、その同じ五二年にチンコムという組織ができました。もちろん日本はチンコムにも入った上、日本だけは、中国に対しては四百品目に上る特別禁輸品目リストというものを課せられました。池田首相らは、これでは日本の対中貿易に支障が出るから、「西欧並み」にしてくれという要求をずっと続けるわけです。それはいろいろな資料に残っています。

あの時、日本が対中貿易を漸く興そうということで、松村謙三さんあたりが動く。国貿促の使節団が中国に行ったりした時です。ココム全般、特にチンコムが日本の対外貿易に対して制約要因になった。ただ、日米安保条約の建前もありますから、日本としては、一応受諾した上で、条件闘争に入ったということじゃないかと思えます。

ココムの事務局はパリにあります。パリの大使館員を指名しま

して、ココム審査委員会に出席させていました。審査委員会というのは何をするかというと、ある国の輸出案件がココムのリストに触れるかどうかを審査する。例えば、日本がソ連に対して、ある機械を輸出しようとする時に、これがココムリストに触れるかどうかというのを審査するのです。どこか一国からでもクレームがつけば、輸出ができない。冷戦後の八七年（一九八七）になっても、東芝機械事件というのが起きて、日本人はココムというのはまだあったのかと愕然とする。最近はずせナー条約というのができて、体制が少し変わってきました。

佐道 ココムとの関係で、パリの大使館に担当の者がいるということだったんですけども、通産との関係ではどうなんでしょうか。例えばパリの大使館の方は、外務省の方がおやりになるんですか。菊地 外務省の人がやりましたね。通産省という役所は貿易振興のほうですから、コントロールするほうになると、それは外務省にということになる。業界に対しては、「外務省からこう言うてきているから」というようなことを言えるんでしょう。

佐道 通産には通産で、ココム室というのもあるんですか。

菊地 もちろん管理室というのがあつたんです。輸出管理課かな。僕は退官後、松下電器産業に行つたんですが、松下電器など、大きな対共産圏貿易をやっているところは、やっぱり輸出管理室というのがありまして、ちゃんとチェックしているんです。

武田 企業のなかに。

菊地 企業のなかで。大企業、ことに電気の機械メーカーというのは、みんなそういう輸出管理室というのを設けています。日本は真面目なんです。東芝機械事件なんていうのは本当に不思議な話で、あれは在京大使館のなかにあるCIAのスパイが電話を傍受したとか、誰かの垂れ込みだったとかいろいろ噂がたちました。質問状にも書いてある外務省から大量に通産省に輸出していった時にどういふふうな感じを持ったか、出向した背景、その具体的

な効果等の点についてということですが、その頃、通産省としては、どうしても渉外要員というものが足りない。で、外務省から語学のできる人達が来た。しかも、その頃は外務省の最精鋭の、戦前の外国経験もある人達を外向させた。彼ら自身、非常にはりきって行ったはず。ですから、通産省としても、いい助っ人が来たという感じのようです。現に、「通商監」というようなポストには外務省から出ていった。いちばん最初が小滝（彬）さんという人。その次、黄田（多喜夫）さん、武内（龍次）さん、牛場（信彦）さんら。

佐道 錚々たる方々ですね。

菊地 最精鋭の通商監が、通産省の通商局長の上において、通商全般に関して采配を振るった。戦前の外務省通商局を思わせる活躍ぶりだった。それで、最初の二、三年はよかつたんですけれども、そのうち、外務省も外交が再開され忙しくなると、出向者を徐々に引き上げ始めた。他方、通産省のほうも、だんだん渉外用の人材が養成された。在外事務所とかなんとかに派遣されて、在外経験をした人が出てきた。いちばんわれわれの頭に残っているのは、前にも述べた山下英明さんですね。ああいう方が出てきて、彼らも自信がついてきた。これは通産省の人から聞いたんだけど、その頃になると、だんだん外務省から送ってくる人材もちょっとレベルが落ちてきた（笑）、と彼らは感じて、だんだん通産プロパーの人でやろうということになった様です。

ここでちょっと脱線してもいいのかしら。

股野 はい。

菊地 有名な通産省の「産業政策」というものに関して。日本が戦後の経済回復の奇蹟をなし遂げた時の最大の政策手段は、通産省の産業政策。いわゆる業界に対する行政指導という名の産業政策だということになってますね。で、チャルマーズ・ジョンソンというカリフォルニア大学サンディエゴ校教授が書いた『通産省

——日本の奇蹟』に関して、僕はよく通産省の連中と議論するんですが、なぜああいうチャルマーズ・ジョンソンが書いたようなことを、通産省OBなりが書いて日本の実状を説明しないのかと。確かに通産省の産業政策というものが成功したのは、僕は一九七〇年代までだと思う。その後は、むしろ産業政策の役割は次第に小さくなる。ことに、大平さんが通産大臣になって（一九六八年十一月）最初に通産省の職員に訓示したことは、「今後、通産省は行政指導はやめてくれ。」と。そういうことは、チャルマーズ・ジョンソン先生あたりはご存じないわけですね。

質問状に「昭和二十七年には、イギリス連邦開発計画も策定され、経済ブロック化の傾向も進んだ」とありますが……。五〇年代までは、スターリング圏とドル圏とが拮抗するという状況で、スターリング通貨がその価値を維持するためいろいろ苦心した。例えばコロンボ計画とか、そういうものができた。ただ、「経済ブロック化の傾向」まで進んだかどうかは、僕はちよつと判りません。

武田 これは鹿島の『日本外交史』にそういうようなことが。

菊地 筆者は誰かしら。

武田 ちよつといま調べてみます。

菊地 確かに、この時代の日本は、「六〇年代の所得倍増期間への助走期間」ですから、ものすごくはりきって戦後復興の努力をやった。この時に、いわゆる制度金融、輸銀とか、開銀とか、電源開発株式会社というものができたことは確かですね。

それと、質問状「6」の「再軍備を睨んだ日米経済協力が日米関係の重要な課題となっていました」と。これは「日米経済協力」となっていますが、当時日本から協力できるような実力はないわけです。しかし、アメリカ側からみれば、「再軍備を睨んだ日本の経済復興に関する米国の強力な援助」というような感じだと思えます。つまり、米国はいずれ再軍備するにしても、とにかく日本

経済には自立してもらわれないかと。自立するだけじゃない。もう少し大きくなってもらわれないかと。ことだと思えます。

武田 実際には、アメリカのほうから打診をしてきたという形でですね。

菊地 アメリカの援助ですよ。

武田 はい、そうです。

■ 対日講和条約は寛大か？

— 日米加漁業条約・日米民間航空協定

菊地 対日講和条約に関して、僕が一言あるとすれば、それは対日講和条約というのは非常に寛大な条約であったし、アメリカの占領政治というのも、一般的に言えば最後まで寛大であった。占領軍ということをかさにきて、講和後の日本にとって不利な条約を課したことはない、ということに一般にはなってます。

ただ、これは一般にあまり言われてないんですが、占領軍が占領終了時に、日本に対して半強制的に要求した条約が二つあります。一つは、日米加漁業条約。北太平洋漁業条約。これは一つの講和条約との取引き。西経一八五度以東の海域では、日本はサケ・マスを取っちゃいかんということを決めた条約です。これは日本の漁業にとつて大変な制約です。

それから、日米民間航空協定。これは占領時代のグランドフォーザー・クローズ（祖父条項）で、いまだに日本が、運輸省がずっと戦後五十年間、アメリカ側と断続的に交渉を続けている案件です。それは占領が終わった当時、アメリカの民間航空会社が持っていた路線権を固定したわけです。アメリカのほうの航空会社が持っている路線権、それから、ビヨンド権。ビヨンド権ってわかります？

佐道 以遠権。

菊地 以遠権も、既得権として固定したわけです。それが日本側に不利になっていったんですね。これを平等の関係にするということとは運輸省航空局の長年の悲願ですよ。

佐道 いまだに平等じゃないわけですよ。

菊地 いまだに平等じゃない。日本にはロサンゼルスから先の以遠権がないんです。で、僕も欧米局一課や、在米大使館にいて、日米航空交渉には何回か参加しました。後に日航の社長になった運輸省の山地（進）君とか、仲田君とか、ああいう人達と一緒に対米航空交渉をしました。それは日本の路線権（landing rights）を増やし、以遠権をとるということ。アメリカはグランドフォーザー・クローズを持っているにもかかわらず、さらにランディングライツの増加を日本に対して要求してくるわけです。日本はアメリカ側の要求を受ける前に、まず日本が蒙っている不平等を是正してくれいことなんですが、アメリカは依然頑として主張するわけです。股野さんは知ってましたか。

股野 日米航空協定のほうは、私もある程度承知しておりましたが、その漁業条約のほうは私もあまり関わる事がなかったです。

武田 すみません。日米漁業協定でよろしいでしょうか。

股野 日米加のほうですね。

菊地 北太平洋漁業条約。ただ、北太平洋漁業条約は、最近九〇年代に入ってから、日米加ロシアの四カ国で、新しい溯河性魚類の条約というものにテイクオーバー（引き継ぎ）されています。

佐道 原則的に、しかし、最初のサケ・マスの漁業規制というのはいまだに。

菊地 新しい条約に引き継がれているはずですが。これは母川主義を基礎とした条約ですね。サケ・マスには国籍があると。俺の国の川でスポン（産卵）したサケ・マスは、俺のものだという発想です。

佐道 戻ってくるわけですからね。

菊地 それを公海上で他国が取ってもらっては困ると。アメリカは都合のいい時は「不自由主義」なんです。ナシヨナリズムなんです(笑)。

■一九五二年、在英大使館へ

菊地 今度は在英大使館。

武田 そうですね。

菊地 経済三課にちょうど一年おりましたら、五二年(一九五二)七月のある日、通産省から外務省に出向してきていた福井政男課長が、「おい、菊地君、君はアメリカ大使館に行くようだよ」という。「ああ、そうですね。アメリカにまた行くんですか」と。そのつもりでいたら、翌日でしたかね。「いや、どうも、君、アメリカじゃなくてイギリスらしいよ」と。これは何とも無責任な話だなと(笑)。

武田 でも、そういうふうに決まるもんなんです。

菊地 どうなのでしょうかね。僕はその後何回かそういう目にあっています。

佐道 英語圏には違いんですけど。

菊地 イギリスだということ、この前から股野さんに冷やかさされている「結婚はどうしたんですか」ということですが、外交官として最初の任地に行くのに独身というのもおかしいだろう。歳も二十九になっていた。結局、僕はよく外交官について言われる間とか閨閥とか、そういうものあまり関心がなかったものから、母親の勧めるまま仙台の地元の人、宮城女学院大学を出たいまの女房と結婚しました。五二年はまだ食糧事情やなんかが悪い時です。結婚式は、女房の一家は熱心なクリスチャンでしたので、東北学院の教会で式を挙げました。だから、言うなれば、新婚旅行を兼ねたような赴任だったのです。

赴任は南回りのSASで行きました。ロンドンの大使館、正確には、在連合王国大使館の陣容は、日本政府在外事務所から大使館に変わったばかりで、初代の大使は松本俊一さん。戦時中の外務次官、戦後は、重光さんの下で日ソ共同宣言の交渉をやった。また日ソ漁業交渉も河野一郎を助けて交渉をやった方です。この人はこの前ちょっとお話ししたように、そもそも大蔵省の人でした。彼の息子は松本和夫といって、一高で、僕の一年以上。それから、公使が朝海(浩一郎)さん。参事官は大蔵省の伊原(隆)さん。あとで横浜銀行の頭取になった。

股野 大蔵省。

菊地 通産省は鈴木義雄さん。例の味の素の長男で、退官後、日本揮発油の社長になりました。各省からは最精鋭の人々が来ていました。外務省は、朝海公使の下に、藤崎(萬里)、中山(賀博)両一等書記官。奈良靖彦二等書記官。堀新助。例の橋敬一君。ブラジル大使になった伊達邦美君。

確かに外務省としては精鋭部隊なんです。いかんせんイギリス経験者というのは、朝海さんただ一人。朝海さんはエジンバラ大学の在外研修員ですね。ですから、彼はパリパリの英国通ですけれども。松本俊一さんはフランス派。ということ、われわれは一所懸命外交の「老舗」である英国なるものをできるだけ勉強しよう。勉強すると同時に、日英関係を増進して、戦後日本外交の一つの柱としたいと。僕などはいちばん下っ端でしたけど、そういう気概を持つていったつもりです。

気概という点で言えば、われわれはもうアメリカには行った、今度は英国の伝統ある外交というものを学んでみようじゃないかと、意気込んでいたように思います。当時はジェネラル・ピゴットという人がいました、この人は日英同盟の頃からの人で非常にわれわれ大使館のものの世話もしてくれました。彼からは戦前の日英関係というのはこうだったとかいう話をずいぶん聞かされま

した。戦前、英国に勤務した日本の外交官は「わが英国」と言うぐらい、英国に心酔していた連中が多かったと言う。それは外交官だけじゃなくて、民間の人でもそうだったようです。

民間の話が出ましたけど、その時、民間も在外に人を派遣することができるようになった。日本銀行は立さん、東京銀行は山崎さん、松平さん、第一物産は深瀬さん、飯田高島屋とか、船会社では三井船舶の熊野さんとか、それはもう最精鋭の人達が揃っていました。そういう意味では、ロンドンにはワシントン、ニューヨークとは違った意味で、われわれは戦後の日本外交に、日英関係とか日欧関係というものをなんとかして活かさないかんとというような気概があったと思います。

僕の仕事ですが、外交官補ですから、いろんな仕事をやらせられる。僕は最初は領事事務、その次は商務。それから、松本大使のプロトコール、儀典というふうには、いろいろやらされました。

領事事務では、当時在留邦人はあまりいませんから、在留邦人の世話というのはいまありませんから、在留邦人の旅券、査証業務とか。僕の最初の娘はロンドンで生まれたんです。自分で自分の娘の出生届を受け付けました。戦後のロンドンでは、最初に生まれた日本人は確か藤崎さんのお嬢さんです。いまの藤崎一郎君（外務審議官）の妹さんです。その次に僕のところ。

武田 二番目ですか。

菊地 戦後ロンドン生まれの第二号なんです。ロンドンにはサマリーセットハウスという登記所がありまして、そこに出生届を出す。領事部では査証を発給する仕事がありました。その頃は、まだ外国人が日本の査証をとるのに、「本人出頭主義」ということを厳格にやっていました。ですから、イギリス人の偉い人でも、本人にわざわざ大使館まで出向いてもらって、僕のところへアプライ（申請）するわけです。僕は気の毒だなあとはいましたけど。

僕がいま覚えている人では、ロード・リメリックというアイルランドの貴族が来たのと、文人、作家では、ジョン・プリーストリーが日本に行きたいと言ってやって来ました。僕は、この人がかの有名なプリーストリーかと。それから、いま皆さんだったらご存じだと思っけど、ロン・ドア。

佐道 若きドアさんが。

菊地 まだオックスフォードかケンブリッジかの若い先生だったんじゃないですか。

僕は商務部に移ってからは、主として貿易関係のインクワイアリーオフィサー・クレーム（引合い）の処理でした。外国の商社、メーカーからのオフィサーを受け付けたり、こっちからオフィサーを出したりする。そういうのを大使館が仲介してやっていたんです。ことに、外国商社のクレームというのは大使館に来たんです。

〔註〕当時、完全な民間貿易が許されていなかったため、大使館が仲介を行った。

佐道 その会社とかに直接ではなくて、大使館が。

菊地 大使館に来たんです。それで、大使館から外務省経由、通産省に移譲し、通産省がその業者を呼び出して、なんとかしろという。だから、クレーム処理という、純粹なる民間の業務にも、政府がなんかと介入する時代でした。ダンピングなんかで提訴されると、本当はその企業が提訴されているはずなのに、まるで日本政府が提訴されているみたいな感じで、日本の通産省が一生懸命民間業者に資料を出させたりして対応する。それが商務部の仕事です。

■プロトコールの本場、英国と日常生活

菊地 プロトコールに移ってからは、イギリスは外交プロトコールの本場ですから、これはもう一所懸命勉強しよう。われわれは、外務官吏研修所ではずいぶんプロトコールは鍛えられました

けども、本場で鍛えられるということで、外交文書の書き方とか、招待状のこととか、例えばクイーンからの招待状にはどう答えるかとか、あれはご存じですか。

〔By command of Her Majesty the Queen〕(女王陛下の命により)で、ロード・チェンバレンが「honor to request」(要請する光栄を有する)、とかという仰々しいものです。それから、クイーンの招待は断つてはいけないとか、いろんなプロトコールを聞かされました。イギリス人には例の公侯伯子男爵、サー(卿)なんてあるでしょう。こういう貴族に対するアドレス(呼び掛け)の仕方。例えばデュークに対しては、なんとアドレスするか知っていますか。

佐道 わからないですね(笑)。

菊地 Your Graceです。

股野 直接言う時ですね。

菊地 それから、一般に、スピーチの冒頭では、貴族がいる時に、「ミイ・ロード」で始まる。マイ・ロードじゃない。これを僕は現実に聞いたのは、英国外相ロード・ヒュームが日本に来た時に、東京会館でギャラ・デイナーがあった。その時に秩父宮妃殿下があいさつをされたんです。秩父宮妃殿下がロード・ヒュームにアドレスするのに、やはり「ミイ・ロード」とあいさつされています。いまの民主主義の時代には、時代遅れのことかもしれないけども、われわれとしては、そういう研修所時代以来鍛えられたプロトコールを実践するよい機会でした。洋服なんかも、これは皆さん方、外交官でない方にはあまり縁がないかと思うけど、例えばわれわれは当時ロンドンに赴任する時は、必ず外国人を自宅へ招んでエンターテイン(招待)しないといかんといいことで、外国人をエンターテインできるだけの食器一式を持っていきましました。その分の支度金は出ますけど。それから、式服は全部作ります。ヴェストン・ノワールというのもあった。シルクハットと日

本語で言うトップハットね。それに、ホンバーク等々。

佐道 イギリスでお作りになったんですか。

菊地 僕はイギリスで作りました。そのほうがいいんですよ。日本のものはどうしても亜流ですから、日本式に変えているところがある。

佐道 しかし、品物はいいかもしれませんが、当時の日本の円のレートからすると、大変高価な。

菊地 それだけの手当は、われわれは支給された。

佐道 当然必要な経費だということ。

菊地 大使館では、必要経費はまあまあでした。借金でしたけども、車も買いました。イギリスですから、伝統的なことがいろいろある。アスコット競馬場とか、いろんなところへ行く。ゴルフも覚えなくちゃいかんというので、これは奈良さんに教えてもらいました。

プロトコール(儀典班)にいた時は、あまり実質的な仕事はないんです。一九五三年三月五日ですか。スターリンが死にましたね。僕は政務班じゃなかったんですが、藤崎一等書記官が僕を呼びまして、「君、スターリンが死んだことに関する英国の新聞の反響をまとめて電報にしてくれ」と言われたんです。外務省では、こういうのを「反響電報」と言うんですけれど、それを書かされました。一所懸命タイムズなんか読んでまとめたんだけど、我ながらできがいいとは思わなかったけど、藤崎書記官が手を入れてくれました。電報になったことを今でも覚えてます。

佐道 当時の反響で、覚えておられるようなことはありますか。

菊地 ありませんね。

佐道 印象に残るようなものは。

菊地 まあ、一つの時代が去ったというぐらいのことじゃないですか。

股野 イギリスの物資とか生活は、まださうとう厳しい時代です

ね。

菊地 その時はまだバターも配給でした。バター、ミルク、卵全部配給なんです。

武田 イギリスで。

菊地 イギリスで。戦勝国のイギリスが敗戦国の日本よりも配給物資の数が多かったです。ただ、われわれ夫婦として幸いだったのは、妊婦に対する特別の配給があったんです。大使館は免税輸入ができますから、あまり困ったことはない。昼御飯は大使館の地下の小さい食堂で、みんな一緒にガヤガヤ言いながら食べてました。ちなみに、その頃の大使館はいまの大使館じゃありませんで、ベルグレーブ・スクエアというところがありました。いまはグロブナー・スクエアにあります。

股野 いや、また移りました。いまはピカデリーです。

菊地 当時、戦前のグロブナー・スクエアの大使館は、まだ接収されていて、日本には返されていなかったんです。それで、ベルグレーブ・スクエアの小さい大使館で、ギーコーギーコー鳴るエレベーターでやってました。

股野 ということは、レストラン等での食事が不自由だったということですか。

菊地 いや、レストランでは食事はできました。レストラスクエアにあった中国料理屋なんかにはよく行きました。

股野 レストランでの食事についての物資不足ということでは必ずしもなかった。

菊地 そうですね。あれはどういうことなんですかね。

股野 大使館で食べておられたというのは、弁当を持っていつておられた？

菊地 いやいや、大使館に「忠さん」とかいう中年の日本人がいて、彼は毎日一膳飯屋のような食事を作ってくれた。

股野 大使館食堂なんですね。

菊地 大使館食堂なんですよ。われわれは節約にもなりますし……。

ただ、われわれは、僕はことに英語が専門なものですから、イギリスに行ったら、芝居とか映画とかバレエというものはなるべく観ようと思って、よく観てまわりました。ストラッドフォードへ行ったり、方々旅行して、いわゆる見聞を広めるということにはずいぶん努めました。レイク・デイストリクトのほうまでドライブしたり、ケジック城のある所とか、スコットランドにも行きました。最初のクリスマスはデボンシャーのトーキー、例のガット(GATT)の第一回会議が開かれたトーキーで過ごしたことを覚えています。僕の最初の任地ですから、ロンドンというものを、こう言っちゃなんですけども、心行くまでエンジョイし、かつ、勉強になったということだと思います。

佐道 奥様を連れてずっと回られたんですか。

菊地 そうですね。

■皇太子殿下の訪英

菊地 僕がロンドンにいた時の最大の行事は、一九五三年の六月でしたか、皇太子(明仁親王)殿下がクイーン・エリザベス二世の戴冠式におみえになったことです。それこそ大使館は総動員で対応したわけですが、われわれ若い館員もいろいろ手伝わされました。僕は、皇太子殿下のオックスフォード大学行きのセクションの担当になりました。殿下のお供は、その時は小泉信三さんが主席随員で、オックスフォード大学へ行きました。車列を組んで行っただんですが、途中、ヘンリー・オン・テムズで、オールド・アングラズ・インなんとかという有名な英文学に出てくるところで昼飯をとった。その時は、本当に皇太子殿下と真向かいでいるんのお話をいただいた。皇太子殿下もその時のことをよく覚えておられまして、天皇になられても、十周年ごとに当時ロンドン

にいたわれわれを、全部宮中に招んで戴いています。
股野 そうですね。

菊地 オックスフォードでは、殿下はユニバーシティ・カレッジにお泊まりになったんですね。ユニバーシティ・カレッジはグッドハートという、珍しくアメリカ人のデイーン(学長)でした。その学長邸に泊まりました。われわれ随員はオックスフォード・サーカスにあるマイター・ホテルに泊まりました。われわれ下っ端は、あまり行事そのものには関係ないわけですけども、翌日でしたか。急に殿下が発熱されたんですよ。それは大変だということで、佐藤さんという侍医が付いてましたけど、そのあとの行事は取り止めにしなければならぬ。それはちよつと大変な事で、藤崎一等書記官以下がえらく心配して、天皇陛下にはどうしてもそれを御報告しなければならない、報告するのに病状をどう言うかということに関して、やっぱり専門の佐藤侍医に頼むほかないだろうというので、佐藤さんに頼んだんですね。そしたら、それはわれわれはもちろんあとから知ったんですが、「皇太子殿下、御違和(ごいわ)にわたらせられる」とある。御違和。いまでこそ、「違和感」という言葉はポピュラーになってますけど、その頃は、われわれにとつてはもう初めてだった(笑)。その後、われわれは大使館をさぼる時は、「きょうはちよつと御違和だ」と(笑)。

武田 じゃ、われわれも使わせていただいて(笑)。
菊地 その頃のイギリスの状況と言いますと、まだ第二次大戦中の反日感情というものが残ってました。皇太子殿下はケンブリッジ大学にも行かれることになっていたんですが、事前に情報が入ってきた。戦時中、あの付近のケンブリッジシャーの連隊が、ビルマかどこかで日本軍による虐待を受けた、捕虜になっている、剣呑な空気がある——というので、結局、皇太子殿下はケンブリッジ大学にはおいでになりませんでした。

さきほどゴルフの話をしましたけれども、ゴルフもわれわれは

高級なところではできないわけです。もちろんプライベート・クラブは入れてくれません。ハムステッドとか、ミルヒルとか、そういう小さいパブリック・コースでささやかにやるしかない。サニングデールとかウエントワースとかは高嶺の花でした。ただ、松本大使だけは、あの人はゴルフはあまりうまい方じゃないんだけども、ロードなんとかに誘われて、時々ゴルフへ行っていたようです。松本大使というのは非常に話好きな人でして、大使室から、必ず昼飯近くになるとわれわれの書記官室に現われて、「諸君、どうですか」とか何とかいって、茶飲み話をする。ある時、「ゴルフはどうでした?」と言ったら、自分は空振りで大地を叩いている。そしたら、くだんのロードなんとかが、松本大使に対して「Sir, Don't hit my country so hard」(大使、どうぞ私の国をそう強く叩かないで下さい)と言われたと。(笑)。

僕がロンドンにいた時に、白洲次郎さんが来たんですよ。あの人はケンブリッジ大学を、パブリックスクールから行った人で、底の底までキャンタブ(ケンブリッジ大学人)なんです。彼がロンドンに來まして、われわれ若い者を集めて、御馳走してやるという。伊達君とか、堀新助さんとか、深田宏君とかが、ロンドンで一流のホテル、クラリッジズ・ホテルに出掛けて行った。その頃、われわれはクラリッジズ・ホテルなんて行ったこともない。クラリッジズというのは、デイナーはブラックタイ着用だったのです。彼はわれわれに質問したり、テストをした。テストの一つは、「君達、よく食事してて、相手があなたにお酒を注いでくれる時に、相手は「Say when」(いい時、言ってくれ)と言うだろう。その時、君達は何と答える?」。だいたい人は、「Oh,oh, enough」とか、「That's all right」じゃないですか」とわれわれ。「それは間違いだ」と。皆さん知っていますか。

武田 「when」と言っ。

菊地 そう、「ホエン」と言うんだ、と白洲さんは言う。僕はそ

れまで知らなかった。ヘー、そんなことがあるのかと。その後、いろいろ英語学者にも聞いてみたけども、これが冗談なのか本当か、僕は日本の英語学者で有名な人とこの話をしてみたら、それは確かに「セイ・ホエン」と言われたら「ホエン」と言えばいいんですが、それも本当にイギリスのエリート層が全部「セイ・ホエン」と言われたら「ホエン」と答えるのかどうかについては、僕もひとつ自信がありません、という答えが返ってきました。

さっきの股野さんの話じゃないけど、そういうふうにあの頃の英国、ロンドンにはグッド・オールド・デイズ（古き良き時代）なんです。伝統にとっぷりと浸かっているイギリス。いろんなイギリスの伝統がまだ残っていて、われわれ若い外交官は、イギリスではこういうことをしちゃいかんとか、ああいうことをしちゃいかんとか言われる。われわれの女房連中まで、先輩の奥さん方が先輩の先輩から聞いたと言われる、例えば「買物は、デパートなんかに行っちゃいけません」、「マーク・アンド・スペンサー（大衆百貨店）なんて行っちゃいけません」と。必ず高級専門店に行きなさいとか。「デベナム・アンド・ピーボディ」（高級衣服店）と言ったかな。洋服を買うならどこか、食器を買うならどこか。銀器なら、「マツピング・アンド・ウェツブ」だとかね。とにかくわれわれの買い物に行く店まで指定される。そういう時代でした。われわれ戦中・戦後世代の者からみると、まあ、なんという伝統のしがらみに浸っているのかなとは思いますが、も、実は僕などは、戦前に半分足を突っ込んでいる世代ですから、ああ、そういうものか、そういうことに生き甲斐を感じる人もいるのかなどと、一人で悦に入りながらも、伝統の美しさ、尊さというのもまたあるのかなというような気持ちをかすかに味わっていました。いまは、イギリス人自身にさえ、そういう伝統というものがなくなっているでしょう。

イギリスの伝統といえは、一九六三年、大平外相のお供をして

訪英、ロード・ヒューム外務大臣の客人になって、スコットランドにあるロード・ヒュームのコテージに招かれたことがあります。その時、グラウス・シューティング（雷鳥撃ち）に招待されました。これもまたグッド・オールド・スコットランドだという思いをしました。

■パキスタン転勤

―第二の貿易相手、カラチへ

菊地 一年たちました。一日も変わらないように転勤命令が来たんです。パキスタンへ転勤発令。その頃は、外務省は若い外交官をフル回転で一年でも一年半でもいいから、在外経験をさせようという方針でした。

佐道 一年と伺って早いなと思ったんですけど、いまはだいたい二年から三年いらつしゃいますよね。

菊地 いまは二年。それは外交再開直後の異常事態だったんです。省内には戦前入省の人で、「在外」に一度も出たことがない人がたくさん溜まっていた。戦後入省した人も早く回転しなきゃいかん。それで最初の任地は全部一年。カラチ（当時パキスタンの首都）に転勤になる前の六月二十三日、長女が生まれました。その二カ月後に転勤命令が来た。僕もちよつと困ったんですが、松本大使が、「菊地君、本省に延期を申請してあげましょう」というんで、「出産直後でもあり、延期をされるようにご配慮願いたい」というような電報を出して下さったんです。しかし、一月かなんかしが延びませんでした。

ちよつどその時コメントが飛び始めた。コメントってご存じ？

佐道 飛行機。

菊地 いまのジェット機の前身。「産後二、三カ月の赤ん坊をコメントに乗せて大丈夫か」と、女房のかりつけの産婦人科のお

医者さんに聞いてみたんです。「それは大丈夫だ」。「ところで、どこへ行くんだ」と言うんですよね。「実はパキスタンに転勤になったんだ」と言ったんです。そしたら、そのベーカー・ストリートのお医者さんは、「What wrong have you done?」（何か悪いことをしてかしたのですか）」と（笑）。その頃、ロンドンからカラチに転勤になるといふのは、イギリス人にとっては「島流し」なんですよ。

僕は今になって、パキスタンへ転勤になったことは、非常にためになったと思っています。最初の実質的な仕事をさせてもらう任地としては、カラチは最高だったと思います。僕が経済通商のことを少しでも覚えるようになったのも、カラチにおける一年余の経験に負うものだと思います。僕はカラチではまだ官補でした。官補ですから、キャリアではいっばい下です。けれども、貿易経済担当にされたんです。通産省から古庄源治さんという技官の人がいましたけども、僕は貿易事務の全体をみていた。その頃のカラチといふのは、ニューヨークに次ぐ第二の日本の貿易相手地域だったんです。

佐道 そんなに大きかったですか。

菊地 大きかったです。片道なんと二千万ポンドの貿易額。それで、都市単位でみて、ニューヨークに次いで日本との貿易量が多いわけですよ。

佐道 主に何を。

菊地 日本からは繊維機械。もちろん繊維製品も出しましたが、むしろ繊維を製造する機械。それから、鉄鋼製品。といつても、いまの熱延、冷延鋼板とか、そういう高級な完成品じゃなくて半製品、つまり、ビレットとか、スラブとかの半製品でした。他方、輸入は、まず第一は原綿。デシ綿というんですけどもね。それから、若干の米。その頃は、いまだに食糧不足の時でしたから、米の輸入といふのは、日本の商社にとってはおいしい商売だったんです。

ね。

佐道 いわゆる外米というやつですね。

菊地 外米でインディカ種（ロング・グレイン）です。それで、商社がごっそり駐在しているわけです。商社、メーカー、それから、鉄鋼輸出組合がいるし、綿糸布輸出組合がいる、まるで小ニューヨークでした。そこは、年中ものすごく暑い。四十度までになる、ただ夜は涼しくなる。夕方になると、各商社の人達は単身赴任者が大部分ですから、みんな集まってパーティと称して飲み会をやつて、情報交換をやっている。僕もそういうところへ呼ばれていって、そこで、いろんな貿易の実務というものを覚えまして。例えば「信用状」とはどのようなものか、そういう基本的なことから。

それから、僕はちよつと一般の人と考えが違ふと思ひますけれども、日本の外交官、ことに貿易を担当する在外にいる外交官は、日本の貿易振興なり経済振興なりのためには、民間業界を支援して構わないという思想を持っていた。パキスタンのカラチに駐在している商社が、パキスタン政府との間でいろんな問題がある場合には、そのクレームが正当な場合には、大使館員がパキスタン側の主張も伝えてやると。商社といふのは、どうしても立場は弱いですから、そういうことを僕はやつたんです。

■貿易振興と政府の民間支援

菊地 当時パキスタンに輸出するためには、パキスタン政府からインポートライセンス（輸入許可）を発給してもらうことが必要でした。パキスタンには、アイアン・アンド・スチール・コントローラー（鉄鋼統制官）といふのがいまして、これが一切の鉄鋼製品の輸入切符の発出をコントロールしているわけです。それを出してもらうことが、第一物産とか東西通商とかいふ商社にと

つては、商売のきめ手になる。僕はある時、当然ライセンスを出すべきものを不当に出し渋っているという訴えを聞いて、その人と一緒に行つてやつたんです。その時の僕の考え方は、例えば三井と三菱が競合してインポートライセンスを取ろうとしている時に、そのどっちかに加担することはもちろん許されないが、一社しか関係していない場合、例えば早い話が大きな入札の場合に、日本からの入札が一社しかないという場合は、その一社を政府（大使館）が応援することは、ちつとも構わないという思想で僕はやりました。ですから、若干、おつちよこちよいと思われたかもしれませんけれども、各商社、メーカーからは感謝されました。いまでも覚えてますけれども、その頃の第一物産、いまの三井物産にいた米倉（国輔）さんという人が本社に戻つて、社内報かなんかに、菊地という三等書記官は、貿易の最前線でこういうことをやっていると、わりと褒めた筆致で書いてくれたらしい。

佐道 現物をご覧になったんですか。

菊地 現物は見えていません。

武田 あれば、大変貴重な資料ですね。

菊地 これには後日譚があります。僕が一九六二年の七月に大平外務大臣の秘書官になりました。当時、最高輸出会議というのがあつたんです。最高輸出会議で外務大臣がいさつをするということがありました。それで、型通り、事務当局が演説の草稿を用意した。車のなかで、大平さんは「菊地君、最高輸出会議で何か特に言うことはあるかね。」というんです。僕はこれにちょうどいい機会だと思ひまして、「大臣、外務省には民間の特定の企業の応援をしちやいかんという不文律みたいなものがある。痛くない腹を探られたくないということ、そういうものに消極的な雰囲気があります。しかし、これだけ国際競争が激しくなつてきて、日本以外の国はみな自国企業の応援をやっている今の時代に、日

本政府の役人だけがきれいな事で、われわれは個別の民間会社の応援はしないんだというようなことを言っているのは、私はおかしいと思います。実は私はバキスタンにいた時にこういうことをやりました。」ということをやったんです。続けて僕は、「私はそうやってましたが、一つ苦い経験があります。ある件で輸出入統制官のところへ行つたんです。私は日本側の立場を述べたのですが、向こう側は、「ミスター・キクチ、あなたはそう言うけども、私のところはこういう別の情報が入っているよ」と言うんです。私は愕然としました。商社の人は僕に嘘は言わなかったけども、この全貌を教えてくれなかつた。いわゆるホール・トゥールスですよ。ホール・トゥールス（半分の真実）は言ってくれたけども、ホール・トゥールス（全貌）は言ってくれなかつた。ですから、業者が全貌を官側に伝えることが前提です。ホール・トゥールスを話して、それで政府の援助を頼むということが必須条件だと思ひます」と申し上げた。会議場に着いたら、なんと演説のなかで、大平さんがホール・トゥールスという英語まで入れて、その通り話したんです。それは最高輸出会議では大変受けたように思ひました。

佐道 大平さんの頭のなかには、大使からその話を聞くまでは、その問題は全然なかつたわけですよ。

武田 行きの車のなかでお話しされたんですよ。

菊地 用意した原稿はほとんど使わない。

佐道 その話がよほど印象が強かつたんですね。

菊地 外務省というのは昔から殿様商売だか、きれいな事か知りませんが、民間とか業界というものからかけ離れている。僕は外務省のなかで、戦後初めてこの点を指摘したんじゃないかと自負しています。見てご覧なさい。ギャラハン英国首相自らが、香港の地下鉄工事の国際入札なんかで香港政府に圧力をかけている。

股野 ホール・トゥルースという表現が、非常に大平正芳大臣好みの言葉だったんでしょね。あの方はクリスチャン文化によく通じておられたし、私も通訳をご奉仕申し上げたことがありましたので、そういう時の表現が、いまのような表現は非常に好まれる。

菊地 あの人はいわゆる文学青年なんです。

股野 遡って恐縮ですが、ご家庭のことで、イギリスでご出産というの、なかなかのご経験だと思いますけども、例えば英国の福祉、医療事情でご印象に残ったことはありますか。英国のシステムは外国人に対しても、非常によくできていたんではありませんか。

菊地 その通りです。さきほど話したように、イギリス人の場合には、妊婦に対しては特別なミルクとかバターの配給があるほかに、出産後は、出産手当が出る。さすがに僕らは、これは辞退しましたけどね(笑)。

股野 やっぱり出るといふ連絡があつたんですか。

菊地 その時に、イギリスはソーシャル・メデイスン(医療保険)の元祖です。福祉制度の行き届いていることには感心しました。しかも、それに全く不正がないところが、またイギリス人らしいなと思いました。日本では、配給だけで生活して死んだ判事さんがいましたね。それがニュースになる。

股野 それから、恐縮ですが、奥様のご家庭がクリスチャンでいらっしゃる。これは宗派は？

菊地 メソジストです。戦時中は、日本教会とかなんとか言っていたんですね。

股野 日本基督教団。そうすると、英国においてになって、特に教会のつながりは。

菊地 教会のつながりはなかったようです。

思い出しましたが、ロンドン時代のこと、日英間で「バクス

トン綿業会談」というのがあつたんです。これは戦後の貿易会談の走りですよ。日英の貿易関係には、戦前の「日印会商」というような古い歴史があるでしょう。それが戦後になって、バクストン綿業会談となり、日本からの綿製品の輸入を抑制しようということになった。朝海公使が日本の代表でした。当時からすでに、イギリスは日本からの陶磁器の輸入制限とか、いろんな制限を課そうとしていました。例のガット三十五条援用の急先鋒はイギリスでしたからね。日英通商航海条約(一九六二年十一月調印)ができて初めて、イギリスは日本に対してガット三十五条の援用を撤回した。

股野 これは六二年ですね。

菊地 パキスタンで一つ言い忘れたんですが、これは隣国のことです。隣国のイランにちょうどモサデック首相が出てきて、AIOC(アングロ・イラニアン・オイル社)を国有化した時でした。あの頃、出光興産が、国有化された会社、つまりイランの会社から原油を買い付けたのに対し、イギリスが「あれは俺のものだ」と言つて裁判所に訴えた。その裁判に柳井恒夫弁護士(柳井俊二元外務次官の父君)が出光興産の弁護人として、結局勝訴したということを知りました。

■五〇年代のパキスタン事情

佐道 パキスタンの様子をさきほどニューヨークに次ぐ貿易量だったと。大変驚いたんですけど、在パキスタンの大使館自体はどのぐらいの規模ですか。

菊地 小規模なものでした。山形(清)大使という大正七年組の古い大使。彼は外務大臣よりも古い、茨城出身の人でした。それから、深井龍雄さんが次席、川島利雄二等書記官、杉原眞一三等書記官かな。それから、古庄源治通産省アタッシェ。古庄さんの

あとは横山君。杉原真一のあとに土屋南夫が来ました。末席が僕。僕の後任は柳谷謙介君だとか、門田(省三)君、宇川(秀幸)君と俊秀が続きます。繰り返しになりますけども、カラチというところは、それほど日本にとって大事だったんですよ。一般の人には目立たないけども、貿易上は非常に大事な市場だった。商社の人達にも、「僕はカラチにいました」という人が案外多いんです。佐道 それだけ貿易量もあって重要なところで、しかし、規模としてはまだ小さかった。

菊地 貿易量でまわるわけじゃありませんから。僕だつて行くまでは、知らなかったんだから。

佐道 企業と一緒にになって、向こうと交渉したりということだったんですけども、パキスタン自体は独立してまだそんなに間がない。

菊地 そう。独立が四七年(一九四七)ですからね。建国の父、ムハマッド・アリ・ジンナーは亡くなっていました。

佐道 まだ、いろんな国自体の機構としても、非常にまだガタガタしているというか、しっかりしていない頃だったと思うんですけども、カウンターパートとか、そういうのはどうだったんでしょうか。

菊地 パキスタンの五三年(一九五三)、五四年(一九五四)というの、まだ人々の建国の意気が盛んな頃ですよ。その頃はまだ腐敗というような話もあまり聞きませんでした。とにかくいかにして、インドと対抗して国づくりを進めるかということ、熱気が溢れていた。日本の商社、メーカーの人達は、これはあまり大きな声では言えないけども、基本的にはインド商人よりパキスタン人が好きというような感じで、パキスタンとの商売をよくやっていた。綿花の買い付けとか。戦前から、印綿というのは、いまのインドもさることながら、パキスタンからも出たんです。戦前から印綿の買い付けをやっていた人に、江商の「ハジ伊藤」

という人がいました。大阪に「五棉」というのがありますね。あいう人達は、戦後まるで故郷へ帰ったような感じで活き活きとしてカラチで活躍していました。で、ただ原綿を買い付けるだけじゃないんです。青田で植えつけまでさせるんです。それで、買いあげるんです。カラチ市には大きな原綿市場がたつ。日本の商社、いわゆる五棉が買付ける。その見返りに日本から繊維機械をどんどん輸出する。パキスタンも次第に自分の綿を使って、綿製品を作るということで、日パ間で共存共栄の関係がうまくいったんです。

武田 日本以外の国の商社も当然あるわけですか。

菊地 ええ。当然ありましたけど、日本が圧倒的でした。ラホール(パンジャブ州)というところがあります。ラホールの駅のプラットホームに立ってますと、ツカツカと屈強の背の高いパキスタンの人が、僕のところに来まして、「あなたは日本人か」と言う。「そうだ」と言うと、「自分はインディアン・ナショナル・アーミー(インド国民軍)にいた」と言うんです。チャンドラ・ボースの。あの対日友好感情というのは、パキスタン人はいまだに持っていた。インド時代の名残りですよ。

股野 さっきの佐道先生の質問に関係しますが、英国統治の時代に、パキスタン人を含めて、現地人の官僚というのは、かなりよく訓練されていたわけじゃないですか。ですから、イギリス人がいなくなっても、官僚機構というものはちゃんと動いた。だから、独立間もなくであっても、むしろ官僚機構はしっかりそこにあった。

菊地 ええ。ICSというのがあります。インディアン・シビル・サービス(インド公務員制度)。これはインド人(ヒンズー)の方が多かったんですけども、もちろん後のパキスタン人(ムスリム)もいたんです。それが残ってまして、インディアン・シビル・サービス出身の人達というのは、張り切って独立後も政府の

仕事をしました。カラチ政府でのわれわれのカウンターパートはアガシャヒー (Agha Shah) 氏ですよ。その後、外務大臣になったり、国連代表になったりした人です。建国の意気盛んな真只中にわれわれはいました。それは環境が悪いが勤め甲斐のある楽しい一年半でした。

ただ、私事を言えば、女房が二度目のお産は、どうもカラチは不安だと言うので、僕より先に日本へ帰したんです。上の娘は倫子と付けたんです。二番目の娘は敦子。両方合わせて「倫敦」なんです。

股野 それは、それは(笑)。

菊地 そういうふうな説明をしますと、誰でもすぐ名前を覚えてくれる。

股野 それは覚えます。

佐道 パキスタンとかを見ますと、先入観で言っちゃいけないんですけど、どうしても例えば区分上は瘴癘地になるのかなあと。

菊地 まさに瘴癘地です。

佐道 やつぱりそうですか。生活環境的にはやつぱりかなり厳しい。

菊地 はい。その頃はまだ「瘴癘地手当」という制度は確立してませんでした。物価が安いし、人手をたくさん使えるということ、生活はそう辛いということはありませんでした。「アヤ」というのは乳母、子供のお守りですね。僕達のアヤはマドラス出身のカトリックの女性でした。この人は、代々ずっと日本人の家庭に仕えているというので、非常にいいお婆さんでした。それから、「チョキダール」という門番は、だいたいパタン族の人なんです。パタン族というのはバシトウンとも言う。彼らは白い大きなターバンを巻いてますから、パタン、バシトウンだというのは、すぐにわかりました。非常に精悍で背が高くて、それこそ門番に向いているんですね。ただ、喧嘩早くて、よくチョキダール同士で喧

嘩しているという話を聞きました。

【註】バシトウン族はパキスタン内では少数民族。多数民族はパンジャビーで、さらに南のほうはシンディという族がいる。いまのパキスタンの北西部州、バルチスタン州は独立前はアフガニスタン領だった。そこにはバシトウン人が多く居住する。一九四七年の独立時、イギリスはその二つの州をアフガンから取り、パキスタンにつけた。いまだに領土問題で、アフガンとパキスタンとの間にしこりが燻っている。最近、問題になっているタリバンは主としてバシトウン族であり、パキスタンの北西部、バルチスタンとは親近感がある。

股野 独立後間もないんですが、カラチで古きよきイギリス時代の名残りみたいなのは残ってましたか。

菊地 あんまりなかった。カラチというのは本当の瘴癘の地なんですよね。アラビア海には面してはいるけども、何にもない。メINSTロリートと言っても大したことない、駱駝がウロウロして、駱駝と車が衝突してたりする。そういう時代です。

あそこでは豚肉が食べられないでしょう。酒も飲んではいけない。ただ大使館内では酒を飲んでもいいと。だから、パキスタン人はわれわれのうちに来るとは酒を飲む。そういうことで親交が深まった。禁制のハムなんか、治外法権のところでは食べられますけれども、街では売ってない。

佐道 マトンとかそういうものですか。

菊地 マトンはいいんですよ。マトンが主です。

佐道 食糧が全般的に不足しているということはないんですか。

菊地 食糧は、一般の人はそう潤沢じゃなかったと思いますけど、われわれはある意味で別世界ですからね。

佐道 娯楽とかということになると。

菊地 娯楽はやつぱり「砂漠ゴルフ」ね。僕はその頃は麻雀はやらなかったけども、商社の人はみな麻雀でした。

その頃にいた民間の代表格の人は、富士製鉄の田坂さん、淀川製鋼の加賀(謹一郎)さんとかでした。日棉の三宅さん、江商のハジ伊藤。カラチに輸出組合の出張所ができた、有能な人材を派遣したということは、いかにカラチというマーケットが大事な

ったかということの証拠です。ちょっといまから考えると信じがたいですけどね。

本場にパキスタンという国は、後年、印パ戦争で「東パキスタン」(現在のバングラデッシュ)を失うなど、政治が悪く国全体が後退しているという感じがします。

■ イギリスの植民地統治に思う

佐道 さつき日本に対しては親近感というものがあると。英国などについてはどうですか。

菊地 その話は、パキスタン人に限らず、インド人も含めて、英国に関してはなんらの恨みとか、そういう感情を持っていないとは感じられませんでした。これは非常に不思議なんです。そういう意味から言いますと、こういうことを言っただけなのかもしれないけど、韓国に対する日本の植民地支配は僅か三十六年ですよ。イギリスのインド支配は二百年ですよ。それぞれの反応の仕方というのが全く違うのは不思議でたまらない。むしろ、台湾の人なんかの日本に対する反応が世界標準なのではないでしょうか。イギリスだって、インド人に対して「セポイの乱」(一八五七―五九年)とかで、かなり酷いことをしているわけです。

イギリス人の植民地政策で一つ汚点と思われるのは、イギリス人が例えばインドとか、ビルマとか、マレーだとか、セイロンだとか、タイも一時期そうなんだけど、その他アフリカとか、ああいうところで植民地行政をやる場合には、その地域の少数民族を、わざと支配階級(官僚)に登用したという事実があるんです。これが植民地独立後、政治・統治上、大きな問題を残しました。

あなたのご質問に答えると、イギリス人のインド統治がよかったのか、インド人の反応、対応が、平均的な、世界標準だったのかどうかという問題提起になります。例えば現在のマレーシアを

例にとっても、マレーシア人から、イギリス人に対する恨みというものを聞いたことがない。これも現在あまり知られていないことだけでも、東南アジアで、イギリス人にいまだに恨みを持っている国が一つある。どこか知ってますか。いまだにイギリスの悪口を言うことが、政治家にとってプラスになる国。意外なところですよ。

佐道 東南アジアですよ。シンガポール？

菊地 いや、ビルマ。いまでもビルマではイギリス人の悪口を言うのが喜ばれる。彼らは、イギリス人に対する恨みをいまだに持っているんです。それで、反射的に日本人に対して親近感を持っている。イギリスはビルマを統治する場合に、あそこの少数民族じゃなくて、少数民族で、異教徒のカレン族を官吏に登用したんです。それがいまだに尾を引いている。日本の韓国の植民地統治は、イギリス人の統治と比較してどうだったかとか、これに反応する側の比較研究をしてみるのも面白いと思います。インド人、パキスタン人は、いまだにイギリスを恨んでいるだろうというような、ある意味でウィットシユフル・シンキング(希望的観測)みたいなものを、日本人はみな持っているんじゃないでしょうか。実情はさにあらず。

佐道 別に私はそう意図したわけではないんですけど、いまだにいろんな関係があると思いますが、どういう感情のもとでやっているのかなということを知りたかったということです。

菊地 もう一つ、彼らインド人は喜んで英語を話すでしょう。韓国人は喜んで日本語を話しませんよね。それも大きな違いです。

井上 ちょっと質問をよろしいでしょうか。

菊地 はい、どうぞ。

井上 この時期に、日本はコロンボ・プランに入っているかと思うんですが、そのことについて何かご記憶のことは。

菊地 ありませんね。この前お話ししたと思いますが、一九五三

佐道 欧米一課に戻ってこられて、ガリオア・エロアのお話もあると思うんですが、その前に、ちょうど戻ってこられた時がいゆる日本では政変が起きましたね。

菊地 そうです。吉田さんが辞めて、鳩山さんになった。

佐道 長く続いた吉田時代が終わりました。鳩山さんになって、外務大臣も今度は重光さんが来られるという、かなり大きな変化だったと思うんですけども、まず、雰囲気的なところから、二年やって戻って来られて、外務省内部の変化というのをお感じになりましたか？

菊地 僕は下っ端でしたからよく判りませんでしたけれども、なんとなく重苦しい雰囲気にあつたような気がします。これは重光外務大臣という人の性格を反映したのかもしれないんですが……。

当時、省内の口さがない連中は、「外務省には御三家がある」と。それは谷正之さん、加瀬俊一さん、それから、太田一郎さんかな。そんなことを聞くと、ますます雰囲気に重苦しくなる。その頃、重光大臣は確か第一ホテルかなんかに陣取っておられまして、足の悪い重光さんを、身体の大きな秘書官の柳谷君が付き添っている姿を時々見掛けました。当時の霞クラブ（外務省記者クラブ）には、毎日新聞の安倍晋太郎なんかがいまして、あの長身で、外務省の廊下を遊弋していた、そんな風景でした。それ以前から、ガリオア返済の交渉が始まっていますし、安保条約の改定の話もそろそろ出てきていました。

外務省内の雰囲気ですけれども、五七年（一九五七）頃になると、藤山外務大臣で俄然パツと明るくなって、安保改定の交渉が始まる。これは外務省としては大仕事ですからね。これで全省をあげて、欧米局（五七年にアメリカ局になる）、安保課が中心となり、条約局と緊密に連絡しながら、安保条約の改定問題にとり組む。だから、在外から帰った当時の雰囲気と、後半の雰囲気と

はまるで違っていました。

佐道 そうすると、逆に言うと、昭和三十二年（一九五七）ぐらいまで、いわゆる重光さんのいられる時代までは、どっちかというと比較的重苦しい時代という感じになりますね。

菊地 そうですね。その間には、どういう事件がありますか。

佐道 バンドン会議から始まって、日ソ交渉で、二元外交と批判されたりとか、いろんなことをやっていますけども。

武田 重光訪米も。

菊地 重光訪米は、アメリカ側からあまり相手にされなかった、というような感じがありますね。鳩山さんが親ソ的な色を出したので、アメリカはあまり快く思っていない。したがって、そのアメリカを相手にしている欧米局というの、なんとなく居心地が悪いという感じでした。しかも、先方にはダレスがいて、日ソ交渉をあまり早く進めると、沖縄は返さないぞなどと言って、日本を脅かす。

佐道 さきほど御三家のお話をされましたけども、大使がご覧になって、その御三家の方々が果たしていった役割と言いますか、どういう機能を持っていたのか。

菊地 実際はあまりなかったと思います。ただ、口さがない連中がそういうことを言う。

僕は御三家にただ一度だけ接触があつたんです。加瀬俊一さんから、ある時、欧米一課から事務官を一人出せといってきたんです。それで、竹内春海課長が、「加瀬さんのところへ、君、行ってくれ」という。「なんですか」と言ったら、「なんかわからんが、とにかく、行け」という。そうしたら、加瀬さんが誰かアメリカの要人に対する手紙を、僕に英語で口述するんです。

武田 加瀬さんは、英語はお上手だったんですか。

菊地 彼の英語力はものすごい。ことに書く英語はうまい。

外務省の先輩には、書く英語のうまい人達がいまして。幣原喜

重郎さんがその典型。しゃべる人はたくさんいるんですが、素晴らしい英語を書く人というのは、数が限られていたんですね。大事な外交文書というのは、日露戦争あたりは、デニソンとかいうお備いイギリス人に書かせていた。もちろん原案は日本人が書くんですが、修文というか、文書をリファイン（洗練）するのは、外国人顧問にやらせていた。

欧米一課の話はこの次でいいんですか。

股野 ちょうど時間ですね。

佐道 具体的な中身のお話は次回ということ。

武田 一つだけいいですか。御三家の他、もう一人、木内信胤という方がいたと思いますが。

菊地 経済局関係ですね。

武田 そうですね。経済外交ということで、戦前、横浜正金（銀行）にいた方。

菊地 僕も知ってますよ。

武田 あの方もかなり外務省の政策とかに関与されたということですか。

菊地 そう思います。ことに、あの人は、占領末期に非常に活躍されました。経済局に総務参事官室というのがあって、総務参事官室には木内信胤さんがしょっちゅう来ておられた。われわれ事務官をよく集められまして、よくぶっつておられた。あの人は非常に優れた人ですよ。吉田茂さんとも親しくて。

武田 外為委員会の委員長。

菊地 外為委員会の委員長になって、あの人は本当に、世界経済、貿易、為替というものをわかっていた数少ない日本人じゃないですか。特に、戦前の為替というのを知っている人が、戦後はほとんど残らなかったことが、日本の戦後の経済運営にとって致命的でした。大蔵省なんかには為替のことを知っている人がいなかったんですから。そういう時に「正金」の木内信胤さん、というの

は非常に貴重な存在だった。彼は木内（昭胤）君（元駐仏大使）のおじさんです。信胤さんはその後、仏教徒懇話会の会長になりました、僕もお会いしました。ちよつと耳が遠くなっておられましたが。

武田 つい最近まで生きていらつしたんですね。

菊地 今度は、欧米一課ですね。ガリオア返済問題がありますから、欧米一課時代と在米大使館時代のちよつとぐらいですかね。どうでしょうか。皆さんの関心次第ですが……。

股野 武田さんが時代考証をして。

武田 さきほどの大使からもお話があつて、大使のお話は隅から隅までお聞きするというお話を、ガリオア・エロアのところは渡辺（昭夫）先生とインタビューをやられた時に少し大使は話されてるんですね。

菊地 そうそう。

股野 鹿島のそれは読んでどうですか。

武田 感想ですか。

股野 事実関係が。

武田 事実関係がわかるということでは面白いと思います。

股野 主として外務省でリタイヤした方々が、鹿島守之助さんがああいう懐の深いですから、受けられて、そして、好きなことをしてもらおうという時に、みんなそれぞれ書かれた。

菊地 それはずっと書いてますか？

股野 いま、どこまでありますか。

武田 七〇年まで行ってないかな。

佐道 行ってないです。六〇年代の半ばぐらいです。講和後の外交のところとか、そこらへんで終わっていると思います。

股野 六〇年代の半ば。

武田 終わりがらうまでは行ってますかね。そうすると、日韓国交正常化。

佐道 それぞれの国との関係回復というところは行っていると思

います。しかし、中国はないはずですよね。

武田 ないですね。

股野 執筆者は後ろに書いてありますか。

武田 章ごとに書いてあります。

菊地 それはインタビュ形式ですか。

武田 いや、これはたぶん執筆されたんだと思います。

佐道 いわゆるOBの方をリーダーにして、若い方々も。

武田 これはたぶん若い方も多いんじゃないでしょうかね。

佐道 私が名前を存じあげている方々もいらつしやいますから。

股野 まだ、現役の人達がその頃執筆していた。そういう機会も、

鹿島さんのところは与えていたんですね。

菊地 鹿島の話が出たけども、僕はいま鹿島平和研究所の理事を

しています。僕はこの前亡くなった中川融さんのインタビュをし

たんです。それがもうできているんですけども、一冊あげますか。

一同 是非。

股野 是非、いただきたいですね。中川さんは、われわれはし損

ねちゃったんです。

菊地 僕が平泉（渉）氏に頼まれてインタビュしたんです。中

川さんの次が、今度は僕がインタビュをされる番になった。そ

の前に井川元条約局長。今月の末に僕に回ってきたんです。イン

タビュアーは深田（宏）君の予定。中川さんのはあげます。

股野 井川さんのはありますか。

菊地 いやインタビュそのものがちょうど終わったぐらいで

す。

股野 私も鹿島に復帰しますかな。私も実は遠慮してたんです。

佐道 終わりましたら、是非。

股野 実は、昔は私はよく出入りしてたんです。守之助さんは同

郷の私の仲人なんです。

菊地 同郷って、岩手県？

股野 いえいえ、兵庫県なんです。養子で鹿島に来て。

菊地 養子で、采女さんのところへ行った。鹿島家は岩手県、盛

岡です。

（終了）

菊地清明

オーラルヒストリー

第6回
欧米局一課時代

開催日：2001年12月7日
開催時刻：午後2時00分
終了時刻：午後4時20分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

股野 景親（元スウェーデン大使）
佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）
武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ペンハウス 戸部芳珠子

■ 重光葵と吉田茂

武田 きょうは、大使がカラチから帰られて、本省の欧米局に戻られる頃からの話なんですけども、私は前回の大使の速記録を讀ませていただいて、一つ補足の質問があるんですけども、よろしいでしょうか。

菊地 どうぞ。

武田 私は重光さんの研究をしているもので、本省に戻られる頃に、ちよと政変があつて、吉田内閣から鳩山内閣に替わつて。

菊地 重光さんが外務大臣になつた。

武田 それで、私も研究しているので、なんとなくお人柄はわかっているつもりなんですけども、やはりちよと苦虫を噛み潰したといわれるような感じの方で、大使のご感想にもそういう雰囲気があつたということだつたんですけども、当時、外務省に吉田茂さんの権威というか、吉田さんのほうが外交官としては信頼できるんだ、頼りになるんだというような向きもあつたんでしょうか。

菊地 まあ、確かに吉田さんと重光さんというのはよく対比されます。それで、鳩山内閣で重光さんが外務大臣になつた時に、重光さんは、やはり吉田さんのアンチテーゼ的な態度を出そうとしたのではないか（重光は外務省で吉田の五期後輩）。それまでずっと吉田さんが非常に影響力を及ぼしていた外務省の人達にとつては、なんか同じ外務省の先輩だけでも、ちよととつつきにくい雰囲気を持った大臣というのがあつたかもしれません。それに、おっしゃつたように、重光さんは九州男児で、英語でいうと、ドゥーア（気難しい）と言うのかな、ちよとと重たいような感じの人に与えます。いちばんうまが合つたのは、加瀬俊一さんでしょう。加瀬俊一さんは重光さんの右腕でした。ほとんど代理みたいなことをやられて、例えば重光さんが訪米した時、五十四年（一

九五四）ですか。

武田 五十五年（一九五五）八月です。

菊地 訪米した時に、共同声明文などは、ほとんど全部、加瀬俊一さんが書いたんですよ（例のホワイトハウスの庭に遊ぶ「リス」の話）。ですから、お答えとしては、重光さんは性格的な面と、それから、政治的な面と両方から、若干難しい立場にあられたんじゃないか。もちろん日本が国連に加盟したのは、重光大臣の時ですから、そういう意味では、歴史に残るといふか、加えて、ミズリー号上で降伏文書に調印したということ、大きな歴史的な場面には立ち会つた人なんです。

武田 当時の政界では、もう一つ、吉田対反吉田というような対立の構図があつて、反吉田の筆頭が鳩山一郎さんで、重光さんもいらつしやつて、岸信介さんなんかもいらつしやつた。そういう政界の構図にあつたような感じで、では次に重光さんを担ごうというような雰囲気は、外務省のなかにはまつたくなかつたということでしょうか。

菊地 それはなかつたんじゃないでしょうか。この前から話している御三家などというものがあつて、外務省としては、なんとなく戦後のメインストリーム（主流）とは違うなという感じを持つていたんじゃないでしょうか。この点については、外務省では柳谷（謙介）君が重光さんの秘書官をやりましたから、彼の方がよく知つてはいます。重光さんのあの本はなんでしたつけ。

武田 『勇断の外相』は東郷さんですか。『孤高の外相』ですかね。

菊地 『孤高の外相』。やはり重光さんは、吉田さんのアンチテーゼということ、例えば占領軍というか、米軍にはなるべく早く撤退してもらいたいか、防衛費の削減とか、そういうふうなアメリカにとっては苦いこともいろいろ言つた。ですから、ダレスなんかは、重光さんに対してはあまりいい感情を持つてなかつたんじゃないかというような気がします。それは別に、重光さんが

悪いという意味では毛頭ありませんけども。

佐道 いまの問題にちよつと関連するんですけども、吉田さんに対するアンチテーゼとして、例えば鳩山さんがいて、その鳩山内閣で重光外務大臣というところで。

菊地 外交面でのアンチテーゼね。

佐道 そうですね。鳩山内閣においては、対ソ外交でもなんでも、二元外交だという批判が非常に強くあつて、鳩山さんと重光さんは、これもまた対立しているという。外務省としては、もちろん重光外務大臣を支えるというような立場だと思ふんですけども、世の上とかく二元外交批判みたいなことがずいぶん取り沙汰されて、いろいろ議論されたりということが当時あつたと思ひますが、そういうお話については、省内にいらつしゃつて、どういふふう。

菊地 重光さんが外務大臣である限りは、外務省員としては、あくまでも「時の外務大臣」をいただいて、とにかくその大臣の方針に従うということですから、外務省に関する限りは、二元外交はなかつたと思ひます。ただ、もしそういう印象を与えたとすれば、重光さんが若干個人的な功を焦つた感じがあり、鳩山プラス河野一郎というグループと対峙するようになった。これは非常に不幸なことです。ただ外務省に関する限りは、重光さんがトップで、その下に松本俊一（元駐英大使）さんが実質的なネゴシエーターとしてやつたわけですね。その下に外務省の条約局、欧亜局、ソ連東欧課はあげて応援したわけですね。

佐道 外務省のなかとしてはまとまつていたということだと思ふんですけども、一方で、やつぱり外務省の頭越しの形で、鳩山さんとか、それこそお名前を出されました河野さんとかがいろいろやつて約束をしてきたりという話がありましたけども。

菊地 例えば河野氏は漁業の面で……。

佐道 そうですね。外務省内部でも、そういう鳩山内閣の外交姿

勢、鳩山さんの手法に関しては、批判的な空気というのは高かつたんでしょうか。

菊地 僕にはわかりません。ただ、いまのように官邸に直結することとはなかつたと思ひます。新しい外務大臣が来たら、いかなる外務大臣であれ、その外務大臣のもとで働くという態勢ができてました。だから、その当時、僕は欧米局ですけども、対ソ外交は対ソ外交としてずっとやつていました。それで、実際に五六年（一九五六）に日ソ共同宣言までこぎ着けるわけですから。

武田 それから、もう一人、さきほど松本俊一さんや河野一郎さんの名前は挙がつたんですけど、この時、ちよつと防衛長官をやられてすぐ辞められたんですけど、杉原荒太さんという方もいらつしゃいました。これも外務省の出身者です。杉原さんなんかはどういうご印象だつたんですか。

菊地 あの人は、僕は直接存じ上げませんが、条約に詳しくて、政治的なセンスもある大変な切れ者だという評判でした。その頃は、曾弥益さんとかもいた。それから、あの頃で、歴史のなかに埋もれてしまつたかもしれないけれども、尾形昭二さん（大正十三年組）という人がいました。この人は外務省出身でありながら、社会党に入つたんです。

武田 終戦の時のソ連の担当をされておられた。

菊地 前回の記録に「当時の賠償問題と貿易振興問題は密接にリンクしている事柄だと言われています。しかし、大使のお話では、通産省と外務省とでは、認識が異なるということですよ」と書いてあります。これはちよつと僕の発言が舌足らずだつたんじゃないかと思ひます。僕が申し上げたのは、賠償問題というものは日本にとつてはそう負担にはならなかつた。中間賠償というものが後になつて放棄された。それに、役務賠償というのが基本ですから。日本の役務、あとから日本の生産もということ、賠償を払つたわけですので、そう日本経済には負担にならなかつた。負担にな

らなかつただけじゃなく、むしろアジア市場で日本の商品に対する馴染みを取り戻したというか、深めたというか、そういう意味もあつたということも申し上げたつもりなんです（牛場信彦、同意見）。ですから、その点に関しては、外務省と通産省の間には意見の違いはありません。ただ、僕が違いに言及したのは、いわゆるODA（政府開発援助）に関して、外務省は開発援助という観点からみるのに対して、通産省はできるだけこれを輸出振興にも結びつけたいという気持ちを持っていた。そこに若干認識の違いがあつたということも申し上げたつもりです。

■ガリオア・エロア返済問題

佐田 とりあえず、きょうは、欧米局第一課の時代ということもメインに、ですから、ガリオアの問題をメインにお話を進めていただきますと思います。

武田 前に、渡辺昭夫先生のインタビューに答えられたものがある。それを私も読ませていただいたんですけども、ちょうど大使が欧米局に入られた時に、ガリオア・エロア担当だということも伝えられるということでございますね。だいたいそのあたりから、お話を頂戴できればと思います。

菊地 日本の学者先生方は、ガリオア・エロアの返済問題に関して、大きな学問的な関心をお持ちだということは、よく承知しておりますけれども、興味の中心がどこにあるのかは、いま一つ僕自身はよくわからない。僕が最初に渡辺昭夫先生からそういう照会を受けた時は、おそらく先生方の最大の関心は、この問題が非常に秘密裏に交渉されたんじゃないかと。政府内でも、ごく上層部だけで決められたのではないかと、簡単に言うと、秘密外交の典型みたいなことで、その裏はどうだったのか、ということに関心があつたんじゃないかと思いますが、どうでしょう。

僕の認識では、ガリオア・エロアというのは一九四六年から五年ぐらいにわたって、占領軍が日本人の生活・福祉・厚生を援助したものだ。最初は、飢餓防止とか、食糧援助とか、衣料とか、そういう非常にベーシックな日本国民を救済するというものでした。その後、四八、九年からは、エロアという経済復興のための援助というものが供与された。それを合計してみると十九億ドルと二十億ドルの間援助してもらったということになっている。これは、本当に貧困と困窮に喘いでいた当時の日本国民には大変な助けになった。干天の慈雨とでも言えますか。日本国民は非常に感謝したわけです。

それで、感謝のあまり、衆参両院で、一九四七年にガリオア援助感謝決議というものを通した。その時は、おそらくこれが返済を要するものなのか、ただでもらったものかということ、よくわからないままだったんだらうと思います。感謝決議なんかをしたところを見ると、おそらく無償援助だと思つたかもしれない。ところが、現実には、一九四六年、最初の援助物資が到着した頃から、総司令部と日本政府との間で覚書が交換されていて、確かにこれは返済して貰いますよ、ただその返済条件については、後日決めましょうというふうになっていたわけです。

武田 そうです。

菊地 ですからアメリカとしては、いずれの日にか、なんらかの形で、幾ばくかのものは返してもらおうと思つていたわけですね。吉田茂さんはユニークな考え方の持ち主で、一九五一年当時、ジョン・フォスター・ダレス特使が講和条約の交渉のために来た時から、すでに「ガリオアは返します」ということを言っているわけです。ところが、これは吉田さんの政治家たる所以だと思つていますが、返すという話は、ごく政府の上層部の人、当時の池田蔵相とか、そういう人には話していたかもしれないけれども、一般にはあまり知らさない。だから、一般には代議士なんかも含めて、

これは払うべきものだという事は、なかなかわかっていなかった。

しかし、だんだん国会でも質問されるようになって、政府としても、一九五四年ぐらいからは、「ガリオアは「債務と心得る」ということを言明、その後も型にはまった答弁を繰り返してきた。つまり、日米間のパーセプション・ギャップ（認識の相違）、日本の上層部と一般国民との間のギャップがあるものですから、われわれ欧米局一課でも、ものすごく秘密裡に問題を扱っていた。それがまたマスコミの関心をかき立てたんだと思います。実際の交渉の本身は、その本（『戦後日本形成の基礎的研究』）にも書いてありますし、菊池努さんが非常によく調べています。渡辺昭夫さんも。僕なんか、下っ端でやってたことですから、あまり高等政策はわからなかった。

日米交渉について、一つ二つ印象的なことだけを申し上げます。交渉は、実際は五三年（一九五三）の池田・ロバートソン会談あたりから、本格的にアメリカ側から「払ってくれ」と言われて、それに対し、池田さんは「日本はいま賠償支払いなんかもあって、財政は非常に苦しい。日本経済も悪いんで……」というようなことで、なるべく引き延ばすか、ないしは、なるべく返済額を削減してもらおうというようなことで始まる。その間、外務省の欧米局第一課がやったことと言いますと、非常に事務的な話でして、まず、ガリオア援助に伴う日本の「債務額の確定」というところから始めたんです。十九億ドルないし二十億ドルという援助をもらったかもしれないけども、そのなかには腐ったものもあったんじゃないか。どうもろこしがだめだったとか、いろんなのがあったんですよ。ですから、そういうものの分まで払うのかということまで言いまして、本当のネット（正味）の債務はどのぐらいかということいろいろ議論した。それこそわれわれ事務官は、貿易庁かなんかにとってあった証票書類、つまり、受取証、これを調

べたりして、日本側は積み上げをやるわけです。それで、結局、いろいろやった末、アメリカの方は、「いや、そういう細かいことを言われても困る。何も全部払えと言っているんじゃないんだから、証票書類とか、そんなぎすぎすしたことは言わないでいいじゃないか」という。だけど、こっちはほうはなるべく減額したいあまり、そういうことを言う。最終的には、僕が担当した五五年の初め頃には、だいたい債務額は十四億ドルと確定していた。そのうち日本が払うのは、これは岡崎・アリンソン会談とか、武内・ウエアリング会談とかということがいろいろあるわけですが……。日本側の案としては、五・五億ドル、いわゆる岡崎第二次案と称するんですけど、こういうものが提案された。そういう段階で僕はこの問題を引き継いだ。

ところが、吉田さんが辞めると、後の政権は、全くガリオア問題に対する熱意は冷めてしまう。鳩山内閣で、重光さんが訪米した時には、ダレスに催促されて、これは今後とも協議していくと。しかし、結局、話がつくのは、鳩山内閣ではだめ。石橋内閣はあまりにも短命。岸内閣でもだめと、結局、吉田の保守本流である池田内閣になって初めて、この問題が決着することになるのです。そういう日本の国内政治と密接な関係があるんです。鳩山内閣とか岸内閣に言わせれば、これは「吉田マター」じゃないかというような感じがあったのかもしれない。それから、大蔵省としては、なるべく返済額は値切りたいと。その上、対外支払いの問題については、外務省にあまり容喙してもらいたくないというようなこともあり、秘密、秘密になっちゃうわけです。

しかし、最終的には、返済協定は五億ドル、マイナス一千万ドルの「四億九千万ドルを、十五年間で五%の金利で返済する」ということで妥結したわけです。その使途に関しては、いろいろ議論があったんです。日本側は初めから、返しはするけれども、その返したものは、また日本の海外援助に使わせてもらうという考

え方があったようです。それで、協定では、二千五百万ドルかなんかを日米交流計画に使う。あとは東南アジアの開発援助に使うというようなことになったのです。

ですから、ガリオア問題は戦後の五〇年代を通じた一つの大きな日米間の案件（十年交渉）ではありましたが、日本としてはうまい外交をやった結果になった。西独（西ドイツ）が援助総額の三分の一を払ったのに対して、日本は「援助額」の四分の一の返済で済んだと。しかも、西独からははるかに遅れて支払いを開始したということで、有利な交渉をしたということになるのじゃないでしょうか。

佐道 そもそも最初は、吉田さんの時に、大使がおっしゃいましたように、日本国内でも返済をしなきゃいけないということを知っている上層部と、そういうことを知らない人達との間の認識のギャップがあったと。結局、上層部だけは知っていて、返済の義務があるんだということを秘密にしていた基本的な理由というのはどういふことなんでしょうか。

菊地 それはやっぱり、国民の間ではもらったものだと思ってる人が大部分だし、もし払わなければならぬということになると——それを吉田は、進んで払うということを既にコミットしているということが国民一般にわかると、やはり吉田内閣の人氣に影響する。少なくとも、そう思ったんじゃないでしょうか。さらに、いわゆる井口・アリンソン書簡というのもあって、講和条約の前に、すでにこれは返済するということを約束している。それから、阿波丸事件の時も、阿波丸については、日本は対米請求権を放棄するけども、その見返りに、アメリカがガリオアに対する請求権を放棄するということはない、ということをやわざアメリカは念をおしているわけです。こういう日米間の秘密のやりとりが表面に出てくるのも困る、ということもあったのかもしれない。これは僕の想像ですが……。ただ、僕が渡辺先生のヒア

リングで話しながら、ちよつと矛盾を感じたのは、われわれは秘密、秘密と言うけども、ある段階からは日本政府は、これは「債務と心得る」と国会答弁ではつきり言ってますから、もう秘密でも何でもない。ただ次の段階で、では、なんぼ払うのかというようなことが、マスコミの興味を中心になった。かつて賠償額の決定がどのぐらいになるのかというのを、新聞記者が一生懸命、目を皿のようにして追いかけたのと同じく。ですから、われわれ欧米一課のなかには本当にぴりぴりしてました。新聞記者が部屋に入ってくると、ガリオアのことを聞かれるんじゃないかと。

武田 新聞記者は欧米局にまで来るといふことですか。

菊地 欧米一課室に自由に出入りするんです。そのなかに、この前も話した安倍晋太郎さん（当時毎日新聞記者）なんていう人もいました。

武田 それで、実際はどうなっているのかということを開いてくるわけですね。

菊地 そうですね。国会でも問題になるものですから、やっぱり取材に来るんです。

佐道 貿易庁の倉庫まで行って、証券を調べられたりとか、これは外務省の。

菊地 実際は通産省がやってくれる。

武田 菊地大使は協力というような形ですか。

菊地 協力というか、僕は担当の事務官ですが、そういう細部のことは周りの人がいろいろやってくれました。

武田 当時、貿易庁の倉庫というのはどこにあったんですか。

菊地 知りません（笑）。

佐道 もっとも基本的なところは、大使がおっしゃいましたように、例えばそもそも債務として返還するということが最初にわかっていたのかどうか、というところから始まって、具体的な金額がどのように決められていったのか、という交渉過程の問題です。

とか、非常に日米間の重要な案件でありますから、その具体的な過程が知りたいというところが、いちばん大きな問題だと思います。

菊地 それにつきましては、さきほどお話ししたように、岡崎・アリンソン会談、それから、武内・ウエアアリンソン会談とか、上層部でやっております。その後、愛知通産大臣や宮沢秘書官が、ワシントンに値切り交渉に行くわけです。それは吉田総理の訪米（一九五四年九月）のお膳立てで行った。吉田総理が現れて、「君達はアメリカから借りた金を値切っているそうだが、もうこれで帰りましたま。そんな余計なことはする必要はない」と言ったということが、宮沢さんの回想録に出ています。（宮沢喜一『美しい日本の挑戦』一九五頁）。

武田 東京、ワシントンの……。

菊地 ですから、そういう意味で、吉田さんという人は、返すと約束したものは潔く返せというようなことで、非常にはつきりしていた。ところが、大蔵省にしてみれば、「その金はどこから出すのですか。今、日本は賠償支払いも大変ですよ。海外援助もやろうという時じゃないですか」というようなことを言って粘る。

佐道 ちょうど吉田さんから鳩山さんに切り換わるところの昭和三〇年の頃が、一兆円予算というところで、非常に緊縮で厳しく。

菊地 あの頃、日本経済は悪かった。

■ 日米査証協定交渉

佐道 ちょうど同じ日米間の懸案として、防衛分担金の交渉というのが、まさに並行してなされていったわけで、あれも日本の防衛分担金をとにかく減らして欲しいというところではないぶん交渉が行われていて、かなり日米関係もぎくしゃくしたというところがあったと思いますけども、そういう問題も、かなり関連はして

きているんですか。

菊地 欧米局には安全保障課がありまして、そういう問題はすべて安全保障課の仕事です。最初は安川（壮）課長でしたが、次に、東郷文彦課長。そういう防衛問題、五七年（一九五七）頃から始まる日米安保条約の改定交渉、これは完全に安保課の仕事なんです。ですから、僕は知りません。欧米局一課というのは、一課という名前はいいんですけど、中身はあまりなかったんです（笑）。

武田 当時の日米関係の文脈においてみるとということですね。

菊地 ですから、ガリオア問題を除いては、あまり大きな仕事はなく、日常的な日米間の業務、いわば雑用をやっていたわけです。僕なんかは大部屋でしたから、隣の安保課が夜遅くまで残って忙しくやっているのがよく見える。あの頃、日米行政協定もできて、ジェラード事件なんていうのも起きたりして、忙しかったようでした。それに比してわが欧米一課というのは、庶務課みたいなものでした。その頃のこと、僕が覚えている事件では洞爺丸事件。一九五四年に青函連絡船の洞爺丸が暴風雨で遭難しまして、米軍人が何人か死んだ、これに対する補償問題。これはアメリカのほうの請求権というところで、これの交渉をしました（日本側の当事者は国鉄）。アメリカの補償関係の法律とかをいろいろ勉強しました。

その頃、日比谷公園のなかに「日比谷イン」という米軍用のレストランがありまして、そこで労働争議が起きたんです。米軍用の施設における労働争議。これはおもしろい問題でした。その他、日米加北太平洋漁業条約（一九五二年）の実施面とか、同じような北太平洋オットセイ条約とか、そういうものを扱っていた。これらの条約は、例の講和条約締結の半ば条件として結ばれたもので、その意味では占領の遺産とも言えるべきものでした。それから、BC級戦犯の釈放の申請を、一件ずつ総司令部に提出するという仕事。平和条約の十九条の日本人の民間の請求権。これは、一般

的に平和条約では放棄しているんですけども、戦争と関係のない、或は日本人が戦前連合国内に持っていた財産を回復するということです。それから、日米査証協定。その頃ちょうどアメリカではマツカラン法というのができた。時はまさに非米活動委員会のおおりで、アメリカが入国・移民を非常に制限した時代です。このマツカラン法というのは、アメリカへの就労のための移民をものすごく厳格に規制したんです。ですから、日本人もその頃はアメリカに渡航するのは大変でした。

佐道 その当時、かなり労働移民という形でアメリカに行こうとしていた人達もたくさんいたわけですか。

菊地 これは「労働」移民（いわゆる移住）ではないんです。日本の企業で、三井物産とか三菱商事とか、そういう商社の人達が、当然社員として渡航する必要があるでしょう。ところが、社員でも役付きの人にしかアメリカは就業ビザ（Hビザ）を出さないんです。例えば三井物産のニューヨーク支店の役員でなければならぬとかヒラ社員の長期滞在のための査証は出さぬか。ヒラの社員ならアメリカ人を雇えというのが先方の理屈です。そういう時代だったんです。僕はそういう時代を知ってますから、いま、アメリカがいろんなモノ、カネ、ヒトの移動の「自由」、「自由」とやかましく言ってますが、五〇年代にはこのような不自由をアメリカ自身がやっていたのです。また若干でも共産党歴があったり、左翼活動なんかをしていたら、もちろん入国拒否です。

一九五五年に、日米生産性協定（U.S. Japan Productivity Agreement）というものを、重光大臣とアリソン大使の間で結んだ。これは皆さん方もご存じでしょう。日本の企業家達が「生産性グループ」というものを結成してアメリカへ渡る。これは日本の実業家がアメリカの経済やビジネス、経営に直に触れた最初なんです。ちよつと数字を調べてみましたら、いわゆるトップマネージャー・チームで出ていったのが、合計四百チーム。のべ四

千人に達している。この派遣費用は、アメリカが対日技術援助（TCA）の一環として援助している。国内では「日本生産性本部」というのが青山にできたんです。郷司浩平さんという人が事務局長、中山伊知郎さんが理事（？）になってました。これが僕が担当したこと、のちのちまで続いた一つの日米協定です。

さつき触れた日米査証協定の締結については、僕は在東京大使館のミス・エリスという領事と交渉しました。この査証協定の下で、トリイ・マリーチャントとか、トリイ・インベスター（通商航海条約に基づいた投資家、商人）が認められた。そのトリイ・インベスターの第一号として渡米したのが、「なごや」の女将なんです。ニューヨークに「さいとうレストラン」というのを作っただけです。これがアメリカ（NY）における最初の正式な日本のレストランです。

股野 鳥料理屋で「なごや」というのが日本にあつて、それのおかみが斎藤さんという方なので、「さいとう」という名前でニューヨークでレストランを開いた。

菊地 これが日本の大臣とか代議士がニューヨークへ行くと、必ず行くところだった。池田総理なんかも、訪米した時は、必ずその「なごや」に行った。永田町付近に、「なごや」という鳥料理屋がありました。

武田 そうですか。知らなかった。

菊地 もうないかもしれないけど。

佐道 アメリカにいます。

菊地 今はそれが場所を変えて、国連本部の前の「青樹」という日本レストランになっています。僕も国連大使時代よく行きました。

佐道 ああ、そうですか。要人を連れていっても、おかしくないようなさちんとした。

菊地 もちろん。ジェニユインな（正式の）日本レストランです。

武田 もちろん当時はあまりないですね。

菊地 ないです。

股野 トリーティー・インベスター。

菊地 彼女の場合は。ところが、彼女の下で働く日本人社員というのに対しては、当時は、アメリカは査証を出し渋った。

佐道 そのお店の場合には、どうしたんですか。従業員とかはやっぱり現地で雇って。

菊地 一般の従業員は全部現地人を雇えとアメリカ側はいう。ただ、チーフクックとか、コックさんのうちでも上のほうは、「テクニシャン」と認めてくれる場合がある。アメリカ人の持つてない技術を持つていてという理由付けです。同様に、学者とか、科学者とか、世界的にも優秀な人には査証を出す。ですから、アメリカの入国の規則というのは、かなりアービトラリーな（恣意的）面があるのです。

佐道 そうですね。しかし、板長さんのような方と、支配人さんと、そのぐらいしか認められなくて、あと、手足になる人がみんな現地でということになると、本当に。

武田 料理の質も下がるんじゃないですか。

佐道 トレーニングを最初すごくしなきゃいけないでしょうね。

菊地 アメリカの領事部とか、本国の移民局というのは、そんなことには一切関心はありません。その頃は、まだアメリカでは、労働組合が、AFLECIOの強い時代でした。アメリカの理由というのは、下級の労働移民排除が一つ、もう一つは、共産圏の人々の排除ということでした。さて、僕はそういう時代の日米関係も知っています。マッカーシー旋風の非米活動委員会の時代のアメリカも知っています。ですから僕は、単純にアメリカというのは全く素晴らしい国だとも言わないし、逆にアメリカはだめな国だとも思いません。むしろアメリカという国は多様性を持った国であると。ですから、アメリカはこうだとか、アメリカの

政策はこうだとかいってきめつけてしまうのは、少しでもアメリカを知っている人だったら、あまり言わないのではないか。アメリカにはこういう面もある、ああ、こういう面もある、という言い方ならいいんだけど、アメリカはこうだというような断定的に割り切る言い方は、やめた方がよいと思います。自戒を含めて申し上げます。

佐道 アメリカはこうだとおっしゃる方は多いですからね。

菊地 多いです。賢しらに。

佐道 ジャーナリストなんかはどうだったんですか。

菊地 ジャーナリストは入れたんです。マスコミの力というのはどこでも強い。日米のマスコミ同士で、もしある日本の新聞記者の入国を拒否されたとなると、すぐ『ニューヨークタイムズ』とか『ワシントンポスト』に訴えるんです。そうすると、彼らが米政府（移民局）に話してくれる。そういう意味では、マスメディアというものは、どこの国でも力が強いですよ。

武田 少し話に戻りますけども、「日比谷イン」というので労働争議があつたと。これはあまり知られてないんじゃないでしょうか。

菊地 全然知られてない。その頃、欧米一課の雰囲気というのは、アメリカとの関係なものですから、なんでもかんでも秘密、秘密でした。あの時の欧米一課の雰囲気だけが違っていたのかどうか知りませんけど。

佐道 欧米一課はその当時、何人ぐらいいらつしたんですか。

菊地 十五、六人じゃないですか。

佐道 キャリアの方は。

菊地 キャリアは、課長、主席（谷盛規）、僕、あともう一人。宮川渉。後に大木浩ぐらいですかね。

佐道 「日比谷イン」で労働争議というのはかなり長くかかった？

菊地 長く続いたんです。待遇問題、首切りの問題でした。

佐道 米軍の施設なわけですか。

菊地 米軍の施設です。つまり、施設として日本側から提供しているんですね。

武田 従業員は日本人で。

菊地 経営者も日本人です。

武田 それじゃ、日本人の従業員が日本人の経営者に対して、待遇問題。

菊地 そうですね。ただ、影響を受けるのは米軍ですから。

股野 「日比谷イン」はどこにあったんですか。

菊地 日比谷公園のなかにあった。現在の「松本楼」がそうです。

股野 いまの「松本楼」が「日比谷イン」。

佐道 そうだったんですか。「松本楼」には何度も行っているんですが、全然知りませんでした。

武田 「松本楼」が名前を「日比谷イン」とした。

菊地 つまり、当時の言葉でいうと、米軍に「接収」されていた。

佐道 いつまで。

菊地 それはあまり長くは続きませんでした。欧米局一課という

のは、今までお話ししたような雑件が多かった。羨ましかったのは、隣の安保課です。安保課とワシントン大使館との間で——その当時、田中弘人さんという参事官がワシントンにいて——米國務省

は今度の安保改定についてはこういう考えを持っているとか、いろんな考えを電報（公電）で打ってくるわけですが、それはわれわれのところにも配布になりました。情報には接していましたが、

内容には携わりませんでした。防衛費の削減交渉とか、そういう話もノー・タッチです。そういう面に関しては、一つは安川（社）

さんの「忘れ得ぬ思い出」（「忘れ得ぬ思い出とこれからの日米外交」）とか、東郷文彦さんの『日米外交三十年』なんかは、実

際その交渉に当たった人達の記録ですから、参考になります。

佐道 ガリオア・エロアの問題にしても、さきほど大蔵省のお話

もされてましたけれども、大蔵省とは日々絶えず折衝もされてい

たわけですか。

菊地 折衝してました。その頃、大蔵省側は石野信一さんという人が国有財産局次長、森鼻さんという人が投資二課長で担当した。当初日本側は五億ドルを提案して、米側がそれではだめだ、少なくとも六億ドルだというところ、岡崎さんが吉田ワンマンのところへ行つて、「どうしましょうか」と訊ねる。吉田さんは「じゃ、五千万ドルを付け加えて五億五千万ドルで出せ」と言う。

佐道 雰囲気ということですけども、大使ご自身は二十九年（一九五四）に戻られるわけですよ。吉田政権のまさに末期と

いう雰囲気になるわけですけども、それで鳩山さんに替わった。前回の最後のところにもちよつとお話がありましたけれども、だ

いぶ外国に出られる前と戻つて来られてからは、外務省の雰囲気も変わっていたというお話もありましたけれども、対アメリカへ

の姿勢ということでも、さきほどの鳩山さんは、外交面でアンチ吉田テーゼのような形でおやりになるうと進めてこられたわけ

ですけども、アメリカに対する姿勢ということでも、だいぶ雰囲気

気が違うなあということはお感じになつておられましたか。

菊地 そうですね。岸内閣になるまではそういう雰囲気だったんじゃないですか。石橋内閣で岸さんが外相になりますね。あの頃

から、かなり変わったんじゃないでしょうか。

佐道 雰囲気としても、そういうふうにお感じになつておられましたでしょうか。

菊地 まあね。

股野 大使がパキスタンからお帰りになったのは、五四年（一九五四）の十二月ですね。その同じ年の三月に、MSA協定が調印

されている。MSA協定に関連しては、経済面で、MSAに基づくところの対日経済援助というものが、一つの重要な日本側にとつての関心事項だと言われましたが、このへんは何かご記憶はありますか。

菊地 これは期待外れじゃなかったんですか。ただ、経済としても、もし経済に「技術」を含めるとすると、これは僕は軍事関係で若干日本は受益したと思います。

武田 いま、戦後の外交記録が外務省の史料館で出ていて、股野大使がおっしゃったような記録も少し出ていて、まだ吉田さんの末期の頃に、まさにいまおっしゃったような問題で、MSAというのは経済復興のためにも使いたいんだと。吉田さんはそれをずっと言っていて、訪米する時にも、一度六月に行く予定でだめになつて、九月、政権が倒れる前に実際に行く時に携行資料というのがあつて、それをみると、吉田さんはまさに同じ問題で、これは技術だったら、経済復興のほうに使えるはずだという案をつくつてらっしゃいますね。

菊地 そうです。僕はその資料を知りませんけれども。

股野 大使がお帰りになつた時は、欧米一課に着任された時は、鳩山内閣になつてました？

菊地 僕は十二月ですね。

股野 まさに十二月。

股野 鳩山内閣になつた時に、欧米一課。じゃ、もうちょっと雰囲気違つたんですね。

菊地 僕の記憶では、一九五六年というのは、対ソ交渉が酣なんですよ。日ソ共同宣言がでる年ですから。ですから、そつちのほうに関心が向いていて、日米関係はさつきお話ししたようなことであるわけです。

■ペルー、ボリビアへ

—大統領就任式特派大使に随行

菊地 ここで僕が一つ変な役回りになつたお話をします。五五年（一九五五）の十一月から五七年（一九五七）の一月まで、時の

外務政務次官に森下国雄さんという人がいたんです。この人は岸さん擁立者の一派でして、岸さんが巢鴨から出てくる時に、岸さんを担いで日本再建連盟という政治団体を作つた。これのメンバーの一人に森下国雄さんという栃木県出身の代議士がいました。政務次官というのは、任期中、必ず外遊してもらつた習慣がある。森下政務次官は広く欧米諸国を歴訪するという外遊計画をたてる。僕は若い事務官として、随行を命じられた。この出張案件が閣議にかつたところ、時の河野一郎農林大臣が、この出張日程にクレームをつけたため、外務政務次官の海外出張は一回取り止めになつちやつたんです。

ところが、その年の十一月頃になりましたら、ペルーとボリビアの二カ国で同時期に新大統領の就任式があるというので、この大統領就任式に日本から特派大使を出すことになつた。これにはこの前外遊を取り消された森下政務次官が適任じゃないかということ、彼が行くことになつた。今度は中南米出張ですから、当然、中南米課の事務官で、スペイン語のできる人が随行するはずなんですけれども、前回のこともあり、課長が、「君、ついて行け」ということになりました。そのためには、一所懸命、即席でスペイン語を勉強しました。ペルーでは、ブラドール大統領という人が、ボリビアでは、エステンソロという鉱山労働者をバックにした人が、大統領になつた時でした。ボリビアでは、森下政務次官は移住協定に調印しました。その後、ボリビアには、僕は退官してから、一九九五年と一九九六年の二年にわたつて、横浜にあるITTO（国際熱帯木材機関）の派遣したアマゾン・ミッシヨンの一員として訪れました。これも何かの縁だと思つています。

佐道 その時以来ということになるわけですか。

菊地 その時以来です。ボリビアは、普通日本人はあまり行かない。標高三千六百メートル。首都ラパスは三千八百メートル。富士山よりも高い。それから、これはまったく余談になりますけれど

ども、森下政務次官とご一緒した時その一行に、さき程の日本再建連盟の領袖なものですから、この系統の人（武智勇記議員）がついて来たんです。われわれ一行は、ボリビアからの帰途、ニューヨークに立ち寄り、われわれを待ち構えていたのは永田雅一でした。そういう当時の岸派、河野派、そして、「永田ラッパ」なんていう人達も揃っており、これは当時としては大変な大名旅行になったことを憶えています。

佐道 何日間ぐらいですか。

菊地 全部で二週間ぐらいだったんじゃないでしょうか。

佐道 ペルー、ボリビアにはそれぞれ何日間ぐらい？

菊地 五日ぐらいずつですかね。

佐道 しかし、当時、日本からだと直行はないわけですよ。

菊地 ないですね。ロス経由で行きました。ロスとかパナマを通って行って、帰りは真北に上るとニューヨークに着くんです。

佐道 それで、ニューヨークに寄られて。

菊地 その後、僕は中南米には何回も行きましたけど、だいたい現在はマイアミ経由になりました。帰りはマイアミ、アトランタとか、ああいうところへ直行便が出ました。股野さんがいたアトランタとかですね。マイアミは現在中南米への出口になりましたよね。

■対米協調と日本の自主性

菊地 ちなみに五七年（一九五七）九月に、外務省は「外交三原則」というものを策定したんです。これは、われわれ外務省の者にとつては、一つのエポック・メイキングなことだった。日本戦後外交史における一つの注目に値する政策決定だと思います。これを実際指示したのは、時の大野勝巳次官。担当したのは斎藤鎮男総務課長。斎藤さん自身が執筆したと思います。この頃の雰囲気

気としては、ちょうど前年末に国連に入ったばかりなので、外交三原則の筆頭が「国連中心主義」、それから、「対米協調」、第三番目が「アジアの一員」ということになっています。これは当時の外務省内の考え方の最大公約数を表したものでないかと思えます。国連中心主義をいちばん最初に持ってきたところが、当時の日本の外務省の心意気というものでしょう。いまだつたら、おそらく対米協調というのがトップに来るんじゃないでしょうか。七二年（一九七二）の沖縄返還が日本の外交の一つの節目だと言いましたけれども、少なくとも六〇年代までは、日本の外交というものは、対米協調一点張りではなかったことだと思えます。

佐道 いまのは大変重要というか、おもしろいご指摘なんですけれども、七〇年代以降になって対米協調というのが、より強くなったということですか。

菊地 対米協調はずっと同じなんですけど、ただ、力点のおき所とどうか、優先順位とどうか、それはちよつと違うんですね。七二年ごろまでは、国家の主権独立の回復、国際社会の一員、諸外国と対等になろう、セカンド・クラス・シチズン（二流国民）でありたくないということ、やはり国威だとか、尊厳とか、日本の国益だとか、そういう要素が重要視かつ強調された。ですから、いわゆるアメリカの言うことならなんでもしようがない、なんでも聞くというような風潮ではない。日本の国益の観点から主張すべきことは主張する、その上での対米協調だったような気がします。それが七二年ぐらいまでの主流の考えだった。

佐道 対米協調という枠のなかで、日本の自主性を模索するということですね。

菊地 とところが、七二年以降になりますと、ほとんどそういうのは姿を消して、もっぱらアメリカに押しまくられるというか、防戦一方となる。いわゆるリアクティブ（反動的）な外交になる。

沖繩を返してくれ（しかも核抜き本土並み）というのは、リアクティブな発想ではありませんでした。言葉はあまりよくないかもしれないけども、オフェンシブな外交（積極外交）でした。ところが、沖繩の返還以降になると、オフェンシブ型・自己主張型・国益主張型の外交というのは、対米外交に関してはもう考えられない思考停止に陥ってしまふ。

佐道 その最も大きな理由というのは。

菊地 それは日本人のメンタリテイと関係がある。外務省も含めて、日本の知識層のメンタリテイと関係あると思います。日本はこれだけ豊かになってきた。もうアメリカと衝突する必要は全然ない。できれば、アメリカというものと一緒になって、ブレジンスキーが使った言葉を使いますと、アメリカの「プロテクトレート」（保護領）でもいいから、日本のこれだけの経済繁栄、高い生活水準を維持できるんなら、それでもいいじゃないかと考える。何を今更アメリカと事を構える必要はないじゃないか、波瀾を起こす必要はないじゃないか、アメリカとくっついてさえいけば安穩であるというような、消極的な、事なかれ主義の国民感情になってしまった。したがってアクティブな外交、積極的な国益主張型の外交というものは、その辺から崩れていったというのが僕の偽らざる感じです。

佐道 これは政治家の考え方も、外務省の方の考え方も、それから、日本国民全体も、そういうふうな形になったということですか。

菊地 そうです。ことに、いわゆる「反米」「非同盟中立」を唱えていた社会党が退潮してからは、もうアメリカをあからさまに批判したり、反対したりする勢力はいなくなつた。もちろん日本の国益に影響ない限り、アメリカと事を構えたり批判したりする必要はありません。だけど、我が国の国益に影響を及ぼす場合でも、また第三国との関係を悪くしかねない場合でも、アメリカが

言うのなら仕方ないといって譲歩してしまふというのが、いまの日本の状況ではないでしょうか。また八〇年代に見られた日本経済の優越的地位から、アメリカに対する「思いやり予算」なんていう発想まで出てくる。他方、シニカルな見方として、かつて椎名（悦三郎）さんが国会で社会党の「米軍の駐留をどう思うか」というのに答えて、「結局、あれは番犬のようなものでございませ」と言つたんです。そしたら、さすがの社会党も、「それはあまり酷い言い方じゃないですか」ということを言つたら、「言い直します。アメリカは日本の・お番犬様でございます」と（笑）。そういう風潮がいまや形を変えて、とにかく日本はこれだけ豊かになつて、これだけのハイレベルの生活をエンジョイしているんだから、アメリカにはカネを払つても番犬になつて貰つた方がいいのじゃないか、というような発想になる。

武田 いまのお話には、私は大変啓発されて聞いていたんですけれども。

菊地 しかし、そういう言論はマスコミ、言論界には出ない。

武田 出ないですね。池田、佐藤の時代というのは、吉田の亜流である。吉田は対米従属と批判されて、アメリカべつたりであるというような批判の仕方がありますけれども、そうでは必ずしもないという。

菊地 いや、沖繩返還要求なんていうのは、本当にポジティブな国益の主張です。あの頃、「核抜き本土並み」なんていう発想は、外務省内になかつた。時の下田次官なんかは「基地の自由使用を認める」というふうなラインで考えていた。外務省にすらないようなアイデアを佐藤総理が打ち出してきた。これは彼の暴虎馮河かどうかわかりませんが、やはり一つの見識だったと思います。その結果、いろんな「縄と糸」とか、ある程度のキャジュアルテイ（犠牲）は出たかもしれないけれども。返還交渉の歴史を皆さん方は勉強しておられると思いますが、事務的には最後までも

めたのは、アメリカが沖縄に残したいろんな施設に対して日本政府が補償する、という問題でした。これは、例えば日本が朝鮮統治時代に残したいろんな施設に対して、独立後の韓国に補償しろというふうなもんですよ。そういうふうなアメリカという国は、カネとか財産とかということになると、かなり「がめつい」ところがあるんです。これはわれわれ日本人は心得ておかないといけないことです。この考え方の本家本元は、米国議会（コングレス）です。コングレスの連中は、あの施設の後始末はどうした、この資産はどうしたと言って行政府を追及し、米国議会の承認しない経済的な負担は一切負わないというような考え方を持っているからなのです。

佐道 いまのお話の沖縄返還ということも重要なんですけれども、その前に、大使が欧米局にいらつしゃったのは昭和三十年（一九五五）ぐらいですね。五五から五六六年にかけて、その当時の沖縄で、アメリカ軍の土地収用がどんどん激しくなっていて、米軍基地を巡る沖縄での闘争がだんだん激しくなってくる状況があったと思うんですが、そういう沖縄の問題というようなことは、欧米局では、例えば情報を必ず取るというようなことはされていたんでしょいか。

菊地 知りません。

佐道 だんだん沖縄の反基地運動とか、島ぐるみ闘争とかが五〇年代の後半ぐらいから激しくなっていますので、日米関係のなかでも、沖縄をどうするかということが一つ懸案になっていくという状況があると思います。例えば沖縄に対して日本政府が援助をするとか、キャラウェイさんがキャラウェイ旋風という形で非常に厳しい向こうでの統治を行った方で、現地の相当厳しい反発があったということですが、そういうのをアメリカとしても、ケネディぐらいになるとだいぶ緩和するという話が出てまいりません。五〇年代、この当時、沖縄の問題について、外務省なりどこ

かケアしているところがあつたのかなということがあつて、ご質問したということだつたんです。

菊地 よく知りません。

■ガット加盟と日本

武田 昭和三十年（一九五五）に、日本はガットに加盟するということなんですけれども、大使はガット（GATT）の加入について何かご記憶はありますか。

菊地 ありませんね。

武田 国連に加盟するのも、ガットに加盟するのも、国際社会への非常に重要なメルクマールだったという。

菊地 そうですね。日本はガットには五三年（一九五三）に仮加盟して、五五年には正式加盟するわけですね。その前にはいろんな交渉をするわけですが、結局、日本はガット三十五条を援用されたままの加盟になってしまった。その最大の旗振りには、イギリスだったという話はこの前したと思います。これは、僕の持論なんですけど、よく日本では、「日本はガットの最大受益国だ、だから、ガットのケネディラウンド、東京ラウンド、ウルグアイラウンド、今度の新ラウンド（ミレニアム・ラウンド）では、日本は一所懸命旗振りをやらなくちゃいけない」ということを言うわけなんです。実は、そういうことを言うことは国民啓蒙上は非常にいいし、貿易・資本の自由化の方向に日本国民全体を引っ張っていくためのいいPRになると思います。けれども現実には然らず。日本はガットのお陰で非常に貿易を伸ばしたというよりも、少なくとも当初は「ガットにも拘わらず」貿易を伸ばしたんだ、というのが、僕の見方なんです。というのは、日本はガットで始めから三十五条を援用されて、日本はフルにガット法規上のベネフィット（便益）は受けられなかった。それでも、日本はこれほどの

経済大国・貿易大国になったんですから、日本に向かって、「お前の国はガットのベネフィットを最大限受けた国だ」と言われたら、当時のいきさつを知っているものとしては、納得がいかない。ましてや、こんなことを日本人自身が言うのは、事の真相を知らないのも甚だしい。これには外務省にも責任があるんですが……。

いまは、中国がその立場にあります。中国は、今回の加盟後、十二年間はフルにWTOの規定に定められている利益・権利を受けられないんです。ですから、ガットとか、WTOとか、グローバリズムというものは、そういう変なところもある「自由無差別原則」であるということをご皆さん覚えておく必要があります。

〔例〕アメリカの国内法、GATT-WTOに反する法律、スーパー三〇一条。米国の域外適用等。

佐道 ガットに加盟したということをお聞きになった時には、その当時はどういうご感想を持たれましたか。

菊地 いろいろ事前の交渉がありましたから。

佐道 時間の問題だろうということですか。

菊地 その頃、ガット担当は経済局国際機関一課でした。われわれの同僚の宮崎（弘道）君、手嶋（志）、溝口（道郎）と、いわゆるガット専門家が外務省に出て暮らんです。彼らは「ガット屋さん」と呼ばれ、国際的にガットの場合（ジュネーブ）で、大いに活躍した。僕も米国カナダ課長の時には、時々ジュネーブ出張して、その現場をみますが、ガットにおける日本の立場、ステータスというのが高いものでした。その後、僕と同期の大川（美雄）君がガット事務局にも入りました。

■ 鳩山、岸内閣の対米姿勢

股野 欧米一課の時、さきほどのお話のように、鳩山内閣になられてからお帰りになったということ、まさに鳩山内閣のもとで

の対米関係の窓口になられるわけですね。他方、鳩山内閣はいよいよ対ソ関係の打開に乗り出す。それからまた、中国について国内で何かしたいという向きもまた別にあつたと。そういう状況で、アメリカ側は講和条約にはソ連も参加しなかつたんだから、ソ連との関係打開については、日本側がすることについて異論は唱えない。他方、当時「中共」と呼んでいたところと関係を持つということについては、アメリカ側は反対と。こういうようなことで、アメリカ側との連絡を取りながら、対ソ関係の打開も進めていったと、ものの本に書かれているんですが、ちょうど欧米一課におられて、そういう点でのアメリカ側との話というものについて、何かお感じになったことはありませんか。特に、いままさに欧亜局が対ソ関係では前面に出る。中国については、当時は中共については、アジア局がいるんで、そちらとアメリカの側との接触というのが第一義的になるんでしようが、当然、欧米局、特に第一課はそういう点についても注意を払っておられたと思うんですが、いかがなものでしょうか。

菊地 その通りです。欧米局一課というのは、さきほどあまり仕事をしないで言いましたけれども、やはり対米窓口課です。そういう意味では、一課というよりも、当時の欧米局参事官の稲垣一吉さんという人、それから、千葉皓局長、こういう幹部を通じて、アメリカ側の感触というものは掴もうとしていたんだと思います。一つは、股野大使が言ったように、ダレスさんは、鳩山内閣の対ソ態度が気に入らない。あの時は、（アペリル・）ハリマン国務次官補は、日本が中共貿易を進めようとするのには、これを心よしとしない。「中国よりもっと東南アジアのほうに出たらどうですか」というふうな言い方をするといいことでしたから、確かにそういう雰囲気はあつたと思います。

ここで、これは公表していいのかどうかはわかりませんが、一九五六年夏頃だと思えますけれども、ダレス長官が「日本の北

方領土返還要求は支持しない」とか、あまり好意的じゃない趣旨の発言をしたことがあります。それが、時の鳩山・重光内閣にも、世論にも、ショックを与えた。それは石橋内閣になってからだったかもしれない。政府部内では「アメリカがどうしてそういうことを言ったんだ。真意を探れ」なんていう調査指示が出る。結局、アメリカ側も、「あれは真意じゃない」とか言って弁明して、うやむやになったんです。これについては、やはり日本政府からも一札、「こういうのはアメリカ側の真意じゃないと日本政府は了解する」というようなことを書簡で出したことがあります。知っていますか。

武田 多分、重光さんがモスクワに行って、そのあとにロンドンのスエズ運河の会議に出た時に、俗説で「ダレスの恫喝」と言われているものがあって、その時に、ダレスは「北方領土は支持しない。もし返すようだったら、沖縄はアメリカのものだったから、返さない」といって、いまのようなやり取りがありました。そのことかもしれません。

菊地 そう、それです。その時に、日本側から出す最終の書簡を、僕は千葉局長から起案を命ぜられた。僕は一所懸命ノートの草案を練りまして、最後に、僕はいまでも覚えているんだけど、「カレント・インシデントは、長い日米歴史のチャプターにおける一つのクローズド・エピソードとなることを両国は希望する」というようなことを書いた。そして、千葉局長はアメリカの二世ですから、非常に英語がうまい。彼がいろいろ手を加えてくれましたけど、最後の「クローズド・エピソード」（閉じられたエピソード）という語句はちゃんと残った。僕はそれをいまでも心の隅っこで秘かに温めています。

股野 いい表現ですね。

武田 英語の原文を探してみたいですね。

菊地 ありますか。

武田 あると思います。アメリカの国務省の文書に。

佐道 アメリカのほうに多分あるんじゃないかな。

菊地 次に、これは五八年（一九五八）ですけど、レバノン出兵があつたでしょう。知ってますか？ エジプトにナセルが強力に出てきて、中近東が非常に不安定になった。イラクのファイサル国王が殺されたりなんかして、中東が非常に不安定になりました。

股野 レバノンの騒乱は五八年五月からですね。

菊地 エジプトがシリアと合併して「アラブ連合共和国」なんかをつくった時です。その時に、アラブ連合がヨルダンとかレバノンに攻め入る危険が迫っていた。ヨルダンのほうはイギリスの権益だからイギリスが守る、レバノンの方はアメリカが守る、というようなことで、米海兵隊のレバノン上陸というのがあつたんです。その時に、日本政府は閣議を開いて、このアメリカのレバノン出兵を支持すべきか否かということを討議した。その時に、一時帰朝していた朝海駐米大使が閣議に呼ばれた。そして、閣議の雰囲気は……。藤山外務大臣かしら。

武田 岸内閣ですから、そうですね。

菊地 藤山外務大臣あたりは、どちらかというところハト派ですから、閣議の雰囲気は全体として、アメリカの行動は、日本は理解するけれども、それを前向きに支持するところまではいけない、というふうなことだった。これを聞いておつた朝海大使が、最後に口を開いて、「いまのアメリカ国内の雰囲気からみると、とても日本が支持しない」なんていうことを言えるような状況じゃない。日本はアメリカの危機に対して、批評家的なコメントをするような立場にはないはずだ」というような趣旨で、非常に現実論を展開したんですね。これは、その頃としては率直な発言でした。そして、なんとそれを支持したのが河野一郎（農相）だった。

ということ、その頃の日本の対米姿勢というものは、藤山さんのように、ある程度アメリカに対して距離を置く、対等ないし

は批判的な立場に立つという人達と、いや、アメリカのバイタル・インテレスト（重大利益）がかかっているというような時は、日本はアメリカをサポートしてやらなければならない、というふうな朝海式の考え方というのが両方ありました。朝海さんは岸さんの任命です。四十八歳の若さで駐米大使になった。この話をこの前しましたよね。

武田 まだです。

菊地 これは外務省の歴史のなかでも珍しいことなんです。駐米大使の戦後の経験者と言うと、吉田さんが民間から新木栄吉さんという日銀総裁を初代の駐米大使に任命した。その次が井口（貞夫）さん。その次が谷正之さん（大正二年組）。谷さんは重光御三家の一人でもうかなりの年輩でした。岸内閣ができ、岸さんがフィリピンに行った時、ちょうど朝海さんがフィリピン大使をしていた。岸さんは、そこで朝海大使を見込んだでしょう。四十八歳の若さで駐米大使に任命した。

朝海大使という人は非常に優れた人です。僕は、ロンドン大使館では公使として仕え、駐米大使館では大使として仕えました。その後、朝海大使につきましては、あとから出ると思いますけれども、彼には中国に関して必ず後世引用される名言がある。彼がワシントンのナショナル・ウオー・カレッジで講演した時に、「日本の駐米大使として最大の心配の種はなに」という質問に対して、彼は、「ある日、国務省から電話がかかってきて、『今回、アメリカは中国と国交正常化することに決定しましたから、ご承知おきください。いままでのご協力ありがとうございました』と言われること——。つまり頭越しの米中国交回復のニュースがいちばん自分のナイトメア（夢魔）だ」と答えた。彼は、戦後外務省が生んだ最高の逸材じゃないかと思えます。僕は、朝海さんは牛場（信彦）さんなんかよりもずっとキャリバー（器量・学識）が上だと思えます。ずいぶん脱線しましたが……。

武田 そういうお話も滅多に聞けないお話ですから。

■一九五〇年代後半の経済協定

菊地 この頃の時代的な背景としては、日本経済は非常に悪い。アメリカも三十五億ドルの国際収支の赤字ということで、ドル防衛に乗り出す。他方、EECが発足する五八年（一九五八）。だから、この年は多事多難でした。それから、外務省全体としての五〇年代の後半の大きな外交案件はやっぱり賠償交渉でした。五四年ビルマと、五六年フィリピンと、五八年インドネシアと、五年にはベトナムと、それぞれ賠償協定調印。その実施のために賠償庁というものが設けられました。外務省としてはアジア局を中心に、賠償交渉というのが非常に精力的に進められました。

佐道 アジア局の一課を兼任されているようですが、それでということですか。

菊地 そうです。これはまったく役所的な話で、僕はガリオア担当である。ガリオアというのは対外支払いの一種である。そうすると、賠償と同じじゃないかということ。対外支払い関係、賠償関係は一つの局でやってくださいということになる。

武田 乱暴な話ですね（笑）。

菊地 それで、僕はアジア局一課兼務になったわけです。そもそも日本の政府開発援助というのは、例のロンポプランに対する協力だとか、インド・パキスタンに対する円借款の供与が最初です。初めはアジア局のなかに、「アジア経済協力室」というのができたということで、最初はなんとなくアジア局がそういうものの担当になったんです。つまり、大口の賠償支払い相手国なんかを抱えていたものですから、結局、アジア局が中心になっていったと思います。

佐道 インドネシアとか、ビルマとか、個別にいろいろ交渉して

いくわけですよ。

菊地 ええ。

佐道 それに全体として大使は関わられたと。

菊地 いいえ。全く関わりませんでした。それは僕が単にガリオアを担当したということだけで、名目的にアジア局一課になっただけの話です。それから、もう一つは経済協力の関係では、アメリカとの間でさつき話した日本生産性本部設置に関する日米技術協力協定に関連し、TCA (Technical Corporation Agency) との交渉があつて、経済協力的な面にも頭を突っ込んでいたということです。

武田 大使は生産性協定にはかなり深くタッチされたんですか。

菊地 そのの立ち上げをやった。あの頃は、生産性運動というのは、アメリカから援助を受けるということですから、誰も反対できない。労働組合代表も含む生産性視察団、トップマネージメントグループで、アメリカに旅行できる。生産性運動というのは、労働強化問題だとか何とかということになって、総評あたりが反対し出すのは、その後です。事務局長の郷司浩平さんは、確か満鉄調査部の出身の人で大変な豪傑。この人に対しては、労働組合も頭が上がらない。中山伊知郎さんも当時の中央労働委員会の委員長ですから、これもまた組合側を抑えられる。生産性本部というのは、五五年(一九五五)三月に設置されて以来、トップ・マネージメント・チームの派遣は六二年(一九六二)まで続いた。いま日本生産性本部というのは、どうなっているかはご存じですか。

武田 いま、渋谷の。

菊地 渋谷に「社会経済生産性本部」というのになつていて聞いています。

武田 それはこの援助が終わつたあとですか。

菊地 ごく最近、九四年(一九九四)です。五七年には、有効期

間五年間の日米綿製品協定ができるんです。その前の一九五五年には、例のワングラマー・ブラウス事件というのが始まつて、このときから日本品の対米輸出が問題化する。その頃は、「集中豪雨的輸出」という言葉が出てきた。アメリカは占領中、日本に対して輸出を奨励しておきながら、その後対米輸出が伸び出すと、一転して、繊維製品を中心に米国市場を閉ざしていく、輸入制限というようなことをやる。それから延々と日米間には、繊維交渉というものが続々続きます。七一年(一九七二)の例の化合繊維協定まで。アメリカの繊維業界というのは、いかにプレッシャー・グループ(圧力団体)として政治的影響力があるかということがわかります。われわれはそういうことを知ってますから、アメリカは「自由貿易です」というようなことを言つても、現実には、アメリカ市場は「自由なところは自由、自由でないところは自由でない」と割り切る他ないんですよ。

佐道 日米の通商問題については、また、あとでいろいろたくさん出て来るとおもいます。

■ 政界出身外務大臣、その付加価値とは？

佐道 岸さんが訪米されますけれども、そういった問題については大使は。

菊地 もちろん北米一課は総理訪米関係の事務局ですから、僕はいわゆるペーパーづくりに関係しました。だけど内容的には、岸さんはガリオアにはあまり関心はなく、防衛問題、安保改定問題で精一杯ですからね。それで、安保問題のほうになると、隣の安保課の担当ですね。その頃の雰囲気はいまでもよく憶えています。東郷さん(安保課長)がせっせと足早に藤山外務大臣室へいく。それは、これからマッカーサー米国外使が大臣室に訪ねて来るんだというような慌しい雰囲気でした。

佐道 その雰囲気というところなんですけれども、藤山外相は財界人でいらつしゃって、それこそ外交の経験はおろか、政治の経験も持つておられない方ですね。本当のずぶの素人でいらつしゃって、そういう方が安保改定交渉にしろ、非常に重要な問題の第一責任者になられるというところで、外務省としても、もちろんその外務大臣を支えるということだと思っただけでも、藤山外務大臣については、どういう印象を持つておられましたでしょうか。

菊地 今流に言えば、「藤山外務大臣の付加価値如何」という御質問になるのだと思います。非常にもの優しい方で、実業家。ご承知のように、対中貿易に情熱を燃やされた。対ソ貿易にも関心を持つておられた。こと安保条約の改定とか、そういう政治外交問題になったら、特に御自身のご意見があるわけではない。あの時の外務省の布陣は、条約局長は下田（武三）条約局長、高橋通敏参事官、井川（克一）条約課長。安保課長の最初は安川（壮）さん、その次は東郷文彦さん。この人達が実際に交渉を担当した。その上に藤山さんが乗っかって、マッカーサー大使と交渉する。ですから、僕はいろんな本を読んでも、藤山さんがこういう意見を出したとかという話は不勉強で知りません。股野さんは何か知ってる？

股野 あまり私も。

菊地 藤山さんの付加価値如何ということ、これはおもしろい課題ですね。これは本には出てますか。

武田 出てないですね。

菊地 彼が果たした役割があるとすれば、外務省の事務当局、下田（武三）次官以下がまとめあげたことを対外的にプレゼント（提案）することでしょう。高橋通敏さんという人は非常に有能な人でして、この人がほとんど取り仕切ったんだと思います。その下に東郷文彦さんがいる。藤山大臣は対外的にプレゼントする

ほか、国内では自民党に売り込むとか、政治家に売り込むとか、社会党を説得するとか、そういう方面では大臣として活躍したんだと思います。

【註】 下田武三は、一九五二年から一九五七年までの条約局長、一九六五年から一九六七年まで外務事務次官を務める。高橋通敏は一九五七年から一九六〇年まで条約局長を務める。

佐道 別の側面からなんですけれども、外交というのは極めて専門性の高い仕事であつて、外務大臣という職ができて以来、幕末、明治維新の初期の頃は別として、基本的には外交官出身の方が外務大臣までお務めになる。例外的にそうでない方も戦前も何人かいらつしゃいますけれども、戦後も、基本的には吉田さんも岡崎さんも含めて、皆さん重光さんまでは、外務省の出身の方が外務大臣をおやりになるという伝統があつて、岸さんが重光さんのあとに外務大臣になったわけですが、岸さんは外交の経験はありませんが、昔官僚出身ということでもあつたんです。

菊地 外務省関係にもいましたしね。

佐道 はい。藤山さん以降は、あとずっといわゆる政党政治家がおやりになるというふうな形になっていくわけですが、外務省として、外交の専門として、外務大臣を支えなければいけない立場として、岸さんまではわかりませんが、藤山さんというような方が来られると、従来の外交と言いますか、外務省の伝統とだいたい違ふところと、例えば違和感をお感じになったり、大丈夫かなという不安をお感じになったりということはございましたか。

菊地 一般論としては、それはないと思います。おっしゃったように、確かに重光さんまでは、外務省出身者が外務大臣になったということですが、その後、政治家になったということは、戦後の民主主義政治からいえば当然の成り行きでした。これは外務省はなんら抵抗なく受け入れたんですね。戦後、外務大臣になった政治家をみますと、五〇年代の末までは、だいたい党の領袖、こ

の次の党の総裁、総理になるような人、換言すれば、副総理格の人が外務大臣になったんです。「実力者外務大臣」ということでした。外務省が外務大臣に期待することは、何も外交交渉などの実務を直接やらせてもらうということよりも、むしろ国内の説得、つまり外務省が立てた政策を国内でプレゼン特してもらって、いわばセールしてもらおう。河野農林大臣は交渉に行きましたが、それはどちらかと言うとテクニカルな交渉でした。外務事務当局が、政党出身の外務大臣に期待するのは、国会を通じ国内に外交政策をセールしてもらおうということに尽きると思います。大臣が、イニシアティブをとってやるのはもちろん歓迎ですけども……。

ただ、ある段階で変化が起きたんですね。ある段階から、必ずしも副総理、副総裁、次期総理心持ちという有力政治家でない人が、外務大臣になるようになったんです。ある意味で外務大臣の格が一段落ちたというか、そういう時代が来たんです。それは、僕は大平さんからじゃないかと思うんですけど、どうですか。

武田 大平外務大臣。

菊地 池田内閣の大平外務大臣です。その前は、小坂善太郎さん。小坂さんは、さうとう有力な人でした。大平さんは官房長官。その頃、官房長官というのは、いまほどの「格」はなく、閣僚（国務大臣）でもなく、閣内の地位もさう高くなかった。ただし、大平さんの場合は特別で、むしろ官房長官経験というバックグラウンドが非常に力になって、国内説得を非常に上手くやられた。総理総裁候補でない人でも、本当に実力のある人が外相として来れば、問題がないということですよ。

一九七〇年代の後半、福田内閣で鳩山（威一郎）さんが外務大臣になりました。彼は、参議院から来た外務大臣の最初じゃないですか。

武田 そうですね。

菊地 そこで、驚いたことは、政府委員として国会の予算委員会

などに行きますと、いままでは外務大臣というのは、予算委員会でも必ず大臣席の最前列に座る。あれは編成順と称して、総理、法務、外務、大蔵と、確か並び方が決まっているんです。ところが、鳩山さんがなりましたら、外務大臣が最前列にいない。ずっと後ろのほうに座っている。これは政治家歴が若いということと、参議院出身ということ、席順はぐんと下がっちゃった。これは鳩山個人とはなんら関係のない話ですけど、事実はその通りです。その後は、もうご承知の通り。田中真紀子外務大臣まで至るわけです。

佐道 そうですね。

武田 さっきの大平さんの話も、あとから考えると、大平さんはそのあと総理大臣になるわけですから、まだ有力者のままだと思えますけど。

菊地 そのとおりです。すぐにはならなかったという意味で申し上げます。

佐道 当時からすると、若い外務大臣ですね。

菊地 非常に若い。それで誰も期待してなかった。ですから、僕が秘書官になる時にも、僕が秘書官になるということが先に決まって、外務大臣は誰ですかと聞きました（笑）。

佐道 お仕える人の側から決まっていたと。

武田 逆に小坂さんなんかは、この当時は本当に有力者で、でもそのあと宏池会からも離脱してしまうわけですからね。

菊地 そうです。

佐道 そこは大平外務大臣の秘書官におなりになるところで、ちょっとゆっくり伺いたいと思います。

菊地 この次は、おそらく在米大使館の話ですね。

股野 その前に、鳩山内閣時代は重光外務大臣ということもあり、吉田茂さんの存在というのは、日本外交にとっても、あるいは外務省にとっても、距離が自ずとできていたと思いますが、岸内閣

になって、特に日米安保改定ということになってくると、吉田さんの存在というのがまた大事になってくるという時に、欧米一課におられて、当時の吉田さんの存在というのはどういうふうに感ぜられましたか。

菊地 衰えてませんでした。僕は欧米局一課にいたせいかもしれないけれども。重光さんは現職の大臣ですから、もちろん重光さんのもとで働くわけですけども、大磯の吉田茂首相の存在というのは厳然たるものがありました。その頃はまだ吉田学校の優等生達がみんないるわけですからね。そのあと、僕が小平さんの秘書官になって知ったのですが、その前から吉田さんは時の外務次官に対して、長い封書（巻紙）を寄越すわけです。それで、外務省のここがおかしいとか、これがいいとか、これはなんとかしろという書簡が来るわけです。ですから、僕は欧米局にいたせいかもしれないけれども、彼の影響力は全然衰えてないという感じを受けました。

武田 皆さんは、吉田さんの達筆は読めたんでしょうかね。

菊地 ええ、難しいんだよ。

武田 私も読めないです（笑）。

菊地 ソワイ（素直）というのが彼の雅号なんです。SYでしょう。僕は何回か吉田さんの書を見ました。

佐道 特徴のある字をお書きになる。

菊地 大平さんから、「おい、これ」と吉田さんの手紙を渡されました。

武田 確か宮沢さんの回想録に、読めないとみんなで吉田さんの手紙をみて、こう読むに違いないと考えたという記述がありました。

菊地 宮沢さんは漢学の素養もありますから、そうとう読めるほうでしょうけれども。

股野 外務省として、吉田さんとの連絡係というのは、例えば白幡さん。

菊地 白幡（友敬）さんとか、その前のもつと年輩の背の低いあとかから代議士に出た……。

武田 北沢。

股野 北沢直吉さん。

菊地 そう、北沢直吉さん。それから加川隆明。例の新聞記者に水をぶっかけた人。白幡友敬は外務省の昭和十二年組。田中三男（昭和七年組）という人はいちばん最初の吉田首相秘書官だと思います。この人もあとから代議士に出ましたけど、神戸で一回だけ当選したのかな。

股野 兵庫県ですね。

菊地 白幡友敬さんという人も福島県から出て、一回ぐらい当選したかな。

股野 白幡さんは選挙に出られたので、外務省で途中でいなくなられたんですね。北沢さんのように、当時そういう流れもあったんですね。外務省のキャリアで選挙に出て、吉田スクールの流れを政界においてまた続ける。

菊地 そのあとはもうなくなつたんですね。というのは、あの当時はまだ政界動乱の時代で、「一旗揚げ組」みたいな、この際、吉田さんの威光を借りて出馬しようというのがあった。いまはこれだけ世間が落ち着いてきますと、二世議員でないともう出られなくなりました。

佐道 時間になりました、ありがとうございます。今回はアメリカ大使館時代。

菊地 在米大使館と秘書官。

佐道 秘書官に入るぐらいで。

股野 在米大使館だけでもいっぱいかもしれませんがね。

（終了）

菊地清明

オーラルヒストリー

第7回

在米大使館書記官時代

開催日：2001年1月11日
開催時刻：午後2時10分
終了時刻：午後4時20分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

股野 景親（元スウェーデン大使）
佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）
武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■ 在米大使館時代

— 経済貿易担当書記官として

佐道 今回は、またアメリカ勤務の時代を中心に是非お話をいただきたいと思います。ちょうど質問項目の頭にも書いてありますけれども、アメリカに留学されて、海外も行かれて、また本省に戻られて、しばらくぶりのアメリカだということなんですけれども、戻られて、ご印象などからちよつとお話をいただければと思います。

菊地 僕は五一年（一九五二）七月にワシントン去つて、五八年（一九五八）の末に、七年ぶりに戻つたわけです。これは僕にとってはホームカミングみたいなものでした。昔からの友人がたぐさんいますし、願つてもないポストでした。昔のSAIS（高等国学問題研究院）時代の友人、その頃培つた人脈もあったので、非常に効率的に仕事をさせてもらいました。僕は経済貿易担当の二等書記官ということでした。ですから、ご質問のなかの安保問題とか、政治関係のことは全然タッチしませんでしたので、あまりお役には立たないのではないかと思います。

佐道 赴任された当時で、大使館の規模はどのぐらいになっておられたんでしょうか。

菊地 さあ正確に覚えてませんけれども、大使館は全部で本官は三十人ぐらいじゃないでしょうか。それから、現地雇い、いわゆるローカル・エンプロイーというのが二十人ぐらいいましたかね。ですから、当時としては、日本の在外公館としては最大ですけども、それでも大したことはない。例えばイギリスの大使館には何百人という。ソ連の大使館などは、十六番街にありましたけども、四階建てか五階建てのビルを持ってまして、そこには翻々とソ連旗を掲げていました。

その頃のワシントンの雰囲気ということですけども、五八年の末、実質上は五九年（一九五九）からですけども、五九年には大

統領選挙があつて、ケネディが当選した。ですから、僕はケネディの選挙運動の最中に行つたことになりました。その頃の一般的な社会情勢から申し上げると、向こうの言葉で「パーミッシブ・ソサエティ」（許容的社会）というんですが、なにをやっても許されるという社会時代なんです。非常に自由を強調する時代。ことに青少年が自由のあまりドラッグ（麻薬）、ポットに走る。マリファナを吸引する。クリントン大統領なんかも若い時にはマリファナを吸つたことがあるというぐらい。ですから、われわれ外国人は、確かにアメリカの自由で豊かな社会ということは非常に羨ましいと思いましたが、同時に、これでいいんだろうかというような感じを持ちました。そういうところに、ケネディ大統領が出てきて、六一年（一九六二）の大統領就任演説では、かの有名な「*Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country.*」（あなた方は国に求めるよりも、国のために何ができるかを問え）」と国民に訴えた。ケネディは、アメリカの社会と違うものをひとつ引き締めていこうというふうなことだったんじゃないかと思えます。あの頃のパーミッシブ・ソサエティというのが、二十年か三十年ぐらい遅れて、日本にやつて来たというふうな感じがします。六〇年代のアメリカを知っている者としては、最近の日本の世相というものは、あの頃のアメリカだなという感じは持ってます。確かアメリカでも、人権問題（シビル・ライツ）というのが盛んになって来たのは六〇年代ですからね。

佐道 アメリカに行かれて、お住まいになったのは。

菊地 僕はチェビー・チェイスのハイストリートというところに独立家屋を見つけました。その頃はまだ住宅手当という特別手当はなかったですね。だから、自分の給与の範囲内で借りられるところを借りました。アメリカ人とか、在留邦人、ことに新聞記者。ワシントンにはたくさん日本人の記者がいますから。そういう人達を自宅でエンターテイン（招待）するぐらいのことはできました。

佐道 現地に来てゐる日本の記者は、頻繁に出入りをするという感じになるわけですか。

菊地 そうですね。彼らとはよく付き合いました。

佐道 その後もお付き合いが続くような方はいらつしやいますか？

菊地 実は僕はそのあと六九年（一九六九）三月から、二度目の在米大使館勤務をしますけれども、その時には経済班長ですから、その頃のほうが、邦人記者との付き合いは多かったです。その時にいたのが読売新聞の渡辺恒雄君とか、日銀の副総裁になった時事通信の藤原作弥君とか、毎日の佐治俊彦君とか、NHKの磯村君、時事通信の田久保君、朝日新聞の原康君とか、それは各社とも錚々たる連中がいました。

佐道 お名前を伺ってもそうですね。

菊地 それから、朝日新聞が河村欣二君。不思議なことに、彼は二度とも一緒にワシントン勤務しました。彼はその後、フォーリン・プレスセンターの理事長になった。彼とは一高から一緒に、非常に親しかった。

佐道 ずいぶん偶然というか。前々からご存じのそういう方がいらつしやると、何かと心強いというか。

菊地 そうですね。その頃はやっぱり安保騒動の前後ですから、むしろ安全保障問題よりも、経済関係が大使館の任務としては、大きな部分を占めてました。新聞記者との接触も、僕なんか多かったです方じゃないかと思えます。

■ 対日輸入制限対策に走りまわる

佐道 経済貿易担当というのは、例えばアメリカの経済事情についての調査とか、研究とか、そういうことも一応。

菊地 それもやります。経済調査については、僕の時には経済企画庁から有名な後藤誉之助が来ていた。彼は僕の一高の先輩なも

んですから、親しくしました。彼はもっぱらアメリカの経済情勢の調査、報告というのをやりました。他方、僕のやったことは、もつと現場の生臭い話でして、当時盛んになりかけたアメリカの対日輸入制限のいろいろな動きに対する対応で、これが僕の仕事の八〇%ぐらいを占めていました。

このお話をちよつとしますと、日本は一九五五年からいわゆるワンダラー・ブラウス問題に象徴されるように、繊維製品を中心にした対米輸出が急増した。それがきっかけになって、アメリカの国内では、安い日本の製品が大量に入ってくるのは困るというので、輸入制限の運動が活発化し始めた。ちょうど五五年というのは日本では「神武景気」の始まりでした。五六年から五八年の間に、日本からの雑貨——当時われわれは雑貨と呼んでました——いまの言葉でいうと軽工業品ですね。これの対米輸出が急増したんです。資料的なことを申し上げれば、例えば合板の輸出は、一九五六年から五八年までの間に七倍、金属洋食器が十六倍。洋傘の骨が百三十倍というふうにも、ものすごい輸出の急増があった。それで、アメリカの業界もこれではかなわんということ所以对日輸入制限に動き出した。そのほか、当時、問題になった商品は、さつきから申し上げている繊維の他、陶磁器、体温計、注射針、それから、大きいものとしては鉄鋼製品ですね。ラジオ、これはトランジスタ・ラジオがちょうどできた頃。マグロ缶詰。絹スカート、玩具、そういうものでした。

佐道 体温計とか注射針というものも。

菊地 そういうものもです。それで、こういうもの、いわゆるレバー・インテンシブ（労働集約的）な商品は、アメリカはもう日本にかなわないわけです。それを現在中国がやっているわけですけれども、こういうものに対して、アメリカではエスケープ・クローズ・アクション（緊急輸入制限条項）というものに基づく輸入制限の提訴がなされるわけです。タリフ・コミッション（関税

委員会)に対して提訴される。僕の仕事は、まず、そういう輸入制限運動が起きそうになったら、それを事前に察知して、日本側に警告するなどの手を打つということ、現実に提訴されたら、今度は日本の業界に報せて、こういうのが提訴されるよと。これには通産省、JETROあたりが中心になって対応する。業界はワシントンにいる弁護士を雇って、タリフ・コミッションに提出するブリーフ(申立書)を作成することを依頼する。それを僕も手伝ってあげる。輸入制限運動というものに対策を講ずるのは、やはり日本政府の責任もありますから、彼らの協力をえて、米政府に抗議したり、タリフ・コミッションなんか意見陳述したりする。

その弁護士で僕が一番頼りにしていたのは、ビル・田中(ウイリアム・ハジメ・タナカ)という日系弁護士でした。彼は非常に有能で、大きなロー・ファーム(法律事務所)には属せず、自分でこつこつとやっていました。他方、半官半民的な組織として、一九五七年だと思えますけども、ワシントンに「日米貿易協議会」なるものをつくったんです。われわれはNBKと頭文字を取って呼んでました。日米貿易協議会は正式にアメリカの司法省に対して、ロビー活動のための組織として登録した。これの長はネルソン・ステイットという弁護士。それから、以前、国務省の日本部長をやっていたノエル・ヘメンディング(ガリオアを国務省で担当)、ビル・タナカは顧問というような形だったと思います。ただ、弁護士同士というのは、なかなか協力しないものですね。NBKで雇ったのが例のサイマルの村松(増美)君です。彼をリサーチ・アシスタントという肩書で雇いました。彼は、それまでは生産性グループのための同時通訳のプール、サイマルテーニース・インタープリターズ・プールというところにいたんです。(その後任が糖沢君)。

この輸入制限対策というのは、話せばきりがありませんけども、その頃のアメリカ政府、業界の態度というものについてちょっと

お話しいたします。その頃は、まだ日米関係では、大まかな言い方をすると、政治優先というような雰囲気があった。というのは、六〇年にはあれだけの安保騒動があつて、アイゼンハワー大統領の訪日が中止されるようなことですから、ある意味で、日本は「こわもて」というか、日本というのは難しい国だなというふうな印象を持たれた。同盟国であるけども、「デイフィカルト・アライ」だなというような感じを、アメリカは持ったのだと思います。ですから、アメリカ政府としては経済問題でさらに日本を追い詰めると、よくないという、いわゆるハイポリティクス(高等政治)が優先したと思います。そのお陰か、そういう輸入制限運動があつたり、エスケープ・クローズ・アクションに基づく提訴があつたり、アンチ・ダンピングの提訴があつたりすると、アメリカ政府の側、ことに国務省は、こういう経済問題で日米関係を悪くしちゃいかんというような政治的配慮が一つ働いた。もう一つは、まだその頃は、アメリカでは、「自由貿易」の原則というものが堅持されていたために、タリフ・コミッションの委員などは、われわれの眼からみても非常に公正な判断を下した。アンチ・ダンピングの担当である財務省のカスタムズ・ビュロー(関税局)も然り。ダンピング・マージンの査定に当たっては、アメリカの担当官というのは、僕のみるかぎり、当時は極めて公平だったという印象を持っています。

【註】アンチ・ダンピングのケースでいちばん問題になるのは、いわゆるダンピング・マージンの算出。どの程度ダンピングしているか。つまり、ある商品の日本における国内価格とアメリカに対する輸出価格との差である。このダンピング・マージンの判定に当たっては、ビル・タナカなんかは一所懸命細かい計算をするわけだが、それをまた査定するのが財務省のカスタムズ・ビュローというところの担当官である。これは職人的な細かい技術的な仕事である。

さつき言ったタリフ・コミッションの審決でも、日本からの輸出の急増によって、米国の当該業界に対して、インジュリー(被害)を与えているかどうか。つまり、ブルー・オブ・インジュリー(被害証明)というのが決め手になるわけですけども、関

税委員会は、「インジュリーなし」という公平な判定を、何回か下してくれたわけです。タリフ・コミッションに対しては、日本の業界代表がプレゼンテーションをやるわけですが、これに対してはよく耳を傾けてくれたと思います。

なぜ僕がこんなことをとりたてて申し上げますかといいますと、八〇年代、九〇年代に入ると、アメリカのやり方が輸入制限の必要性・ダンピングの判定には、インジュリーの証明は不要だとか、アンチ・ダンピングなんかも目茶苦茶に提訴してくるようになる。クリントン時代には、「結果主義」とか「数値目標」とかいうものが出てきます。これらに比べれば、当時アメリカは実に公平だった。本当にフェア・トレード（公正貿易）、フリー・トレード（自由貿易）の信奉者であるアメリカだなどというような感じを僕は持ちました。ですから、当時、僕はこういう仕事をしても、あんまり不愉快な感じは持ちませんでした。これがアメリカ式のリーガル・ファイト（法廷闘争）なんだと納得してしまいました。アメリカは、ご承知のように、なんでも法廷とか、タリフ・コミッションのような準司法機関に持ち込んで物事を決める訴訟社会です。

佐道 それはやっぱり当時のアメリカにはまだまだ余裕があつてということですか。

菊地 そうですね。余裕があつたんですね。当時、アメリカの経済は決してよくないんだけど、それだけ戦後の西欧民主主義国のリーダーとしてのプライドと責任感というものを、まだ強く意識していたんじゃないかと思います。

■アメリカの通商政策

―六〇年代と八〇年代の違い―

佐道 アメリカ側のカウンターパートといろいろ折衝される時に

も、いま、財務省とかも出ましたけども、国務省がメインになるわけですか。それとも、各省にわたっているいろいろ交渉したんですか。

菊地 アメリカでは、七〇年代以降になってUSTR（通商代表）というのが出てくるまでは、政府自体が、こういう問題に直接噛むことは少なかった。個別の省に係わる輸入制限的な動きを抑えるために、日米貿易経済合同委員会というのができた。そういう個々の輸入制限や市場開拓に対して、アメリカ政府が大々的に介入するのは、半導体協定に始まる。半導体協定とか一九八五年のMOSS協議のような、個々の業界、商品別の問題に対するアメリカ政府の介入というのは、まだなかったんです。

僕が経済担当外務審議官を辞めてからの話ですけども、中曽根内閣時代には、MOSS協議（個別市場協議）なんていうのが出てきた。この話を聞いた時は、僕は啞然としました。これがアメリカかと。アメリカというのは、通商拡大法とか、一般的な法律は制定するけど、各業界ごとの、個別の商品ごとと外国政府と交渉をするなんていうことは、僕は夢にも想像できなかった。あの頃、僕は大使で在外に出ていましたけれども、こういうのはおかしいんじゃないかと。アメリカ政府がこういうことで日本政府に要求してくるのはおかしいし、そういう交渉を受入れる日本政府、外務省もおかしいということの後輩の諸君に言ったんですけども……。

佐道 大使はSAISで勉強されて、それこそアメリカの国務省関係とか、そこらへんにも友人知人もたくさんいらつしやると思うんですけども、お話をされていても、アメリカがそれだけ大きく変わったというご印象なんですか。

菊地 そうです。アメリカが大きく変わったというのは、通商問題に対する国内の空気や政府の態度が変わっちゃったんです。五〇年代、六〇年代のアメリカの商務省などは、業界とコネクションを持つというところは、なんか変なことをしているんじゃないかと、むしろ疑われるような雰囲気でした。だから、アメリカの政

府はそれを意識的に避けていた。それが八〇年代（レーガン政権）に入ると、アメリカは輸出市場拡大の名において、個々の業界についてまでそういう官民の癒着は、「日本式」になっちゃった。これはアメリカの二百年の伝統からいえば大変な逸脱ですよ。日本の外務省あたりに、本当にアメリカの歴史を知る者がいれば、この点を強く指摘すべきだと思います。

アメリカ政府の通商に対する態度がなぜこういう風に変わったと思いますか？これはなんのことはない、アメリカの政府部内の権限争いから出てきているんです。一つにはアメリカの憲法の第一条八項でしたかね。この規定によつて、通商を規律する権限は行政府ではなく議会（コングレス）にある。それが一九三二年の互惠通商法で、行政府は関税の相互引き下げのための通商交渉をやる権限に限って認められた。但し、最終的な承認権は議会が握っている。そういうことでやって来たもので、アメリカの行政府としては、通商の権限を是非とも欲しい。しかし、それは議会は絶対承知しない。ところが、ケネディ・ラウンド（一九六一年）あたりから、ガット・一括関税交渉をやるために、政府がかなりの権限を持つようになって来た。そのへんから政府の介入が始まった。そこへ商務省が入って来て、商務省がタリフ・ネゴシエーションズ・コミッテイ（TFC）という民間の委員会を設置しまして、民間との関係をどんどん深めていった。日本の通産省を真似したのです。ところが、STR（特別通商代表）というものが、ケネディの時の六二年（一九六二）、通商拡大法で出来た。それがカーター大統領の時にUSSTR（ホワイト・ハウス）になって、USSTR、国務省、商務省の三つ巴の権限争議に発展した。争われた権限は何かというと、外国政府と通商に関して交渉する際どの省が主導権を握るかということで、三つ巴の争いが起こり、その格好の餌食になったのが、わが日本なんです。

僕がもし現役だったら、日本は断固こういうアメリカ国内の権限

争いの材料にされちゃかなわんということで、明確な交渉権限を持たないアメリカの政府部門との交渉には応じられないと主張したと思います。アメリカの政府は、その後はファースト・トラック（一括交渉権限）と呼ばれた制度を考案します。このファースト・トラックがない限り、アメリカ政府の代表と交渉したって無駄なんです。議会が合意事項について認めるか認めないかはまったくわからないからです。そういういわば最終権限がない当事者と交渉しているというようなことは、日本政府としては、いわばメッセンジャー・ボーイと交渉しているようなもんです。しかも、そのメッセンジャー・ボーイが三人もいて、お互いに対日要求を競争でエスカレートさせる。僕がいた当時は、アメリカ政府というのは、自ら内外に宣明している自由貿易原則というものを曲がりなりにも維持していた時代でした。そして、それがほとんど最後の段階だったんじゃないかというような気がしています。

佐道 次にアメリカに赴任された時には、状況が違ったわけですか。

菊地 もう状況は変わっていました。僕は、今回は六九年（一九六九）の三月にワシントン大使館に着任しました。その一月にはニクソン政権ができ、スタンス商務長官というものすごい人、ミツチエルという司法長官がいて、彼らはまったく圧力団体政治というか、特に南部の繊維業界にまったくコントロールされたような連中でした。もうその頃は、アメリカの通商政策というのは特定業界の保護、個別の商品の輸入制限の方向に動き出します。八〇年代になりますと、さらに個別の商品の輸出市場拡大政策に変っていくわけです。日本の新聞はこのへんのことを報道すべきですね。

佐道 そうですね。昭和三十三年とか五八年からの時にはそうではなかった時代なんですけど、日本の安い製品の輸入に対して訴訟を起こしたりというアメリカの業界のほうは、例えば日本の大

使館などに直接クレームをつけてくるとか、そういうことはあつたんですか。

菊地 それはいいです。彼らは今は日本の実情を知ってますから、日本大使館にクレームをつけてもどうにもならないことは知っています。別に占領中のように日本政府が貿易しているわけじゃありませんからね。

■ アンチ・ダンピング法問題

菊地 僕は、もっぱらアメリカのエスケープ・クローズ・アクシヨン（緊急輸入制限措置）という正面きった輸入制限方式のことを言いましたけれども、そのほか、アメリカが法律で定めている輸入制限の手段というのは、一つはアンチ・ダンピング法ですね。それから、対敵通商取引法（Trading with the enemy Act）です。

佐道 髪の毛を中国とか、そういうところから輸入している。

菊地 その通り。僕の工作上的担当は、通産省から来ていた原田明さん（一等書記官）が、当時、輸出の大概を占める繊維、エレクトロニクスを担当しましたので、僕はさっき言ったいわゆる雑貨と称していたもの、それから、アンチ・ダンピング法関係は全部。鉄鋼のダンピング提訴というのが、当時、僕が扱ったなかで大きい案件ですしたけれども。

佐道 鉄鋼は、本当にダンピングと言われるほど下げた値段で輸出していたんですか。

菊地 そうなんでしょうね。その頃は、対米輸出というのは大変な目がありましたからね。これはさっき言ったネルソン・ステイツトが、日本の業界の弁護士として対応していました。もしダンピングをやった、（ダンピング・マージンあり）ということになれば、被害額の三倍の税金を課せられるわけです。その他、関税法とか、バイ・アメリカン・アクト（アメリカ産品優先法）とい

う、国産品優先の法律。この法律で、国防省の入札に当たっては、八%のマージンまでは国産品を優先すると。つまり、国産品が八%高くても、それは一番札にするということですよ。

僕が扱った案件では、パナマ運河の閘門内で船を曳航するためのローコモティブ（電気機関車）の国際入札案件でした。僕の記憶が正しければ、それに日立系の東洋電機というところが、三菱商事と組んで入札に参加した。日本は一番札だったんですが、あれはGEだったと思いますが、ジェネラル・エレクトリック社が「これはバイ・アメリカン・アクトを適用すべきだ」ということで、国防省に訴えた。僕は三菱商事や東洋電機の人からいろいろ相談を受けて、ちようど三菱商事の弁護士チャールズ・マルドゥーンという人——占領中総司令部で財閥解体をやった——と協力して、国防省まで出掛けて行っていろいろかけあつた。結論としては、日本が勝ち落札できました。ですから、そういうことをみても、当時のアメリカ政府というのはフェアだったと思います。

武田 バイ・アメリカン・アクトが適用されると、関税も上がるわけですか。

菊地 関税は上がらない。落札できないだけです。国産品を優先するために、国内業者に八%のマージンを与える、つまり、ハンディキャップを与えるわけです。僕は、その関係でエリーのGEの工場まで見学に行った。そういうふうには、僕の在米大使館の経済担当の書記官としての仕事は、非常に充実していた。非常に現場的な仕事だったもんですから、若い者としては、非常に楽しみながら仕事をさせてもらったという気がします。当時、僕の属する経済班の班長は吉良（秀通）さん、その上に小川平四郎さんが経済担当参事官、その上に下田（武三）公使がいた。ある時、僕がある案件で電報を下田公使に上げたら、その電報が決裁されて返ってきました。下田公使というのは、電報の端にコメントを書くんです。それに、「好電報なり」とある。あの人は非常に人使

いがうまい人でした。そういうコメントをみると、部下もついはいきつちやう。

佐道 いや、実際にいい電報だったんじゃないかと思えますけど、下田公使が経済担当の公使でもあったんですか。

菊地 いや、公使は主要な電報は全部をみるんです。

股野 大使館のナンバー・ツー。

佐道 館務は全部。

菊地 ええ。いわゆる「特命全権公使」の公使ですね。

■ワシントンは「顔」と「コネ」の社会

菊地 それから、戦略物資のストックパイルの放出というのがありました。その頃はまだ戦争が終わって十五年です。アメリカ政府はまだ戦略貯蓄物資というものを大量に保有していたんですね。チタニウムとか、マンガンとか、そういう戦略上必要な希少金属なんです。それをアメリカとしては、戦後不要になったものから、市況をみながら徐々に放出するわけです。放出されると、世界の商品相場に大きな影響を及ぼす。その放出の時期を知ることが、日本の業界にとっても大事なことなんです。僕が米政府のリリース（発表）をもらって本省に報告するというふうなことをしたわけです。

佐道 戦略物資の放出となると、アメリカの所管は国防省ですか。

菊地 国防省だったと思います。

佐道 担当の方といるいろコネをつけたりして。

菊地 オフィシャル・リリース（公式発表）もありますけれども、事前にも情報をとる。ワシントンというところは一万人のロビイストがいますので、こういうのをリテイン（常備）しておきまして、彼らから情報を取るんですね。彼らは彼らで、各省に全部インフォーマントというんですか、そういうコネをつくってあるん

です。ワシントンというところは、もつぱら「ロビイストの世界」、「コネの世界」と言っても過言ではありません。

僕は経済担当の書記官として、かなりの数の弁護士と接触がありました。二回目の在米大使館勤務の時は、ニクソン大統領がもと居たロー・ファーム（法律事務所）とも付き合っていました。ロー・ファームのプレステージ（格式）が高ければ高いほど、高度な情報が入ってくるわけです。ですから、国務省から情報を取るよりも、そういうロー・ファームからの情報のレベルの方が高いという場合もある。ワシントンというのは、いかに「顔の世界」、「コネの世界」かということが判ります。

佐道 下世話な話になりますが、それだけ有力なロー・ファームとかだと、いろいろかかるものもたくさんかかって大変になるんじゃないかと思えますけども。

菊地 そうです。外務省の機密費というのは、まさにそのためにあるのです。外務省の機密費がそういうものに使われる限りは適法である。もちろん百発百中の効果は期待できませんが。

佐道 でも、そういうものですからね。

菊地 玉石混合ですが、やっぱり投資しなくちゃいかん。

佐道 さきほどお名前の出たビル・タナカさんとか、こういう方は、やっぱり前から日本大使館とは接触があつて。

菊地 ビル・タナカは、僕の行く直前に大使館で雇つたんです。彼のことを少し申しますと、彼はUCCLAの英文学部卒業なんです。そのあと、ロー・スクールへ入って弁護士になる。非常に優れた人で、ことにリーガル・ブリーフ（法廷申立書）を書くのがうまい。さすが文学部出身だなと僕は感心していました。彼は割と早く亡くなりましたが、当時、在ワシントン大使館にいた下田公使以下われわれは彼を非常に買っていたものですから、彼が亡くなる直前に日本に招待しまして、勲二等をさしあげました。僕はそれでもって、本当に日本政府は彼の功績に報いることができ

たなと思つています。

佐道 大使が最初にこのビル・タナカさんを採用されたというか、関係を持たれてから、それからずつとあとは。

菊地 ずつと。僕の後任の人もずつと彼に助けて貰ったと思いません。彼がいちばん活躍したのは僕の前後の七、八年間ですかね。その後は、さつきから申し上げているように、日米の通商問題・経済摩擦というのは、政府対政府、しかもハイレベル間の交渉の問題になつちやつた。これはおかしな話で、アメリカにはせつかくタリフ・コミッション（関税委員会、後の国際委員会）という準司法機関がありまして、民間業界同士の問題、民間貿易の問題はそういう機関で裁定するようになっていながらも拘わらず、今やアメリカの政府が直接乗り出してくる。USTRが出てくるというようなことで、八八年（一九八八）のオムニバス・アクト（包括通商法）以来、まったくアメリカ政府が外国との通商問題、市場開放要求交渉をやる恰好になる。

■日米の技術格差

菊地 その頃の雰囲気を示すものとして、日米業界の技術格差というものをみせつけられたんです。例えば日本の製造技術というのは、僕が最初に行つた五八年（一九五八）の末などは、とてもお粗末なものでした。日産自動車のフェアレディが当時いちばんいいとされていたんですが、フェアレディやトヨタのコロナ、ああいうのはまだアメリカのハイウエイを走るのに適さない。

武田 隔世の感がありますね。

菊地 日産とトヨタが宣伝のために、フェアレディとコロナを各一台ずつを在米大使館に寄付したんです。僕が行つたとき、大使館の庭に置いてありました。フェアレディは、「これは誰が使つてゐるの」と聞いたたら、「朝海夫人がセカンドカーとして使つて

ます」と。ところが、コロナのほうは誰も使っていない。「どうしたの」と言つたら、「これはもうハイウエイではとても走れない」という。ハイウエイで、九十マイル、百マイル出すと、車が家鳴り振動して（笑）こわいというんです。

佐道 大使はアメリカではどの車に乗つてらっしゃったんですか。

菊地 最初は、フォードのフェアレインというのに乗つてました。

これはいちばんホイールベースが長い。若い時ですから、キャデラックとはいかないけども、いちばんホイールベースの長い車ということで、フェアレインにしました。それほど日米間には技術格差があったので、アメリカの業界、ビッグスリーは、日本の自動車工業が今のように発展するなんていうのは全く夢想だになかった。

佐道 そうでしょうね。大使が担当しておられた雑貨類は、当時、よく言われる安かろう悪かろうというようなものだったんでしようか。

菊地 確かに安かったけど、悪くはなかった。だって、悪かったらアメリカ人は買いませんから。

佐道 技術の集積のような自動車とか、そういうのになると、まだまだ全然だめだけれども、雑貨類はそれなりの品質だったと。

菊地 労働集約的商品だからです。ただ、僕は金属洋食器というものはいちばん最初に取り扱つたんですけれども、その頃、三條とか、燕の業界の人々がワシントンまで大挙して来ました。僕もいろいろ事情を聞いたんです。燕の人がポツツと言いました。自分達が対米輸出している金属洋食器、ナイフとか、フォークとかで儲けるのは、これを製造する時の残つたおが屑みたいなものを売って、初めて利益が出るんですよ。それほど薄いプロフィット・マージン（利鞘）だったということは驚きでした。その後、金属洋食器が輸入制限を受けるようになってからは、いち早くゴルフクラブの製造に切り替えた。それで、いま隆々としているようですね。

股野 大使は経済担当の書記官ですが、前任者はどなたですか。

菊地 高橋正太郎さんです。

股野 後任は？

菊地 小杉（照夫）君です。僕が帰朝する時に、法制局参事官になるということを言われたんで、以前、法制局にいたことのある小杉君の話を聞いた覚えがあるから。

佐道 いずれにしろ、大使が行かれた頃に、急速に対米貿易が拡大をして、問題も多くなつたという。

菊地 僕の前二、三年前からですかね。五六年（一九五六）がよくベース（基準年）にされるんですけども、ワンダラー・ブラウス問題は五五年でしょう。五六年頃から、いろんなものが急速に出てきたんです。日本の業界も貿易実務に馴れてきたんでしよう。五九年（一九五九）十一月には貿易自由化の開始ですね（ただし自動車を含む本格的輸入自由化は一九六五年）。その年の一月には対米綿製品輸出自主規制が発表になっていきます。

他方、五九年の四月から、東京では安保改定交渉が始まっている。

佐道 防衛庁の海原氏などはよく接触は。

菊地 これはあまりありませんでした。あの人は僕の一高の先輩です。安川さんと海原さんは一高の同級生なんです。当時、防衛庁は盛んに在外公館に防衛駐在官（戦前の駐在武官制度）を出したいと希望していた。しかし、駐在官に制服組から出すというのは、社会党あたりから反対が出るだろうということで、文官である海原治さんを、最初の防衛担当の参事官としてワシントンに出したのです。

■ 訴訟社会、アメリカの実情

菊地 さつきアメリカの社会のことに触れましたけど、六〇年代

も後半になると、ポストモダンというか、ああいう反体制運動が起きた。と同時にアメリカという社会は、デュー・プロセス（適法な手続）ということを非常に重視する法治主義国家でもあります。悪い面は、訴訟社会。いわゆるリテイジャス・ソサエティだということ。われわれは米国の訴訟社会という面からは、エスケープ・クローズ・アクション（緊急輸入条項）なんかを頻発されて非常に困ったのですが、デュー・プロセスを経て、万事物事を処理するというところで——通商問題は全て関税委員会で裁定する、デュー・プロセスを重んずる国だなと感じました。

このデュー・プロセスは悪い面もまたあるんです。それはデュー・プロセスを踏みさえすれば、仮に悪いことでも、例えば国際法違反のようなことでも、国内法に規定があれば、アメリカ社会では許されるということです。いちばんはっきりしているのは、アメリカ法の「域外適用」です。域外適用というのは、アメリカの法律に域外適用の規定があれば、それは適用してよろしいと。つまり法律的根拠があれば、なんでもやってよろしいということになります。ですから、われわれは、バイ・アメリカン・アクト（アメリカ産品優先法）では、八%の（国産品優先率）を定めておきながら、日本が国産を優先すると、アメリカは「けしからん」と言う。「あなたのところには、八%国産品優先マージンがあるじゃないか」と言うと、彼らの言い分はなんと、「いや、あれは法律の明文で規定してあるから合法的なんだ」と。これがデュー・プロセスの一面です。彼らの言い草は、「As long as it's on the books」（法令全書にのっている限り）合法だと言っんですね。

日本がアメリカに対していろんな制限をしますね。これはアメリカ側から見れば、通産省の訳のわからない行政指導でやられるのはいかんけれども、もし日本がちゃんと法律で規制するならば、それも仕方がないというようになると思います。ですから日本はアメリカ輸入制限の動きを示した場合、輸出自主規制などはやら

ずに、不当な要求だと思ふ場合には、米国法に従い、例えば関税委員会（現在のITC）に提訴して最後まで争うとか、もし不当な判定があつた場合には、ガットで許されている報復措置をとる方が、アメリカのデュー・プロセスの精神には合致するのです。日本がそういう態度をとれば、アメリカの輸入制限運動に対する一つの阻止力にもなります。

佐道 法的なシステムの違いをうまくアメリカに突かれたという形ですか。

菊地 そうです。このことを日本人がもつと勉強しないとイケない。例えばスーパードール一条の問題が一九八八年に起きたでしょう。あの時、いろんな国がガットにアメリカを提訴したんです。その時、ガットがどう言つたかというところ、「この法律はアメリカの法律書に載っているだけなら、まだガット違反にはならない。それが発動された時にはじめてガット違反になる」という裁定を下したと聞いてます。アメリカとデール（交渉）する場合には、アメリカの法律観念の逆手を取っていくのも一つの方法です。アメリカが国内のデュー・プロセスを免れるために使つた一つの手は、日本品に対して輸入制限を課する代わりに、日本に対して輸出の自主規制を要求したことです。アメリカは法律的には日本に輸出自主規制は要請できないんです。もし正式に要請したら、アメリカ政府はアメリカの輸入業者から独禁法違反で訴えられるわけですから。つまり、日本の輸出業者がカルテルを結ぶことになるわけですから。それはアメリカの国内法である独禁法に違反する。そうすると、アメリカ政府は訴えられるわけです。それを避けるために、日本に「自主的に輸出規制をしろ」というわけです。日本政府はもちろんこのことを知っているんですけど、どうしても泣き寝入りになるとというのが、戦後の日米経済関係の姿ですね。

■輸出拡大と在米大使館

佐道 そうすると、アメリカへの輸出の拡大というのは日本にとつても非常に大きな流れであつたわけで、通産省とかは一所懸命やっていたんだと思ひますけども、一方で、輸出拡大に伴う問題も出てきて、確かにその後処理されていくんだろうと思ひますけども、JETROなんかもどんどんアメリカに当時も出ていって。菊地 はい。

佐道 そういう状況はよく観察していったんでしうか。

菊地 そう思ひます。ただ、少なくとも僕のいた頃のJETROの活動というのは主として市場調査でした。いろんな商品別の市場を調査する。例えば日本品が値崩れを起こしてますよとかいう警告は出すけれども、輸入制限対策そのものは優れて外務省所管だつた。外務省経済局ですけれども、外務省の予算で当時いちはん大きかつたのは輸入制限対策費だつたんです。輸入制限対策費といへば、予算はいくらでもついたという時代です。僕はそれの最先端で仕事ができた。

佐道 通産省から大使館には出向された方はいらつしやるんですか。

菊地 ええ、僕の頃から公使もいましたね。佐藤（清一）公使、それから、大畑さん、その前は松村さん。原田明さん。通産省はニューヨーク総領事館を相当重視してますから、そつちにもずいぶん出してましたね。歴史的に言うところ、大使館内で商務といへば元来、領事事務の一部でした。ただ、輸入制限問題という優れて政治的な問題になってくると、首都にいるわれわれ大使館で処理する方が効果的。

佐道 しかし、大使は輸入制限対策の最前線で、やり甲斐があるお仕事であつたとおつしやいますけど、鉄鋼なら鉄鋼とか、そういう一つにまとまるようなあれならやりやすいと言つてはいけな

いんですけども、それこそ雑貨という形でさつき伺っただけでも、あらゆるものがあるわけですね。それぞれに業界がまたいろいろ細かいのがたくさんあるわけですね。これはそれぞれの業界のなかのことは知るだけでも大変じゃないかと思うんですけども。

菊地 そういう面も確かにありました。けど、基本的には、業界の人々が直接ワシントンに乗り込んで来て、われわれのところにもいわゆる陳情という形でやってくる。彼らの話を全部聞きまして、われわれが国務省なんかに事情説明や交渉に行く時の参考にするんです。さつきから言っているように、現実の仕事は、業界がワシントンで雇っている弁護士がやるわけです。ですから、その弁護士とコンタクトをとり、必要があれば、僕はタリフ・コミッションのヒアリングに出席する。コングレス（議会）のヒアリング（公聴会）もあった。例えばソニーの盛田昭夫さんなんかも、ウィットネス（証人）としてこれに出たことがあります。僕はそういう人達のお世話をしたり、普段から情勢をウォッチしているということなんです。つまり、われわれは、いわゆるケプト・インフォームド、事情に常時通じていないといけない。時には関係の弁護士から、「菊地さんのコネのある国務省なり、タリフ・コミッションの委員なりに話してくれませんか」などと頼まれることがあり、動く。さつきのパナマ運河の牽引用電気機関車の国際入札の時のように。

佐道 しかし、それでも多岐にわたる。ケアをする時も大変だと思います。

菊地 そういう意味では、僕ははずいぶん雑学的知識が増えました。失礼、商品学の知識ですね。

武田 体温計とか、注射針とか。

菊地 ええ。鉄鋼とかね。もう一つ、僕はワシントンに本部のある国際綿花諮問委員会（ICAC）の日本の代表を永年やりました。これは国際商品協定の一つなんです、この会議は条例で

ワシントンの農務省でやるんですね。そういう意味では一かどの原綿の知識もええました。

佐道 アメリカで綿花の買い付けとか、そこらへんに。

菊地 それはやりません。国際商品協定というのは、消費国と生産国との間のある意味での生産協定、価格協定です。その時々々の生産の状況とか、消費の状況というのをにらんで、メンバー国がよりより協議して原綿価格の安定を図るという仕組みです。

武田 農林省の方も在米大使館に。

菊地 いました。所秀雄さんという人。この人はとても有能な人だったな。この人は在米大使館を辞めて、本省で、局長かなんかをやった後、わりと若くして辞めたんです。それで、なんと彼はアメリカにいる間に習得したプロイラー飼育技術を使って、日本で最初のプロイラー会社を始めた。

■ケネディ大統領就任式

佐道 さきほどちょっと当時の雰囲気というお話をされたんですけども、ちょっとその関連で申しますと、大使が赴任されたのは、まさにアイゼンハワー政権の末期で、それから、ケネディ政権に代るわけですけども、そのケネディ政権の誕生は、日本でも、それからアメリカのなかでも、非常にアメリカの雰囲気が変わったとか、それこそベスト・アンド・ブライテスト（優秀な集団）の時代という形でもいろいろ言われるんですけども、大使ご自身はケネディ政権になったということのご印象はどういうふうに感じておられましたでしょうか。それで、アメリカの雰囲気が変わったとお感じになりましたか。

菊地 はい。僕は六一年（一九六一）の大統領就任式をペンシルベニア・アベニューに立って実際にみました。その晩は、ポトマック河畔では花火大会。これはいまでもよく憶えています。就任式

のあと、ジョンとジャクリーヌがペンシルベニア・アベニューを歩いてパレードをしたんじゃないかな。それはそれは明るい希望にみちたアメリカだった。いま、あなたはアイゼンハワーからケネディへとというふうに言われましたけれども、実はあの頃の雰囲気から言うと、ニクソンかケネディかの選択だったんですね。つまり、一年前から選挙運動が始まるわけですから、アイゼンハワーはもう過去の人になっていました。それで、ニクソンが勝つか、ケネディが勝つかということでした。しかも、テレビ討論の最初で、結局、ニクソンは髭面のせいで負けたんだということに。佐道 ご覧になりましたか？

菊地 もちろん観ました。しかも、あれは僅差だったんです。今度のブッシュ対ゴア（二〇〇〇年）じゃないですけど。ケネディはセネター（上院議員）として前々から国政には非常に関心を持って準備もしていて、幕僚がたくさんいた。なんかやはり新鮮な空気が吹き込んできたというような感じでした。ですから、あの頃、共和党はニクソンを推して、共和党色を濃く出そうとするのですけれども、やはりケネディの方が優っていた。彼の、さつき言った国民に対して一段高いところから、「あなた方は政府に求めるよりも、政府に何ができるかを問え」というようなことを言える大統領。ただ、さつき言ったように、アメリカ全体としてはパーミシブ・ソサエティ的な社会になっていました。しかも経済はよくない。ケネディとしては、非常にやり甲斐のある挑戦だったんじゃないでしょうか。けれども、ケネディが就任してすぐ、例えばベルリンの壁ができたり、ベイ・オブ・ピッグズ（キューバ上陸作戦）の失敗でしょう。そういう意味では、彼はかなりはりきっていると同時に、緊迫した治政に踏み込んだということだったんじゃないでしょうか。

■ 大統領としてのアイゼンハワーを再評価す

菊地 さつきアイゼンハワーのお話が出ましたけれども、日本人のアイゼンハワー大統領に対する評価というのは、少し低すぎるんじゃないかと思うんです。例えばアイゼンハワーの訪日が阻止されたということ。もちろんアイゼンハワー個人に対する反対じやなくて、安保条約改訂反対、米軍基地反対の余波を食らったものですが、アイゼンハワーという人が日本人の間では高く評価されていません。僕はこれは非常に残念なことだと思いますね。アイゼンハワーは大統領を去るに当って、有名な産軍協同の弊害を警告しました。それから、これは僕はあとからもの本で知ったんですけれども、日米安保条約改定交渉で、最後までもめた「事前協議」に対して、日本側は「ノー」も言えると。つまり日本側の同意を要するかどうかという点で、国務省と国防省が対立した時に、最後に日本の同意を求めるべし、との裁定を下したのは、アイゼンハワーなんですよ。あなた方学者先生は知っておられるかもしれないけれど、一般の日本人はこれを知らない。

第三に、これは記録に残っているかどうかは知りませんが、亡くなった法眼（晋作）元外務次官のとおきの話なんです。岸さんが一九五七年訪米した時——例の、ゴルフをやった時のことですが、アイゼンハワー大統領が「ときになぜ日本では安保条約反対というのがあるんだ」と岸さんに尋ねた。そしたら、岸さんが「いや、実は日本国憲法の第九条というものがあって、安保条約反対が出ているんです」ということを説明したらいい。するとアイゼンハワーは「えっ、日本はあんな憲法をまだ守っているのか」と言った。つまり「あの憲法をなぜいまだに改正しないんだ」と聞き返したというんです。このことは日本人一般にはあまり知られていない。もちろんその前段もあるわけです。一九五三年、時のニクソン副大統領が日本に来て、「憲法第九条を日

本に押しつけたことは不明の至りだった」と。

佐道 五四年（一九五四）です。

菊地 五四年ですか。これもアイゼンハワーの考えに発するものとみるべきでしょう。アイゼンハワー元帥のように、実際に戦争を戦ったものだけの知ることですよ。アイゼンハワー大統領にして、マッカーサー元帥にして、敵となつて戦つた相手国の軍人というものは尊敬するんです。決して、相手の大将を処刑しろなどとは言わない。それは近代国家の軍人の間の掟てのようなものです。アイゼンハワーについては、やはり一言、日米関係史の中の一言として残しておきたい。それには若干のアネクトト（秘話）を交えれば効果があるんじゃないかというのが、僕の率直な気持ちです。

佐道 本当に大使がおつしやることはその通りで、アメリカでも、十年ぐらい前までアイゼンハワーの評価というのは、学会のなかでも非常に低かつたんですけれども、五〇年代の資料が開くようになりまして、アイゼンハワー政権の見直しというのが急速に行われました。アメリカの学会を中心に、アイゼンハワーというのは実はなかなかすぐれた大統領だったんだという見直しが行われました。それがアメリカであると、日本の学会のなかでも、「なんだ。アイゼンハワーというのは、外交を全部ダレスに任せて、ゴルフばかりやっていたんじゃないんだ。なかなか優れた大統領だったんだ」と、これは日本の学会でも、最近見直しが行われるようにいまなつてきたというところがありますが、一般にはもちろん全然。

菊地 それは非常に結構なことですね。われわれは、少なくとも外務省の者はこのことを知っていた。ただ、外務省はそういうことはあまり外に対して言わないんです。

佐道 そうですね。ですから、前々からご存じだったことは、やっとな学会のなかでは少し知られるようになってきたという（笑）。

菊地 その点、僕は外務省のPRは足りないと思いますよ。

佐道 でも、大使のように、どしどしこれからも言っていたただかないと、本当にこれからは。

菊地 といつても、われわれはもう先が短いですからね。誰も言わなくなるわけです（笑）。岡崎（久彦）君などは、今月号の『ボイス』誌で非常にいい論文を書いているけど。やつぱりわれわれも言わないと、永遠に歴史から消えてしまいます。五百旗頭とか、薬師寺とか、ああいう学者先生方、もちろん佐道さん、武田さんもそうだけでも、こういうことを掘り起こしてくれるということは、非常にいいことです。ただ、あまりにも遅すぎました。なぜ日本のマスコミがこれほど筆を折つてきたかと思うと残念です。筆を折らなかつたのは産経新聞だけ。

佐道 アカデミズムのなかでも、「アメリカが正しいと言うことは学者の恥である」みたいな雰囲気がありましたので、一時というか、かなり長い間、主流というか、メインにいらつしやる方々のなかにありましたもので、なかなかの言いにくいんです。

■大使の仕事とは？

股野 ケネディになつてからの話で恐縮ですけど、ライシャワーの起用ということについて、ワシントンではどうでしたか。

菊地 ワシントンというところは、ご承知のように一般的には出先の大使なんて全然問題にしないところですよ（笑）。日本は外国の大使をわりと大事にする、これに比べたら、ワシントンからみたアメリカの出先大使というのは、ほとんどゼロに近い存在ですね。これは、重要な大使ポストほど、ポリティカル・アポイント（政治的任命）を任命するからです。チャールズ・ボアレンとか、ジョージ・ケナンとか、ああいうキャリアの大物大使が行つている場合は、彼らの意見は聞くとお思いますけれども、ポリティカ

ル・アポインティーの大使なんていうのは全然。それだけに国務省の本省というのが大事なんです。ことに、国務省にいるエアリア・スペンヤリスト（地域専門家）というのが非常に大事です。冷戦時代は、国務省のなかのケナン、ポーレンに始まるクレムノロジストが非常に重要な役割を果たしたことは周知の通りです。

佐道 逆の問題で、大使がいらつしゃった時は、それこそ朝海大使でいらつしゃった。大使も、外交官として大変優れた方でいらつしゃったというお話だったんですけども、対国務省との関係とか、そういうことから、朝海大使の大使としての仕事ぶりとか、そういうものはどうでしたか。

菊地 大変優れておられました。時々、朝海大使は国務省へ行つて、国務長官、国務次官とか、国務次官補に会つて帰つてくると、本省へ報告電報を書く。それをわれわれ若手館員に口述、ディクテイトする。僕は二、三回口述筆記を取らされたことがあります。それは珠玉の電報でしたね。大使の「直電」——われわれはそう呼ぶんだけど——とはかくあるべしというような、会談の情景が非常にヴィヴィッド（鮮明）に判る。彼は内容もよく把握してますから、まともなロジック（論理）を使つて相手方と議論をする。余談ですが、アメリカ人はロジックが好きなんです。議論する人が好きなんです。ところが、日本人はあまり議論をしない。日本の外交官の役割というのは、「相手の言い分を正確に聞き取つて、これを正確に本省へ報告する」、これが役目のすべてであつて、その場で相手方を反駁したり、議論するのはその仕事ではない、というような思い込みがある。これには僕は抵抗を感じました。僕はその場でおかしいと思つたら、すぐ反駁することにしておりました。だから、さつき話した下田公使みたいに、菊地はちゃんと相手に対して言うべきことは言っているな、ということに認めて下さったんだと思います。そういう電報は割と少ないんじゃないのかな。どうですか、股野さん。

股野 大使の人柄、力量。

菊地 高度の政治問題になればなるほど、大使というのは自分の意見をあまり言つちやいかん、というようなふうに馴致されてしまつていきますからね。これは非常に残念なことです。だから、そういう意味では、日本の大使は一頃の共産圏の大使と似ている。

佐道 厳しい（笑）。

■ワシントンから見た日米関係

佐道 安保条約の問題については直接関係されなかつたということとなんですけれども、一九六〇年に安保改定というのがあつて、ちょうどその六〇年は、日本の政權も岸さんから池田さんにかわり、六一年には、アメリカもアイゼンハワー政權からケネディ政權にかわるという状況なんですけれども、ケネディ政權にかつて、国務省の対日セクシヨンの雰囲気は少し変わったとか、そういうことはございますか。

菊地 ケネディ政權でいちばん変わったのは、日米間に貿易経済合同委員会というものができたこと。これがもう決定的ですね。これでもつて、ケネディ政權の間、いや、その後の十一年間ぐらひは、日米の経済問題（その後経済摩擦と呼ばれる）が政治問題化することは少なかった。つまり、エクスポロジヨ（爆発）を起こさない、その素地を築いたのがケネディ政權だと思います。ケネディ政權の外交布陣というのは、まずディーン・ラスク国務長官ですよ。それから、アレクシス・ジョンソン国務次官補代理。ジョンソンは日本語もうまいし、非常に親日家で、フェアな人でしたね。それから、その下にポブ・バーネットとか、ディック・フィンというのがいて、言うなれば、戦前のグルー駐日大使時代の人達が国務省に陣取つているというように感じて、われわれ大使館員は付き合つていても非常にカンファタブル（快適）で

した。とにかく国務省へ行くことは非常に楽しいといっているが、本当に親しい友達に会いに行くような気持ちでした。あとからお話しますけど、加藤（匡夫）参事官はボブ・バーネットとしょっちゅう付き合っていて、日米貿易経済合同委員会というのを立ち上げたのです。

六〇年の安保騒動の後、アメリカは、やはり日本というものを、こわもてでもない、やんちゃ坊主扱いでもない。なんと言った方がいいか。何か「難しい同盟国」、ディファイカルト・アライという感じを持ってた。そういう意味で、日本との間であまり波風を起したくないと。だから、経済問題も、とにかく暴発しないように抑えるという感じだった。六二年（一九六二）の十月にはキューバ危機が起りますけれども、あの時でも、日本というものはほとんどアメリカのピクチャーに入ってますね。

よく僕は聞かれるんですけど、「あなたはキューバ危機の際、秘書官をしておって、日本の上層部、総理、外務大臣の間で相当の危機感があったのを感じましたか」とか、「どういうように日本は対処しようとしたんですか」と聞かれます。確かライシャワーが信濃町に池田総理を訪ねて来るんですよ。また、「ああいう時に、日本は事前にインフォームされていたかどうかと、よくマスコミは問題にします。アメリカ側からみれば、当時は、日本というものは、また世界的政治問題、安全保障問題に関する限り、ちよっと触らないでおいたほうがいいな、というぐらいの気持ちだったと思います。これは全く僕の推測ですが。」

日本国内では、安保条約改定交渉が大変なわけでしょう。ワシントン大使館では安保条約なんかに関しては、本省へせつせと情報を送ると。国務省のデイツク・フィンあたりはこういうふうに言っているよとか、そういう公式・非公式の情報をせつせと送る。当時はベルリンの壁の問題とか、金門・馬祖の砲撃問題とかいろいろあって、アメリカにとっては大変な危機の時期なんですよ。

けれども、日本は好都合にもその埒外にいた。池田内閣は所得倍増の一本槍。池田さんがライシャワーから、キューバ危機で「日本は是非米国の立場を支持してくれ」と言われた時に、池田さんは「承った」ということで、その後閣議を開くわけですよ。その後、池田さんが言ったと称せられる（伊藤昌哉談）、「やはり日本もこれからは軍事力を持たないかな」とつぶやいた、その程度の反応なんです。

股野 池田訪米について何かご印象はありますか。

菊地 六一年（一九六一）の。

股野 はい。

菊地 これはほとんどありませんね。ただその時に、確か池田さんがブレアハウスに泊まりました。それで、近藤荒一郎さん（池田さんの女婿）なんかが一所懸命やっているのを見掛けた程度です。あれはまだ池田第一次内閣ですから、六一年の話ですよ。

股野 六一年です。ですから、まだ小坂外相の時ですね。

菊地 あまり印象に残ってないんだな。あれは何をやったんですか。

股野 貿易経済合同委員会の設置をあそこで決めた。

菊地 ああ、ポトマック川の会議で決めたという話だな。

股野 イコール・パートナーシップということですね。それはそれなりの。

菊地 それとガリオアでしょうね。

股野 これはまた別の事業ですね。

菊地 六二年（一九六二）一月には、これに調印するわけでしょう。六一年に来た時はほとんど覚えてないな。何かほかに忙しいことがあったんだと思います。

武田 皇太子ですか。

佐道 皇太子は六〇年。ご夫妻で。

菊地 そうでしたか。ご成婚のあとね。ご婚約発表はいつですか。

佐道 発表は昭和三十五年（一九六〇）。

菊地 五八年にご婚約が発表になりましたが、その前に美智子さんがヨーロッパを回ってアメリカに来られたんだと思います。お一人で。知ってる？

股野 いや、ちよつと記憶にありません。

菊地 美智子さんがワシントンにみえた時、新聞記者が盛んに追いかけるもんで、美智子さんのスケジュールなどは秘密にしていたんです。朝海大使は正田家と同じ群馬県館林出身で縁続きなんです。それで、美智子さんを朝海大使の公邸にお泊めした。当時、われわれの仲間に大森（誠一）君というのがいた。大森家と正田家とは戦前、天津で一緒にいた関係で、大森君と美智子さんは子どもの時から知っている仲。それで美智子さんは大森君の家を訪問する。そういうことがありました。いよいよワシントンを発つ日、美智子さんがナショナル・エアポートから航空機に乗り込んだら、なんと隣の座席に一人の日本人が座り込んできた……。それが大森実記者。

股野 実のほうですね。

菊地 大森実。まさに大スクープでした。毎日新聞の大森実って知ってる？

佐道 ええ、もちろん。

菊地 ワシントンでは、彼は僕のゴルフの先生でした。さっきのご質問の朝海大使のご活躍ぶりですけれども、彼は本当にバックグラウンドもいいし、彼自身の能力も抜群。ことに彼が非常にソーパー（冷静）で、まっとうな大使だったということは、彼の名句がありますよね（前出）。このように、彼は非常に冷めた冷徹な頭脳の持ち主だったと思います。ああいう人が今後出て来ないと、日米関係の百年の大計というのは出て来ないんじゃないでしょうか。

股野 あともう一つ、当時、ハリマン國務次官補ですか。何かご

印象は残ってますか。

菊地 ハリマンと、大使館にいた間は接触はありませんでした。六二年に秘書官になって、大平大臣と共に訪米した時には、大平外相が会ったのがハリマン次官補でした。そのあと、もちろんラスクとか、みな会いましたが……。その時は武内（龍次）大使でした。アベレル・ハリマンというのは、ご承知のように、彼の父さんは東満洲鉄道を日本と共同運営したいということを出た、ユニオン・パシフィック鉄道の会長で大富豪のローランド・ハリマンです。アヴェレル・ハリマン自身も駐ソ連大使もやり、ソ連とは非常に親しい。彼はよくスターリンと話したと、ハリマンから直接聞きました。スターリンは、ハリマンのことをロシア語的に「ガリマン、ガリマン」と呼んで、ハリマンを苦笑させたと言っていました。

股野 これはもう秘書官になられてから。

菊地 秘書官になってからの話です。

股野 しかし、もう彼はケネディ政権発足してから。

菊地 六一年からなっています。

■草創期の戦後対米外交

股野 五〇年代の終わりから六〇年代の初めの頃の在米大使館を、一方において國務省、他方におけるホワイトハウスとの関係というものをみて、そのあと、もう一遍、今度は二度目にワシントンに勤務された時と比べてみると、当時はずっと國務省との関係が大きくて、そして、國務省というものが対日政策というものについて非常に大きな比重を占めておったところ、そのあとのニクソン政権時代になってくると、グッとまたホワイトハウスの比重が増してくるということがあったと思いますが、最初の経済担当の書記官でおられた頃の朝海大使を含めて在米大使館と

ホワイトハウス・スタッフとの関係というのはどうだったんでしょうか。

菊地 その頃は、僕なんかはロー・レベル（末端）ですけれども、参事官、公使レベルの安川さん、加藤さん、小川さん、海原さんでも、当時はホワイトハウスとのコンタクトというのはあまりなかったと思います。むしろ、僕なんかは猪突猛進の方で、さきほど言ったパナマ運河の機関車の入札問題に関しては、最終決定権はホワイトハウスだということをロビイストに聞いて、じゃ、ホワイトハウスにある担当者に会いに行こうと。チャーリー・マルドゥーンという三菱商事の弁護士がホワイトハウスの人を知っているというので、僕はホワイトハウスのエクゼクティブ・オフィスに会いに行つたことがあります。

武田 すごいですね。

菊地 実はアメリカ（ワシントン）というのは、そういうところなんです。二等書記官でも、一等書記官でも、アメリカ政府の要人に対するアクセスはあるんです。これはアメリカの非常にいいところですね。ただ、当時はやっぱりホワイトハウスよりは国務省ということでした。その頃のホワイトハウス、ケネディ大統領のスタッフは、まず補佐官がマクジョージ・バンディでしょう。それから、セオドア・ソレンセン報道官。大統領の右腕がロバート・ケネディ司法長官、というようなことで、ホワイトハウスには、どっちかという知日派というのはいなかった。事実、その頃ケネディ大統領の頭にあったのは、ベルリン問題、キューバ問題がらみのソ連であり、軍縮問題であり、ラテンアメリカの問題（進歩のための同盟）、ケネディ・ラウンドであつて、アジアとか、別して日本というものはなかなか視野に入つて来なかった。佐道 基本的に皆さんは大西洋のほうをみていらつした。菊地 ホワイトハウスの方はね。マクジョージ・バンディなんかもそうでしたからね。ですから、確かにあの頃は、二度目の僕の

勤務の時代（七〇年代始め）と比べて、ホワイトハウスというところは、なんかちょっと近付き難い存在のような気がしてましたね。

股野 そうですね。

菊地 それほど大使館がまだ人脈を開拓してなかったともいえるかもしれません。対米外交の最大の老舗であるイギリスなんかに比べたら、それはもう日本は遅れていました。ホワイトハウスとか、ベルトウエーのなかに食い込む、その食い込み方はちょっと少なかった。あの頃、日本はワシントンのロイヤル（弁護士）連中、高級なロー・ファーム（法律事務所）をやつと使えるようになったところじゃないでしょうか。ダレスのロー・ファーム（クロムウエル・アンド・サリバン）だとか、アチソンのロー・ファーム、次期政権の高官予備軍が雁首をそろえている超一流のロー・ファーム。それから、ブッキング・インスティテューションのような研究機関（シンクタンク）、そこには常時次期政権の予備軍がいる。こういうところへのアプローチが非常に大事なわけですが、そういうのを開拓ができたのは、六〇年代の末から七〇年代にかけてでしょう。僕が二回目に行つた時は、もう大使館とコンタクトのあるロー・ファーム、ロビイストというのはかなり増えていました。

股野 ですから、まだ六〇年代はじめは草創期の戦後対米外交。

菊地 その代わりと言うか、当時はまだ初々しさというものがあつて、アメリカの自由貿易とか、アメリカのフェアネスというものに対する僕らの信頼は高かつた。

佐道 確かに主権回復してまだ五、六年という頃ですからね。

菊地 そうです。

股野 またちょっと個人のことになりますが、吉良大使から加藤匡夫。

菊地 いや。吉良さんが経済班長、そのうえに加藤さんがいたわ

けです。吉良さんは一等書記官でしたから。

股野 そうですか。じゃ、加藤匡夫さんはもう一つ上におられた。

菊地 えー、吉良さんの後任が中島信之。僕は吉良さんと中島信之、この二人に仕えた。しかし、書記官というのはまったく独立行動隊ですから、一人で全部やる。ただ、電報だけはクリアすると。

股野 加藤さんについては何か思い出がありますか。

菊地 この次話しますけども、加藤さんは例の貿易経済合同委員会をつくったということで、彼は非常に活躍していましたね。彼は経済のエキスパートですから。彼がいなければ、貿易経済合同委員会は生れなかったんじゃないかと。

股野 ちょうどハーバード大学へ研修に行っておられて、それから、ワシントンに來られたですね。ですから、非常に張り切っ

ておられた。

菊地 非常に張り切っていた。ハーバード大学で経済協力なんかについての論文を書いた。それを僕に見せてくれました。加藤さんとは非常に付き合い合いました。ベセスダ・カントリークラのメンバーは、当時、安川夫妻と僕夫妻だけだった。よくウィークエンドには、うちから近かったので僕は女房を連れてゴルフ場へ行くと、だいたい安川夫妻がプレーしていました。ちなみに、アメリカでゴルフのプレーというのは、だいたい二人が原則です。

(終了)

菊地清明

オーラルヒストリー

第8回
大平外相秘書官時代 その1

開催日：2002年2月25日
開催時刻：午後2時05分
終了時刻：午後4時15分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

股野 景親（元スウェーデン大使）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■大平外相秘書官として

菊地 この前、何か積み残しがありましたか。在米大使館の陣容かなんかで。

股野 そうですね。加藤さんの話をさせていただいてですね。

佐道 今度のところで詳しくお話をいただくということになっていたと思います。

股野 日米貿易経済合同委員会ですね。

菊地 加藤匡夫参事官は、例の日米貿易経済合同委員会を実際につくった人ですが、その話はまだしてませんよね。

佐道 つくったというところはありましたけど、詳しくは。

菊地 前回、僕はちよっとはつきりしなかったんですけども、僕は在米大使館で二等書記官から一等書記官になったわけですが、

僕の前任者は高橋正太郎。彼は外務省でいう十八年組。

股野 高橋正太郎さんは、それから帰国されて安保課長になったんですかな。

菊地 そうですか。

股野 まだ課長になる前ですね。

佐道 それでは、きょうの秘書官のところをメインに。

井上 この質問表の順番でよろしいんでしょうか。大平（正芳）

外相の秘書官時代のお話ということで六項目が挙げられておりますが、一点目はいかがでしょうか。「外務大臣秘書官事務取扱」と

二つの役割の違いについて、私なんかは本当にこれを読んだだけでは区別もつかないんですが、これはいかがなんでしょうか。

菊地 テクニカリーに申し上げますと、われわれのような事務秘書官というものの正式の名称は「外務大臣秘書官事務取扱」というんです。政務秘書官がもう一人いますけども、そっちの方が正式の外務大臣秘書官なんです。ですから、ここにある「外務大臣

書記官事務取扱」というのはないな。

武田 あるいはこちらで調べたもので、間違ったのかもしれないですね。

菊地 正式には「外務大臣秘書官事務取扱」です。

武田 そうでしたか。失礼いたしました。

菊地 外務大臣には、僕のころは、政務秘書官一名、事務秘書官一名という体制でした。これはどの大臣からかはわかりませんが

れども、推察するに大平大臣が二度目に外務大臣になった一九七二年の頃から、事務秘書官が二人制になった。メインの秘書官とサブの秘書官ができて、例えば藤井君は大平外務大臣の秘書官

でしたけども、そのサブの秘書官として中本君がいましたね。

股野 そうですね。

菊地 秘書官二人制になったのは、どの大臣からでしたか。

股野 福田外務大臣（一九七一年）の時に、小和田（恒）秘書官がいわゆるシニアなほうの秘書官で、その補佐に、ジュニアの

ほうの秘書官としてベルギー大使をやりました兵藤長雄です。

菊地 福田外務大臣の時から、事務秘書官二人制になったというふうに考えていいでしょうね。もちろん最近、田中眞紀子外務大臣になって、四人か五人秘書官を命じたという、これはもうまったく前代未聞です。

佐道 日本外交が始まって以来の異例なことでしょうか。

菊地 日本外交が始まって以来の珍事です。しかも、最初の秘書官を首にしたり。

佐道 大使は事務秘書官になられたわけですけども、私どもは秘書官の仕事の内容とか、詳しいことは何もわかりませんので、

例えば朝から始まって、どういうふう具体的に大臣とご一緒されるのかというところまで含めて、お話をいただければ有難いんですが。

菊地 外務省では、大臣秘書官というのはどういうふう任命さ

れるのかというのは、案外皆さんは興味があるんじゃないかと思
います。その話をちよつとしていいですか。

佐道 はい。

菊地 外務省の場合は、外務大臣秘書官を推薦するのは、官房長
が次官と相談した上で決める。だいたい適当な年次の人、前の秘
書官と比べて何年後ぐらいのちよつどいい人、それから、もちろ
ん能力的にみても秘書官として適任であるというような人を選ん
で出すわけです。その場合、僕の了解する限りでは、外務省は特
定の外務大臣にべつたりになったりしないように、秘書官は中立
的な立場をとることを期待しているんじゃないかと思えます。僕
は詳しくは知らないんですけども、ほかの省では、かなりその
大臣の意向を汲んで秘書官を任命する。政務秘書官は当然、当該
大臣が連れて来るわけですが、事務秘書官のほうも、かなり大臣
の意向を付度して決めるといわれます。大蔵省なんかは、大臣秘
書官というものを出すことによって、ある程度、大臣にインフル
エンス（影響）を及ぼすというぐらいのことを考えているのかも
しれません。ところが、外務省の場合は、僕の経験からいっても、
比較的、中立的な人を出す。政治的考慮というのはなく、それこ
そ事務的に出すわけです。ただ、あまり政治的な感覚というか、
フレキシビリティ（柔軟性）のない人は、秘書官には向かないと
いうことはあると思えます。

外務省の歴史では、事務当局が指名した秘書官を大臣に断られ
たという例は、僕はあまり知りません。今度の田中眞紀子氏の場
合に、そういうのに当てはまるのかどうかは知りません。ただ一
つ、僕は、大臣秘書官に一旦なつて数カ月で交替を大臣から希望
されたというケースを一つ知っています。

僕がどういふ経緯で秘書官になつたかということをちよつとお
話しします。実は僕は一九六二年の六月でしたか、帰朝命令が来
た。最初は「お前は内閣法制局参事官の予定」ということだつた

んです。そうですかということ。僕は法律には強くないけども
ということ。一応準備として六法全書なんかをいろいろ広げて
みていました。ところが、直前になつて、「いや、お前は法制局
参事官じゃない。外務大臣秘書官だ」という。これは前にお話し
したように、僕の人事というのは、よく最初の内示と変わる。
「外務大臣は誰ですか」と聞いたら、「いや、まだ決まつたらん
（笑）。このことによつてわかるように、外務省というのは、当該
外務大臣の意向を聞いて秘書官を任命するというやり方じゃない
ということをはつきりしています。

帰つて湯川盛夫官房長に帰朝挨拶をしたら、「君は大臣秘書官
に予定しているが、大臣がまだ決まらないんで、国へ帰つて少し
静養でもして来い」と言われました。僕は仙台へ帰りました。第
二次池田内閣の組閣の最中でした。誰が外務大臣、つまり自分の
ボスになるかということで、毎日、目を皿のようにして新聞を読
んでました。その頃は、黒金泰美さんとか、宮沢喜一さん、そ
ういう人が下馬評に挙がつてまして、当時、官房長官だつた大平さ
んの名前は全然出ないんですね。最後に大平官房長官というこ
とに定まつた。湯川さんが僕を官房長官室へ連れていきまして、
「この菊地という男を大臣秘書官につけますので、どうぞよろし
く」と紹介したんです。そしたら、大平さんはただ一言、「君は
何歳か」と聞いたんです。僕は三十九歳から四十歳になる時でし
た。大平さんは僕の一回り上の戊午で、五十二歳でした。同時に
大蔵大臣になつた田中角栄さんが四十四歳ですかね。

僕はよくインタビューに「最初に大平さんに会つた時はどう
いう印象を持ちましたか」と聞かれるんですけど、その時、「僕
は正直言つてびっくりしました」と言うことにしています。とい
うのは、僕はずつと在外だつたものだから、大平官房長官とい
うのは新聞ぐらいでは知っていましたけども、全く面識はない。
受けた印象は、びっくり。つまり、大平さんのなんかどうか茫洋

たる風貌とか、そういうものに強い印象を受けました。

それが大臣秘書官になった経緯ですが、その時の政務の秘書官は岩倉淳一さんという人で、東北大学の工学部を出たエンジニア。彼はずっと大平さんの地元の世話をやっていた人です。同じ讃岐出身の人でした。

■秘書官の職務とは？

菊地 さて、ご質問の職務内容、秘書官の仕事ですが、秘書官は英語ではプライベート・セクレタリーというんです。このプライベート・セクレタリーという名称は、おそらく英国外務省に倣ったものだと思います。英国の外務省では、プライベート・セクレタリーというプレスティージ（名声）の高いポストなんです。プライベート・セクレタリー経験者が後々大臣になったり、首相になったりするというケースが多い。ただ、プライベート・セクレタリーというと、なんか身の回りの世話をする仕事という感じもですけど、この場合は、大臣の公私の行動のすべて、いわゆる秘書書類処理も含めて、大臣の身辺から職務に関することまですべてを補佐する。それは外務省内のこともありますし、省外のこともあります。ただ、やっぱりいちばん大きい仕事は国会との関係、国会答弁の準備——準備といっても、秘書官自身が自ら準備するんじゃないくて、各司々に連絡して、作成してもらおう。それを全部まとめて、大臣がダイジェストしやすいような形に整理して、大臣に提出し、かつ常時携行する。

外務大臣秘書官のいちばん仕事の時間をとるのは、僕の場合は、大臣随行でした。とにかく大臣の行くところは全てに同乗して行く。いろんな会議に出るのも、国会に行くのも、講演に行くのも、全部ついていく。大臣によっては、夜は秘書官を解放してくれる人もいるようですけども、大平さんの場合は、僕は全部夜のお

付き合いもお伴しました。時には大平さんは二つも三つも宴会をかけ持ちするもんですから、僕が大臣より先に行つて、「すぐ、大臣が参りますから」などというような役廻りもしました。

仕事のサブスタンス（内容）については、毎週火曜日と金曜日の定例の閣議案件の大臣に対するブリーフィングですね。そのためには、朝大臣の自宅まで行きました。僕の時はまだ大平大臣は駒込林町に住んでおられたので、駒込林町まで行きました。閣議案件を車のなかで説明をする。大臣はパラパラとみる、大臣の質問に答える、それから、局長から、「特にこの点は強調しておいてくれ」と言われたようなことは、特に丁寧に説明する。移動中はかなり大臣から話を聞くこともできますし、同時に、秘書官によっては、大臣にインプットするというような人もいます。ただ僕の場合は、大臣にインプットするということはなるべく控えるようにしました。専ら大臣の御下問には正確にお答えすることを心掛けておりました。

僕の場合、特異だったことは、大平さんという人は、自分自身が秘書官経験者なわけです。大物秘書官だった。大物秘書官経験者の秘書官というのは、最初は大変な緊張感がありました。大平さんという方は、戦前の確か小磯内閣の津島大蔵大臣の秘書官の時から始めているわけです。で、戦後、津島さんが東久邇内閣でまた大蔵大臣になり、また秘書官に。池田大蔵大臣の時にまた秘書官。その秘書官になった時に、彼の回想録に書いてありますけども、ちやうど四国かなんかに行つておつて、池田さんからの秘書官就任要請に対して、「心千々に乱れ決心つかず。暫くご猶予請う」という電報を打つたという話がありますよね。これは秘書官になれと言われて、ご猶予請うと言つた、ほとんど唯一の例じゃないでしょうか。だけど、池田さんは「なんだ。こんな電報をよこしたよ」とか言つて、そのまま任命しちゃつたらいいですけどね（笑）。そういう大物秘書官経験者の秘書官だということ、

僕も最初はずいぶん緊張してました。

大平さんは僕のことを比較的信用してくださいました。例えば大臣がなんか大事な会議に行くような時に、「おい、菊地君、あの資料を持ってるか」とか「この資料を持ってるか」というようなことを注意されたことは一度もありませんでした。ただ、一度だけ、「資料を持ってるか」と尋ねられたことがあります。それは内奏の時でした。内奏の時はさすがに大臣も緊張したらしくて、「菊地君、内奏の資料を持ってるか」、「はい、持ってます」。それだけでした。

佐道 大平さんという方は、よく有名なのは、「アー」とか「ウー」とかという話なんですけども、普段、秘書官を務めておられた大使などと会話では、ご自身から言ってくることも多いですか。それとも、会話のキャッチボールと云いますか。

菊地 いや、それはだいたいワンウェイ（一方通行）でした。秘書官というのは、むやみにしゃべって大臣をかき乱してはいけませんと心得ていました。だいたいご高説を伺う、という態度に終始しました。僕は、大平さんの考え方を極力理解しようと努めたつもりです。ただ、なんか誤解しておられるようなことがあったら、それはこうじゃないですか、ということは申し上げたことはありますけれども、ほとんど僕の方からインプットしたことはありません。というのは、大平さんという人は非常に複雑な人です。大平さんが、僕に期待するところは、せいぜい僕から外務省事務局の本当の「感触」を聞くことぐらいだったと思います。

佐道 秘書官のお仕事のこと、ごく単純な質問なんですけれども、ほとんど行動を車に乗ってずっと一緒にされるわけですね。最も重要な仕事として、外務省から来る書類とかいろんなことを取りまとめて、それを大臣にお伝えして、またその質問に答えたりするということがあるということだったんですけれども、単純に考えて、いつそういう書類を読んでいるのか。秘書官というのは

ご自身も書類に目を通して、質問に備えて、いろんなこともやらなきゃいけないわけですよ。ずっと大臣と一緒にされているわけですから、寝る間がないんじゃないかという気もするんですけども。

菊地 まあ、寝る間はありませんけども。ただ、大臣が大臣室にいる間は、僕は秘書官室にいるわけですね。その時は、大臣決裁文書の整理、次官、局長とかからいろんな連絡があります。その間は、一生懸命電報（来往電）に目を通す。在外公館からの来電が無数に来ますからね。大臣室まで上がってくるのは重要な電報だけですが、その中でも重要な電報だけを選びすぐって大臣に提出する。僕は重要な電報があれば、車のなかで、こういう電報が来てましたよ、と大臣にブリーフをする。

で、外務省というところはご承知だと思いますけれども、在外公館との間の電報の往復で仕事をしている役所なんです。在外から来る報告電報、請訓電報、情報電報、意見具申電報を読みこなして、それに基づいて情勢を判断し、具体的な政策を決定して、在外の大使に「訓令」を出すというのが、大まかに言えば外務省のファンクション（機能）です。だから、電信というものは、ものすごく大事なんです。外務省には「電報文学」というものまであると言われるぐらいです。外務省の電報のなかには、「秘」、「極秘」というのがある。それから、「館長符号」、「館長符号扱い」というのがあります。これは館長が自ら起案し発電する、また館長だけがみることが出来る電報です。発電の場合は、館長が自ら起案し、暗号に組んで出す。それから、館長符号で発電する場合は、館長しか持っていない略式の暗号書を使います。ですから、外務大臣に対しては、その「館長符号」とか、「館長符号扱い」という電報は必ずみせる。それから、来電を読んでいて、これは大使の「直電」（直筆）だな、と思われるものは必ず大臣におみせしました。

佐道 基本的にそういう判断は秘書官配慮というか。

菊地 秘書官の判断です。それがプライベート・セクレタリーの大事な仕事なんです。決裁書類は、もちろん全部通し、秘書官レベルで抑えるということはありません。来往電の数は膨大なものですが、重要な電報は必ずお見せする。ただ、大臣によって、電報をよく読む人と、あまり電報を読まない人がいるんです。で、大平さんはどっちかという後者でしたね。だから、僕が一所懸命代わりに読んで、大事なところはメモを取って、車のなかでブリーフする。大平さんの場合は、一つ非常に事務当局にとつてよかつたことは、昼食には幹部食堂へよく出られたことです。これはほかの大臣はあまりやらなかつたことです。その機会に各局長がいろいろ大臣にブリーフィングをしてました。これには僕も必ず出でて、「局長、あの件を大臣にちよつと説明してあげてくれないませんか」というようなことを、僕のイニシアティブでやってました。

それから、これも僕だけだつたかもしれないけども、僕は、自分で大臣の通訳もやりました。英語の場合は、要人との会談では、ほとんど僕が通訳をやりました。大平大臣は二回ヨーロッパ旅行をされました。国連にも行かれました。ああいう時もだいたい、僕は身体があいている限り自分で通訳をしました。通訳すると同時に記録を取り、さらには報告電報も書く。例えば一九六三年の訪英で、ロード・ヒューム（外務大臣）に招かれて行った時なんかは、通訳はもちろん、報告電報も書きました。ちょうどその頃、在英大使館に林貞行君がいて、彼に口述して、打電したということをお憶えています。

これは大平さん特有のことだつたと思いますが、夜の宴会がありますね。宴会のなかには政党関係のものがありますが、実業界の人が多い。池田派、宏池会の人達との料亭での会食が多い。大平さんは政党関係の会食にまで僕に連れてこいと言われる。僕は、

こんなところに僕のような者が出ていいのかなと思つたこともありました。当時は古井喜実とか、政治家との会合にも、お付き合ひさせられました。

ご承知のように、池田さんが六〇年に組閣した時に、大平さんが官房長官、参謀役で、いわゆる「寛容と忍耐」というスローガンを打ち出したうえ、二つのこと約束した。一つは、ゴルフはやりません。二つは、お茶屋遊びはやりません。このお茶屋遊びはやりませんというので、新橋にある「栄家」というのは、料亭じゃなくて旅館だということ、そこへ池田さんはほとんど毎晩行つてました。その女将の和田栄子さんは、池田さんと同じ広島県出身、大変な女傑でした。大平さんのことを「おとうちゃん」、「おとうちゃん」と呼んでいました。僕がやったことで一風変わっていることは、その二つ。自分で大臣の通訳をやつたということ、政治がらみの夜の会合にも出させてもらったということです。

武田 選挙区なんかにも行かれるんですか。

菊地 選挙区にも行きました。六三年の選挙に行きました。大平さんの選挙区は香川県二区ですが、その時は大平さんは現職の外務大臣ですから、地元で自分の選挙運動をしますけれども、他の候補者、その頃、服部安司官房副長官だとか、福島県から初立候補した伊東正義さん、ああいう人達の選挙応援もずいぶんおやりになりました。自分の選挙運動よりも応援演説が多かつたんじゃないですか。ところが、この時一つ不運なことが起きた。われわれ政治の門外漢にとつては判らないことなんです。政治家にとつては大変なことらしい。それは、現職の外務大臣がその時トツプ当選じゃなかつた、ということなんです。僕なんかは当選したからいいじゃないかと思つていたんですが、それは大平一家にとつては大変なショックだつたらしい。あの時は大平一家総出で演説して回つたんですかね。いまの、森田一代議士の奥さんになつている良子さんも、盛んに応援演説をやつたあとでしたので。

佐道 選挙の時も、事務秘書官も一緒に行くというのは普通ですか。

菊地 これはまったく大臣次第のようです。だいたいは秘書官がついて行くようですよ。というのは、やっぱり役所との連絡がありますから。これは政務秘書官だけじゃ足りないのです。なんか事件があるといけませんので随行するようですね。それから、さつき話した「栄家」の会合には、僕は大平さんが「おい、ついて来いよ」と言われるままついでに行きました。そうすると、上座には池田勇人首相がでんと座っておられる。僕なんかはもちろん末席の末席ですけども、とにかく池田さんがあいうところへ座って放談しているのを目のあたりにしたことは得がたい経験でした。おそらく大平さんとしては、自分と池田さんとの関係を、お前も見ておけ、というような感じだったんじゃないかと想像しました。

佐道 その時の池田さんの印象はどういう。

菊地 まあ、例のダミ声で談論風発。一人でしゃべってました。で、陪席している人は当時の財界の四天王と言われた桜田武とか、小林中、永野重雄、そういう人です。大槻文平さんもいたかな。池田派には末広会という財界人の集り（支援団体）がありまして、当時の財界の大物がずらりと並んでいた。これが最大の宏池会のバックアップ団体でした。大平さんという人は、財界との顔が非常に広いんです。お陰で僕も財界の人々とお会いすることができました。大平さんは一橋大学出身なんです。一橋出身の人というのは、昔はだいたい財界、実業界へ行っただけで、大平さんは一橋出身の最初の総理大臣なんです。ですから、如水会にしたら、双手あげて応援した。水上（達三）さんとか、茂木啓三郎さんとかですね。個人的な支援団体も正芳会、それから、大平会。大平会というのと太平会（たいへい）というのと二つあるんですけどね。

佐道 ややこしいですね（笑）。

股野 大平さんは、第一次の外務大臣の時はまだお年が若いです

よ。ね。

菊地 五十二歳。

股野 それで、菊地秘書官が四十歳ですか。ですから、大臣と秘書官の年齢が近いんですね。

菊地 近いです。

股野 これはまたちょっと割に少ない例じゃないかと思えます。ですから、それなりの人間関係の形成にもよったんじゃないかと思えます。

菊地 そうですね。それは大平さんは僕を秘書官としてよりも、やっぱりなんか同輩と言っちゃおこがましいですけど、大臣と秘書官という関係よりは……。

股野 後輩というお気持ちはどこかにあったんでしょう。

菊地 たまたま、お互いに英語が好きだとか、ゴルフが好きだということがありました。ゴルフは毎回お付き合いしました。彼は相手がないと、スリーハンドレッドとかに僕を連れていってくれた。いま股野さんの言われたことは、大平さんが非常に若くして外務大臣になったということと関係ありますよ。五十二歳。最初に選挙に出たのが一九五二年ですから、十年後には外務大臣になっちゃった。戊年で、ワンワン会というのが国会にもあるんです。

佐道 それは何をやるんですか（笑）。

菊地 まあ、親睦会です。例えば春日一幸だとか、山本幸一とか、ああいう議員も確か戊年。戊年会というのは何かおもしろい人が多かった。

佐道 私も戊年なんですけど。

武田 私もそうです。

菊地 それから、昭和十一年大学卒業者の集りというものがあるでしょう。昭和十一年に大学を出た人の間には「昭士会」という会がある。わかりますか。昭和の十一で「士」でしょう。大学卒業十一年組というのは、官庁間横断の昭士会というのがあった。そ

れに大平さんは入ってました。大平さんはよく回想していましたが、自分が外務大臣になった時は、次官、局長はみな自分より年上だったので、居心地はあまりよくなかったと。それは確かにそうですね。後宮虎郎さん（アジア局長）が少し大平さんより若いくらい。もちろん次官は武内龍次さん、その次が、島重信さん、最後はほんのちよつと黄田多喜夫さん、三代の次官です。この人は昭和二年から四年組ですから、大平さんよりはみな先輩なわけです。ですから、確か大平さんは、次官とか、局長の古手というのは正直なところ煙たかったんだと思います。ただ、黄田さんのことは非常に好きで……。黄田さんは最初外務審議官だったんですが、何か大きな事件があると、例えば、周鴻慶事件とか。大平さんは僕に「黄田さんと呼んでくれ」と言っていて、黄田さんとはよく相談しておられました。

■秘書官の任期と役割分担

佐道 秘書官のことなんですけども、一方で、政務秘書官がいらつしやるわけですよ。役割分担というのは自ずからという形です。

菊地 政務秘書官の仕事は、割り切っていえば大臣の選挙区の人達のお世話係です。選挙区の人が東京へ出てきて、いろいろ陳情したり、大臣に会いたいということである人達を振り分けて、この人は大臣に会わせるとか、この人には夕食を差し上げるとか。地元の人を園遊会に招ぶとか招ばないとか、そういうのは政務秘書官の仕事です。もう一つは、大臣の金庫番ですよ。僕は外務省会計課の金はもちろんサインをしますけれども、政治献金とか、そういうのは一切タッチしません。

武田 大使が政務秘書官の方と接触するような機会もあるわけですか。

菊地 ええ。だって同じ部屋にいますもの。ただ、政務秘書官というのは、だいたい地元の人の案内などで、ほとんど席にいません。ただ、夕方はちよつと帰ってきて、大臣に連絡、報告するとかというようなことはやっていました。

佐道 突然、知らない人がふらつと現れて、政務秘書官がそつと通してということ。

菊地 僕の場合は、割とそういうことははじめをつけていました。政務秘書官は必ず僕に断った上で大臣室に案内する。そのうちに、僕も、ああ、これは選挙区の人だなということもわかりますからね。陳情団とか、いわゆる強請陳情みたいな人達を入れるか入れないかは、どつちかというところ官房総務課や会計課あたりで取りきつてくれます。警備というのは確か会計課の所管なんだね。一九六〇年の頃は、「政治浪人」というような人達がよく大臣室に現れました。

佐道 外務大臣ですと。

菊地 戦前は外務大臣は大きな機密費を持っていました。その機密費を目当に来るいわゆる「浪人」という人がくる。大臣に会わせるという時は、僕は「いま、大臣は忙しい」とか、居留守を使ったりなんかしました。このカテゴリーではありませんが、その頃よく大臣室に来た人で錚々たる人もいました。例えば、いまの沖繩の稲嶺知事のお父さん。

佐道 稲嶺一郎さん。

菊地 ええ、それから、茨城県出身の社会党議員で外務委員になった森元治郎なんかもよくみえました。戦前、同盟の記者だった人。そういう人達がいろいろ話をしてくれました。「おい、菊地君な、昔は外務大臣のところに来ると、キャビネットから札束をとり出して、「おい、これ持っていけ」と言つてカネをくれたもんだよ」、「いまは外務大臣もけちになつたな」、というようなことを言つてましたけど。外務省機密費というのは戦前からあった。

佐道 戦前と比べられるとちよつと大変だと思えますけども（笑）。外務大臣秘書官というのは、その外務大臣限りなわけですね。

菊地 そうですね。

佐道 外務大臣が替わられると秘書官も替わる。

菊地 秘書官は「二君に仕えず」という一応の原則があるんです。福田さんのケースのように、小和田（恒）君は外務大臣の時の秘書官をやつて、福田さんが総理になったら、総理大臣秘書官になった。しかし、これは「二君」です。僕の前任者は大河原さん、小坂善太郎さんに仕えた。僕の後任、大森君は椎名悦三郎外務大臣に仕えた。それはある程度節操は守らなくちゃいかんと、暗黙の了解でしょうね。

佐道 そうすると、秘書官になれるのは、ある程度の年次もありますし、課長級とか。

菊地 まあ、若い課長級ですね。

佐道 本当に中堅の方になられるわけですけども、外務大臣によって、どのぐらいの長さをやられるかで、皆さんはまちまちで違うわけですね。外務省からしたら、しかも、評価されている方がそういう秘書官になれると思うんですけども、そういう中堅の有力な方が、つまり、外務大臣の任期に合わせるということになると、はつきりしないですね。

菊地 おそらく外務大臣の在任期間が非常に短い場合は、同じ人が続けてやる、つまり、「二君に仕えず」の例外はありうると思えます。例えば、木村（俊夫）さんみたいに何ヶ月しか外務大臣にならなかつた場合は、そのまま続けてやつたんじゃないかな。股野 そうです。有馬が木村俊夫さんの秘書官をやつて、短い期間で木村さんが交替されて、宮沢さんになつたんですね。

菊地 それから最近のことですが、例えばこれは外務大臣秘書官じゃないけど、最近、総理秘書官の楨田君は、総理大臣が短い間

に四人も替わつた時に、確か四代全部に仕えましたね。

■宏池会の人びと

股野 さきほどの財界関係者で、非常に交遊が広がつたというのはよくわかるんですが、いわゆる政治の世界で、さきほど財界関係者でもあり、政治にも非常にいろんな意味で発言が多かつた永野重雄さんの話なんかもありましたけども、例えば戦前から大陸政策についていろいろ意見を持つているような人達、例えば矢次さんというような人達とか、いわゆる政界の消息通兼政策をいろいろ持つている人達、ああいう方達と大平さんはどういうふうなお付き合いの仕方をされていたんでしょうか。

菊地 僕の知るかぎり、ほとんどありませんでした。

股野 ほとんどなかつたんですね。特にこの頃はね。

菊地 大平さんはむしろ、歴代総理の師父と言われていた安岡正篤、ああいう人には非常に私淑してました。それから、「電力の鬼」と言われた松永安左エ門さんにも。吉田茂さんはもう別格です。実業界の大物とは非常によく接触していたし、実業界のほうも、この人は経済がわかる人だ、宏池会を将来背負つて立つ人だということ、非常に彼を買つていたんじゃないでしょうか。特に、証券業界、銀行業界は非常に大平さんをバックアップしました。「大陸政策」で大平さんが意見を聞いたのは、おそらく高崎達之助さんとか、松村謙三さん、岡崎嘉平太さんという人達。いちばん意見を聞いたのは古井喜実さんじゃないですか。あの人は茨城県に、古井喜実茨城県知事、大平正芳税務署長（？）かなんかで一緒にいたことがあるんです。税務署長か財務局かどちらかです。あなたの言ういわゆる浪人というか、論客の人で大平さんが接触があつたというのは、僕の記憶はあまりないな。むしろ大平さんはそういう人達と接触がないことがよかつたんじゃない

ですかね。

股野 そういう印象を私も持つてます。つまり、人脈が岸さんの系統と違う。

菊地 矢次とか、末次とか、田中清玄とかそういう系統ではなかったような気がします。宏池会自体の体質がそうですからね。宏池会は全体としてハト派というか、御公家集団といわれ、また、財界あげて末広会みたいなもんでした。池田さんという人は銀行、金融、証券界に非常に関心を持っておられて、毎日株式相場をチェックしていたことは有名です。彼がワシントンのブレアハウス（国賓を泊めるところ）へ宿泊中でも、東京へ電話させて、その日の株式相場をチェックしていたのを僕は目撃しています。銀行界、証券業界とは非常に密接で、瀬川美能留さんとか、奥村綱雄さんとかですね。なお末広会というのは、吉田茂さんあたりが池田さんの失意時代に、白洲次郎を通じて宮島さん、桜田武さんとかに声をかけ、財界人を集めて、「末広がり」ということで「末広会」というものをつくったのです。

佐道 政党関係の集まりにも出られたというお話をさつきされてましたけれども、ほかの有力な政治家との関係というところでは、例えばさきほど名前が出ましたけれども、黒金さんとか、宮沢さんとか、同じ宏池会でも有力な方々がいらっしやるわけですけど、大使がご覧になつていて、それぞれの個人的な関係も含めて。

菊地 池田さんという人は三人の秘書官、実を言うと四人なんですけど、大平正芳、黒金泰美、宮沢喜一、それからもう一人、稲田耕作という人がいた。この四人が全部大蔵省で池田さんの秘書官グループを形成し、これを池田さんは自由に使いこなした。大平さんは主として政界関係の、宮沢さんは対外関係と経済問題、池田・ロバートソン会談なんていうのにも、宮沢さんはずつとついでにいつている。黒金さんは秀才タイプで、第二次池田内閣の官

房長官。稲田耕作さんという人は、あとで長銀の役員になったりした池田さんの子飼いの人で、非常におもしろい人でした。僕も非常に親しくしてもらったんですが、外務省の稲田（繁）の兄さんね。

股野 繁さんのお兄さんですね。この話は別途ちよつと私もさせていただきます。耕作さんと繁さんの二人の非常にユニークな兄弟に。

菊地 そうそう。全然タイプは違うけどね。

股野 しかし、池田さんに可愛がられた。繁さんも可愛がられた。

菊地 そういう関係ですね。もう一人、これは大平さんとか、池田さんの回想録には必ず登場する人がいます。伊藤昌哉さんです。われわれはプーちゃん、プーちゃんと呼んでいましたけれども、この人は陰の実力者なんです。いまの飯島勲秘書ほかかどうかは知りませんが（笑）。

伊藤さんは、『池田勇人―その人と生涯』という本を書いてますが、彼は本当に池田さんの軍師の役目を果たした。大平さん自身も池田さんの軍師をもって任じているわけです。いま、流行りのアメリカのスラングで言うと、スピナーというやつです。伊藤プーちゃんも一高なんで、僕も親しくしてもらいました。第二次池田内閣の組閣は、大平さんと伊藤プーちゃんとでやったということになつていて。いまにして思えば、大平さんが外務大臣になった頃から、だんだん大平さんとプーちゃんが、それぞれが持つている池田さんに対する影響力というものが、競合するようになったのかもしれない。大平さんと宮沢さんとの関係も、そもそも宮沢さんを池田さんの秘書官に推薦したのはどうも大平さんらしい。そのことはプーちゃんについても言えるわけです。プーちゃんを池田さんの首席総理秘書官に推薦したのは大平さんで、大平さんを官房長官に推薦したのはプーちゃん、ということになつています。そういうふうには、お互いに推薦しあっている仲なんだ

けども、同時に、お互いそのポジションについてしまうと、あの程度の摩擦というが、考え方の違いがどうしても出てくるということなんですかね。

■大平外相の外交手法

―ノーチラス号寄港問題・周鴻慶事件

菊地　ところで、僕の秘書官時代のいろんな案件については話さなくていいんですか。

佐道　いいいえ、それも是非お話ししたいと思います。特に、大平外務大臣時代にいろんな出来事もありましたので、横からご覧になっていただくところでお話をいただければ。いま、秘書官の仕事の内容で、そういうことも、外部の人間にとっては、よくわからないこともあるものですから、それも含めて全体像という形でお伺いました。

人の関係のついでと言いますか、質問項目のなかにもあるんですけど、ライシャワー大使との関係というところも。

菊地　ライシャワーさんは、確かその前の年に着任しておられるんですね。

武田　そうです。六一年（一九六二）ですね。

菊地　大平さんは、官房長官時代からライシャワーさんとはお付き合いがあったらしいです。外務大臣になってからも、ライシャワーさんとは非常にいい関係でした。これはおそらく僕だけが知っていることなんです。六三年（一九六三）初め、原子力潜水艦ノーチラス号の寄港問題が起きた頃から、大平外務大臣とライシャワーさんとの会合が、霞友会館で極秘裏に行われた。場所が霞友会館なものですから、新聞記者も追って来ない。ここで大平さんはライシャワーさんとテータータ（相対で）の話ができた。家庭的にも非常に親しくなった。例えば、ライシャワーさんが一

青年に刺された時なんかは、虎の門病院で手術している間、大平外務大臣が隣の部屋で待機しておったとか。ライシャワーさんは大平さんの回想録に英文で「ミスター大平、マイ・センパイ」という寄稿文を残しています。そこで彼が書いているのは、「アメリカの小麦の輸入をもう少し増やしてくれないか」ということを大平さんに頼んだら、大平さんがしばらく聞いておって、「わかった。しかし、そのことは絶対他の人に言わんでくれ」ということを言ったと。その後、輸入が増えるようになって、非常にライシャワーさんは大平さんに感謝したというようなことを書いています。

もう一つ、ライシャワーさんは、ノーチラス号の寄港の時に、寄港を要請してきた。兵員の休養と給油のため、寄港を認めてくれということを書いてきて、大問題に発展した。あの時の大平大臣のハンドリングは、僕はとても立派だったと思います。放射能漏れだとか、あることないこと社会党が言うわけです。それに対して、外務省は、あの時は安川参事官じゃないかと思うんですが、彼が大いに奮闘して、「原子力潜水艦、つまり、ノーチラス型の潜水艦のみならず、ポラリス型原潜も、世界各国の港に何十回と寄港しているけど、一切放射能漏れはなかった」ということを詳細に調べ上げてペーパーを公表した。また学術会議議長の兼重寛九郎さんという人は、外務省と協力して科学的に問題を論議しようというようなことを言って、社会党の放射能危険論というものに反論した。この時の大平さんの立場は一貫して、ノーチラス型の原子力潜水艦というのは原子力を船の推進力として使っているだけで、核兵器は搭載してないんだ、ということ。最後まで頑張った。放射能漏れの恐れがあるという反対ならば、これは徹底的に科学的に究明すべきじゃないかというのが大平さんの考えでした。僕はよく「ザツハリヒ」（即物的）という言葉が好きで使ったけど、大平さんはこの問題についても、「ザツハリヒなアプローチ」をされた。大平さんはやっぱり役人出身だ、いわゆる政

党政治家タイプじゃない、本当の官僚出身の政治家のよい面がここに現れているんじゃないかと思えます。

このような大平さんのアプローチは、あとの周鴻慶事件（一九六三年）でも現れました。周鴻慶事件では、外務省全省あげて議論が沸騰し、国運を左右するような重大事件だと、その当時は思われたんですね。しかし、新聞にはあまり出なかつたんです。情報をコントロールし、マスコミも自粛した。だけでも、省内では連日会議を開いた。その時も、大平外務大臣の立場は、「国際法はどうなっているんだ。国内法規はどうなっているんだ」ということで、非常に理詰め、法律詰めの議論で会議を主導していたことを憶えています。外務省のアジア局の連中は、中国に対する配慮（チャイナ・スクールの）だとか、台湾に対する配慮だとか、いろんなことを言うのに対して、大平大臣は「それはわかっている。しかし、法律はどうなっているんだ。国際法上はどうなんだ」ということを問いただしていたのが、非常に強く印象に残っています。外務省としては、当然そういう議論をすべきなんです。

佐道 いまのところは、非常におもしろい、興味深いお話ですね。

■ オースドックスな外交

佐道 大平さんの外交に対する考え方は、秘書官になられて最初に、こういう方針でやりたいということは何かおっしゃったんでしょうか。

菊地 言ったかもしれませんが、あんまり僕は記憶にない。それから、僕自身も大臣にインプットすることはしませんでした。しかし、車のなかの話で、だんだん大平さんの考えもわかってくる。僕の感じでは、少なくとも初期の段階では、大平さんという人はオースドックスな外交を展開しようとしているなと感じました。オースドックスな外交というのは、つまり、吉田外交の遺髪

を継いでいくこと、それが、いわば外交の素人である自分に対して与えられた課題だ、というふうに彼は感じていたんじゃないかと思えます。彼は非常に吉田さんを尊敬していました。外遊をして帰国すれば、葡萄酒をワンケースかツーケース持って、必ず大磯の吉田邸に報告に行っていました。僕も二度ほどついていきましたけどね。

「オースドックスな外交」というのは、やはり「バランス・オブ・パワー」の外交ですよ。独立して十年ですから。しかし、彼はいわゆる権力外交パワー・ドイナミクスという意味のバランス・オブ・パワーではなくて、やはり「力の均衡」というか、力というのは必要なんだ、大事なんだという考え方。一言でいえば、非武装中立ではだめだということだったと思います。当時、大平さんが具体的に言及したことはありませんけれども、やはり五三年（一九五三）にできていた外務省の「外交三原則」（国連中心主義、西側との協調、アジアの一員）というラインは一方にある、しかし、三原則ではありますが、大平さんとしては基本的には対米協調路線。徹底した対米協力論者でした。ほとんど無条件な対米協調と言ってもよいと思います。これはその後、党の政調会長なんかになりますと若干変わってきますが……。あとになると大平さんも、「多元外交の時代に入った」とか、「環太平洋連帯構想」とか、「総合安全保障」とかいろいろなことを言われますよね。ことに総理になつてからは、僕の言った徹底した、百分ないし百十%の対米協調主義というものが徐々に修正されていく。その頃、大平さんの言ったのは、「日本の対米外交も、これは多国間外交の場に持ち出しても大丈夫なようなものでなくちゃいかん」というようなことを言い出すわけです。

佐道 それは総理になれる頃のお話ですね。

菊地 そうです。総理になる準備段階で、例の九つの「大平政策研究グループ」をつくったでしょう。佐藤誠三郎とか、高坂正堯

とか、猪木正道とか、ああいう人達が集って、いろんなことを提案した。「田園都市構想」、「地方の時代」、「文化の時代」、「総合安全保障」とか、いろんなことを言い出した。ところが、初期の外務大臣の時代は、安保騒動のあとですから、対米関係の調整というのが最大の眼目だったんじゃないでしょうか。だから、その頃は、アジア、東アジア、東南アジアに対して、大平さんがどういう考えを持つていたということを聞かれても、ちよつと僕は回答に窮するんです。それは演説では、外務省の事務当局がつくった作文に則って、まんべんなく発言してまずけども、大平さん個人が、アジアの国だとか、太平洋地域の諸国に対して、どういう個人的な独自な見方をしていたかというようなことはわかりません。ただ、中国に対してだけは、彼は戦時中、張家口に興亜院から派遣されています。ですから、中国に対しては思い入れがあつて、さつき言った古井喜実さんなんかからのインプットもあつて、日中関係というのは、なんとかしなきゃいかんということは考えていたと思います。現にLT貿易なんていうのは、六二年（一九六二）にはもうできていました。そういう日中間の実務関係、経済関係は進めたいというようなことは考えておられたと思います……。

佐道 その場合には、台湾の問題なんかについては。

菊地 台湾の問題は、六四年（一九六四）になつてからです。同年二月に吉田元総理が訪台し、五月には吉田書簡が出て、七月には大平さん自身が訪台する、というようなことがあつた。これは専ら親台派の大野伴陸あたり、それから、当時、外務省には毛利松平という政務次官がいます、この人はものすごい親台派でした。この人達からずいぶん、「行つてくれ」ということを言われて、行かれたということですね。僕はその時だけは随いて行かなかつたんです。唯一、私が大臣に随行しない外遊でした。それに関して、行かれる前に、「菊地君、今度は森田君を連れて行く

から」と一言。その時は岩倉さんに代わつて女婿の森田（一）君が政務秘書官になっていました。それで、対中ビニロン・プラント輸出の融資の問題以来こじれていた日台関係がやつと修復され、台湾政府が対日買付停止を解除することになった。それをお土産に大平さんは帰つてきた。

佐道 初期の外務大臣の頃の大きなアジア論とか、そういうことについてはあまり印象がないということですね。

菊地 あまりないですね。

佐道 具体的には、中国大陸については、経済的な関係を中心にLT貿易というような実務的な関係をつくつてどんどんやつていこうと。台湾の問題も、今度は政治絡みになつてくるわけですが、これは何かあつた時の個別案件的に処理をしていくという形での対応しかなかつたということですか。つまり、長期的に日中関係をどうしようとか、台湾との相互の関係をどうしようということではなくて。

菊地 日中関係では、大平さんは歴史に残る発言を国会でしています。「中共がいつの日か国際社会からのプレッシング（祝福）を受けた場合には、日本も中国との関係は考えなければならぬ」と思います」と。あれは六四年（一九六四）二月ですか。

武田 そうですね。二月十二日。

菊地 この発言は大平さんの「プレッシング発言」として喧伝され、歴史的な転換点になつた。あれは穂積七郎議員（社）の質問に答えて、中国の代表権の問題をどうするんだという質問に対して、大平大臣が、「中共政権が」国際社会から認められるようになって、プレッシングを受けた場合には、日本としても決心しなければなりません」と。これは当時としては、せいっぱいの日中国交正常化へ向けての日本政府としての意思表示、見解表明だった。穂積七郎は答弁に満足したのか、あるいはプレッシングという言葉を理解したのかどうかは知らないけど、そのまま引つ込んで

ったんです。これはもちろん国連における中国代表権の問題と絡んでのことです。

■六〇年代前半の日米関係

佐道 いちばん最初の外交の基本を日米協調においていたということをお伺いします。そのところはもちろん間違いないことだと思えますけれども、大平さんが外務大臣をやられた六二年（一九六二）は二次防が決まったあとで、いわゆる吉田路線

の忠実なる継承者としての池田内閣と大平外務大臣、というものだと思えますが、ちょうど六〇年以降、アメリカのドル防衛の問題もありまして、アメリカは対外的な援助を大幅に減らすと。日本に対するいままで行ってきた援助ももう出せないというような状態になってくる。ということ、日本に対しても、防衛力増強ということを少し控えていたのを、また言い出すようになってくるというのが六〇年代の前半ぐらいからだと思えます。そうすると、対米協調ということに大事にするという問題と、日本にも防衛力を増強して欲しいというアメリカの要請という問題。しかし、経済財政重視でなるべく防衛費のほうにお金をかけないというのが池田内閣の基本路線だと思えますから、そうすると、その調整をどうするのかということ、日米関係を考える場合に、かなり大きな問題になってくると思うんです。こういう防衛力整備の問題、自民党内でも、防衛装備の国産化の問題とかを含めて、結構がまん言い始める時期にあたっては、大平さんはいわゆる、こういう防衛力の整備の問題等々について、大平さんは当時何かおっしゃっておられましたか。

菊地 大平さんは、防衛力の整備、防衛はおろそかにしてはいけないというようなことは考えていたと思います。ただ、いわゆる「再武装論者」ではないが、彼がよく使う言葉は、日本も「身分

相応の」防衛力というものは持たなきゃいかんじゃないかと。あの頃、防衛費というのは年々増額され、それに対する野党の抵抗がある。それから、大蔵省も反対。当時の防衛庁長官は岩手県出身の志賀健次郎さんという人だったね。この人は政治力はあまりなかった人なんで、防衛費の増額要求に関して、志賀防衛庁長官が大蔵大臣と予算要求で大臣折衝なんかをやる場合には、大平外相と一緒にやって行っていました。

佐道 ああ、そうですね（笑）。

菊地 防衛費の増額というものに対して、大平さんもバックアップしてました。ちよつとあなたが先に触れられた日本がLT貿易を始め、ビニロン・プラントで中国に対して輸銀信用と供与しようとしたり、周鴻慶事件では、周鴻慶を、結局中国に送り返しちやったりということに関しては、アメリカはその時々、ある程度の不快感の表明というか、申し入れはしてきたように聞いています。しかし、それはいわゆる「agree to disagree」というような格好になった。あの頃、ハリマンがアジア太平洋担当の国務次官補で、はつきり「中国は危ないからやめた方がよい。日本は中国と貿易するよりも、東南アジアともっと貿易したらどうですか」などというようなことを言ったりした。そのころは、僕はアメリカという国は中国市場というものを非常に渴望していますから、日本に先取りされちゃ困るといふような心配が心底にあったとみえています。少なくとも、日本を若干牽制しようとした気持はあったようなんです。ただ防衛力の増強を、どの程度強く日本に迫ったかについては、僕は知りません。ただあの頃から、すでに沖繩の問題がありますから、沖繩の基地の問題は大きかったと思います。

佐道 沖繩の問題について言えば、ケネディ政権になりましたから、日本が行う沖繩援助という問題がかなりクローズアップされて出てきたりということもあるんですけども、大平さんの沖繩の問題の関心というのは、かなり大きかったわけですか。

菊地 普通ではないですか。沖縄との関係では、キャラウェイという高等弁務官が帰国の途中、外務大臣のところにあいさつに来たのを僕は覚えてるぐらいのものですね。キャラウェイというのは非常に強硬派だったようですが。

井上 普通の理解の仕方ですと、六〇年代前半というのは、特に池田首相が「日米関係というのは先生と生徒の関係である」というような言い方をして、最も協調的で問題がなかったかのようなイメージを受けるんですけども、その場合、アジアとの関係というのは非常に希薄なのは当然だと思いますが、他方で、日米協調が重要というだけではなくて、日米関係の調整が専らの重要なことであつたということだと、例えば中国との関係を巡って調整が必要だつたということでは、それはマイナーな問題で、もつと日米関係本来何か大きな問題が何かあつて、それに忙殺されていたとか、そういうようなことなんでしょうか。日米関係が重要で、それがいちばん仕事の重要な部分としてなつたというのは、具体的にどういうことですか。個別の案件はともかくとしまして、全体として、六〇年代前半というのはどういふふうにとらえればいいのかと思うんですけども。

菊地 確かに安保騒動のあとですから、日米関係調整の期間なんです。言うなれば、ダメージ・コントロール（損害管理）の時代なんです。ですから、積極的に特定の問題について協調したとか、特定のアメリカの政策に対する協力の仕方について政治判断を迫られるというのではない。むしろ、これ以上日米関係が悪くならないようにコントロールしておこうというダメージ・コントロール。前々から言っているように、六一年（一九六一）には日米貿易経済合同委員会というのができたわけです。これは非常に重要な役割を演じ、日米間のいろんな問題が起きて、だいたいここでコントロール（調整）された、コンテイン（封じ込め）されたということだと思います。そういう意味では、この委員会という

のは非常に大きな役割を果たしたと思います。この時期で起きた具体的な、本当に爆発を起こしそうな問題はノーチラス号ぐらいですかね。周鴻慶事件にしろ、ピニロン・プラント問題にしろ、所詮、日本と第三国との関係ですからね。

井上 ノーチラス号のというのも、のちの非核三原則につながるようなことですよ。

菊地 そうです。

井上 結局、核兵器はいけない。だけでも、原子力で推進するのはいいという。そこをできるだけ、まさに国際法的に厳密に区別して、日米関係を調整するという。

菊地 社会党、マスコミなんかは、原子力、核というところだけを捕まえて盛んに世論を煽る。それを懸命にコントロールしようとしたのが外務省、政府だつたということだと思います。

■ 利子平衡税交渉

菊地 もう一つ。いま経済絡みの話が出ましたけれども、六三年（一九六三）の七月ですか。利子平衡税というものを課すると、アメリカが突然言い出したわけです。ケネディ政権ですけれども、国際収支が非常に難しくなつて、ドルが海外にドンドン流出する。それを阻止するため、諸外国がアメリカで資金調達する場合の調達コストを高くしようとして、利子に付加税10%を課すということをお願い出した。これは経済成長を看板に掲げる池田内閣にとっては、ものすごい打撃だつた。ことに、銀行界、証券業界をバツクとする池田さんにとっては大問題だつた。これで日本は喉から手が出るように欲しいアメリカの資金の調達が難しくなる。銀行業界、証券の陳情（野村證券の奥村氏等）もあつて、池田さんは宮沢経企庁長官に「すぐ、アメリカに行つてくれ」と言つたんです。そしたらその前日かなんかに、宮沢さんが盲腸炎になりました。

て、それで、そのお鉢が大平さんに回ってきた。大平さんは急遽、「おい、菊地君、行くぞ」と言つて、二人で出掛けて行つた。

利子平衡税というのは、カナダに対しては免除されていたんです。ですから、日本もカナダと同じように免除してくれないかと。もし全面的な免除ができなければ、特別の免除枠をくださいというような交渉をしに行つたわけです。大平さんは、ディロン財務長官、ケネディ大統領などと会いました。だけでも、その段階では、米側としては日本はカナダと同じように免除するというわけにはいかないが、本当に日本が国際収支上の困難に遭遇したなら、その時は特別枠を考えてもよいというような漠然とした約束をした。それをもらつて帰つたわけです。

ニューヨークでは、主要な大物財界人全部と会いました。ジョン・リードとか、ホワイトヘッドとか、ウォール街の錚々たる銀行家に会いました。デビッド・ロックフェラーにも会いました。これは後日譚ですが、六四年（一九六四）になって、実際、法律ができて、いよいよ利子平衡税が施行されることになった段階で、財務次官補のトゥルーエッドという人が日本に來まして、日本の大蔵省と交渉し始めた。その時、僕は今度は米国カナダ課長として、現実の免除枠の交渉をやるという巡り合わせになりました。

佐道 台湾のあれ以外は、大平さんの外遊には当然ご一緒されたわけですね。その時も通訳もされたわけですか。

菊地 だいたい自分でやりました。ただ、もちろん僕が出ないこともありますから、事務方の通訳は必ず連れて行つてました。

佐道 最後に、結局、アメリカ側がこれをやる時に、大蔵省と交渉になったというお話はあとで聞きます。その外遊された時ですが、やっぱり大蔵省マターだと思いますが、大蔵省の方も、例えば大使館とかには行つてらっしゃるんじゃないかと思いますが、そういう方も一緒に行かれるわけですか。

菊地 ええ、一緒に行きました。その時はちょうどワシントン大

使館に山下武利（公使）さんという人がいました。この人は大平さんと大蔵省入省が同期なんです。利子平衡税は大蔵省マターですけれども、対外交渉となれば外務大臣がやつてもおかしいということはない。

佐道 行かれた時に、大使がアメリカも長くいらつしゃいますので、大使として、こういう方にお会いになったほうがいいですよということでお会いになった方とかはいらつしゃいますか。

菊地 それはありません。それは出先の大使館が全部アレンジしました。

佐道 特に印象に残つた方なんかはいらつしゃいますか。

菊地 その時？ やつぱりディロンでしょうね。ディロン・リード社の御曹司ですから、なかなかしつかりしてました。彼は日本に同情的でした。ニューヨークでは、亀徳正之財務領事（後の共栄生命社長）がいました。この人が一生懸命われわれの世話をしてくれました。

■ キューバ危機への対応

佐道 外国との交渉にあたる時の大平さんというのはどういう。

菊地 大平さんは、交渉にあたつては常に淡々としているんです。事務当局がいろんな振り付けをしますから、だいたい事務当局の案を「自分の言葉で」表現をする。

僕の秘書官時代にはいろんな案件があつた。六二年（一九六二）の段階では、まず大平さんは国連総会に出席しました。国連から欧州へ回つたんです。欧州から帰つてきましたら、キューバ危機が起こつた。キューバ危機のあとには、池田さんが訪欧する。十一月にはLIT貿易協定ができる。それから、焦点の大平・金会談が十一月。第二回の日米貿易合同委員会があつて、ワシントンに行きます。何かお尋ねになりたいことがあれば、どうぞ。

佐道 順にというか、例えば大平・金会談とか、これは日韓関係史のなかでも大変重要な問題ですし、ちょっとお時間をいただいでお聞きしたいというところで聞かずにずっととってあったんで

すけれども、そのほかに、いまのお話で、例えばキューバ危機の問題とか、この時の日本側の対外的な対応の責任者でいらつしやるわけですから、この時の大平さんの仕事ぶりを教えてください。

菊地 キューバ危機の時は、僕はいやにはつきり覚えているんですが、たまたま僕は太田さんのうちへ行っていたんですね。そして、信濃町からだと言話があつて、池田総理から大平さんに対して、ライシャワー大使がこういうことを言ってきたよと。ライシャワー大使の申し入れは、アメリカを日本も全面的に支持をしてくれという要請でした。もちろん、それまでもキューバにおける危機というのは進行していたわけで、新聞なんかは、米ソ戦争が勃発するかもしれないという危機感はもちろんあつたわけです。だから、池田さんにしろ、大平さんにしろ、そういうことを心配していたんだと思いますけれども、当時の一般の世論は、なにしろ遠い国のことなんですよ。当時、日本全体が非常に危機感に溢れたという感じでは僕はなかつたと思ひますが……。

佐道 日本全体はそうだと、政府の責任者でいらつしやるわけですよ。やつぱり緊急に集まつて対策を講じるとか、これからのあり方を論じるということがあつたのではないかと、それから、あつたとしたら、どういふふうなものが議論されたのか。

菊地 それは、僕は知らないんです。あとから、中川（融）条約局長の回顧録とか、伊藤昌哉さんの回想によりますと、この時、首相官邸で会議が開かれた。そこで、日本としてはどうすべきかということ、外務省から大平外務大臣、中川条約局長等が出た。池田さんがどうしたらいいかということも諮問された時に、中川条約局長は「日本は、日本の立場から自主的に態度を決定すべきだと思ひます」と、進言したと記録に残つてます。これは、僕は

条約局長としての発言としては、非常に立派な答えだつたと思ひます。

もう一つは、伊藤昌哉さんの説によると、その時、池田さんがちよつとつぶやいたのは、「あ、日本もそろそろ軍事力を持たないかん」とつぶやいたということになっていふます。

佐道 例えばキューバ危機のような事態が起こつていふ時に、大平さんは日常と変わらず淡々と仕事をこなされた。

菊地 そうですね。キューバ危機については、あとでロバート・ケネディ（当時、司法長官）が「サーティーン・デイズ」といふ本に詳しく書いてますけれども、あれは十月十六日から二十八日までの「十三日間」の決断なんですね。この間、ホワイトハウスを中心に、ケネディ（大統領）、マクナマラ（国防長官）、マクジョージ・バンディ（大統領補佐官）、ジョージ・ボール（国務次官）などといふアメリカのベスト・アンド・ブライテスト（エリート層）が集まつて盛んに協議を重ねた。その時のアメリカにとつての選択肢は、二つ。一つは、ソ連がキューバに運び込んだのは明らかにミサイルと認められるから、これをエアストライク（空爆）で粉砕するという作戦をとるか、それとも、それを運び込むソ連の艦船を抑えるために海上封鎖をやるか、という選択だつた。マクナマラ以下、ケネディも、まず海上封鎖から始めて、段階的にしめつけをやるうといふ説で、この説が勝つて、結局封鎖に踏み切る。そこでフルシチョフが譲歩をして、国連のウタクト事務総長の斡旋、国連の監視のもとでミサイルを撤去する、というのがキューバ危機の顛末ですよ。アメリカにとつて、また世界にとつて戦後最大の危機だつた。

しかし、当時、六二年の段階では、われわれはそんな内情は知るべくもなかつた。ことに、アメリカ自身がこの問題を、「ウエストタン・ヘミスフィア（西半球）に対する脅威」というとらえ方をしたものですから、ああ、そうか、西半球に対する脅威かという

ことで、日本のような国は局外である。僕は、そういうことを含めて、中川さんが「日本は、日本として自主的に対応を決定すべきだと思えます」という意見を進言したのではないかと思えます。佐道 秘書官を務めておられた大使のお耳にも、そんなに当時細かいことまでは入って来なかったということですか。つまり、どういふ事態が具体的にどのよう進展しているのかということについては。

菊地 そういふことは在外公館からの電報で知るわけですよ。当時、わが方のキューバ大使もいたわけですけども、あまり印象に残った電報はありません。

■ 大平正芳のソ連観

井上 さきほどの自主的に決めるといふような条約局長の発言なんかから受け止め方として思うのは、どういふソ連観を持っていたのかなと言いますか。のちに大平首相になる前後に、大平氏のソ連観というのは、大国としてのソ連というものにそれなりの行動の予測性を見出し出していて、単純なイデオロギー的に反対しているというのではない大平氏のソ連観みたいなのが研究のなかにはあるんですけども、外務大臣として、まさにキューバ危機に直面しているような時に、米ソの核戦争になりかねない状況のなかで、ソ連というのをどんなふうに見ていたとか、そのへんのこととは何か。

菊地 それはグッド・クエッションです。大平さんのソ連観ですが、ご承知のように、大平さんは反共論者ではない。どっちかというところ、中道左派。もちろん、そういうふうな色付けを彼は非常に嫌いますけど。それに、大平さんはあとの段階で、高島(益郎)次官、あとから駐ソ大使になる人ですけど、あの人は外務省のなかでもユニークな対ソ観を持っていました。「ソ連というのは共

産主義の輸出とか、革命の輸出とかというように、対外膨張的、帝国主義的膨脹主義的な国家のように一般にとられているけれども、本来はロシア人(大口ロシア人)というのは非常に防衛的な民族で、外へ侵略していくような民族じゃないんだ。ところが、共産主義になってから、世界中に包囲されているという意識から防衛思想が過剰になり、100%の防衛どころか、百二十%の防衛を求めるようになった。このメンタリティーが、すべてのいまのソ連のビヘイビアを規定しているんだ」といふ見方をした人です。それをどうも大平さんがどこかで聞いた。

この話で思い出しましたが、八〇年(一九八〇)一月、大平さんは、首相として環太平洋連帯構想というものをひっさげて、豪州、ニュージーランドを訪問します。オーストラリアの新聞記者が、「あなたの方言う環太平洋連帯構想のなかには、ソ連及び中国は入るのか」と質問した。そしたら、大平さんは、これは若干不用意だったんじゃないかと思うんですが、「もしソ連ないし中国が希望すれば、彼らを排除するものではない」と言ったんです。そしたら、会場からブーイングが起こった。

井上 それはアフガン侵攻の直後ですね。七九年(一九七九)の十二月末にソ連のアフガン侵攻があつて、翌一月にオーストラリアでそういう発言をされている。

菊地 それはフランス語でいう「フォー・パー」(失策)というやつですが、あの時点での発言としては、ちよつとまずかったです。

佐道 ちよつと時間になつてしまいました。

井上 大変おもしろいところで。

菊地 この次は国連から欧州に回りました。それから、ヨーロッパに行つて、ロード・ヒューム外相と会談をし、ヨーロッパ大陸へ回つた。それは大旅行でした。旅行中に、大平さんは痛風が出たりして、ちよつと難儀したこともありましたが。イギリスでは正式の会談の他に、グラウス・シューティング(雷鳥のハンティング

グ)に行ってきました。いろんな話題性にとむ旅行でした。ですから、それはこの次に。秘書官の役職そのものに対するご関心が大きいようですけれども、今回は案件のほうに集中したほうがいいかと思います。

佐道 両方なんです。秘書官自体にも興味がございまして、大平外務大臣のお仕事にも興味があります。ですから、外務大臣としてのあれのほうで。

菊地 内容のほうですね。一九六三年は、さっき言った利子平衡税の問題だとか、部分核停条約の成立とか、呉敷レーヨンの問題とか、二度目の訪欧、周鴻慶事件。六四年になると、大平・ラスク会談、それから、マフィリンドの話が出てきます。ご存じ？マレーシア、フィリピン、インドネシア間の紛争。この問題も僕の時はわりと大きな問題で、日本が調停工作をしたことになっているんです。

股野 例のマレーシア構想との関係で。

菊地 インドネシアが最初、コーフロンタツシーということで、マレーシア、シンガポールをやっつけようとした。

佐道 スカルノが強硬にいろいろやろうとした。

股野 マレーシア構想にフィリピンも反対したんですね。その過程で出てきたことです。

佐道 そこらへんもこちらの年表をちょっと整理しまして。

菊地 きょうはキューバ危機だけで終わっちゃったけども、僕の時でいちばん大きい問題は、ヨーロッパに回った話とか、大平・金会談、第二回の日米経済合同委員会、それから、六三年には、日本・ビルマ経済協力協定というの、大平さんが自分で交渉したんです。これがあります。

佐道 日本外交年表というのをもう一回見直します。

(終了)

菊地清明

オーラルヒストリー

第9回
大平外相秘書官時代 その2

開催日：2002年4月4日
開催時刻：午後2時05分
終了時刻：午後4時40分
開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）
股野 景親（元スウェーデン大使）
佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）
武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■大平外相の国連演説

股野 大平さんは五十二で外務大臣になっているから、若い外務大臣ですね。

佐道 戦後の最年少というのはどなたですかね。

股野 最初の外務大臣をやった時に、小坂善太郎も若かったでしょう。

菊地 そうかしらね。大平さんより若い先輩（二橋大学の）かな。

股野 いい勝負かな。善太郎さんも若かったですよ。

菊地 戦前、枢軸外交華やかなりし頃、訪伊使節団というのがあって、団長が佐藤尚武さん。白鳥駐伊大使なんていうのが威張っていた時に、小坂さんはその使節団の団員だったんですね。戦前からそういう活動をしている人なんです。

股野 金山政英駐韓大使が若かりし頃、学生時代か外務省に入ってからか、ヨーロッパに船で小坂さんと一緒に行ったそうですね。そしたら、あの元気のいい人ですから、二人で口論になって、ついに取っ組み合いになった。そしたら、金山さんが「小坂は強かったよ」と。それはそうですね。柔道ですよ。

菊地 両方とも体がいいからね。

股野 金山さんも元気な人ですね。「取っ組み合いになって、彼とやったんだけどね、彼は強かった」と（笑）。

菊地 金山さんは懐かしい人です。十二人も子どもがいたんだよ。カトリックで、戦争中は、バチカンが中立国でしたから、四年間ずっとバチカンにいたんです。敗戦になってやっと帰ってきたという非常に珍しい外交官です。

井上 今回、昭和三十七年（一九六二）から三十九年（一九六四）にかけての大平外務大臣の秘書官時代のお話ということで、昭和三十七年については、四つほどの項目が挙げられておりますが、これらを取捨選択していただいております。

す。いかがでしょうか。

菊地 ええ、結構です。この順番でいきますか。

井上 ええ、それでよろしければ。

菊地 第十七回国連総会に行ってから、ヨーロッパを回った。この外遊のサブスタンス（内容）については、僕はあまり記憶していることはありません。大平さんとしては初の檜舞台ですので、非常にやりきっていた。「一般討論」を国連総会でするわけけれども、その草稿は自分で一所懸命筆を入れていろいろやっておられたというようなことは憶えています。むしろ僕は、その頃外務省では口さがない連中の話題になったことをお話しします。大平さんが国連の演説をする時に、英語でやるか、日本語でやるかというところでちよつとしたハプニングがあったんです。それは、股野君なんかは知っているでしょう。

股野 大平さんはそうでしたか。私は小坂さんが英語でやるというので、英語で一所懸命タイプをお手伝いしたのを記憶しております。

菊地 大平さんの場合は、もうのつけから英語でやるつもりでいたんです。だから、僕もそれは結構ですということで、テープレコーダーに吹き込んだりして、発音の練習なんかもやりました。

当時、国連局長は高橋寛さん。北米局長は、竹内春海さんがちょうど安藤（吉光）さんから交替したばかりです。ところが、最後のニューヨークのホテルでの打ち合わせ会議の時に、英語でやるか日本語でやるかを決めなくちゃいけない。そしたら、例の竹内春海さんがここでも出てくるんですが、「大臣、日本語でお願いします」とピシヤッと言っちゃったんです。その時、竹内さんというの、なかなか気骨のある人だなと僕は感心しました。おそらく同じ一橋出身だという気安さもあつたんじゃないかと思えます。竹内さんは、この前から話しているように、あの年次では大変な秀才です。その人がそういうことを言って止めちゃったんで

す。この話はよくいろんな回顧録に出てまして、時の外務次官、武内龍次さんもこのことに触れてまして、彼のパージョン（説明）には、大平さんが英語でやるのを止めたのは自分だといっている。とにかく前夜まで大平さんは英語でやるつもりでいたことは事実ですから、最後、止めを刺したのは、竹内さんのほうです。

それでよかったですと思います。あの方は一橋大の時に英語の家庭教師をやっていたという話があるぐらい英語が好きで、この前も話したように、僕との会話のなかにはしょっちゅう英語の単語がよく飛び交っていた。そのあと、大平さんは非常によく英語の勉強をし発音もよくなった。大平さんの葬儀の時にテープで流された国連総会での演説（二回目の外相の時の）はとっても立派になっていた。ライシャワーもその回顧録で、「あの時の大平さんはとつてもうまかった。あんなに英語がうまいのに、自分とはいつも日本語で話していたのは、私を騙していたんだ」というようなことを冗談半分に言ってます。ところが、僕の正直なところを言いますと、少なくとも最初はやっぱり発音上のトラブルがありました。あの方は四国ですから、英語でも四国弁が出る。四国の人というのは、「スイットダウン」(Sit down) というのはなかなか言えない。「シット・ダウン」になっちゃいます。これは英語としてはまずい。しかし、その後大変お上手になられたのは、申し上げた通りです。なにしろ熱心だったですからね。

佐道 その時の国連日本政府代表部はどこにあったんですか。

菊地 その時はスカーズデールかなんかだと思います。北のほうにありましたよ。

股野 いや、それは国連大使公邸ですね。事務所は三番街の四十二丁目の角です。

菊地 じゃ、ずっと僕の時も同じだ。国連から近いところでしよう。

股野 国連から近いところです。

佐道 じゃ、同じですか。

菊地 で、最近また移りましたけど。スカーズデールは公邸ですね。昔、加瀬俊一さんがいた頃、僕はそこへ行ったことがあります。岡崎さんのあとが松井明さん。六三年（一九六三）の七月ですね。

次、ヨーロッパに移っていいですか。ここにはラスク長官と会談したあと、と書いてありますが、この大平さんのラスク長官との会談では、沖繩問題を議論したということになっています。ラスクさんという人は、例のフェアモント・カレッジのプロフェッサーから国務長官になった人で、彼は穏健な人で民主党には打つてつけの国務長官だったと思います。彼はそう強力な国務長官ではなくて、むしろ国務次官のジョージ・ボールあたりが、僕は実際は外交政策を取り仕切っていたんだと思います。ご承知のように、ラスクはブダ・フェイス（仏の顔）といわれて、非常におとなしい人です。大平さんとラスクは非常に親しくなったということになってますけれども、ラスクのメモワールを呼んでも、大平さんのことはほとんど出てきません。

■ 欧州訪問の印象

— クリスチャンとしての大平正芳

菊地 ヨーロッパへ行きました時の会談など内容的に印象に残ったことはありません。その時は志げ子夫人も同行した。イギリス、フランス、西独、イタリー、それから、ヴァチカンに行った。ヴァチカンではヨハネス二十三世にお会いしたわけです。大平さんにとつては、これは人生のハイライトだったんじゃないかと思えます。大平さんというのは、高松高商時代に観音寺教会でキリスト教の洗礼を受けたということになっています。クリスチャンとしての大平さんということ、新聞記者や伝記作者はよく問題にするんですけども、キリスト者としての大平さんというのは、

僕はちよつとよくわかりませんでした。宮沢（喜一）なんかに言わせると、大平さんは大蔵省に入ってから、神楽坂で太鼓を叩きながら伝道したとか、大蔵省の若い連中が神楽坂に遊びに来るのを、大平さんが辻説法よろしく追いついた、とかいう伝説めいた話がありますが……。彼はキリスト教というのは一つの哲学として、人生観、世界観として、非常に関心を持っていたということじゃないかと思えます。で、同時に、西田哲学にも非常に興味を持っておられました。「絶対矛盾の自己同一」だとか、「永遠の今」とか、西田哲学ばりの言葉をよく口にしておられました。ただ大平さんのキリスト教徒としての宗派もはっきりしない。大平さんが亡くなった時には、所属の教会がないので八代さんという英国国教のいちばん偉い人、アングリカン。チャーチのビショップ（司教）と親しかったので、英国国教式で葬儀をやりました。だから、いわゆる宗派的なキリスト教じゃなくて、どちらかというと、内村鑑三とか、矢内原忠雄とか、無教会のような理論的、神学的なキリスト教だったんじゃないかという感じがします。

日米政府間のいろいろな交渉では必ず通訳に出てくるジム・ウィッケルという人が思い出に書いています。アメリカの西海岸から東海岸まで汽車旅行を大平首相と一緒にするんです。その時に、大平さんが広大な資源に富むアメリカ大陸を見て、「神様はなんて不公平なんだろう」と言ったというんです。アメリカにはこれだけ莫大な国土と資源を与えておき、日本には非常に小さな資源しか与えなかった。神様はなんと不公平なんだろうと。それを聞いて、ウィッケルは非常にびっくりしちやつたわけですよ。普通のクリスチャンにとって、神様は不公平だ、なんていうことはとても言えない。ですから、僕のみた大平さんは、「敬虔なクリスチャン」というよりは理論的な、神学的な、唯理的な、キリスト者だったというような感じがします。

大平さんも大平夫人もチャリティー（慈善事業）をよくやられ

ました。僕はそこに初めてチャリティーを現実に実行する人の姿を見ました。恵まれない子どもたちのところへ寄付したり、そこへ行って贈り物をしたりしていました。

それが第一回の欧州旅行です。もちろん、大平さんは代議士になられる前に世界一周旅行はしていることはしているわけですが、大平さんはこの旅行で政治家として大いに見聞を広めたということだと思えます。

佐道 この時、例えばフランスではドゴールとか、結構大物もお会いになつていられるわけですけども、そういう印象談みたいなことはありますか。

菊地 これは最初ですから、何というか、「顔見せ興業」の面もありますから、大平さんとしては、相手のドゴールとはどういう人だとか、そういうことを一所懸命「サイズアップ」（品定めをする）するとか、観察するとか、世界のリーダーというのは、どういうものかというのを見極めることが第一の眼目だったんじゃないでしょうか。外務大臣になると、アメリカへ行き、ヨーロッパへ行くというのは定例ですから、あまり大きな意味をみる必要はないかもしれませんが。その後の池田首相の訪欧の露払いの意味もありました。

■一九六二年の日韓・日中問題

菊地 それが九月です。十月には中印紛争が起きるんですよ。これはちよつとした大事件で、中共軍が国境へ攻め入って、クリシュナ・メノモン国防大臣の率いるインド軍が全面的に敗退する。それで、ネール首相はケネディ大統領に全面的な援助を頼むわけですよ。この時、国会でもちろん問題になったわけですけども、国会答弁の振り付けは、専ら安川（壮）参事官がやっていました。アジア局長は後宮（虎郎）さんだけでも……。この時は、

おそらく日本はあまりポジション・テーキングはやらなかったんじゃないですかね。

佐道 安川さんは当時。

菊地 総務参事官です。国会担当兼総務参事官です。それで、第一回の大平大臣の時の国会対策は、大平さんと、安川さんと、僕と、三人でほとんど取り仕切っていました。もちろん各局長、特に中川（融）条約局長には出てもらうんだけど。その次に起きたのがキューバ危機ですよ。キューバ危機はこの前お話ししました。

この頃、注目されたのが英国の『エコノミスト』誌に「コンシダー・ジャパン」（日本を注目せよ）という論説が出たんです。これはその頃としては非常に出色の論文だったんですが、日本がちょうど高度成長期に入った時ですけども、日本は注目すべしと。これが出た時に、外務省あたりでプリントして、その写しを総理官邸に配っていました。これは、まさに池田さんにとっては願ってもない日本評価なわけです。そのあとは、池田首相がヨーロッパに旅立つんですよ。

佐道 大平さんが戻られたら、入れ替わるような形で。

菊地 そう。十一月から。この時に池田さんがドゴールに会って、「トランジスターのセールスマン」とかと言われたとか、新聞は冷かし半分の論評があつたんですが、これは僕は総理官邸のことですから知りません。

十一月十二日に大平・金会談がありますね。この経緯は現在だいたい明らかになっています。大まかな話をする、その前に朴正熙が政権をとって、何かと日韓関係を打開しよう。朴さんは、やはり日本との関係をよくすることによって、韓国の将来を切り開いていこうという気持ちを持っていた。そこへ金鐘泌というやりの中央情報部長がいた、彼を使って、とにかく最大の懸案の請求問題というのを片づけようということにした。この会談は、ちやうど池田さんが訪欧中に起こったものですから、その後、い

ろんなことが言われるわけです。「大平は俺の許しを得ないでそんなことをやった」ということで、池田さんが怒ったという話とか。大平さんは請求権問題とか、財政の問題については、自分はエキスパートだ、専門家だと思っている。日本側の原案は当時の伊関（佑二郎）アジア局長が考えたものと言われていますが、最初の日本の方針としては、なるべく無償は少なくして、有償を多くしようというのが基本的なスタンスなわけです。それで、無償一億ドル、有償二億ドルと、そのぐらいから大平さんとしては切り出した。結局、最後のところは、三、二、一でしたかね。これも大平さんとしては、はっきり決めたとは言っていないわけで、これは自分たちの責任で、自分たちのボスを説得しよう、という合意だった。

ただ、僕が渡辺昭夫さん、菊地努さんとインタビューした時は、僕はその時の雰囲気からみて、大平さんと池田さんは外務大臣と総理大臣の関係が緊密であったことが、合意達成を容易にした、というふうな説明をしています。たださつき申し上げたような別のバージョン（解釈）がある。これはやっぱり池田さんという人の端倪すべからざる性格からきたものと考えます。僕の大平さんの側からだけみた、或いは外務省側だけからみたものですので間違っていたのかなとも思っています。伊藤ブーちゃん（伊藤昌哉）の説によると、池田さんは、まず「日中」をやってから「日韓」をやると考えている。他方、大平さんのほうは、「総理、あまり口出ししないでくださいよ」というような調子でやるもんだから、まあ、両者の関係がぎくしゃくしたということも考えられます。僕は本来に外務省側だけからしか見てませんでしたから、官邸側から見たところも考えないと、全体のピクチャーはわからないという気はしてします。

股野 このへんは黒田さんとお話しになったことはありますか。
菊地 ないですね。

股野 一度(笑)。

菊地 そうだね。

股野 黒田さんはどういうふうにもそのへんを思っておられるのか。

菊地 つまり、はっきりしないんですよ(笑)。それで、大野伴陸が結局まとめる形になる。大平さんがやったことは、一応、韓国側とは合意されているわけだけでも、日本側は最終的態度ははっきりさせない。話は戻りますが、大平・金会談を始める前に、大平さんが大野伴陸を訪ねるんです。それで、一応、大野伴陸の了解を得てから、この話を始めようと思ったんでしょね。大野伴陸の事務所が赤坂のなんとかジャパン……。

佐道 ニュージャパン。

菊地 ホテル・ニュージャパンを大平さんは訪ねる。僕は部屋の外で待っていました。ものの二十分ぐらいで大臣が出てきた。帰りの車のなかで、僕は大臣があまり黙りこくっているものだから、この時は珍しく「大臣、どうでした」と聞いたんです。そしたら、大平さんは憮然として、「だめだよ。大野伴陸の隣に渡辺恒雄が座っていたもんだから」と(笑)。

股野 そうですか(笑)。

武田 あり得る話というか(笑)。

菊地 ナベツネさん(渡辺恒雄)の本には、彼は大野伴陸を指南したという事は書いてあるけれども、さすがにこのことは出てません。僕はナベツネさんをよく知っています。外務省ではいちばん親しい方じゃないですか。

井上 朴正熙政権の誕生というのは、どういうふうな受け止め方なんでしょう。

菊地 僕は知りませんね。ただ、いまの韓国のインテリ層、エリート層に「いままでの韓国の大統領のなかで、いちばんいい大統領は誰だと思いますか」と聞きますと、十人のうち七、八人までは「朴正熙だ」と答えるそうです。そういうことはご承知?

武田 いや、初めてです。

菊地 最近、朴政権の評価が高まってきているようです。

佐道 朴政権のあとの大統領は、みんな捕まったりしますし。

菊地 金斗煥とか、盧泰愚とか、金泳三とか、いまの金大中と比較してみても、いかに朴正熙という人は清潔であったか、あの人は歴代の大統領のなかではいちばん「親日」だったんじゃないですか。日本の陸軍士官学校を出たんじゃないのかな。ただ、大平さんは、朴正熙の強権政治というイメージがありましたから、「軍事情権ということとはわかるけれども、どうしてあそこまで強権的な姿勢でなくてはいけなかったのかね」とチラッともらしたことを憶えています。

佐道 大平・金鐘泌会談で一応、道筋がつけられるわけですよ。日韓交渉は、とにかく延々と交渉を繰り返しては、失言問題等があつて。

菊地 六五年(一九六五)までね。

佐道 ええ。いろんな研究をみますと、アメリカ側もなんとか日韓関係がうまくいって欲しいということ、側面からいろいろやると。ただ、やっぱりその請求権問題で、なかなか法的な問題では片がつかなくて、結局、この大平・金鐘泌会談での政治決着というか、政治的な話でなんとかうまく決着をつけようということになると思えますが、こういうふうなまとめ方をしようということについては、大平さんにも、いろんなところからの意見も上がってきたり、意見をされる方もいらつしやつたのかなと思います。

菊地 いや、それは片や大野伴陸からの注文があつて、それは強烈なものです。また、その頃は韓国の回し者みたいなものがあったわけ。その頃の韓国の力はものすごく強かった。いま、アメリカのことをおっしゃったけど、アメリカは日韓関係の正常化を望んだことは事実でしょうが、こと請求権問題について、口を出せる立場にないんです。それはアメリカが日本の植民地であつた

朝鮮半島を占領した時、朝鮮半島にあった日本の財産を、なら日本政府と相談しないで、韓国と北朝鮮に引渡したわけですからね。これは明らかに国際法違反です。

佐道 日本側も、それで、韓国に対する請求という話になるわけですよ。

菊地 そうです。まあ、結果的には、そう悪いことじゃないんだけども。それから、LT貿易があります。LT貿易は十一月。

武田 ちょうど同じ時期ですね。

菊地 大平さんは松村謙三さんらとよく会っていました。岡崎嘉平太さんもよくみえましたが。古井喜実さんを通じて、いろんな情報を取っていたようです。大平さんも一応は張家口なんかに興亜院から行っていたわけですから、一応、中国派と見なされていますし、自分もそう思っていたんじゃないですか。土地勘はあると。佐道 松村さんは官僚嫌いによく言われますけど、別に官僚出身者であれば、みんな嫌いというわけではなくて。

菊地 そうじゃないですよ。同じ政治家同士になればね。だって、池田さん自身が官僚出身なんだから。十一月三十日に第二回日米経済合同委員会がありますね。これは大平さんが団長、関守三郎さんが経済局長だったんですね。それで、僕も当然随行了した。第一回が箱根ですから、これはアメリカでやる最初の日米貿易経済合同委員会でした。当時は、まだ日本は対米貿易赤字で苦しんでいる時ですから、やはり貿易問題とか、それから、アメリカの対日輸入制限は困るとか、こういうことが主たる議題だったと思います。僕が個人的に覚えていることは、このあとのジョイント・コミュニケーションを作る時に、コミュニケーションの作成には、僕は直接は関係ないんだけど、大臣との連絡役というので、ドラフティング（起草）の段階には参加させてもらいました。外務省のものにとつて、コミュニケーションの作成作業というのは最大の仕事のひとつなんです。

■ 国際経済のなかの日本

― ドル防衛・輸入課徴金

菊地 さて、六三年（一九六三）一月、原子力潜水艦ノーチラス号の寄港問題について、ライシャワー大使が大平大臣に申し入れてきた。兵員の休養、補給のために寄港を認めてくれということと言ってきたわけですね。この頃までには、大平大臣とライシャワー大使は、非常に親密な関係になってました。霞友会館でしょっちゅう会っていたという事は、この前お話しした通りです。その一環です。ノーチラス号の場合は、外務省の立場というか、大平さんの立場は、まず、これは原子力といっても、原子力を推進力として使っているもので、原子力兵器とはなんら関係がない。もし放射能漏れの危険があるのならば、それは純粹に科学的に究明すべき問題であると割り切っていました。それを証明するため、安川さんが直筆でもって「危険がない」という論文を書いて、社会党なんかにも全部回した、ということが安川さんの回顧録に出ています。「忘れえぬ思い出」（「忘れ得ぬ思い出」とこれからの日本外交 パールハーバーから半世紀）はなかなかいい本です。彼の経歴と僕の経歴は、かなりオーバーラップしています。もちろん彼のほうがシニアですが……。

股野 安川さんは官房総務参事官ですね。

菊地 官房総務参事官ですね。しかし、この問題を乗り切ったというのは、やはり大平さんの功績だと思えます。当時の社会党はなんでも反対という状況でしたからね。その時、兼重寛九郎先生なんていう日本学術会議議長をやったような大先生を動員して、放射能漏れの危険はないということを説明したわけですね。

それから、利子平衡税の問題はこの前お話ししましたね。何か質問がありますか。

佐道 利子平衡税そのものではないんですが、この前もちょっと

お話しただいたんですけれども、アメリカのドル防衛の問題で、防衛力増強の問題は、この前お話しになりましたけれども、アメリカのドル防衛策と絡んで、日本にはもうお金は出さないと。だから、日本独自でやれという言い方のアメリカが六二年（一九六二）の中盤以降強くなつてくると思います。これは貿易経済合同委員会なんかでどれほどのお話が出たかどうかはわからないんですけれども、安保協議会とか、そこらへんの場では、大平さんもアメリカ側のそういう意向とかはずいぶんお聞きになつたんじゃないかと思いますが、そのへんについては何かご印象に残ることはございますか。

菊地 僕は直接担当ではありませんから、ありませんね。一般論ですけども、アメリカと折衝する場合は、常に国防省はある要求をするだろうけれども、国務省はまた別の考え方を持っているという場合が往々にしてあります。日本としては、やっぱりその点を見きわめてワシントンをにらんで折衝しなければいけない。東京で折衝したら、アメリカ側はもう一本槍で来ますからね。そうではなくて、やっぱりワシントンを使つていろいろ情報を集める。それはイギリスとか、カナダがやつていくことです。そういうやり方を日本ももつとやるべきじゃないでしょうか。そういう防衛費の増額の問題とかでも、片一方では、防衛費の増額は好ましくないという論調も、アメリカにはあるはずですから。

佐道 いまの関連でお伺いします。大使は秘書官として、本省からのいろんな情報も入ってくるのではないかといいことでお聞きしました。さつき国務長官の印象がありましたけれども、どつちかというところ、影が薄いと言つてはなんですかけれども、ケネディ政権の場合は、マクナマラという国防省に燦然と輝く人がいて、彼が取り仕切つてやっているわけですね。そのケネディ政権の内幕をみても、ラスクとマクナマラというところ、どつちかというところ、マクナマラのほうが中心で、それをまた取り巻くいろんな人もいる

という状況のなかで、アメリカの対日政策でも、大使がお話しになつたように、国務省と国防省のせめぎあいがあるというやつてお聞きしたいと思います。こういう状況の時に、両方みても両方の様子を見ながらやるというのは当然のことだと思えますが、例えばケネディ政権の対日政策というふうな場合に、外務省の場合、完全にカウンタートパートは国務省になると思いますが、国務省の意見がだいぶ活かされているとか、そういう感じ方をするといいことはおありでしたか。

菊地 確かにおっしゃる通りに、ラスクがトップでは、国務省は弱いという印象を与えますけれども、あの当時の国務省の実力者は、実はラスクではなくて、ジョージ・ボールだったんです。ジョージ・ボールのほうがケネディ大統領やそのあとのジョンソン大統領にずっと近い。ですから、あまりラスクのことには問題にしないでいい。当時の「ケネディ一家」というのは、ラスク、ジョージ・ボール、マクナマラ、それから、もつと強力なのはハワイ・ハウスのマクジョージ・バンディ（安全保障担当補佐官）。これがケネディの最も近くで最も強力なスタッフです。さらに超弩級はロバート・ケネディです。彼は司法長官だけでも、実際は兄さんを補佐する最大のポリシューメーカーだった。こういうベスト・アンド・ブライテスト（エリート集団）がそこへ集まつていたわけです。そのうち、マクナマラ国防長官はフォードの社長からなつた人ですから、別に軍部でもなんでもない。どつちかというところ、産業界であり、国務省に近いような戦略的のものを見る人で、合理主義者（「天才児」の一人）です。だから、マクナマラは軍部、国防省を代表したとみるのは当たらない。確かに、ベトナム戦争なんかを遂行したのはマクナマラですけど、彼自身、回顧録で反省しているように、まったく迷いに迷いながら、投入兵力を拡大し、結果的には状況判断を誤つたわけです。

佐道 それはそうですね。

菊地 あの頃の歴史は非常にもしろい。この前から話している「サーティーン・デイズ」とか、そのほかの本を読んでも、五人か六人かのポリシューメーカーがホワイトハウスで議論を交わしている。ケネディ自身も議論する。キューバ危機を中心にして、もしキューバに対し、エアストライク（空爆）をやったら、ソ連はどうするか。おそらくソ連としては、トルコにあるアメリカのジューピター・ミサイルを攻撃するだろう。それから、ベルリン封鎖をもう一度やるだろうということとか、そういう世界的な、そこそ宇宙的なタイムメンション（次元）で、戦略を考えてるわけでしょう。それは、とつてもラスク一人では手に負えないしろものです。

それから、今度は二度目の訪欧のほうへ行つていいですか。
股野 その前に、大使の一般的なご記憶でいいんですが、利子平衡税の問題に関連しまして、ちょうどこの頃、日本経済がかなり戦後の窮迫期を脱して、だんだんと国際的な力をつけつつあった。確か、六三年（一九六三）、日本が国際収支を理由とする貿易制限を行わない。

菊地 八条国になった？

股野 ガット十一条国への移行をしたと。それから、OECD加盟のために、日本が外交努力をする。加盟は正式には六四年（一九六四）の四月末ですが、六三年中にかんがりの話が進んだ。

菊地 あれは合意はされていたんだね。

股野 そういう状況で、日本の国際経済のなかにおけるポジションみたいなのは、当時どんなふう感じておられましたか。

菊地 あの時は、日本は高度成長の最中なんですね。六二年、六四年というのは成長の加速がついた時期です。六五年（一九六五）になって、対米貿易が初めて黒字になるのです。それに対応してアメリカの輸入制限の動きが起きる。それで、アメリカのドル防衛に直面するわけです、これは石にかじりついて、アメリカと

の関係をよくしながら、ドル外貨をいかにして稼ぐかということが当時の最大の課題です。当時は池田さんを中心とする産業界——奥村綱雄とか、そういう人達、それから、四天王と言われる人達が集まって、専ら対米工作を考えた。利子平衡税の時などは、奥村綱雄さんあたりが官邸まで押し掛けてきて、大平さんが持つていく池田首相の親書内容の相談に加わる。それほど強力なインパクトがあったのです。これはなんとかしなくてはいかんということ、その後免除枠をもらうと。しかも、免除枠はなんと一億ドル。その頃の人にしてみれば、一億ドルというのは大変な額だったんですね。これはまさに金融界、証券界と政府が密着して、産業界にはどんだん金を回す。日本開発銀行を中心として民間に資金を流し、産業界の活性化を図る、輸出産業を振興するということではないでしょうか。まさに大人になりつつある日本経済でした。また、六八年（一九六八）には、日本はもう世界第二の大国になつちやうわけです。ですから、十年間で所得倍増というのを七年もかからないで、達成しちゃった。

■北欧三国公式訪問

—英国貴族の趣味にふれる

菊地 大平大臣の二度目の訪欧（一九六三年）のポイントは、日本の外務大臣として初めて北欧三国を公式訪問したことです。明治以来、日本の外務大臣は公式に北欧三国を訪問したことがなかった。初めてスウェーデン、ノルウェー、デンマークへ公式訪問をした。フィンランドへは割愛した。フィンランドの大使は小島太作さん、この人は大平さんと一橋大で同期なんです。大臣はストックホルムからヘルシンキに電話をしました。

武田 北欧三国を選ばれた理由というのは何かあるんですか。

菊地 行ったことがないということ、やっぱり初物食いの類いで

しょうね(笑)。

佐道 訪欧というのは純然たる親善訪問ということですか。

菊地 親善訪問もありますが、英国のロード・ヒューム外相がその前に来日してまして、その答礼という意味があつて招待で行つたその途中の立ち寄り訪問になります。英国は答礼訪問ということですよ。

これは学者先生方にはあまり興味がないけども、この時にロード・ヒューム外相のスコットランドの山荘へ招ばれてまして、そこで、いわゆるグラウス・シューテイングをやつたことは前におられました。日本の外務大臣が、英国の貴族趣味の最高峰であるハンティングとか、シューテイングに招待された。ホストは、アール・ヒューム、十四代目の伯爵。スコットランドでは大変な名門なんです。この人がメインズビルというところに広大な領地を持つてました。見渡す限り彼の領地なわけです。それで、その山荘(コテージ)なるところへ泊まつただけでも、「コテージ」とは称していましたが、実際は大きい家でした。そこで日英外相会談をやりました。その時、ロード・ヒュームの補佐役は、あとから香港総督になつたマクルホーズ・アジア太平洋担当外務次官補、秘書官がロード・ブリッジズという若い外交官でした。この人は、あとからシエルパになつて再会した。わが方は法眼(晋作)欧亜局長。もうその時は欧亜局(欧州参事官室から欧亜局になつたのは一九五七年)になつてました。日英外相会談では、いわゆるトゥールドリゾンといいますが、世界情勢全般について話し合ひをしました。グラウス・シューテイングは、あまり経験をした人はないでしょうから。

武田 ないですね。

菊地 ちょっとお話をしますと、われわれ一行みんな鉄砲を持つて、朝早く出掛けた。日本を出発する前に、大平夫人が心配して下さつて、シューテイングの服装からその他万般気を使つて下さ

つた。まあ、ハンティング帽ぐらいは知っているけれども、そのほかの服装はどうかと。ニッカーボッカーを履かないといかのかとかいろいろ聞きました。僕は麴町の一口坂にある日本狩猟協会まで出かけて行つて、いろいろシューテイングのことを教えてもらいました。僕の親父が好きでして、よく雉かなんかを取つてきたのを子ども心に知つてました。大平夫人が大平さんのシューテイングのための服装一切を、それこそツイードの服装でもつて一式揃える……。僕までいろいろ作つていただきました。

現場では、手前側にわれわれがずつと猟銃を持つて待ち構える。大きな原っぱです。遠い向こうは丘陵になつていて、地平線に連つている。ややつて、その地平線上に、いわゆる四、五十人ぐらゐの「ビーターズ」と称する勢子が一人、二人と姿を現わし、遂に横一線になりドーツと押し寄せてくる。その勢子達とわれわれの間に、グラウスが草むらに潜んでいるのです。そのビーターズがだんだんわれわれとの間の距離を狭めていくと、そのグラウスが一斉に飛び立つ。飛び立つたところを、こちらが待ち構えて撃つわけです。軍隊の経験のある人なら知つてますけど、射撃は横に飛んでいるものを撃つよりも、真つ直ぐ自分に向つて飛んでくるのを撃つのがいちばん命中する。僕は一匹ぐらい当たつたのかな。大平さんはゼロ。その時は僕は知らなかつただけで、一緒に行った大野勝巳駐英大使は鳥撃ちの名人らしいんです。三羽ぐらいしとめていました。一方、そのロード・ヒュームと、その令息のダグラス君は十羽近くの獲物をしとめていました。

それが終わりました。今度はそれを料理するのに、いわゆるコテージのあるところへ戻る。ステーションワゴンだったけど、途中、ヒースの茂つた荒野ですから、じめじめした泥濘がある。その泥濘に、われわれのワゴン車はまりこみ、全然動かなくなつちやつた。そうしたら、ちょうどそこへさつき勢子の連中が、仕事が終わつて帰つて来たんで、引上げを手伝つてもらつた。ロー

ド・ヒュームは、十六世紀の古の伯爵よろしく、大号令をかける。で、「オール、ピーターズ！」。すると、勢子たちはブーツと車を持ち上げる。また「オール、ピーターズ！」。グラウス・シューティングのとんだエンディングでした。

佐道 その時に作ったハンティング用の衣裳を着る機会は。

菊地 えー、普段の時にも着ました。普通のツイードの洋服です。

佐道 大平さんにとつても、その時が唯一の経験でしょうね。

菊地 それは大臣にとつても人生最良の日の一つじゃないですか。

股野 ブーツを履かれましたか。

菊地 ブーツを履かないと、大変なんです。九月でしたけど、寒かったです。スコットランドの秋は。

佐道 さきほど、話題が世界情勢の全般にわたってというお話でしたが、ヒュームさんはどういうことを話題に出されますか。

菊地 その時の話題は、基本的には経済問題でした。ちょうどイギリスが五六年（一九五六）ですか、スエズ以东から撤退して、アジアに対する政策を、将来どういうふうに展開していくかという事で、マクルホーズあたりの知恵者たちが、イギリスのアジア・中近東政策というものを策定していた時です。それから、彼らは香港の話は非常に興味を持っていて、香港の話が出たように憶えています。

佐道 大陸、中国のことは。

菊地 中国のことも出ました。トゥールドリゾンですから、その時間問題になっていたことは全部出ました。

■ 中共との摩擦

武田 ちょうどフランスが中共を承認する時ですね。

菊地 そうですね。そうそう。中共承認の問題は大きかったんで

す。イギリスは中共をとくに承認していた。いろんな意見が交わされた。その時、法眼（晋作）局長は「日本は違うんだ。アメリカとの関係もあるし、共産政権は認められない」というようなことをはつきりと言っていました。法眼さんは大の反共論者ですからね。ところが、皮肉なことに、その法眼さんが次官の時に、日中（国交）正常化するんですね。萩原（徹）さんみたいな皮肉屋さんは、「法眼君はいつから中国通になったんだ」と言っていて冷かしていました。

佐道 法眼さんは後年は反ソは貫かれましたけど、中国に対しては、だいぶ親中になられたということ。

菊地 それで、萩原さんの皮肉になるのです。

武田 そのあとは国連でしょうかね。

菊地 ビニロン・ブランドの対中輸出問題が起きるわけです。対中輸銀融資が八月から始まる。それに台湾が抗議する。日台関係が悪化して、張厲生大使が本国へ召還される。国連総会では大平外相は一般討論の演説をやった。この時は文句なしに日本語でやりました。一般討論では、諸国家の相互依存を説いたと思います。それで、部分核停条約を支持した。当時、案外新聞なんかは書きませんでしたけど、自民党の右翼には、これに日本が入ることに反対という意見があった。外務省のなかにも、曾野明情文（情報文化）局長などは「これは様子をみたほうがいい」と、時期尚早論を唱えた。新聞は全部賛成。この国連総会（九月十五日から二二日）は、概して静かな総会だったと形容されています。

周鴻慶事件が十月七日にもち上がる。これは周鴻慶という中国人が、油圧機械見本市というのが開かれた時に通訳として来日し、終わった時に在京のソ連大使館に亡命を求めた。ソ連大使館は、ことは面倒になっちゃいかんというので、警視庁に周鴻慶を突き出すと。周鴻慶は亡命を求めたわけですから、まず、本人の意思を確かめることが第一。最初は台湾に行きたいということ saying

た。それじゃ、亡命条約の精神に基づいて、本人の意思を尊重し台湾に送るべしということで決まりかけた。周鴻慶事件については、外務省のなかではこの問題を非常に重大視して、大平さんもこれで日中、日台関係が破局になってはいかんというので——というの、その前に長崎国旗事件がありますから——非常に心配しました。大臣室で連日のように会議を開いた。あの頃の雰囲気からすれば、これで国運が左右されるんじゃないかというぐらいの緊迫感がありました。結局、周鴻慶はふらふらして、中共へ帰るといふようなことを言い出した。それで中国へ帰した。あれは翌年になっちゃったんじゃないかな。

武田 そうですね。昭和三十九年（一九六四）に。

菊地 僕の日記によると、その次に来るのが総選挙です。そこで、池田自民党が大勝するんですね。僕も大平さんの選挙運動について行った。

そうするうちに、ケネディが暗殺されて、大平大臣は急遽、葬儀に参列した。あれはまったく葬儀出席だけの訪米で大統領などには会ってないでしょう？ 帰りにホノルルへ寄って、池田さんは国内では「ゴルフはやりません」と言っていたもんだから、ホノルルでゴルフをやった（笑）。池田さんと大平さんと黒田さんと僕と四人で。これが池田さんの唯一の公約破りのゴルフでした。

その時、勲章問題というのがありました。これは下世話な話なんですけども、外務省としては、プロトコール（外交儀礼）上の失敗談で、名譽な話でもないものです。事の始まりは葬儀に参列する時の服装が、勲章佩用ということで在米大使館から言ってきた。モーニングコート・ウイズ・デコレーションズという招待です。モーニングにデコレーションというのはあまり聞いたことがないので、おかしいなとは思いました。僕は、「こういうことはありませんから、モーニングだけでいいんですよ」と言っ出て掛けた。シアトルに着きましたら、また電報で、外務省のプロトコールに

確かめたところ、やはり勲章佩用だということです。しようがないんで、わざわざ本省へ電報を打って、ワシントンまで大平大臣の勲章を届けさせた。その頃までには、大平さんはだいたい外国から勲章をもらっていた。式場には大平さんは勲章をつけて行った。いよいよ現場に着く。池田さんは勲章をつけていない。武内（龍次）大使も。他国の元首級も。アーリントン墓地へ近づくにつれて、ものすごい長蛇の列で、全然アクセスができない。それで皆、車から降りて歩き出したわけです。大平さんは胸を外套で隠しながら歩いて事なきを得た。僕は「外務省はプロトコールの専門家みたいなことを言っているが、こういう失態をしまして、大変相済みません」と謝りました。大臣は何も言いませんでした。

こういう場合は、ほかの国はどうするんだということをやっぱり確かめないといけないですよ。勲章事件というのは、あなたは知らないでしょう。

股野 これは知りませんでした。

菊地 まあ、椿事の部類ですな。

■ 大平外相の新機軸

菊地 六四年（一九六四）。第三次池田内閣が十二月で、大平さんは外相留任と。アデナワー西独首相が亡くなる。ケネディの死後ジョンソン大統領ですね。中国は「四人組」の主導になる時期です。

ちなみに大平さんは、外務大臣として、従来の大臣と違うところが二つありました。一つは、従来の外務大臣は、在京の大使館の国際日のレセプションとかディナーには原則として招待を受けなかったんです。例外的に、アメリカ大使館には行った外務大臣はいると思いますが……。ところが、大平大臣は各国の国際日の

レセプションには、体のあいている限り出席されたんです。これには外務省の儀典課は若干当惑しました。というのは、それまで外務大臣が各国の国際日には出ないという慣例をつくったのは、ある国へ出て、ある国へ出ないということになると、プロトコール（外交儀礼）上の問題になるという理由でした。ですから、政務次官は出席しても構わないけど、大臣は原則として出ないということにしていたんです。ところが、大平さんはそういうのは平気なんです。とにかく体があいている限り出ますよと言言されて、よく出られました。パーティーでは、各国の大使が大臣のところに寄ってくる。それに対して、僕が通訳することもありましたけど、僕はなるべく大臣から離れて、大臣に英会話の練習をする機会をもってもらおうと思った。大臣は六四年の一月、初めてソ連大使館のディナーに出席したんです。これはおそらく外務大臣としては初めじゃないかと思えます。向こうから国賓が来た時のお返しなどのディナーは別だけでも。

もう一つは、大平大臣にはなるべく省員と接触してもらおうと計画しました。僕の勝手な、独断と偏見で選ばせてもらった各課長クラスの論客を、大臣に赤坂あたりに招んでもらった。僕は秘書官の職権を乱用して、課長連中が大臣に意見を言う機会を作ることにしたのです。大平大臣も非常に喜んでくれました。大平さんも役人あがりですから、そういうのは非常に好きなんです。外務省の幹部食堂に、大平さんが昼食会の約束のない時は、そこへお連れしたことは前にお話ししました。

佐道 さきほど菊地大使が選ばれた外務省の課長クラスとというのは、お差し支えなければ、どういう方々でしょうか。
菊地 僕がはつきり覚えているのは、鈴木干夫。岡田晃、彼は中国通ですね。ことに鈴木干夫さんは経済局スターリン課長をやっていたので、ちょうど日英通商航海条約があがった時です。で、ご苦労さんということの名義にして、スターリン課の事務官を含

めて大臣に招んでもらった。そういうことは秘書官が気を利かせれば、簡単にできることなんです。

第三回の貿易経済合同委員会。前の年の会議は取消しになった。ケネディが暗殺されたので、米側閣僚は全員、途中で引き返した。それで、その翌年の一月に京都で大平議長司会のもとに、第三回日米経済貿易合同委員会が開かれました。米側の閣僚が全部やって来た。その時に大平・ラスク会談というのが、白金の外相公邸で開催された。この大平・ラスク会談では何を話したという記録は何かありますか？僕はほとんど記憶はありません。おそらく中国問題、その頃、国務省はラスク、それから、ハリマン・アジア担当国務次官補あたりは、日本のLT貿易を気にしていた時ですから、そういう話が出たかもしれません。

大平大臣は白金の公邸、藤山愛一郎さんの旧邸をずっと使っていました。僕はあそこに何回通ったことか。後で出てくるマフィリンドの四国会談もあそこでやったんです。

国連における中国代表権の問題について、国会で穂積七郎議員の質問に答えて、例の「中国が国際社会においてブレッシングを得られるようになったら、日本もなんらかの決心をしなければなりません」と答弁したという話はこの前申しました。それから、日韓の正式会談が三月に始まる。五月にはライシャワー大使が青年に刺されて、大平さんがライシャワーさんを虎の門病院にお見舞いした。第一回のUNCTAD（国連貿易開発会議）がジュネーブで開かれた。四月には、前に言った、日本はIMF八条国に移行して、OECD（経済協力開発機構）に正式に加盟しました。それから、第一回の日仏定期協議とというのがありました。その時、ポンピドゥー大統領とクワヴドミュルヴィル外相の両方が来日した。この時に通訳をやったのが川口（洋）君です。彼のフランス語は抜群でした。それから、その頃の来訪者としては、ソ連のミコヤン副首相。ミコヤンというじいさんはアルメニア人で、なん

かダーティなジョークを飛ばしていました。

この頃、経済問題では、前出のUNCTAD第一回会議で、朝海大使代表が会議終了後、日本に立ち寄り、経済閣僚会議の席上、国民所得の1%を対外援助に向けることとか、コービーとかの一次産品の関税撤廃の日本提案を説明した事になってます。

■戦後アジア外交ービルマ・インドネシア

菊地 それから、ビルマの賠償問題に関する交渉経緯。これは、僕としては一つの思い出があるんですが、あれは六三年（一九六三）じゃなかったかな。ちよつと戻ります。

武田 そうです。

菊地 オリジナルな対ビルマ賠償協定には、再検討条項というのがついていました。これは、ビルマは一九五四年に他にさきがけて日本との賠償協定に署名してくれたんです。ビルマは署名の際に、ほかの国がビルマよりもいい条件で妥協する場合は再検討してくれという再検討条項を入れていたんです。インドネシアとか、フィリピンとか、全部終わったものですから、ビルマのアウンジー將軍という人が来日しまして、「（追加賠償要求の）再検討をしてくれ」ということを言ってきた。これは白金公邸で大平大臣が自分で交渉したんです。これは非常に珍しいケースです。ちょうど大平・金会談で日韓請求権問題を交渉した伝でもないんですが、ビルマとの再検討条項に基づく賠償交渉をご自分でおやりになった。

第一回の交渉を終えて、その時はまとまらなかった。帰りの車のなかで、「どうでしたか」と言ったら、「いやあ、あのアウンジー將軍というのは、全然経済のことがわかっていない。本当に説得に困ったよ」というようなことを言うんです。結局、まとまらなかったんです。そこで、僕は初めて大臣に意見らしい意見を述

べた。「大臣、日本にはビルマ・ファンは非常に多い。社会党の中にも、非常にビルマを好きな人がいるので、ここでビルマにある程度譲って協定を結んでも、国会審議では褒めこそすれ、批判する人はいませんよ。確かに大臣のおっしゃるように、相手はわからず屋かもしれないけど、こういう問題では、日本ができるだけの譲歩をして合意したほうが得策かと思えます」と申し上げたんです。そして、大臣は黙って聞いた後、「それじゃ、宇山（厚）君に言っておけ」と言うんです。僕はそのまま、宇山参事官、当時アジア局参事官に、「大臣が折れるかもしれないから、とにかく折れやすいような案を出してください」と頼んだ。それで、結局、まとまったんです。アウンジー將軍というのは、名前を聞いたことがあります？彼はビルマ陸軍のブリガディア・ジェネラル（准将）なんです。彼はネーウィン大統領の子飼いで、当時ビルマ政界のホープと見られていた。本当に軍人らしい軍人でした。その後、アウンジーさんはネーウィンにうとまれ失脚して、坊さんになってお寺に入っちゃった。ネーウィンが失脚した後、またちよつと出てきたようです。いまでも、ミャンマーへ行きますと、「私はアウンジー將軍を知ってますよ」と言うと、みんなが「ああ、あの人はいい人だった」と言います。

結局、1・4億ドルの無償と八千万ドルの有償援助でまとまった。大平さんが自ら手がけた交渉でした。

最後は、大平外相に随行してネール首相の葬儀に行きました。ネールさんが亡くなったというニュースが入る。ところが、いまのように政府専用機がない。いちばん早い飛行機便で、香港乗り継ぎで大急ぎで行ったけれども、結局、ネールさんの葬儀には間に合わなかった。翌日のコンGRES・パーティの大集会には出席したんです。あそこは火葬ですから、英語でパイヤー（茶毘用薪）というのかな。焚いた跡が残ってました。そこで拝みました。ラスク長官とか、コスイギンソ連首相なんていうのは、ちゃんと問

に合つて、前日の葬式に出ている。

最後にマフィリンド(MAPHILIND)ですけども、結果としては、インドネシアのスカルノ大統領が降りたような形で、一件落着とまではいかないんですけども、何とかけりがついた。あれは股野さんのほうが詳しいかもしれませんが。六五年(一九六五)の九月三十日、スカルノが失脚するわけです。ただ、これは日本の例えば外務省アジア局あたりとしては、戦後十何年間たつてはじめて対アジア外交で、純粹に政治絡みの外交として始めたことなんです。スカルノさんは非常に親日的なもので、日本はスカルノとはツーツーだということで、工作を調停しようとした。ただ、スカルノさんの方はスバドリオとか、ものすごい共産主義者が背後にいましたから、スカルノさんの思い通りにはいけません。スカルノさんが来日する度に、大平さんは赤坂とか、新橋にお招びして接待していました。その話はしましたね。

武田 いや、まだですね。

菊地 僕はスカルノさんとは宴席で二、三回ご一緒しましたけど、本当に豪放磊落な人でした。あの人はバンドン大学の建築科の出身です。絵もうまくて、よく赤坂の料亭なんかでキャンパスを持ってこさせて、似顔絵だとか、いろんな絵を描いてました。その時の通訳をしたのが永井重信なんだ。外務省には、バハサ・インドネシア専門家のよき伝統がある。その時のスカルノさんは、インドネシア建国の父と言われるだけはあるなと思つてました。外務省では、斎藤鎮男さん(司政官)がスカルノと日本の占領中から非常に親しい。それから、もう一人は黄田多喜夫さん。黄田多喜夫さんは、例のデビ夫人なんかを世話した。スカルノと日本との関係というのは、日本の戦後アジア外交の一コマですよ。

■一九六〇年代の日米関係 —ダメージコントロールの手法

菊地 時間が来たけども、あと十分ぐらいいいかしら。大平大臣のことで皆さんはどういうことを知りたいですか。僕からべらべらしゃべつてもしょうがないだろうから。

井上 六〇年代の初めの頃の日本外交のイメージというのは、要するに、対米協調一辺倒で、ほかの外交というのが対米外交の従属変数として出てくるというイメージなんです。きょうのお話を伺うと、ヨーロッパにおいても、世界のあらゆる問題を議論したというようなお話ですとか、韓国の朴正熙との関係ですとか、スカルノとの関係、アジアとの関係についても、少なくともアメリカとの外交だけではなくて、別の次元のヨーロッパやアジアを舞台とした外交というのがもう少しあつたようにも思えます。そうすると、単純にアメリカとの外交から導き出されてきて、ヨーロッパではこうだとか、あるいはアメリカとの関係があるから、アジアとの関係はこうだというのはないんだとすれば、それはどういふことなのかと思ひました。一つは、日韓交渉のことで思ひましたのは、普通は冷戦の論理というのがあつて、アメリカにとつては、「アジアにおける同じ西側陣営が」こういう問題で対立してはいけぬから、なるべく中に入つてまとめようとした。しかしながら、今日のお話ですと、むしろ日本側は非常に法律的に合理的に戦後処理の仕方をどうやっていくかということについて、冷戦の論理のような政治的な考慮よりは、もっと法律的な観点からきちつと処理していこうということだったのかなというふうにも受け止めました。わりと六〇年代前半の日本外交というところ、あまり研究者としては、いま一つ魅力に乏しいというところであらなすけれども、やや空白みたいな部分があるものから、今日、やや断片的には、実際はそうではなかつたと受け止

められたものですから、大平外交というのは対米協調だとは思ってすけれども、それとヨーロッパとアジアとの関係というのはどういふふうにつながっていたのかなということでも何かお話しただければと思います。

菊地 いまの井上先生のディスクリプション(叙述)は正しいんだと思います。僕が何度も言うように、六〇年代というのは、何ととっても、六〇年の安保騒動のあとの調整期なものですから、何か特別な問題が起きた場合に、その問題の余波をなるべく早く収めようと、僕はよくダメージコントロールという言葉を使っていますけれども、ダメージコントロールなんです。過去のダメージをコントロールし、将来の問題の暴発を予防すると。そういう意味で、日米経済貿易合同委員会というのは非常に大きな役割をした。それで、外務省・国務省主導のラインで、だいたい収めていったと。ですから、六〇年代というのは確かに退屈かもしれない。それは過去の傷を癒すというような感じで、アメリカもなかなかびつくり、日本もおっかなびつくりで相手と付き合う。他方、日本の経済がだんだん強くなってきて、中国市場にもどうも出ていきそうだと。これは、アメリカの財界、実業界にとっては、脅威なんです。

そこで、大平さんですけれども、確かに大平さんは、この前からずっと申し上げているように、本当に対米協調というのを至上の外交命題としていたわけです。ただ、外務大臣ですから、アメリカだけを相手にしているわけにいかない、さっき言ったヨーロッパもアジアも取り上げるわけです。それでも、やはり基本はアメリカとの関係をちゃんと握っておけば大丈夫ということをやっていたんだと思います。実際に、彼の姿勢に変化が起きたのは、第一次の外務大臣の時じゃなくて、第二次の外務大臣の時で、日中関係に踏み込むようになり、国内の右翼からは、「大平さんは左寄りだ。中国シンパだ」というふうに言われ、台湾派からもの

すごい攻撃を受ける。脅かされませんでしたわけです。本当に身の危険も感じたぐらい。

■大平政策研究会について

菊地 これは後のことですが、大平さんは政調会長を経て、幹事長になり、それから、いわゆる総理準備時代になりますと、佐藤誠三郎とかが中心になって、九つの大平政策研究会を作るわけです。そこから出てきたのは、こう言っては叱られるかもしれないけれども、大風呂敷です。かつて佐藤総理が「沖繩返還がなければ、日本の戦後は終わらない」と言った時、大平さんは、「政治なんていうのは、スローガンを掲げてやるもんじゃないよ」と冷やかに眺めていた。それが、御自身が九つもスローガンを掲げるといふことになった。個人的には、僕なんかは、これは僕の知っている「大平さん」じゃないなというふうな感じを持った。さはさりながら、彼としては総理心得として、政策、処方箋を発表するということは当然だった。それで、外交問題では、佐藤誠三郎他が中心になってやった。山本一平や、浅利慶太も顔を出した。実際の事務局は、森田一君(総理大臣秘書官)と、長富祐一郎、この森田・長富ラインで先生方を集めてきて、大平首相の「イメージ・メイキング」(イメージ作り)を兼ねた大構想の発表となった。大平さん自身が実際どう思っていたかは、僕は聞く術もなかったです。その頃はもう、ほとんど大平さんとの僕の接触は、シエルパ(サミットの個人代表)としての接触しかありませんでした。また、僕はそういうふうには自らを限定していません。そこへ出てきたのは、「環太平洋連帯構想」であり、「総合安全保障」、「文化の時代」、「地方の時代」、「田園都市構想」だとか、続々と発表されました。僕は大平さん自身の考えが変化したのかどうかは知らないけれども、与えるイメージとしては、後半になって変化

してきたように思います。

大平さんも八〇年代には、ああいう状況になり、僕はゆつくりお会いする機会はなくなつた。七九年（一九七九）に、イランの人質事件が起きたでしょう。あれでカーター大統領というのが出てきて、彼は非常に窮地に立たされたんです。たまたま大平大臣も、七八年の十二月に総理になつた。それで、訪米して、カーターが悩んでいる姿をみて、これだけ世界の責任を一身に担っているアメリカが、これだけ世界から期待されているなかで、非常に苦悩しているのを見て、いたく同情した。カーター大統領に対して、本当に親身になつて、日本はなんでも協力するからというようになことを言う。これはまさしく大平さんらしいところなんです。「クリスチャン大平」の真骨頂かどうか知りませんが。そこで、僕に言わせれば、本来の大平さんがまた出てくる。そこで日本の総理として初めて、「日米同盟」、同盟（アライアンス）という言葉を使って、アメリカをバックアップする。それまでは、日米同盟という言葉は、自民党にとつても特に禁句だつた。そんなことを言つたら、それこそ社会党に唾みつかれますからね。それを大平さんは敢えて「同盟」という言葉を使った。どういうわけか日本の新聞はそれを問題にしない。

そういう意味では、大平さんという人は、新聞操作と云つては悪いけども、新聞との関係が非常によかつた。アメリカ式に言えば、「He had a good press」というやつです。少なくとも外交問題に関しては、大平さんはグッド・プレスなんです。例えばモスクワオリンピックのボイコットが八〇年（一九八〇）です。あれも他の総理があんなことをやつたら、「なんだ。政治とスポーツを混同するのか」とか言つて、新聞はワーワー言うはずですよ。世論もそうだったろうと思います。これは、いかに大平さんがグッド・プレスだったかの証左です。グッド・プレスを持つような、大平さんはそういうナツク（こつ）というか、そういう術を心得

ていた。僕の見るところ、それは極めて簡単なんです。ものごとは早く決断して、早く発表する。新聞にあーだ、こうだと憶測する機会を与えないこと。それがグッド・プレスを持ついちばんの秘訣なんです。新聞というのは、特ダネを取るのが新聞記者のねらいですからね。決めないうちは、こうなるだろう、ああなるだろうといういろいろ憶測記事を書く。当たれば社長賞なんかをもらうわけでしょう。ですから、それを初めから封じてしまえばいい。そういう意味では、大平さんは「あー」、「うー」だとかなんとか言われてましたけど、決断する時は早かつたです。

■大平正芳の人物論・政治思想

菊地　ここで大平さんの人物論をちよつとまとめて申し上げると、僕は、大平さんの日常生活まで何もかも知る立場にあつたものです。僕は渡辺昭夫先生にブリーフしましたが、彼は、大平さんという人は決して単純な人じゃない。ものすごい複雑系の人だといふふうなことを書いています。ものすごく多面性を持つている。これは大平さんの盟友の伊東正義さんの言葉ですけども、「大平君は西洋的な合理主義と、東洋的な義理と人情をミックスしたような男だ」と。これはまさに言いつて妙だと思えます。さきほど話したように、案件処理には非常に「ザツハリヒ」（即物的）に西洋的合理主義ですよ。他方、義理人情の世界では、例えばキリスト教的な慈善事業をやるとか、安岡正篤を師と仰ぎ、東洋的な哲学を非常に信奉している、それに加えて西田哲学への傾倒といつたぐあいです。それから、彼は「プロセスが大事だよ」とか、そんな彼の言い方、それは老荘の哲学かもしれない。それから、ある意味では運命論者ですらある。池田総理が辞める時に、彼は明らかに幹事長を狙つていたわけですが、三木さんにさらわれる。佐藤内閣の時に通産大臣に拾われたけども、すぐ例の繊維問題で

佐藤総理に首を切られ、その後任に、人もあろうに、宮沢喜一と。この一連の有為転変を、彼はどう受け止めたか。

シュミット西独首相が大平さんを評して、「わかりにくい人物だ。しかし、考え方には何か深いものを感じさせる」と評したと。これは、佐藤嘉恭君が書いていることです。これも的を得ている見方じゃないかと思えます。中曽根さんは、「大平政治はわかりにくい」と言ってます。わかりにくいということは、単純じゃないということなんです。大平さんという人には哲人政治家だとか、いろんな褒め言葉があります。しかし、非常に複雑な、西田哲学を信奉しているような人です。勇ましい姿勢は好きじゃない。またいたずらに干渉しない。政治思想としては、彼は非常にはつきりした「スモール・ガバメント」の信奉者だった。僕が最初にお会いした時から、自分はスモール・ガバメントがよいと言っていました。彼が通産大臣になって、最初に省員に訓示したことは、「これからは民間主導でいってもらう。余計な行政指導はやめてもらいたい」とはつきり言った。通産官僚がびつくりするようなことを言う。スモール・ガバメントというのは、無闇に政府が口出しするのはやめたほうがいいということです。それから、財政のデイシプリン、フィスカル・デイシプリン（財政規律）というものを非常にオーソドックスに信奉していました。（消費税の導入の必要性。）

最後はああいう状況だったので不運な人だという感じもある。彼が最も忌み嫌ったと思うような四十日間抗争、それから、例の福田さんとの密約とか、ああいうのがいろいろ出てくると、中曽根さんでなくても、大平政治というのはわかりにくいということになるのかもしれない。他方、非常に大胆なところもあって、一般消費税の導入を言い出しました。大平さんの屍を越えて、竹下総理の時に付加価値税というものができたわけです。だから、大平さんというのは、布石を置き処方箋を書くことをした人じゃ

ないんでしょか。

最後に、外交の姿勢に関して、大平さんのやった外交で、本当に成功したのは日中（国交）正常化だけなんです。そのほかのことは……彼は交渉を始めたなら是非まとめなくちゃいかなというようなスタイルじゃありませんでした。まとまらないなら、まとまらなくてもいいじゃないかと。例えばあとから申し上げますけど、メキシコとの原油の交渉の時も、相手が応じてくれないというなら、無理はしない。よく日本の政治家というのは、自分の面目をかけても、交渉を一旦開始したら、なんとしてもまとめなくてはいかんということがありますが、そういう気負いは大平さんにはなかったと思います。この点、僕はとても尊敬しました。というのは、外務省の連中の中にも、一旦交渉を始めたら、絶対まとめにやいかんと思つて、目茶苦茶折れようとしたりする。政治家はことにそうです。鈴木宗男でなくてもね。大平さんは、できないものではない。できるものではない。それは外交の常道です。以上です。ご質問があったら、お答えします。

佐道 いまの人物論も大変おもしろかったです。大平さんという方は、後に総理大臣になれるわけで、そういう目で、前の実績もついつい見えてしまいますが、その時期に、外務大臣をやられて、そのあと、また田中内閣の外務大臣をやられて。

菊地 七二年（一九七二）から七四年（一九七四）まで。

佐道 前回のお話にもありましたけども、まだ若い時期に、どつちかというところ、当選五回とか六回ですから抜擢ということだと思います。官房長官からなられたのですから、もちろん宏池会のなかでは大きい位置を占めておられたとはいえ、そのあとの宏池会の跡継ぎになるかどうかというのは、もちろんまだまだ何もわからない状況です。そのなかで、こうやって外務大臣を一所懸命務められた。そこで、後に大使が大平さんから「外交の指南役」だったと言われるような非常に密接な関係を築かれたわけですね。

れども、この時期の大平さんと、それから、七〇年代田中内閣時代の大平さんと比べて、さつき日中をやられて、本当に変化があったというお話だったんですけど、例えば外務大臣として外務省を統括するとか、そういうところで何か変化があったとか、あるいはこの時期に非常にいい経験をされたとか、そういうことで何か印象に残っておられますか。

菊地 ありませんね。その頃は、外務大臣が組織としての外務省のことを心配する必要なんかは全然なかった。いまは全く異常です。外務省というところは、案外素直なところで、どんな大臣が来ても、その大臣をバックアップするという伝統があります。ことに昔は、だいたい外務省出身の人が外務大臣になりましたからなおのこと、その時々々の外務大臣を全面的に支持するというのが外務省の態勢です。外務大臣のほうから、職員がちゃんとしているかというようなことを心配する必要は全然ない。

佐道 いまの私の質問も、いまの状況に引きずられた質問だということですね（笑）。

菊地 いまの状況はまったく異常です。あなたの質問のなかで、六四年（一九六四）に外務大臣を辞めて、筆頭副幹事長という職に甘んじるわけでしょう。それから、大平さんの冬の時代が始まるんです。この間、佐藤さんに完全に干されるわけです。その間、宮沢さんのほうはどんどん進んでいく。だけど、それでも、宏池会の会長は引き継ぎます。それで、通産大臣に六七年（一九六七）、やっと引き上げられる。それも東の間、首を切られる。六九年（一九六九）に、政調会長になって、ちょっと息を吹き返す。

この前の質問表のなかに、池田さんを巡るいろんな人物評、「黒金、小坂をどう思いますか」と書いてあったんですが、六四年十月に総裁選挙があつて、第三次池田内閣ができる。それから、すぐ池田さんが入院する。その間にあつて、宏池会のなかでは、ものすごいシュトルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）があるん

です。幹事長が前尾繁三郎さんでしょう。前尾さんという人は、大平さんのことを、「大平君はまだ若い。しかも、まだ党の経験を全然してない。官房長官になり、外務大臣ということで、日の当たる政府のポストだけをずっと歩いてきている。だから、幹事長には早い」というと。その時に、池田さんはちょうど「自民党改革と近代化」ということを考えていて、三木さんが党近代化運動をやっていた。それで、三木でいいじゃないかということ、大平さんが大嫌いな三木さんが幹事長になる。だから、そこからずっとボタンの掛け違い。

股野 井上先生のさきほどのお話で、六〇年代の初めのアジア外交ということですが、まだASEANもできてない頃です。池田総理は総理として二度東南アジア訪問を在任中されるんですが、どうもみているところ、大平外務大臣は東南アジアに足を運んでおられませんね。これは今日では考えられないことです。したがって、戦後、日本のアジア外交の黎明期です。大平外務大臣が第一次外務大臣の時には、東南アジアに足を踏み入れることがなかったということにも、一つそこが表れているという感じがいたします。ただ、池田総理は東南アジア歴訪を二回されてまして、「アジア外交はおもしろい」とちように言い始められた時期でした。

菊地 そのとおり。僕はほかの場所です。ただ、第一次大平外相の時代には、あまりアジア、特に東南アジアのことは、さつき話したスカルノ大統領が来たとか、マレーシアからラーマン首相が来るということはある。何か積極的に日本から大平さんの方から働きかけるということは、あまりありませんでした。例外は経済協力関係です。六六年（一九六六）には、東南アジア開発閣僚会議というのができるんです。椎名外務大臣の東南アジア諸国に対する「浴衣掛け外交」ですけども。だいたいアジアとの関係は賠償に始まるから、全部経済貿易、経済協力というフィルターを通すわけです。それはなんと言っても、大東亜共

栄園という亡霊がありますから、なるべく大東亜共栄圏的な印象を与えないように、なるべく低姿勢、経済一本槍でいくというのが、当時の日本の対アジア外交だったわけです。

ですから、ことに六二年から六四年の大平外務大臣の時期は、東南アジアというのは政治日程にあがってこない。ただ韓国、中国、いわゆる東アジアでは否応なしに向こうからやってくるという状況で、それへの対応に追われる。東アジアについても、国内で社会党を中心として、「米帝は日中国民共同の敵」とか、ものすごいイデオロギー対立の時代です。東アジア外交もまったくイデオロギー対立の世界。他方、東南アジアのほうは経済協力を除いて、政治的にはバキューム、真空状態というような状況の描写ができていた。

股野 もう一つ、これは雑談的な一種のオフレコ的な話になるかもしれませんが。さきほどのお話で、第一次外務大臣時代に、官房総務参事官をしておられた安川さんが非常によく国会関係等の振り付けをしておられた。その後も、大平さんが第二次外相をされ、それから総理をされて、安川さんを非常に信頼しておられるという様子がみられました。だいたいお性格はお二人は違うんですけども、大平さんが安川さんについての信任を寄せられる何かケミストリー（作用）があったんでしょうか。

菊地 変な話のほうから先にすると、例の「蓮見事件」を起こしながら、安川さんは駐米大使になったでしょう。あれは、彼の祖父さんの安川第五郎が、大平さんの後援者だったからだという言い方をする人があります。それはまったく嘘です。安川さんという人は、まったく欲得のない人なんです。あの人は一高の野球部ですけど、いわゆる秀才タイプではない。あの人は外務省に入ってます。七年前、中国で兵隊をやっていたんです。二十年（一九四五）に帰ってきた時は、われわれと同じスタート・ラインだったんです。彼が安保条約の改定問題をやり、それから、大平さん

の時代の総務参事官をやった。これはまったく無私的態度で大平さんに仕えていました。大平さんはまた大平さんで、安川さんのそれを見て、非常に彼を信頼したんです。安川さんの言うことは常に当を得ているんです。あの人は、外務省の外常識プラス政治的な常識のバランスのとれた意見を言う人なんです。「思い出に残ること」（『忘れ得ぬ思い出』）を読んでもわかりますけど、非常にバランスがとれている人。だから、僕も安川さんのことを非常に好きでした。安川さんのお嬢さんのことで、僕は国連大使の時に世話したこともありました。安川さんの奥さんは、人見さんの妹さんなんです。人見さんも安川さんも僕は両方知ってますし、非常に親しかった。

ですから、僕は大平さんが、安川さんを駐米大使に考えているというのは、前から薄々感じていました。それは安川さんは「ノンシャラン」（気取らない）というか、まったく飾り気がなく、欲得がない。また、おうちにはちゃんとしてますから、そんな私利私欲を持つ必要がない。だから、安川さんが、ああいう変な蓮見事件にかかずにあっても、新聞記者は彼を批判しないし、政治家からもあまり批判は出てこない。あれは西山太吉という毎日の新聞記者がやったことです。その頃、渡辺恒雄とかなんか、全部外務省霞クラブにいた。ちなみに大平大臣の第二回目の訪欧の時に、渡辺恒雄とか、読売の堀内だとか、共同の酒井とか、その後、社長になったような連中が同行しました。

新聞のついでに言うと、池田内閣というのは、朝日新聞と非常に関係がよかったということがあります。

佐道 朝日と関係がいいというのは珍しいというか。

股野 大平さんについては、その後の時代もありますから、また別の機会にも。

菊地 その後、先進国サミットのシェルパになって、大平首相に仕えました。その前、第二次の外相の時は、僕は経済協力審議官、

局長です。その後、大平さんは大蔵大臣になられましたから、大平大臣にはよく陳情に行きました。また、ゴルフにお伴した帰りとかには、大臣にいろいろ話を伺いました。日中友好病院に対する援助の説明を大平さんに直接した憶えがあります。

実は、僕は先月十五日から十八日に中国の社会科学院の学会に招ばれて行きました。日中友好病院を見ました。ちなみに今回北京に行ったのは、日中ベテラン外交官懇話会というもので、日中国交正常化三十周年記念の一つの行事なんです。僕は中国側に率直に言ってきました。「あなた方、もう日本に対する内政干渉をやめて下さい。あなた方は、教育主権ということを知っているでしょう。教育主権に関する内政干渉は最も重い罪です。あなたのところの教育の問題について、外国からイデオロギー的干渉をされたら、どんな反発を示すか」と。中国というのは、年長者というのを尊敬するんです。「僕は七十九歳だ」と言ったら、途端に向こうは尊敬して、なんでも僕が団長にされた。それで、李

鉄映社会科学院長のところでも、代表で僕があいさつ。その前に、向こうの蔣立録かな、日本研究所の所長が僕の話を用いるわけです。僕は会議で、「豊かな隣国のほうが貧窮する隣国よりかはるかに付き合しやすい。ですから、日本は中国経済が隆々として伸びることには、なんら脅威とは感じないし、かえって、日本のためになると思っている」ということを話したんです。これが非常に受けました。李鉄映と会見した時、李鉄映はあいさつのなかで、「日本の経済がいま落ち込んでいるのは、中国はとっても具合が悪い。日本が経済的に発展してくれるのが、中国のためになる」と言った。僕は、日中相互理解の芽生えを感じました。

これで僕のオーラルヒストリーもピークを越えました。あとは、シエルパ時代が出てくるか。

佐道 まだ、経協局長とかいろいろあります。よろしくお願いします。

(終了)

菊地清明

オーラルヒストリー

第10回

米国カナダ課長・ドイツ大使館時代

開催日：2002年5月17日

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時15分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

股野 景親（元スウェーデン大使）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■米国カナダ課長を志願

井上 それでは、今回は、経済局米国カナダ課長時代とドイツ大使館時代を中心にしたお話ということですので、どうぞよろしくお願いたします。

菊地 僕が一方的にしゃべると、どうもつまらなくなるので、質問をしてください。

佐道 はい。ここにもありますけれども、内示はいつ頃はつきり出たのでしょうか。

菊地 僕は六四年（一九六四）七月に秘書官を辞めた。その時、人事課長は魚本（藤吉郎）さんだったかな。彼が「おい、来てどうする」ということで、僕は自分で米国カナダ課長をボランティア（志願）したんです。というのは、秘書官になる前には、在米大使館の経済担当で、本省の米国カナダ課長から訓令を受けておったわけですから、あの課を一つやってみたいなということがあった。その頃、経済局で米国カナダ課というのは「花形の課」だったんです。とにかく日米経済関係はその頃中心でしたから。その代わり、仕事は多いし、やりがいがあるんじゃないかと思いましたが、志願しました。椎名（悦三郎）外務大臣の秘書官の大森君も、辞めたら、やはり僕の後任の米国カナダ課長になりました。そういうルートができたみたいになりました。

佐道 単純な素朴な疑問ですけども、外務大臣秘書官とか、総理大臣秘書官は大変な激務でいらっしやるわけで、よくそういう激務のあとには、少し骨休めをしろと在外に出られるとか、そういうのがあるのにも関わらず、日米経済間の問題が増大傾向の時期ですから、通常の人事と違うなと思わず思ってしまったんです。菊地 そうでもないです。ハーバード大学とかに、研修に行くというの、骨休めの面もありますけれども、本当はすぐに空いたポストがないので、ちよつと行つてくれんかという場合もあり

ます。本当に自分が好きなポストがある場合には、そんなところには行きません。すぐ実務につきます。在外研修、いわゆるミッド・キャリア・トレーニングというのは、外務省は非常に重視してますから、それは重要なことではありますけれども。

佐道 すぐ空いたポストがなかなかない場合とおっしゃったのは、秘書官の人事というのは、外務大臣とかの任期に連動するので、通常の人事交替のローテーションに関わらないということもあつてですか。

菊地 そうですね。

佐道 これは幾つか示されるわけですか。このうちの幾つかからどうかという。

菊地 僕の場合は希望を聞かれましたから、希望を言いました。

井上 椎名外務大臣の印象ということが質問事項に挙げられていますが、この点はいかがでしょうか。

菊地 椎名外務大臣とは、直接は関係ありませんでした。椎名外務大臣自身は、六六年（一九六六）まで、僕が米加課長をやっている時は、ちょうど日韓交渉のたけなわですから、大臣はそつちのほうに掛かりつきりでした。だから、経済局は、当時はあまり大臣とは接触はなかったですね。あの時は、牛場外務審議官になつていたかな。次官は黄田（多喜夫）次官ですけども、黄田さんも例の川島正次郎と喧嘩して辞めました。

股野 その頃は黄田次官でしょう。米国カナダ課長になられた頃は、牛場外務審議官です。

菊地 米国カナダ課長の仕事はどういうものかとありますけれども、読んで字の如く、米国とカナダとの経済関係の処理です。主として、米国関係が八割ないし九割ぐらいで、あと一割か二割がカナダ関係でした。アメリカとの関係では、一九六五年にはそれまで日本の対米貿易は赤字だったのが、黒字に転換するんです。これは分水嶺というか、ウォーターシェットの年なんです。そ

れまで占領軍の指導によって、大いに輸出振興をやっていたわけです。一九五五年には、例のワンダラーブラウスがあまりに出だして、アメリカに輸入制限をさせられる。それから、アメリカの国内では、繊維、金属洋食器とか、そういう雑貨を中心にした輸入制限が起こり始める。ですから、僕の課の大きな仕事はアメリカの輸入制限対策です。以前、在米大使館でやっていたことを、今度は本省でやったということです。

佐道 経済局米国カナダ課長というのは基本的にはいまの北米局の。

菊地 北米二課ですね。

佐道 二課だと思つてよろしかったですか。

菊地 そうです。

佐道 カナダとの経済関係も主管をしているということですか。

菊地 そうです。

そういう輸入制限運動対策と同時に、いろんな貿易上の問題が起きました。その後、経済摩擦と称せられるようになったものもろの問題が起きました。僕の記憶に残っているのは、対米鉄鋼製品の輸出の際のフォールス・インボイスの問題。フォールス・インボイスというのは「虚偽表示」と訳します。アメリカに向けて鉄鋼製品が一斉に出始めた時に——鉄鋼を現実に輸出するのは商社ですけれども——税関に提出する輸出のインボイス（送状）価格を実際より低く記載する。それによって、支払う関税を低く記載する。それをアメリカの関税局から指摘されました、非常に大きな問題になった。明らかに日本側の非ですから、非常に嫌な問題だったんです。それでもあまり新聞沙汰にはならない。その頃の、鉄鋼業界というのは非常に影響力がありましたから、わりと無難に取めたということがありました。また綿製品の輸入制限のみならず、毛製品の輸入制限、それから、既製服の輸入制限まで起きて、繊維業界は大変だったんですね。毛製品の交渉には、当

時、サンフランシスコで弁護士をやっていた、あとから國務長官になるウォーレン・クロストファーがアメリカ業界の代表になって、日本は毛織物輸出組合の安宅産業の猪崎さんという、非常に元気のいい人を日本側の代表にして、もちろん経済局もその間に入つて、交渉したことを憶えています。

綿製品協定についてお話しします。アメリカでは六一年（一九六一）、僕が米加課長になる前に、ケネディがいわゆる貿易拡大法というものをつくつて、ケネディラウンドを提唱します。これはマルチ・ラテラル貿易の動きなんです、アメリカはこういう大胆な自由貿易的な動きをすると同時に、やっぱり国内の保護主義者をなだめなくてはいけないというので、国際的な綿製品協定、LTA（ロング・タム・テキスタイル・アグリメント）をジュネーブで交渉合意した。それに基づいて、各締約国はさらにバイラテラ（双務的）に協定をするということが必要だったので、僕が米加課長の時にLTAに基づく日米二国間の綿製品協定というものも交渉しました。その時に、いろいろ手伝ってくれたのが、いまの最高裁判事の福田博君です。

佐道 最高裁の。

菊地 はい。アメリカ側の相手方にスタンレー・ニーマーというのがいて、それから、スタンレー・ニーマーの下にパトリックという男がいて、これが福田博君のハーバード大かなんかの同級生だということで、彼らといろいろやっていました。スタンレー・ニーマーというのは当時日本の敵役として令名を轟かせた男です。彼は一九七一年の化繊の協定交渉にも参加しました。アメリカの商務省では、同一人物が長いこと繊維問題を担当をしていたわけです。

佐道 こういう協定というのは通商問題ですから、通産省との関係が。

菊地 ええ、通産省と一緒にやる。ただ外交交渉は外務省が主に

なってる。六〇年代、七〇年代の中頃までは、対外経済交渉と
いうのは、外務省がリーダーシップを持っていたんです。通産省
からの意見は聞くし、いろいろ案を出してもらっても、実際、
対処方針というものをづくり、交渉するのは外務省です。外務省
の経済外交がもっとも華やかなりし頃です。それが、いまの外務
省の経済局というのは、バイ（二国間）の交渉は完全にギブアッ
プしてしまって、マルチの経済関係だけをやるということになっ
ています。我々OBからみると、残念なことですが…。

佐道 あとからになると、通商問題では、通産が自分のテリトリ
ーだと。

菊地 そう思うようになったわけです。ただ、僕が外務審議官で
いたぐらいいまでは、やはり外務省が、これは僕の個人的な趣味と
言われれば、それまでですけれども、外務省がはつきりリーダ
ーシップを持っていました。綿製品交渉の話はそういうことです。

■対米加経済ミッションの派遣

菊地 僕が米加課長の時にやったことで、これはある程度新機軸
でしたが、その頃まで外務省は、対米経済ミッションというもの
を何回か出していますが、僕が課長になった時に、課長補佐の藤
井（宏昭）君、渡辺幸治君らの意見も聞いて、これからはアメリ
カ全体に対して経済ミッションを出しても、あまり効果がない。
ご承知のように、アメリカというのは州で成っている国であるし、
また、もうちよつと拡げても、西部とか、南部とか、中西部とか
そういう地域で成り立っている国だから、これからは地域別向け
の経済ミッションを出そうじゃないか、ということを出しま
した。これはまったくそのとおりなんです。アメリカという国全
体に対して、経済ミッションを出しても、あまり意味がない。各
地域、地域によって、インテレスト（利益）が違いますし、対日

関心度も違うし、対日輸出関心も違うわけでしょう。例えばオレ
ンジに関しては、カリフォルニアとフロリダ州が共に大産地であ
るとしても、お互いに競争している。

それです、対カリフォルニア・ミッションというものを出し
たわけです。富士銀行の岩佐凱実さんを団長にしまして、それこ
そ財界の最強のメンバーを揃えて出したわけです。当時が岩佐さ
んが行くと言えば、みんな一緒に行きたいと、各大企業の社長と
か会長さんがみな付いていってくれました。当時のサンフランシ
スコ総領事は和田力さんで、彼は強力な総領事でしたから、受け
皿として非常に効果が上がった。カリフォルニア南部だとか、中
西部だとか、東北部とか、そういうふうにいる経済使節団を
編成しまして、派遣しました。

佐道 それはその年というか、その時期によって、重点を置く地
域を決めてということになるわけですか。

菊地 そうです。

佐道 これは何名ぐらいですか。

菊地 十二名ぐらいじゃないでしょうか。

武田 ほとんど財界の方ですか。

菊地 財界です。アドバイザーとして、例えば学者も付けました。
対カリフォルニア・ミッションは渡辺幸治君を付けました。その
次に、カナダに対して最初の経済ミッションでした。新日鉄の稲
山嘉寛さんを団長にして派遣しました。カナダは最初ですから、
カナダ全体を回ってもらった。これが日加経済関係の官民交流の
最初ですね。

佐道 課長としては同行されなかつたんですか。

菊地 課長というのは、そういう時は同行しないんです。課長が
行きますと、公的色彩が強くなりますから、これはやっぱりあく
までも民間の使節団を外務省がスポンサーする形。団長には何
がしかの手当は出すけれども、団員は手弁当です。各会社は社長

とか会長ですから、必ず秘書を同行させますから、全体としてはかなりの人数になります。稲山さんという人は非常にぎつぐつばらんで、愛想いい人です。その後もずっと対加・ミッションで行った人達は稲山さんを囲んで思い出の会というのをやっていました。

■ 利子平衡税交渉 — 米國カナダ課長として

菊地 この前、利子平衡税で、大平（正芳）さんと一緒にワシントンに行った話をしました。僕が米國カナダ課長になる、その前年の六三年（一九六三）七月に利子平衡税法がアメリカで成立した。この前話した時はまだ提案の段階だったのです。いざ実施することとなってアメリカの財務省はトゥルーエードという財務次官を日本に派遣して来たんです。この話はまだしてませんね。

武田 まだですね。

菊地 たまたま大平さんと一緒に利子平衡税の免除を頼みに行ったのが、今度は僕は米加課長として、実際の免除交渉をやる羽目になった。利子平衡税の問題は、基本的には大蔵省の主管事項なんです。大蔵省の当時の為替局長、渡辺誠さんはワシントンで一緒にいたもんですから、彼がトゥルーエードと交渉を始めるにあたって、僕のところへ電話をかけてきました。「菊地君、ちょっと手伝ってくれんか」ということで、僕は日本の代表団の一員として関わりました。大蔵省としては、大蔵省プロパーの交渉に外務省の課長を入れたということは、おそらく前代未聞のことでしょう。

交渉が始まった。なるべく大きい免除枠をもらいたいという交渉です。最終的な日本側のオファー（要求）として、七千五百万ドルを限度に利子平衡税を免除してもらいたい。つまり、日本の銀行なりなんなりが七千五百万ドルまではアメリカから資金を借りても、それに対しては、利子に対する10%の平衡税は課せられないようにということをお願い出たわけです。トゥルーエードは

「ああ、そうですか」と言ってお帰った。僕が米國カナダ課長の席に帰ってくると、電話が鳴りました。フィル・トリザイスという在京アメリカ大使館の経済公使です。「キクチ、なんだ。大蔵省に似合わず遠慮したじゃないか。コンフィデンシャル（内密）だけでも、トゥルーエード次官補は一億ドルの枠を持ってきているんだ。」と。早速、僕は為替局長に電話して、「あなた、ちょっと遠慮すぎたようですよ。先方は一億ドルまでの枠は持つてきているんですよ」と伝えた。翌日、日本側から、「七千五百万ドルと言ったけれども、実は最低でも一億ドルはもらいたい」と訂正した。向こうは「わかった」ということで、結局一億ドルに落ち着いた。もらったんです。ですから、僕も少しは貢献したかなと。

佐道 いやいや、大使のパイプがなかったら（笑）。

菊地 大蔵省は非常に感謝してくれまして、官房長の谷村裕さんから、数日たつてから僕のところへ電話があり、「おい、菊地君、どうもありがとう。ついては、交渉の打ち上げ会をやるから、君も来てくれ」というので、「ああ、伺いましょう。どこへ伺うんですか」、「目白の御殿だ」というわけ。田中角栄大蔵大臣のね。それで、初めて僕は目白の御殿に伺った。角栄さんは真ん中に座って、御満悦でした。僕は大平さんの秘書官をやっていました。大平さんと田中さんは非常に親しい。田中さんは僕の顔を知っていて、「おい、菊地君、ここへ座れ」と言われて、御馳走になったことがございます。

佐道 御殿をご覧になった印象はいかがですか。

菊地 それはものすごいものです。そこで田中角栄さんという人はいかに大蔵省の官僚を把握しておったかということをもまざまざと見ました。高橋元秘書官。谷村裕……。

佐道 大蔵省の方々も、田中さんには心服してらっしゃるんですか。

菊地 心服していたと思います。それだけ田中角栄という人は官

僚を把握しておった。異能の人でした。公にも、私的にも。

■輸出自主規制の功罪

菊地 僕は日米の経済交渉に深く関わり合つていたものですから、対米経済交渉というものはどうやるべきかというようなことをいろいろ考えるところがありました。これはあとから僕の経済外交論ということでもまとめてお話ししてもいいと思います。

やはり、アメリカとの経済交渉になったら、本音ベースで大いに議論を交わさなくてはいけない。日本はアメリカから輸出規制を迫られると、すぐ「それでは」と言つて輸出自主規制に応ずるといふようなやり方には、僕は非常に違和感を覚えました。対米輸出自主規制というのは、アメリカがもし自ら輸入制限をやつたら、ガット（GATT）違反になるようなことを、（アメリカが罪を犯す代わりに）、日本がアメリカに代わつて罪を犯す（自由貿易に反することをやる）、ということです。もしアメリカが輸入制限をどうしてもしたいというのなら、それはやつてもらつて構わない。その代わりに、こちらもそれなりの補償要求なり対抗措置をとる。

その頃、日本はアメリカからしよつちゅう頼まれていたことは、アメリカの農産物、小麦をもつと買つてくれ、石炭を買つてくれということでした。アメリカの石炭は競争力がないんです。豪州炭とか、マレーシア炭の方がずっと競争力があります。日本も、アメリカに対する「駒」は持つているわけですから、そういうコマを使つて、日本に対して無闇に輸出規制は求めるべきでないんだよという観念を、アメリカに植えつけることが肝腎です。

日本が自主規制をやつても、誰にも喜ばれない。日本人は勿論アンハッピー。ヨーロッパ人もアメリカに自主規制をすると、その余つた分はヨーロッパに溢れるわけですから、やはりアンハッ

ピー。ヨーロッパに行くとき、なぜアメリカだけに自主規制をして、ヨーロッパになぜしないかと必ず言われる。そういうようなこともありまして、僕は現役時代から外務省内の会報とかに書きましたけれども、外務省のなかで、数少ない自主規制反対論者だった。八一年（一九八一）の日米自動車協定の時も、僕は最後まで自主規制反対ということで、当時の天谷（直弘）通産審議官と対立した話は、あとでします。外務省というのは、アメリカに言われれば、「アメリカの困難に理解を示す」と称して、国際貿易原則を曲げるといふことになつたというのは、いかにも残念だと思ひます。

佐道 最近では、アメリカだけじゃなくて、中国にもそういう面を持つていますけれども、それは冗談です。

菊地 いま、中国との関係では、ちょうどかつてのアメリカと日本との関係が、日本と中国との関係になつた。

佐道 いまの自主規制のお話ですけども、明確なのは、いわゆる糸と縄といわれた例の繊維問題とか、七〇年代に顕著になつてきたとか、繊維の規制の話が。

菊地 あれは化纤織ですが……。

佐道 そうですね。日本側の本音ベースという場合に、素朴な疑問として、日本のほうがダメージが相当大きいのではないか。アメリカが対抗措置をとつて、日本もというふうになつた場合、保護措置をとつて、それに対して、日本もそれは承諾するわけにはいかないと、違反であるということでは日本側が例えば対抗措置をとるといふふうにした場合に、日本側の経済的なダメージのほうが、特に六〇年代とか、七〇年代には大きいのではないか。

菊地 アメリカは自ら国内産業対策をとらないで、日本に輸出規制をやらせようとする。だから、まず、彼らが本当に業界対策措置をとりたいたいのなら、自分の方でとりなさいということなんです。それに対して、日本側が対抗措置をとるかどうかというのは別です。とらない場合もあるでしょう。しかし、その場合、補償要求

はできるし、それだけでなくアメリカは輸入制限をとったという負い目は残る。それで、「アメリカは世界で最も貿易自由の国です」というようなことは言えなくなる。現にその頃から既に、アメリカの輸入全体の四十％は何らかの輸入規制の対象だったんですから。ところが、日本に対して言う時は、アメリカのマーケット（市場）はオープンだと。確かに大方の商品についてはオープンでしようけども、特定の商品（例―農畜産物）については、クローズされているわけです。いちばんいい例は、八〇年代、日本に対して、牛肉とオレンジの自由化を要求してきたでしょう。ところが、アメリカは豪州に対して、牛肉は輸入制限をしているんです。そういうダブル・スタンダードがありますから、そういうことはつきり指摘すべきじゃないか。指摘した上で、僕はすぐ対抗措置までいけという話じゃないが、自主規制などということには、こっちからすぐ応じないことです。向こうに考えさせなくちゃいけない。向こうの問題をこつちで解決してあげる必要は全くない。

対抗措置の話になりますけれども、先進国のなかで、日本というのは、経済外交でかつて対抗措置をとったことがない珍しい国です。今度初めて鉄鋼のダンピングで対抗措置をとるといいます。あれが実行されれば、本当に初めてです。日本の経済外交もここまです成長したかと、思いを新たにします。

以前は、日本の経済外交の辞書のなかには、対抗措置、報復措置という言葉はないんです。僕はむやみに対抗措置をとれといっているんじゃないんです。対抗措置をとる伝家の宝刀を持っているという姿勢を示すことが必要だと言っているのです。アメリカでは、例えば鉄鋼なら鉄鋼に関して、輸入制限の動きが起ると、商務省とかUSTRとか、業界とかの輸入制限の主張に対して、国務省とか、ホワイトハウスというのは、日米関係全体を考えて、輸入制限すべきじゃない、もしそんなことをやれば、日本から対抗措置をとられますよ、と主張する。日本はアメリカの農産物の

最大の顧客で、当時年間七十億ドルぐらい輸入しているわけですから、それに対する影響がありますよと主張することもできる。ちなみに、マイク・マンズフィールド大使は、常にその点を日本に訪れるアメリカの議員、指導者に対していつも指摘していました。「忘れないで下さい。日本はアメリカの農産物の最大のお得意さんであることを」と。そういうふうには、お得意さんとしての日本を重視するグループがアメリカにはいるのです。国務省とか、国防省がそうです。ホワイトハウスもそうです。そういう人達が、アメリカ国内の保護主義派を抑える時に、「そんなことをしたら、日本から報復措置をとられますよ」と言えば、これがいちばん強い抑止力になりうるわけです。

ところがです。日本政府は、この最も強力な武器を自分からもぎ取っちゃっている。僕は何度も言うようですけども、無闇に対抗措置をとれという話じゃないんですが、対抗措置をとらないと定めてかかる必要はないし、一度か二度は、対抗措置をとった例を示す、それによってアメリカ国内の自由貿易主義派は、アメリカが保護主義的措置を日本に対してとったために、これだけの被害を被ったということを説明できるように、彼らを応援してやるべきだ、というのが僕の単純な主張です。この点は八一年の日米自動車協定の時も、もう一度触れたいと思います。

佐道 大使が外務審議官をなさっていた頃は、まさに日米経済摩擦の本場に酷い状況でしたし、また、外務審議官時代の日米経済問題というのはまた改めてお話ししたきたいと思います。

菊地 当時の経済局というのは、二国間関係を取扱う課と、多国籍間の課（機能課）に分かれてました。六一年（一九六一）にケネディー・ラウンドというのが提唱されたわけですけれども、われわれ米国カナダ課は、ほとんどノータッチでした。国際機関課は東郷文彦さんとか、下田（吉人）さんとか、ガットのエキスパートがいた頃です。

ただ、その頃矛盾じゃないかなと思ったのは、アメリカはケネディ・ラウンドという多角的自由貿易を提唱しておきながら、国内の産業保護はやると。例えばさっき言った綿製品などはちゃんと事前に手を打つわけです。日本人の多くは、アメリカがガッツトの最大の推進者と思つているでしょう。それは間違いです。アメリカは他国に対しては、多角的、自由無差別の貿易原則を要求するけれども、自国市場に関しては専らタメージコントロールです。そもそも本当は、ITOにしたかった。インターナショナル・トレード・オーガニゼーション (International Trade Organization) にすると。しかし米国の議会は「インターナショナル」という言葉を極端に嫌う。インターナショナルとなると、アメリカはもろもろの国のうちのワン・オブ・ゼムになっちゃうわけです。しかし、ワールドなら仕方がないと。それほどアメリカ議会というのは、アンチ・インターナショナルなんです。そういうことを、日本の識者は記憶しておいてよい。ユニラティラリズム (一方的主義) ・イコール・アンチ・インターナショナルリズム (ユニラティラリズム) というのは、米国議会の本質的性格とも言えます。

それで、お答えになるかどうかは知りませんが、その次はベトナム戦争ですね。

■ ベトナム戦争の経済的影響

菊地 六四年 (一九六四) 八月二日と四日にトンキン湾事件というのが起きまして、北ベトナムのパトロール・ボード (巡視艇) がアメリカの駆逐艦を攻撃したというようなことがあった。ところが、これはマクナマラ国防長官 (当時) の本を読み直してみましたら、北ベトナムが本当に攻撃したのかどうか、最後まで真相がわからない。見張りの水兵さんがそういう音が聞こえたとかと

いうことで、実際は映像も何もないです。ですから、マクナマラが書いているのは、統合幕僚本部に対して、「写真なんか物理的証拠を俺のところを持って来い」と盛んに言ってます。しかし、事件が起きたので、アメリカの世論は激高、それまで分裂しておつた米国の議会も一致団結して、南ベトナムに対するコミットメント (援助約束) を承認したと。しかし、十年後の七三年にはもう撤退の論議が始まっているんです。

ベトナム戦争の話あまりやってもしょうがないんですが、当時のわれわれがこれをどうみていたかという事は——股野さんなんかは当事者だったでしょうけども——僕は少なくとも「アメリカも大変なことにはまりこんだもんだな」と。つまり、ゴージン・ジエムが暗殺されて、フランスももう手に負えなくなる。アメリカがフランスからテイクオーバー (引き取り) して、いわゆるシアトー (SEATO条約) なるものをつくって、南ベトナムを防衛する。南ベトナムを防衛しなければ、「ドミノ論」で、東南アジア全般に共産主義が波及する、それは即南ベトナムの「キューバ化」であり、ソ連の勢力、中国の勢力が入ってくると。アメリカのナショナル・セキュリティ (国家安全保障) に対する大変な脅威になると。だから、アメリカは最初は「軍事顧問団」を派遣し、戦闘兵力を出すようになった。われわれ日本のインテリ層の見方は、アメリカさんも御苦労さんだなど。アメリカがそう確信してやるのなら、しょうがないじゃないかという感じだったと思います。しかし、アメリカの情勢判断、つまり、ドミノ理論というふうなものは、少なくとも僕は信用していませんでした。現に、あとでマクナマラも告白していますけれども、当時のアメリカ政府の最大の関心——北ベトナムの本当の実力と重要性、アメリカが大規模に介入した場合、中国及びソ連が介入するかどうか、それからベトナム人のナショナルリズム——に対する判断を間違えた。何よりも東南アジアの戦略に占める南ベトナムの重要

性を過大視したのは、すべて誤りだったと、マクナマラは告白しています。われわれは岡目八目で、この戦争は泥沼だなどというふうに思っていました。

佐道 米國カナダ課は基本的に日本とアメリカとの経済関係ということですから、そうすると、例えばアメリカの経済動向というのは非常に大きな問題ですね。毎年、毎年、アメリカの経済指標とかをご覧になりながら、どうなっていくのだろうかという分析もされていたのではないかと思います。

菊地 もちろんです。

佐道 大使がいらつしゃった時期は、ベトナム戦争が急に激化していつて、まだ、テト攻勢の前ですから、どちらかというと、どんだん拡大はしていくけれども、アメリカの勢いはいい時期というところなんですけれども。

菊地 六五年（一九六五）が北爆開始ですからね。

佐道 はい。ベトナム戦争がアメリカ経済に与える影響というふうなものについては、かなり分析をされていたのではないかと思います。これはどうでしょう。

菊地 一般的な米國経済の動向ということでは、もちろんやってきました。ただ、現地のウエストモーランド司令官から兵隊をもつと送ってくれというのに対して、国防省や統合幕僚参謀本部というのは「ウエストモーランドの言うとおりで。送つてやらなくてはいいかん」というのに対し、議会のほうは渋る。当時、上院議員だったマンスフィールドなんかは、「ベトナムは中立化すべきだ」とか、「撤兵すべきだ」とか、いろんなことを言うわけでしょう。アメリカの国内の世論が割れていました。ですから、確かにアメリカの経済にとつては、ドレーン（消耗）というか、大変な経済を枯渇させるような戦争だと思いました。ジョンソン大統領になつてからは、いわゆるグレート・ソサエティ（大きな社会）というのを唱えますよね。ベトナム戦争から国民の関心をそらすため

かどうかは知りませんが、結局、それもあまりうまくいなくなると。

六八年（一九六八）二月には、マクナマラ自身が国防長官を辞めてしまふ。これは大失敗ですよ。ジョンソンだけが頑張つた。ジョンソンとゴールドウォーター上院議員の争いです。六八年の選挙には、ジョンソンは、自ら出馬しないと宣言することになる。

佐道 六四年のトンキン湾事件で六五年の北爆が始まつて、ベトナム戦争が激化していくわけですけども、例えば朝鮮戦争の時には、日本が戦争のための軍事工場化をして。

菊地 朝鮮特需というやつですね。

佐道 はい。急激な戦争の拡大ですから、アメリカもそれなりの戦争経済というものが入つていくと思います。そうすると、そのことによつて、なんらかの日米の通商関係なり、経済関係なりに、急激な戦争の拡大ということによつて、大使が所管されている間に、影響が少しでも出たのか。それをお感じになったのか。それとも、大使がいらつしゃる間には、そんなことはほとんどアメリカの経済のなかではお感じにならなかったのか。そのへんのところはいかがでしょう。

菊地 朝鮮特需の頃は日本が非常に困つてました。けども、六四年頃は、もう日本経済のほうが高々としてきますから、特需などは必要とされない位。ですから、僕はベトナム特需という言葉はあつたかも知れないが……。股野さん、ある？

佐道 特需とまではいかななくても、例えば何かに関する通商が急に拡大をしたとか、戦争の影響が日米通商関係に影響があつたとか、そういうことはないんですか。

菊地 それはあつたかもしれませんが。ただ「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）なんていうのが盛んなりし頃ですからね。

井上 関連で、より一般的に、日米の経済問題で対応しようとする時に、日米の安全保障上の問題とか、冷戦というような問題が

縁故しているとか、あるいはなんらかの形で関係しているというようなことは意識されて、経済問題への対応というのは考えられているのか。それとも、あくまでも経済ベースで、さきほどのお話のような本音ベースで議論しなくちゃいけないとか、自主規制はかえって損なうというような形での処理がされていたということなんでしょうか。

菊地 その頃の外務省経済局というのは、ものすごく強力でした。ですから、「経済外交」という言葉は、僕は好きじゃないんだけど、われわれは経済外交の先兵だということで、正直いって安全保障ということはあまり頭の中にありませんでした。経済は経済の論理でいくべきじゃないかと。経済というのは金目の話ですから、輸出して、経済成長を成し遂げてナンボという話ですから。そこへ防衛上の「お前のところを守ってやっているのだから、もっと輸出を抑えろ」とか、そういうことを言われたら、われわれは反発したと思います。

アメリカ側には、当時は非常に対日配慮というものがあつたというの事実でしょう。確かに国務省あたりが、日本は重要なアライ（同盟国）である、日本には米軍の基地を置かせてもらっているんだよ、ということとは、配慮した形跡はあります。デーリン・ラスク国務長官などは、そういう配慮をしてくれた。だから、問題は向こうのほうに配慮してくれた。というのは、安保騒動のあとで、軍事だとか、安全保障とか、そういうことはタブー視されましたからね。

■「巻き込まれ論」と世論動向

佐道 いまの関連ですけれども、まさに大使は日米経済外交の最先端でおられたわけですが、一方、所管でないんですが、大使は大平さんの秘書官で、日米外交といえますか、日本の外交の広い

全般的なところからご覧になった立場として、ベトナム戦争が激化していくと、北爆とかありまして、すぐに「巻き込まれ論」というのが出てまいります。アメリカと一緒にやっているから、日本が余計に危ないんだという議論が社会党なんかを中心に出てくるわけですけども、こういった議論については、どのようにご覧になっていたのかというところと、外務省も、例えばこういった問題について、何か言論の問題で、もっと積極的に出るべきだとか、省内で議論されていたとか、そういうことについては。

菊地 確かに社会党あたりは「巻き込まれ論」ということを言ったわけです。これに対しては、政府与党、われわれ外務省のものは、なんと言うか、「巻き込まれ論」というのは感情論、臆測で、別に根拠はないわけですね。ですから、そういう「巻き込まれ論」というものには立ち入らないと。

佐道 外務省の立場として、アメリカはベトナムで戦争を戦っているわけですね。当時は同盟という言葉を使いませんでしたけれども、有力な協力国としての日本が、実際に一緒に戦う戦わないを別としても、巻き込まれ論みたいなことをして、国内で対米批判みたいなものが沸き上がる。

菊地 あの頃は世論も新聞も、ベトナム戦争は「アメリカが勝手にやっている戦争だ」と、いわば対岸の火災視していて、アメリカと一緒に戦うべきだとか、アメリカから、一緒になって戦ってくれと要請されたというようなことは、表立ってはなかったと思います。

〔註〕後のキッシンジャー大統領補佐官などは、沖縄返還交渉の際、日本がベトナムで対米協力することを要求したと伝えられる。

佐道 いえ、そういうことを申し上げているのではなくて、もちろんそんなことはできませんから、そうではなくて、本来、同盟国であるわけなんですけれども、そのなかで、ベトナム戦争を戦っているアメリカに対して、ベトナム批判というか、アメリカと

の同盟がまずいという意見が社会党やマスコミを通じて行われているわけですね。それに対して、対米関係上まずいと。こういう議論があまりに強くなり過ぎると。

菊地 国内で？

佐道 国内でこういう議論が大きくなり過ぎると、対米関係上よくないので、これに対しては、何か外務省としても積極的にアピールするということをしなければならぬといった対策を考えるようなことがあつたのかということです。

菊地 ない。外務省はそもそも世論統制、世論操作なんて考えません。外務省は、いま世論がこうなっているから、これを直させようとか何とかは……。世論というのはギブン、予件なんです。これをなんとかしようとか、啓蒙しようとか、同盟国アメリカの批判をしちやいかんというとか、そんなことは言論の自由ですから全然議題にも上りません。現在の外務省というのは、世論指導をやらないんです。日本政府自体があまり世論指導をやりませんから。日本の政党政治というのは非常におもしろいんです。おそらく、世論（調査）は与件であり、これに対して影響力を行使するなどということは考えもしない。

その頃、ベトナム戦争に関して、アメリカ批判はあつたし、現地からの報道は、共同とか、時事とか、ありとあらゆることを報道する。「ソンミの虐殺」だとか、いろんな虐殺事件もありました。僕の聞いた話では、ある新聞記者がベトナム戦争批判の記事をあまり書くので、ある人がその記者に対して、「君の書いていることはかなり間違っていることが多いようだ。ついては一遍現地を見たらどうか」とすすめた。そしたら、その記者は言下に、「いや、わしは行かない。現地をみると僕の筆鋒は鈍るから」と。

佐道 現場を見ない記者ですか（笑）。

菊地 そうというのが当時の日本のジャーナリズムの空気でした。社会党、共産党がそうでしょう。ただ、いまにしてみると、ベト

ナム戦争は十年続いた大戦争です。第二次大戦だって四年しか続かないんですからね。犠牲者も多い。落とされた爆弾の量も相当なものです。韓国も多数出兵している。

佐道 当時の世論調査をみますと、世論調査は当てにならないという話はあるんですけども、六〇年代の初頭には、好きな国ということで、アメリカはかなり高位にあるのが、六五年ぐらいから、急激に下がっていくんですね。もちろんベトナム報道とか、対アメリカ報道というのがいけばん大きいということだと思えますが、七〇年代の初頭には十何％というところまで来ている。そういう流れになっているんですけども、大使の場合は、日常的にアメリカの大使館の方とか、いろいろ接しておられたと思いますが、いまおっしゃったような間違つた報道とかも多かつたわけですから、こういうようなのはないんじゃないかと、アメリカの人達がこぼしていたとか。

菊地 それは全然ない。六二、三年、あなたはその当時幾つでした？

佐道 六二、三年はまだ五つ。

菊地 全然そういう雰囲気じゃないんです。アメリカ人もそんなことを言えた義理じゃないです。ベトナム戦争に関しては、アメリカ国内では真つ二つに割れていたわけですから。さっきのマクナマラの本を読んでも、派兵論と派兵すべきじゃないという論と、早期撤兵すべきだというのと、政治交渉をやるべきということに分かれるわけですから。それは在京の大使館員もみんな知っている。

【註】一九六七年にはワシントンで十万人のベトナム反戦デモが起きている。

あなたの質問は、アメリカかというのをそつちへ置いといて、日本のことだけを考えるから、そういう質問が出てくる。アメリカは、あれで大変苦惱して、「ベトナム・シンドローム」（ベトナム症候群）というものでできたわけでしょう。

日本との関係ですが。これはマクナマラの本に出てくることな

んですが、南ベトナムを援助しろという議論の一つに、もしアメリカが南ベトナムを見捨てたら、日本に対して大変な影響が出てくると。つまり日本人は、アメリカがベトナムを捨てたら、日本も捨てるんじゃないかと思うと。それほど当時のアメリカにとって日本は心配だった。日本に参戦しろとか、言えるわけがない。アメリカが一枚岩になってベトナム戦争をやったわけじゃありません。

〔註〕最後の段階になって、マクナマラはなぜやめさせられたかという点、一九六七、八年の段階になると、彼は撤兵論になる。民主党のロバート・ケネディはハト派で、彼に近いんじゃないかとジョンソンが疑ったので、首を切ったということになっている。

ジョンソン政権については、ジョンソンに高い評価を与える人はあまりいませんね。再選はされて、マクナマラとか、マックジョージ・バンディが一生懸命彼を支えるんですけども、結局、補佐しきれないんです。マックジョージ・バンディも辞めてしまふ。やはりジョンソン流の、つまり、上院の院内総務的な……。日本でいえば、大野伴睦みたいな国対族、議運族では、結局、国際問題はハンドルできない。ベトナム問題を処理する場合でも、大統領の選挙のことを考えて、ゴールドウォーターに名をなさしめちゃいかんということで、若干タカ派的なポーズをもとる。

■ 日米貿易経済合同委員会(JUSC)

菊地 佐藤政権については、椎名外務大臣に替わりまして、それから、第四回と第五回の日米貿易経済合同会議、この時は僕が担当課長でした。これは仕事の量としては大変だったんです。

これは雑談になるけれども、第五回の会談の時、宝ヶ池の国際会館でやった。最後の打ち上げ式のために祇園の有名な料亭「一力」を予約しておいた。コミュニケーションの作成は大幅に遅れて、結局、そのデザイナーはキャンセルになった。そしたら、あの「一力」の

若女将は柳眉を逆立てて怒るわけです。僕は「ちゃんと払いますから」と言いました。最近問題になっている外務省の報奨費とか、そういうのは、そういう意味合いもあるんです(笑)。これは全くの雑談です。

日米合同委員会では、アメリカの経済が悪い時です。われわれは経済関係が主でして、ベトナムでアメリカが苦勞しているからといって、日本に手伝ってくれという話は、僕はなかったと思います。ちなみにベトナム戦争に対する反感というのは、日本だけじゃありません。ドイツでも、例の赤軍、ロートアルメーは、ベトナム戦争反対を一つの綱領に掲げていました。これは、僕は憶えてませんが、第五回の日米貿易経済合同委員会で、中国の代表権問題について、二つの中国の同時代表権という案を、米側から提案したけども、日本側はそれは断ったと。いや提案する前にアメリカ側のラスク國務長官は、提案者のマックジョージ・バンディに、それはやめておけと言ったらしい。このことは安川さんの本に出ています。しかし、僕は経済関係ですから、このことは知るべくもありませんでした。米国カナダ課長時代に他に何かありますか。

股野 日米貿易経済合同委員会は、菊地米国カナダ課長ご在任中ぐらいが実質もあり、顔触れもきちんと揃い、日米でそういうレベルで話ができるという感じがあつたんじゃないですか。この時代は、まだいろんな意味で、日本の国際的な地位が上昇中のシンボリックなものでしょうね。七〇年代になると、中身について、さてどれほどの意義ありやというような懐疑的な向きも出てきますけど、ちょうどまだ。

菊地 日米貿易経済合同委員会というのが、一つのアンブレラ・オーガニゼーション(上部機構)として、非常に有効な機能を果たした。六〇年代には、日米貿易関係が曲がりなりにもファンクショナル(機能)したのは、この経済合同委員会があつて、大所高所か

らコントロールしていたからだ、言えると思います。これが七〇年代、ニクソン政権になると、ガクンとその重要性が落ちるんです。それはなぜかという、一つには、これは僕の偏見かもしれませんが、キッシンジャーの登場です。キッシンジャーは、そういう多数の閣僚による外交というのは信用しない。全部自分がやらなきゃ気がすまんわけです。しかも、六人も七人も閣僚が外国へ行って会談するなんていうのは、彼には耐えられない。加えてその頃から、多数の閣僚が同じ飛行機で海外出張すると、危険が多いということも理由の一つになったんだと思います。

もう一つの理由は、経済問題は、なくなつたわけではないけれど、日米経済問題はそういう合同委員会の場でやるよりも、モリス・スタンプとか、ミッキー・キャンターとか、ああいう強力、豪腕な個々の閣僚が交渉するというスタイルに変わつちやうた。各省合同の、政府対政府の交渉ではなく、個人プレーみたいな、個々のネゴシエーター（交渉者）が日本と交渉する。それで、「arms twisting」（アームズ・ツイスティング）をやる、日本の腕をへし曲げてやろう、それを、自分の手柄にしよう、という傾向が七〇年代から出てきた。これは非常に嘆くべきことです。

カナダに関しては、懸案はあまりなかった。ただ、カナダという国は、当時アメリカが日本に対してある商品の輸入制限をやりますと、必ずカナダ市場に流れるんです。ですから、カナダはそれをウオッチしてまして、アメリカが輸入制限をやると、カナダは直ぐ日本に対して、「カナダにも同じようなことをやってくれ」と言ってくるんです。それはわからんことではないわけです。その時の駐カナダ大使が牛場（信彦）さんで、ある時、ものすごい電報が来ました。それはロードニー・グレイとか、サイモン・リースマンとか、カナダの通産省の次官、次官補との交渉で、カナダの言うことはあまり理不尽だと。それで、牛場大使が怒って、「実は、自分は今度カナダ大使を辞めて、経済担当の外務審議官

になる予定だ。自分は外務審議官になつても、東京から、あなたたちとファイトするつもりだから心得ておけ」と言つて、席を立つた、という電報が来たんです（笑）。いまでも覚えてます。

佐田 すごいですね。

武田 どういうお返事を書かれたんですか。

菊地 僕が一言加えるとすれば、牛場さんには同様のことをアメリカにも言つて欲しかったなと思います。

佐田 牛場発言のあと、何か事態は変わつたんですか。

菊地 いや（笑）。僕は後にカナダ大使になるんですが、その時に、相手にしていた連中がいるわけです。彼等は大方リタイヤ（退職）してましたけど。僕はその人達を全部訪ねて、懐旧談をしました。「実は、僕は一九四七年からカナダ担当官だったんだよ」とか「六四年から六六年までは、米国外務省課長だった」という。今度はドイツに移りましたよか。

股野 まあ、また何か米加課長時代にありましたら、それはまた遡つて。井上先生、よろしいですか。

井上 またのちほど。先にドイツ時代のお話をいただいて、また、最後に戻るかもしれませんが。

■ドイツ大使館の総括参事官として

井上 昭和四十一年（一九六六）十月、ドイツ大使館勤務ということですが、お仕事の具体的な内容その他について、お話しただければと思います。

菊地 僕は六六年十月にドイツに赴任したんです。ちょうど米国外務省課長は二年になりましたし、それに大森（誠一）君という非常にいい後任者を得たので辞めよう。外国に出ることを希望しておつたんです。その頃、経済局総務参事官室に、伊藤博教という背の高い男がいます。彼が来て、「おい、菊地、君、ボン

に行くらしいぞ」と耳打ちしてくれたんです。総務参事官室というのは、経済局全体の人事をやっていました。「ああ、そうですか。それはいいですね」と。僕はドイツ語ではないけど、以前お話ししたように、一高の時にそうとうドイツ語をやりました。枢軸外交華やかなりし頃です。ドイツ語は好きだし、ドイツ文学も好きだし、ドイツ哲学もかじったりなんかしたものですから、ドイツはいいなど。加えて西ドイツの戦後の復興は、同じ敗戦国として、日本としょっちゅう比較される。ドイツ戦後経済の奇跡とか何とか言われて。そういうのを現場でみてみたいという気持ちが強かった、二つ返事で受けました。

一週間ぐらいしたら、大河原人事課長が僕の課へ来まして、「おい、菊地君な、君、ボンじゃなくて、オーストラリアへ行ってくれないか。いま、日豪関係、ことに経済関係がクリティカル（危機的）な状況なので、豪州で君を必要とするんだ」と言うんです。「ええ、僕はドイツへ行くつもりで、ドイツ語の昔の教科書なんかを引き出して、ブラッシュアップしているところですが」と言ったら、それでは局長室へ行こうと。その時は、加藤（匡夫）経済局長、鶴見（清彦）経済局次長、それから、大河原人事課長、伊藤博教経済総務参事官の四人がかりで僕を説得に掛かる。けども、豪州は英語国で、つまらないので、せっかくドイツ語というのを少し知っているから、ブラッシュアップしたい（磨きかけたい）などという気持ちがあつて、抵抗しました。そしたら、鶴見さん達も折れて、じゃ、しようがないということ、ボンに定まりました。

ボンの大使館では、内田藤雄大使、兼松武公使、吉岡一郎参事官という陣容で、僕はその次の総括参事官です（着任時は一等書記官）。内田藤雄大使は、例のピアニストの内田光子さんのお父さん。彼は非常に優れた大使でした。この人の下で働いたということは、僕は幸いでした。兼松大使という名づけての強者でして、

股野さんは知っているでしょう。喧嘩もしましたけど、彼にはだいぶ鍛えられました。

僕の仕事の内容は、総括参事官というのは官房事項を含め、全部やるんです。ある意味では、自分の好きなことがやれる。経済関係は、本当は僕是非常に興味があつただけでも、大蔵省から佐上君とか、宮崎知彦君とか来ていたし、通産省からは、いま、代議士をやっている牧野隆守君なんかもいた（その前は外山弘君）。経企庁からは田中誠一郎君、等々たくさんの俊秀が揃っていました。警察庁からは藤巻君という（皇宮）警察署長をやった人。大使館のスタッフは非常にいい。僕が着任したのは、ちょうどエアハルト政権が、はじめは成功したが、その後おかしなつた時期でした。そこでキリスト教民主同盟（CDU）のキージンガー首相と社会党（SPD）のブランドが、大連立を組んだ。カールシラーという経済大臣が経済成長安定法とか財政法の改革をやっていた頃です。

■東欧情報の収集に専念する

菊地 経済関係は、大蔵省、通産省、経企庁から来た書記官に任せして、僕は専ら、その頃ちようにブランドが入閣することによって拍車のかかった東方政策（オストポリティック）、つまり、西独の窓を東の、ソ連と東欧諸国に向かつて開く、という政策をとり始めたので、その調査とか、情報収集をやることに専念しました。ブランドがベルリン市長をやっている時から、彼の右腕として活躍していたエゴン・バルが外務次官になってきたんです。彼を最高の情報源として、ドイツの東方政策がどうふううに展開するのかということを一本省に報告しました。

東方政策というのは、ご存じかどうかは知らないけども、それまでハルシュタイン・ドクトリンというのがありまして、西独は、

東独と外交関係を持っている国、つまり、東独を承認している国とは外交関係は結ばない、という原則です。これによって、西ドイツは東方に対して、自ら窓を閉じておったわけです。それを修正しようということで、ブランド等が提唱した。これは日本にとってはあまり関係のないことですけれども、外務省の情報収集能力に関する一つのテストケースだった。似たようなケースでは一九五六年でしたか。ソ連のポーランド侵入。

佐道 ハンガリー？

菊地 ああ、ハンガリーの動乱とか、そのずっと前のポーランドへの介入とかを事前にキャッチしたかということは、我々外務省のものの情報能力が問われる問題です。ことに、国際情報局にとつては。その頃は情報調査局といったのかな。

股野 その頃は国際資料部です。

菊地 それがあつて外務省は各在外公館に訓令して、そういう情報収集をやらせる。それには逸話があつて、例えばトルコにいた越智（啓介）君がハンガリーの時のソ連介入を予測して本省に電報したとか、そういうのがあるわけです。

われわれがドイツにいた六八年（一九六八）の「プラハの春」の時に、ソ連の侵入に関する情報を事前にキャッチしたかどうかというようなことです。われわれも一生懸命情報集めをやりまして、本省に送ったら、「ボン大使館から来る情報はおもしろい。どんどん送ってくれ」という訓令が来しました。（政務担当書記官は新井弘一君。）それを見ても内田大使が見て、「おい、菊地君、当館の電報はほめられているよ」と。それはなんということはない。内田大使が最高の情報とりだったんです。内田大使が西ドイツの最高レベルと接触して情報を取る、もちろんわれわれも取る。それがヨーロッパの公館に転電される。そういうのがわれわれのいわゆるプロフェッショナル・プライドだった。

内田大使について言えば、内田大使という人は、ものすごい有

能な人、あまり自己宣伝をしない人ですから、僕が代わって記録に残しておきたいと思います。この人は戦前戦時中の本場の枢軸派の事務方のトップだった。枢軸派というと、大島（浩）中将とか、白鳥敏夫とか、そういう大物はいますけれども、事務方のトップは内田さん。内田さんが大島中将の片腕として——大島中将はドイツ語は堪能ですけども——リッベントロップ外相に会う時とかには一緒に付いていった。そういう意味で、古内広雄さんとか、甲斐文比古さん、牛場信彦さんも、枢軸派と言われてますけれども、実際に大島中将を補佐したのは内田さんです。それだけ能力のある人なんです。能力のある人ほど、あの頃は枢軸派になった。その時の時流だからです。

ただ、内田さんについて言えば、立派なことですが、彼は敗戦と同時に、パージされる前に、さつさと外務省を辞めて弁護士を開業しました。ボン大使館では、毎週月曜日に館内会議というのがあつて、そこで彼は戦前、戦中のドイツの状況をずっとわれわれにしてくれました。それは本当におもしろかった。僕は外務省のなかで大先輩は別としまして、僕が外務省に入った時の現役だった人では、例えば武内龍次さんとか、黄田さんという人は僕の尊敬をする人ですけれども、内田藤雄さんもこれに加えておきたいと思えます。

佐道 内田さんは一度お辞めになって弁護士をされて、それで、また復帰をされたわけですか。

菊地 官房長に復帰した。復帰する前に、為替管理委員会の事務局長、入管の管理局長をやった。あなたの初代の。

股野 僕の前任者です。それから、移住局長も。

菊地 移住局長もやった。

股野 外務省の移住局というのがありました。いまの領事移住部です。

佐道 前はもつと大きかったわけですね。

股野 一つの局です。局長をなさって、それから、官房長です。

菊地 彼は僕を個人的にもかわいがって下さった。ボンというのは、ヨーロッパ全体、特に東欧の情報収集の中心地だということ。内田大使は認識していました。東欧というのは、みんなドイツ語が通じます。東欧を勉強しろといわれ、僕は東欧五カ国に出張をさせてもらいました。これは本当に勉強になりました。

佐道 例えば東ドイツとか、まだ日本は国交を結んでませんよね。

菊地 西ベルリンに総領事がありました。

佐道 そこを通して入ることは可能なわけですか。チェコとか、そういうところは大使館もありますけども、東ドイツはまだですよ。ね。

菊地 東ドイツは行かない。東ドイツ内の孤島、西ベルリンの総領事館に行きました。その時は都倉（栄二）さんが総領事でした。都倉俊一のお父さんです。テンペルホーフの飛行場に着きました。

■日独戦後復興を比較して

菊地 ボンでどんな仕事をしたかというのは、いまの話でいただいたわかんと思えます。仕事の一つとして、ドイツの経済復興、ドイツ復興の奇跡から、日本は何か学ぶことがないか、僕はそれに関心を持っていました。日本の場合は傾斜生産方式とか、ああいうことで、よくも悪くも言われる日本の「産業政策」というもので、復興に成功した。ドイツの場合はどうやったのか。いろいろやって研究しました。この辺のことは佐上君なんか本にしますから、別にここではお話ししません。

ただドイツの戦後処理、敗戦処理について、日独を比較してみました。再軍備の問題、教育の問題について。再軍備の問題については、ドイツは平和条約はいまだにない。基本条約というもので再軍備を認められて——ブンデスヴェーア（国防軍）というんです

が——ドイツの社会党ですら、このブンデスヴェーアというのは党の綱領の一つに入っています。日本の社会党とは大違いです。このように防衛をしっかりとした西独の憲法——ここで憲法というのは基本条約のことですけれども——これも不磨の大典なんとかにしないで、既に四十六回も憲法改正をしている。

日独間での違いで、僕が特に興味を持ったのは教育制度です。ドイツはご承知のように、七年制のギムナジウム（中高等学校）とベルフスシューレ（職業専門学校）というのにはつきり分かれている。ドイツの子どもは十歳、小学校の六年生になると、先生から、お前はギムナジウムに行け、お前はベルフスシューレへ行け、とはつきり言われる。先生が振り分けてしまう。日本のPTAなんかでこんなことを知ったら、ひっくり返るような騒ぎになる。僕がドイツで聞いた一つのエピソードは、あるうちの子どもが非常に優秀な子どもだったので、先生が「君は非常に優秀だから、ギムナジウムへ行け」ということを言った。その子どもが家に帰って、お父さんに、「今日、先生からギムナジウムに進めと言われたよ」と言った。そしたら、そのお父さんは「とんでもない。お前はギムナジウムなんかへ行くんじゃない」と言って、ベルフスシューレへ、つまり、徒弟になる学校へ行けと言ったという。徒弟制度がある以上、そうならざるを得ないわけです。そういう封建的な制度もドイツは敗戦後も頑として変えなかった。

日本みたいに、アメリカでも全国的に行われていない六三三制を、アメリカは日本に導入した。ちょうどガリオアから帰ってきたばかりの時、アメリカ人のいる会席で、「アメリカですら、六三三制というのは全国的に普及していないのに、なぜ日本に導入したのか」ということを尋ねたことがあります。だけでも、問題の核心は、アメリカが押しつけたというよりも、それを唯々諾々として受け入れた当時の日本の教育当局の方にあると、僕は思います。ドイツは最後まで抵抗した。これは黒川（剛）君なんか

言わせると、「いや、ドイツはそういう点では非常に有利な立場にあった。というのは、ドイツは東独と西独に二分割されたのみならず、西独自体が四分割された。占領当局が四カ国いるわけですから、ある一国、アメリカがこういう政策をやれと言っても、イギリス地区ではそれをやらない。そういうことで、ドイツは四カ国の占領軍の間を縫って、うまくことができた。」日本の場合は、そういうことができなかつたのみならず、日本人の事大主義というんですか、これが禍いした。あなた方も知ってる？ 日本では占領中電車の乗降口に、「占領軍の命令により、ここから乗降することを禁ず」と書いてありました。そういうのを知ってる？

武田 知りません。

菊地 「占領軍の命令により」と東京の電車に書いてあったんです。なんと情けないことかとわれわれは思いました。そういう点は、ドイツ人というのは非常にデイグニティ（尊厳）を重んずるし、誇りがある。これはよく聞かれる質問ですが、日本の敗戦処理とドイツの敗戦処理はどのようにしてかくも違うんだろうかと、僕の見るところ、いちばん大きい差は、ドイツ人は負け癖がついていること。日本人は処女体験であった。敗戦でなにかもわからなくなっちゃった。僕はドイツへ行ってみまして、本当にそう実感しました。ドイツに僕は三年近くいましたけど、その間にドイツ人から、ナチスの悪口とか一切聞いたことがありません。こっちはもちろん尋ねもしないけども。それはもちろん日本人とドイツ人の性格の違いにもよると思いますけれども。それから、やっぱり同じ白人に負けたということですが、白人でない日本人が、欧米人に負けたということで、まったく自分と違うものに征服されたというような感じを持つ。ドイツ人はそういう感じは全然ない。アイゼンハワー大統領だって、先祖はドイツ人。

この質問のなかに、「ベトナム戦争や非常事態法制定に対する

学生のデモが起きております」とありますが、これはその通りです。六八年（一九六八）というのは、例のフランスの騒動があったように、あの頃、反戦ということが欧米先進国に広がっていた。ドイツではロートアルメー、赤軍というんですが、バーダーマインホーフとか、ドウチケとか、いろいろなりリーダーが出てきまして、これが暴れた。黒川（剛）君は、外務省切つてのドイツ語のエキスパートですけど、彼の記憶で当時のドイツではデモは盛んにやった。テロはなかつた。ドイツの場合に限っていえば、キーンガー・ブランドの大連立ができたものですから、ドイツ議会のなかに、強力な野党、反対党がなくなつてしまつた（これは民主主義に反する）という事態に対して、NGO的な団体、その頃はAPOですけども、これが反政府デモを展開した。他方ドイツ政府も、ちようどいまの日本の「有事法制」みたいなものをつくつておかないといかんと。六〇年代の後半は、まだ主権というのは完全に西独政府には移っていない、国内の治安にも完全に主権を持ってない、やはりこれは持つべきじゃないかというので、ご質問の緊急事態法 (Notstandsgesetz) というものができた。

もう一つ。これは、僕はいろんなところでお話するんですけども、戦後の経済経営で、西独の経済政策が日本と基本的に違つていた点の一つある。それは、日本はまず産業政策から入つて、住宅とかは後回しにして、とにかく生産、生産ということで、六〇年代の所得倍増計画を進めた。あれはもっぱら生産者中心の政策です。日本の場合は、産業政策、高度成長経済をやつて、功を奏した。その後に住宅政策、その他の社会政策を達成することになる。つまり、産業政策から始めて社会政策に進んだ。ところが、ドイツの場合は社会政策、住宅建設から始めて、重工業化政策、産業政策、エネルギー政策というものを進めていった。それで、ECS C（「石炭・鉄鋼共同体」）のメンバーにもなる。そういうふうに、ドイツの場合は、社会政策から始めて、産業政策がフォ

ローした。ビスマルクの昔から、「ゾチアルポリティック」(社会政策)というのがある。その伝統だといえ、伝統です。黒川君によればドイツ人にとっては、極寒の天候もあるので、住というのは衣食住のうちの最優先課題なんだと。ドイツ人は、戦後復興は「住」から入り、日本は「食衣」から入った。日本人は敗戦後とにかく生産、生産で、「ウサギ小屋」に住みながら生産に励んだ。それで、やっと余裕ができるの家を建てる。建てますけれども、その大きさはほどほどのものにして、海外旅行に行く、世界中のおいしいものを食べる。日本には四畳半趣味なんているのがあるんですからね。

佐道 戦前は借家がほとんどですからね。

菊地 日本でこれは採用しなくてよかったと思うんだけど、ドイツにはミットベシユティンムング、共同決定権という制度がある。ドイツでは大企業のクルップでも、バイエルンでも、企業の経営陣には、必ず労働組合の代表が重役で入る。これを共同決定権というんです。これが日本は最後まで輸入しませんでした。

佐道 大使が行かれた時期は、在留邦人はどのぐらいのレベルいたんでしょうか。

菊地 在留邦人は少なかったですね。ことにボンにはわれわれ大使館員と新聞記者だけです。だいたい日本の銀行はフランクフルトにある。ブendesバンクがありますから。商社は、デュッセルドルフ、フランクフルト、ハンブルグです。デュッセルドルフは多かったです。岸さん系の川部美智雄がつくったヤーパンハウスがありました。

ここには、ガスト・アルバイターのことを書いてありませんね。ガスト・アルバイターというのはあの頃ピークでした。知ってます？労働移民です。われわれの頃は、トルコ、ユーゴスラビア、ギリシャから大量の労働移民、ガスト・アルバイター(ゲスト・ワーカー)が来ていました。看護婦はフィリピン人とか、トルコ

人とかです。日本からはなんと炭坑夫が来ていました。炭坑国家管理法で炭坑が閉山したでしょう。それでドイツのルール地方の石炭を掘りに行ったんです。

佐道 日本の炭坑夫が、ドイツの炭坑で働いたというのは知らなかったです。

菊地 ドイツのいいところは、これらの労働移民に対して、社会保障を全部均霑させたことです。ですから、トルコ人もユーゴ人労働者はドイツ社会がよくてよくてたまらない。第一次大戦前から、ドイツとトルコというのは非常に親密な関係がありました。ですから、トルコ人には、ドイツ語をしゃべる人が多い。ユーゴはもちろん近いですから、ユーゴ人もドイツ語をよくしゃべります。デュッセルドルフには、ちょうど僕がいた時にクルトール・ツェントルム(Kulturzentrum)という外務省のカルチャーセンターをつくって、大賀小四郎さんと言ったかな、その人を所長に据えました。

佐道 大使館は全体でその当時どのぐらい規模だったんですか。

菊地 その時は本官が十五、六人でした。あとはローカル・スタッフ(現地雇い)が同じぐらいいました。大使館は、ケルナーストラッセ(Kolherstrasse)にありました。いまはもうヴェーヌスベルグの上のほうへ移って、大きな大使館になりました。僕の時は一階建ての小さいビルでした。場所は非常にいいところだけでも。

佐道 ベルリンの総領事館というのはそれなりの規模だったんですか。

菊地 僕も総領事館は行ったけど……。例のティアガルテンの前の石造りの、議事堂と同じぐらい大きな大使館。ヒットラーの時代に建てた物です。それはまだ修理中でした。

佐道 一度行ってみたいと思ってるんですが。

菊地 ヒットラーが「日本のためならつくってやれ」と言ってつ

くった。

佐道 大使がいらっしやる頃に、大統領選挙に出る直前のニクソンがドイツに行っているはずなんですけど、何か現地で報道されたとか、ご記憶にありますか。

菊地 その前にケネディが行った。

佐道 ええ、そのあとです。六八年に大統領選挙に出ますね。その前の年です。

菊地 それは知りません。それは二番煎じでしょう。その前にケネディが「イヒ・ビン・アイン・ベルリーナー」(Ich bin ein Berliner)とベルリン市民に呼びかけて、ドイツ人からものすごい拍手喝采を浴びた。

股野 時間ですね。実は、菊地大使のドイツ観を少し伺いたいですけれども、次回の冒頭にもよろしければ、もう少し詳しく伺いたいです。

菊地 どうぞ。

■米国カナダ課の陣容

股野 ちょっと遡りまして、身近なことですが、人物像ということで、経済局の米国カナダ課長時代で、局長が加藤匡夫、次長が鶴見さん。この方たちの当時のご活躍ぶり、印象に残ったことはいろいろおありでしょうか。

菊地 あの頃は、割と外務省主導で経済外交をやっていたので、われわれは仕事をしておって難しいことは、ほとんどありませんでした。アメリカとのバイ(二国間)の綿製品交渉でもなんでも、われわれはアメリカと対等に議論して、対等に資料を突き合わせ議論をした。加藤さんとか、鶴見さんとかは、われわれをバツクアップしてくれた。われわれはああいう人がいたから頑張れたという感じがあります。

「あの頃までは」と言ったら語弊があるかもしれないけど、われわれは本当にアメリカと対等に議論をしたつもりです。日米の大局からこれは譲るべきだとかではなく、案件自体のメリット、デメリットに応じてやろうじゃないか、ガットの規則、自由貿易の原則に則ってやろうじゃないか、という本音の議論をした。ところが、八〇年代になると、外務省の事務方も賢くなりまして、こんなことをいくら俺が頑張ったって、あとで後ろに政治家が控えていて、降りると言われる。自分だけで頑張ったつてしようがないと言って、結局あまり頑張らなくなった(もちろん例外はある)。アメリカの要求は、なるべくアコモデート、(適えて)やろうと。そういうふうな雰囲気になってしまったようです。例外と

いえば、国広(道彦)君ぐらいなものじゃないでしょうか。

股野 そのお話で、僕は一つ思い当たるのは、少し下りまして、菊地大使がアメリカ大使館に移られてから、牛場大使が例の沖繩返還交渉との関連で、化合織に非常に取り組んでおられた時に、アメリカ側と折衝されて帰ってこられました。僕は政務担当でしたから、経済は直接担当じゃないんですけれども、当時は、大使公邸はいまの大使館事務所になっている場所に公邸と一緒にあったんです。大使の公邸の入り口で、牛場大使が通商担当であった吉崎(英夫)参事官、これは通産です。当時参事官でした。

それから、もう一人どなたかがおられて、僕はそこへ用があったらちようど行ったら、牛場さんがいま交渉を終わって帰ってきたんですが、非常に興奮しておられた。牛場さんは熱情溢れる方ですから、そういうのを承知してはおりましたけど、その時に非常に言っておられたのは、いま、行ってきたばかりの交渉で、日米双方で出したデータについて、日本側のデータがちゃんと揃っていない。そういうところで、まず、向こう側の言い分にちゃんと論破できるだけのものを持ってなければだめじゃないかと言って、吉崎参事官を特に……。これは通産省のマターですからね。村田

(良平) さんも聞いていて非常に緊張したと言っておられた。だから、まさにいまのお話で、あの時は大交渉ですけれども、交渉する時にまず机に座ったもの同士がデータを突き合わせる。そして、それに基づく論議のところで、「がっぶり四つに組むだけのものをこつちは持つてなければだめじゃないか。資料が足りない。しつかりせい」と言ってお怒っておられた。僕は牛場さんがあれほど怒っておられるのは、自分で見る機会ではなかったんです。

菊地 おそらく向こうから指摘されたんでしょうね。

股野 交渉は、また最後は田中角栄さんが出てきて、国内措置をとって最後に至るんですけども、交渉の第一線では、まず、そこでしつかり互角に組むんだと牛場さんが言われていたのが非常に思い当たります。牛場さんは経済交渉というもののあり方の達人でおられましたから。それから、これは米加課とはちよつと違うかもしれないませんが、加藤匡夫局長、鶴見次長も、マルチのことをかなりやっておられたんじゃないでしょうか。

菊地 そうです。その頃はケネディラウンドが始まった時ですから。

股野 それから、OECD（経済協力開発機構）に日本は加盟する。あの二人はマルチ経済外交にずいぶん熱を出しておられるように、私は脇から見て感じました。

菊地 こう言っておかしいですけども、米加課というのは、当時はある程度、一國一城の主みたいになってました。僕はさっき米加課長に希望してなったといいましたけれども、実はこれは

ごく最近、深田（宏）君から聞いたんですが、深田君があの時あそここの首席事務官です。いちばん最初に須磨（未千秋）さんが課長になる、その次に奈良（靖彦）さん、奈良さんも短くて、二階（重人）さんが来るということ、めまぐるしく替ったらしい。そこへ僕が米加課へ来たいと言ったんで、深田君は渡りに船と僕を歓迎してくれたようすです。それほど米加課長というのはキーポストでしたし、大蔵省も一目置いてくれたようなポストだったわけです。

僕が非常に恵まれたと思ったのは、部下がよかったことです。深田君でしよう、藤井（宏昭）君でしよう、渡辺（幸治）君でしよう。太田博、それから、福田博。こういう秀逸がいたんです。また、人事課もそういう配置を考えてくれたのかもしれない。われわれの間は本当に侃々諤々の議論をしました。ところが、その後外務省には、だんだん侃々諤々の議論が消えていく。アメリカ人相手に議論をする人を、彼はタフ・ネゴシエーターだなんていいいますが、タフ・ネゴシエーターでもなんでもない、あたり前の話なのです。

股野 ありがとうございます。ドイツの話はもう一遍お願いします。

佐道 もし溢れたのがありましたら、そこから次回お願いいたします。

井上 特に東ヨーロッパへの関心の持ち方というのはどういふものだったのかということが是非お伺いしたいと思います。

(終了)

菊地清明

オーラルヒストリー

第11回

ドイツ大使館・在米大使館時代

開催日：2002年6月21日

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時00分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】肩書きはインタビューの時点

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学COE特別研究員）

記録者：有限会社ベンハウス 戸部芳珠子

■ドイツの戦後——諜報機関と治安維持機構の存在

井上 それでは、本日は第十一回ということでして、最初に、ドイツ在勤時代の補足からお願いするというふうになっておりますが、二つ質問事項が上がっておりますが、一点目についてはいかがでしょうか。

菊地 ドイツ外交についてということですが、僕はドイツの専門家じゃありませんが、せっかくのご質問ですから、若干僕が感じたことを申し上げます。

日本もドイツも両方とも敗戦国ですよ。だけれども、日本とドイツの間では、敗戦処理にあたって、非常に大きな違いがあった。少なくとも二つ、再軍備の点を入れれば三つあった。一つは、この前から申し上げているように、ドイツは過去において何回か負けている。つまり、敗戦ずれているということ。もう一つは、日本の場合は「無条件降伏」をしたんですけれども、日本政府は存続したわけです。ドイツの場合は、政府が消滅しちゃった。首都も変わった。前の政府と一応断絶しているものだから、その責任を問われるということはありません。ところが、日本の場合は、政府が存続して、もちろん吉田茂とか、鳩山一郎とか、そういう人達も。一九五八年には岸信介というA級戦犯の人が総理になる。そうすると、これはますます戦前とのコンティニューエー（連続性）ということ、世界も、国内では社会党あたりは問題にする。それがドイツにはなかった。したがって、日本では、戦前の日本の指導者を責めるということが、社会党あたりは安易にできたわけです。戦前は全部悪いというふうに言うことができた。ところが、ドイツの場合は、悪かったのはナチス、ヒトラーの一味だけだ、「ナチスの犯罪」だというようなことができた。ドイツ語で言う「フォルクス・シユルト」（「民族の罪」）ではないということでごまかした。

もう一つは、これは外交の一部ですが、日本は戦後は諜報活動というものは一切禁止された。一国の存続にどうしても必要な諜報活動というのは、どんな国にとってもあるのですが、社会党、共産党は諜報即彼らに対する治安維持法的な……。

武田 弾圧だという。

菊地 弾圧だというふうには曲言して、あらゆる対外的、対内的諜報活動をすることを政府に対して許さなかった。ところが、ドイツはそういうことは全然ない。われわれは俗称、ゲーレン機関と呼んでましたけど、ゲーレンというナチスの高級将校だった人の率いるところのゲーレン機関というのがあり、これが内外の情報活動をやっていた。ゲーレン機関の正式の呼称は「ドイチェ・ナハリヒテン・デーインスト」(Deutsche Nachrichten Dienst、ドイツ情報機関)というんです。これはCIAの(西)ドイツ版なんです。東京の西独大使館なんかに、DNDの人を派遣している。ドイツという国は自分の国を守るための諜報活動、国内の治安維持のための諜報活動というのは、戦後も堂々とやっています。それが日本のように、「治安維持法」の復活だと言われて、おっかなびっくり、あまりワーク（機能）しないような破壊活動防止法を作ったのとは大違いです。

もう一つ、ドイツには憲法擁護庁というのがあったんです。「フェアファスングス・シユツ」(Verfassungsschutz)というんです。憲法擁護庁というのは、西ドイツの憲法体制の維持を任務とする。憲法体制の維持は、反共産主義ということなんです。これははっきり言ってしまえば、治安維持機構です。カッセルにあります、堂々と活躍している。そういう意味で、古い言葉で言えば「国体護持」だけど、国家の維持ということに関してはドイツ人は徹底している。ところが、日本の場合は、「国家」という言葉は、完全に戦後政治のボキャブラリーからは消えてしまっただ。それが大きな違いじゃないでしょうか。

佐道 大使がいらつしゃった時代は、さきほどナチに戦争責任を全部負わせてということでしたが、一方で、ナチ狩りといいますが、ナチに対する戦犯の追及は厳しくやっていたということはよく言われます。そういうのは実感というか、そういうことをやっているなということでも体験されたり、お感じになったことはありますか。

菊地 それはありません。それは高度の秘密でした。ゲレーン機関なんかには、普通はアプローチ（接触）できないです。憲法擁護庁なんかものすごい警戒です。それは昔の日本の特務機関とか内務省以上に強力な秘密組織ですから、そんなのは新聞にも出ません。アルゼンチンで、旧ナチスのアイヒマンを捕まえたというのは、全部海外からの報道でしか知られなかった。

もう一つ申し上げたいと思ったのは、戦後のドイツでユダヤ人はどうなったんだろうかということ。ユダヤ人というのは、ドイツの社会、政治に復帰したんだろうかということを、僕はかねがね興味を持っていたんです。ソ連の時代に、ユダヤ人は陰に陽に抑圧されていたわけですけども、ゴルバチョフになったら、一斉にユダヤ人が表面に出てきて、ボルゾフスキーだとか、グシンスキーだとかのユダヤ人——多くはアシケナージ系のユダヤ人ですけど、あれが復活して、新生ロシアの報道機関を独占してしまうぐらい、ユダヤ人の力が復活した。ところが、戦後のドイツには、政治家のなかにはもちろん、言論界のなかにも、ユダヤ人はいなくなっちゃったんです。ですから結果的に「民族浄化」が行われたことになる。「これはどうしてか」とあるドイツ通の人に聞いてみたら「いや、あれだけ痛めつけられれば、ドイツには帰る気はしないのでしょ」と言う答えが返ってきた。だから、ヒトラーは死んで、結果を達成したんだと。

佐道 目的を達成した。……情報のところなんですけれども、大使ご自身ではなくて、大使館として、例えば警察情報の交換とい

うことで、日本の警察から大使館に向われたりという方々がいます。まよよくいらつしゃると思いますが、大使の時代にも、もうすでにそういう方もいらつしゃってましたか。

菊地 ええ、もう来てました。よく覚えてますけど、藤巻書記官というのが警察庁から来てました。この人は皇宮警察署長をやった人で、学習院出で、当時の皇太子殿下の御学友だった人です。彼などはゲレーン機関とは、接触は持ったんじゃないかと思えます。その後発覚したように、ブランドの右腕だった人が東独のスパイだったり、それは、ドイツの場合は厳しいんです。ドイツでは、さっき言った憲法擁護庁なんていうのがあって、共産党は非合法です。ところが、日本の場合は非合法どころか、大威張りでしょう。これだけの違いが戦後の日本と西独の間にはある。政治的風土の根本的な違いがあつたんです。それはやっぱり日本のほうがずっとリベラルだったんです。これはおそらく占領時代のニュー・ディーラーの連中がいろいろ画策して、日本弱体化政策の一環として、左派勢力を強めようとした一つの結果だと思えます。

■西ドイツの東方政策

佐道 大使がいらつしゃった時期のヨーロッパは、特に六八年（一九六八）というのは、西ヨーロッパも、それから、東ヨーロッパも激動の時期でした。六八年は、フランスの学生革命もありましたし、東ヨーロッパでは、チェコの「プラハの春」もございましたけども、まず、フランスからいきますと、学生運動とか、非常にドゴール体制に染められるわけです。ああいう動きというのは、例えばドイツの政治にいろいろ影響を及ぼすとか、大使の方というのはどういうふうに動きを観測しておられたんでしょうか。

菊地 例えばバードマインホーフとか、ドゥーチケ、皆さん名前を知っているような学生指導者がいたわけです。ドゥーチケなん

ていうのは右翼に刺されたりしました。ドイツの学生運動というのは、ドイツのいわゆる「大連立」(キリスト教民主党と社会党)というのが出来上がっちゃって、これはもう民主政治じゃないと行って批判する運動が起こった。それにベトナム反戦。そういうふうなことが重なり、学生運動は大いに盛り上がっていました。だから、ロートアルメー、赤軍、あれなんか非常に盛んでした。学生運動の元祖を、アメリカのバークレーに求めるか、ドイツに求めるかという問題はありますけれども、少なくともドイツは学生運動の元祖の一つでしょうね。それは政治的にも強力なものでした。ドイツの学生というのは戦前一九三三年頃から過激な運動をしていた。

佐道 一方で、チェコのほうですけれども、もともとは東ヨーロッパのなかですから、そもそも情報そのものが少ないといいますが、いろいろ伝えられるところもありますけれども、ヨーロッパ、ドイツという拠点にいらっしゃるわけですから、情報収集とか、御苦労されたり、努力されたりということがあります。まさにドイツ、東独もありますし、要のところだと思えますが、チェコを中心とした東ヨーロッパの動向は、そもそも事の起こりるところからすると、どういうふうになるというふうな観測されておられて、チェコについては、どういうふうな展望を持っておられましたか。

菊地 「大連立」の相手であるドイツ社会党のブランド党首の腹心に、この前話しましたエゴン・バルというものすごい有能な政治家がいた。それから、全独問題担当相というのに、有名なヘルベルト・ヴェーナーという人がいました。彼はロシアの国籍を持っていたんですが、戦後ドイツへ来た。いわゆるオストポリテック(東方政策)の本当の立案者は彼だと言われています。彼らが動いて、とにかくこのように、反共、反ソで、西ドイツが内

を変更すると。英語ですけれども、「リコンシリエーション・スルー・チェンジズ」(reconciliation through changes)かな。「変革を通じて和解へ」ということで、西ドイツは自己主張はしつつも、できるだけ、ソ連(当時はブレジネフ政権)と和解をしつつ、東に窓を開いていこうと。つまりハルシユタイン・ドクトリンを修正しようとするわけです。結局、ポーランドとか、そういうところと国交正常化をするわけです。東欧というのは、歴史的にはドイツの金城湯池です。ドイツというのは自分の国を「ミッテルオイローバ」(Mitteleuropa)の中心だと。東欧は自分の勢力圏だと思っている。昔の「ミッテルオイローバ」の地位を回復したいということが非常にあったんだと思います。それがオストポリテック(東方政策)となつて、成功を収めた。貴方の質問に答えていないかもしれませんが、「ドラング・ナーハ・オステン」(Drang nach Osten)と言うでしょう。「東への攻勢」というか、東に向かつていくわけです。そういう西独外交のバイタリティーを、われわれはあれよあれよと見ていました。

■「プラハの春」と情報収集

佐道 チェコの問題ですと、チェコで「プラハの春」が始まって、だんだんソ連を中心にして緊張が高まってまいります。周辺の国々がちよつと行き過ぎだみたいなことを言い出すというようなところがあつて、もちろんチェコにも、日本の大使館が当時もありませんから、第一義的には、チェコの大統領がチェコの情報についてはいろいろ情報を収集してやると思いますけれども。

菊地 情報収集の話ですね。それはぜひいぶんやりました。この前もお話したように、チェコの時は、わが方のチェコ大使館に桜井君という非常に優秀な書記官がいます、チェコ語をよくする人で。その人がチェコの要路者の間を巡って歩き、非常にいい電

報を刻々本省に送っていました。それが我々にも転電されてくる。それから、この前お話ししたように、内田藤雄大使というのは非常にドイツ語がうまくて、ドイツの有力者とはツーカーの間でしたから、非常によい情報を取っていたことはお話ししました。ただ、ご質問の趣旨にちょっと外れるかもしれませんが、ドイツの東に対する最大の関心は、チェコとかポーランドもさることながら、東独自体なんです。ですから、外交か内交かは知りませんが、これも、全独問題担当省というのがるように、東独との関係、これは最大の関心事なんです。だから、おそらくポーランドにも、ハンガリーにも、それから、チェコにも、非常に情報網を張り巡らせていたと思いますけれども、東独との関係をちゃんと把握していない限り、どうにもならんわけです。

佐道 いまのあれでいうと、チェコに対する具体的な侵攻が始まります。これはワルシャワ条約機構軍で、ソ連軍だけではないわけです。

菊地 そうそう。全部で二十万人かなんかね。

佐道 東独の分も入っていくことになると思いますが、そうすると、西ドイツ自体も、より情報活動を活発にすると思いますし、もう一つは、日本の大使館が置いてある国に、軍事侵攻が行われるというか、部隊が入っていくわけです。そうすると、数は少ないでしょうけども、在留邦人もいたと思いますし、例えば同じヨーロッパの在外公館として、何か支援体制みたいなことが検討されることになるのか。そういうことについてはどうでしょうか。

菊地 そこまではいきませんでした。また、そういうことは当時許されません。その頃の東欧というのは、ものすごい警察国家ですから、外国から来て何か支援活動をする、警察行動、治安行動、援護活動みたいなことをやるということは認められません。せいぜい情報収集です。それはいまから考えると、そういう発想も出

るかもしれませんが、あの頃の東欧諸国の鉄のディシプリン（紀律）を考えたら、そんな余裕は全然ありません。日本の在留邦人は少数ですけれども、始めから自己責任で危険を覚悟で行っていた。

佐道 軍事侵攻が始まったあとのドイツの国民の状況はどうだったでしょうか。

菊地 それは憤慨はしたと思いますけれども、どうにもならない。あの頃、皆さん方もご承知だと思いますが、ブレジネフが「制限主権論」ということを唱えまして、東欧諸国の主権というのは、ソ連との（友好）関係によって制限されているものである、というようなことを言っていた。ですから、半ば諦めの気持ちですよね。だって、西ドイツが東欧諸国に干渉するということは、ソ連と対決することを意味しますから。いまなら考えられるかもしれないけど、当時はソ連を敵に回すようなことなんかはできっこないです。

佐道 ハンガリーの動乱が一九五六年にありましたね。あの時には、大量の難民が出たりとか、いろんなことがあったと思いますが、チェコの六八年（一九六八）の時にはどうだったんでしょうか。

菊地 さあ……。僕は六八年の「プラハの春」の終わったあとに、ボンから車でニュールンベルグ、カールスルーエ——チェコ語ではカルロビバリ、ピルゼンを通って、プラハまでベンツを駆って行ってみた。その時は広場の教会は砲撃されて——いまもそのままになってますけど——それは非常に悲惨な光景でした。ただ、ああいう時ですから、皆貧乏になって、金練りのために、いろんな家宝、絵画とか、宝石とか、そういうものを売りに出すわけです。それがプラハの街に溢れていました。僕はそういうふうには政権が変わったとか、外国の侵略を受けたあとの首都というものに、また行ったことがあります。一九七二年、チリにアジェンデ政権が出来たあとのサンチアゴです。これも悲惨でした。国が破れる

ということとはこういうことかと暗澹たる気持ちになりました。もちろん日本も破れたんですけども。

佐道 アジェンデ政権のあとでも行かれていたわけですか。

菊地 あれは第三回のUNCTAD総会の時、僕は四十五日間の長期出張をしたんです。

佐道 街の人々の様子はどうだったんですか。

菊地 それは鬱陶しいというか、大変重苦しいものでした。僕はプラハ市内のヤルタというホテルに泊まったんですけども、水道もよく出なかつたり……。この前お話ししましたかね。内田大使は「ソ連は必ずプラハに侵入してくる」という予言のような観測電報を本省に送っているんです。

佐道 そのお話しはなかつたと思います。

菊地 それは内田大使の大金星なんです。あの頃、皆さんご承知のように、ソ連圏、ワルシャワ機構のなかで、いろんな軍隊の動員があつたりして、各国からいろんな観測が流された。内田大使は確固たる信念を持って、ソ連は介入してくるということを見通していた。これは介入を予測した数少ない電報だつたと思います。そういう意味では、ドイツ大使館は点数を稼いだ。

武田 それは何か確固たる。

菊地 それは全く内田大使の情報収集能力で、おそらくドイツ筋から得た感触と彼一流のか。

佐道 それはすごいですね。

井上 ちよつとずれちゃうんですけども、この頃、ドイツの統一の可能性みたいなことを論じられたことはありますか。

菊地 まったくなかつたですね。だって、九〇年（一九九〇）でしたっけ。実際、統一になつた時も、コール首相自身が「あと二、三年はかかるだろう」と公言していたのですから。

井上 というのは、日本の外務省記録を別のところで調べていましたら、ドイツと中国という二つの分断国家に関する文章が出て

いました。そのなかで、中国に関しては、内発的な理由で大陸と台湾に分かれたから、その分断というのはかなり固定化して、分離のほうにどんどん進んでいくだろう。ところが、ドイツの場合には、いわば人為的に米ソが分割占領、直接統治したので、不自然ないわば外からの力によつて分断させられてしまつていて、しかも、陸続きで分かれている。中国の場合は、海峡を挟んで二つに分かれているので、分離が固定化しやすいんだけど、ドイツはそうでもないんだと。五〇年代初めだから、全然時代状況が違ふんですけども、東西ドイツをどう認識されていたのかなという個人的な関心があつたものだから。

菊地 よく知りませんが、僕自身の感じでは、ドイツの二分割と、中国本土と台湾と分かれているというのは、全然国際政治学的には比較にならないと思います。だって、ドイツの場合には前は一つの完全なる一体だつたわけです。それが非常に人為的に分けられたわけでしょう。ところが、中国の場合は、台湾というのは、戦前は日本領だつたわけです。それが台湾の最終的な帰属が決まらないままに日本政府が台湾を占領し、本土で共産軍に敗退してから政府機関が台湾に移り、別々になつちやつたわけです。これは比較するほうがちよつと乱暴だと思ひます。

井上 ちよつと脱線してしまいました。では次の。

佐道 アメリカに行く前にもう一点。七〇年代になりますと、より顕著になるんですけども、例のベトナムの煽りで、その前からドルの下落、通貨の問題がありまして、それがやがてニクソンショックにつながっていくわけです。

菊地 七一年（一九七二）の。

佐道 はい。当時、戦争のためにドルも刷るといふことで、通貨の状態もおかしくなるということ、ヨーロッパにおいて、例えばドイツのマルクの価値の高騰とドルとのバランスの問題とか、大使がおられる時、ドイツのなかで、こういう問題もかなり指摘

されるような状況になっていたのかどうか。まだそこまではあまり言われてなかったのかということについては、どうだったんでしょうか。

菊地 よく憶えてませんが、あまりなかったと思います。あれはニクソンショックと言われるだけあって、やっぱりショック的な面があったんじゃないでしょうか。もちろん前兆はあったけども、アメリカ経済がそこまで悪かったのかということはなかなかわからなかった。ベトナム戦争というのが、アメリカ経済をどの程度弱体化させたのかということは、僕にはよくわかりません。確かに兵員は、最後は五十万まで送ったわけですが、逆にいうと、戦争というのは景気をよくする面もあります。ジョンソン大統領は「グレート・ソサエティ」の建設なんて言い出した。ただ、あなたのおっしゃるように、潮流としては、アメリカ経済は停滞のほうに入っていくわけです。それで、日本に対する輸入制限運動がエスカレートしたということだと思います。

■二度目の在米大使館勤務 — 化合織の対米輸出規制交渉 —

佐道 アメリカのほうのお話に。

井上 まず、「3」と書いてあるわけですが、大使は下田(武三)氏で、公使は吉野(文六)氏であったということですが、ほかに主な館員にどのような方がいらしたのかとか、あるいは大使の主な業務、その点はいかがでしょうか。

菊地 下田大使と吉野文六公使ですね。経済班長は僕です。政務班には木内(昭胤)、浅尾(新一郎)という両雄がいて、この二人が張り合って仕事をしました。木内が政務班担当、浅尾が情報担当。通産省からは、最初は川田通良参事官、その次は吉崎英男君。大蔵省は松本十郎、その後代議士になった人。長富祐一郎君もいました。彼は自動車でものすごい事故を起こしまして、

病院から、真夜中、僕の家で電話がかかってきたんです。僕は経済班長で、直接の上司だということで、彼の手術の承認のサインをさせられたことがあります。

佐道 当時の大使館ですと、総勢何人ぐらいですか。

菊地 僕はよく憶えてませんが、本官は三、四十人じゃないでしょうか。それから、ローカル・エンプロイー(現地雇い)が、その一倍半ぐらいいるわけです。僕は経済・貿易、経済班長ですから、一応全部みる。僕のところには、通産省の人の他、運輸省からは、あとから日本航空の社長になった山地進君、成田空港の総裁になった仲田君とか、農林省は佐野宏哉君。その他厚生省、郵政省、建設省まで来てました。ワシントン大使館は各省出向者のオンパレードです。ワシントン大使館のポストというのは、各省は欲しくてしょうがないポストですから、みんな来る。

佐道 外務省からの、大使の純然たる後輩の方々の経済班の方は。菊地 大木浩。参議院議員からいま環境庁長官でしょう。それから、村田良平。あとの外務次官。あとはノンキャリアの人の書記官が若干いました。その中で今度、アゼルバイジャンの大使になった藤原(稔由)君は、事務的なことをいろいろやってくれました。

その頃の主な仕事は、依然として、輸入制限対策です。その輸入制限対策のうちでいちばん大きなのは、例の化合織の対米輸出規制問題でした。僕がワシントンに行ったのは六九年(一九六九)三月ですが、その一月には、ニクソン政権ができていました。五月には、悪名高いモリス・スタンズ商務長官が訪日して「化合織の対米輸出規制をやってくれ」ということを時の大平通産大臣に申し入れてます。化合織の規制問題というのは非常に後味が悪いというか、「すじ」の悪い問題でした。一九六八年の大統領選挙の際に、民主党候補のハンフレイ大統領が、先に繊維業界に対して保護を約束しているのに対し、これに輪をかけたように共

和党のニクソン大統領候補が、サウスカロライナ、ノースカロライナ州に集中しているアメリカの繊維産業を保護するということを、選挙公約に打ち出していたのですから、これはもうしようがない政治問題でした。ニクソンの選挙参謀だったモーリス・スタンズという人を商務長官に任命して、対日輸入規制攻勢をかけた。初めから、アメリカの国内政治問題として、繊維輸入規制の問題が出てきた。当時、日本の繊維製品がアメリカ市場で占めている市場は僅々五%に満たないものでした。品目によっては、一%にも満たない。これがアメリカの産業に被害を与えているとは到底言えない。ですから、日本の業界は徹底的に抵抗しました。

しかし、そのうち、反対だけをしなくてもしようがないだろうというので、日本からいわゆる包括規制という、大枠のアンブレラをかけて、それを毎年、五%増とか、何%増という程度で規制するのなら約束してもかまわないということになった。僕が着任した時には、もう吉野公使とトレザイス経済担当国務次官補の間で、交渉が始まっていた。そこへ僕が飛び込んでいって、吉野公使のお手伝いをした。

佐道 基本的な質問ですけども、吉野公使はその当時大使館では。

菊地 ナンバー二。

佐道 総括で、全体を。

菊地 特命全権公使です。

佐道 吉野公使が化合織の問題に関しては担当になられたわけですか。

菊地 そうです。吉野公使は元来経済の専門家なんです。僕のこの方面の先輩で、最初の経済局第三課の頃（五一年）から彼は経済局総務参事官室にいまして、経済局全体を総括していたんです。ですから、彼は根っからの経済畑で、牛場さんに非常に可愛がられた。両方ともドイチエ・シユーレ（ドイツ語畑）です。牛場さ

んが大使として来るまでは、ずっと吉野・トレザイスの間で交渉していたわけです。それをわれわれとか、吉崎君とかが補佐した。当時の通産省の繊維雑貨局というところから外務省経由で訓令をもらい、それで交渉するわけです。当初は、日本は繊維問題については長期協定とか、国際的にもうすでに協定があるから、日米交渉はジュネーブでやるべきだと主張し、初めは、ジュネーブで中山賀博大使とグリーンワルド大使の間で交渉しています。日本のほうは、これはマルチの場で交渉すべきだというのに対して、アメリカの方はマルチでもやるけども、バイ（二国間）でもやるべきだという主張を展開した。これはもちろん決裂します。

それで、ワシントンに舞台を移した。下田大使の最後の頃、五月に愛知外務大臣、宮沢通産大臣のお二人が雁首を並べてワシントンに来ました。それで、ロジャーズ商務長官も一応かんでいましたけど、スタンズ商務長官と交渉したが、結局決裂した。その時に、スタンズ商務長官がこういうものがあるんだよと言って、例の佐藤・ニクソンの覚書をヒラヒラさせて「佐藤・ニクソンの間では覚え書ができている話だよ」ということを言った。それに對して、宮沢さんの記録によれば、「いや、そんなものは見てもしようがないと言って拒否した」ということです。その翌日は、キッシンジャー大統領補佐官が、ジョンソン国務次官を連れて大使公邸にやって来た。キッシンジャーとしては、日本側に直接圧力をかけるつもりで来たんでしょうけども、愛知大臣にしろ、宮沢大臣にしろ、佐藤さんからはそのメモの存在は教えられてませんから、そんなものは知らんという立場で、結局、それも何ら成果を生まなかった。そのあと、キッシンジャーが「日本から二人も大臣が来て、まとめられないというのはなんたることだ」と言っただけやいたという話がわれわれのところまで伝わってきました。

■「糸と縄の取引」——沖繩返還交渉

菊地 それから、もう一つ、例の若泉敬君がやった……。

佐道 「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」。

菊地 さつき言ったように、若泉君は僕のSAIISの後輩ですから、彼のことはよく知っています。僕はあのこと自体はもちろん知らなかったけども、ああいうことがあったということは、戦後の外交史で特筆すべきことだと思います。本当に外務大臣も通産大臣も聾聵敷に置かれて、ああいうことをやられたということは。これは牛場さんが原康君（朝日新聞記者）との対談のなかで、チヨロツと言っていることですけれども、牛場さんがフラニガンと交渉しているところへ、ふらりとキッシンジャーがやって来て「こんなことは佐藤とニクソンの間でもう決まっていることだよ。」と言ったと。だから、牛場さんも、何かあるのかもしれないということは感じていたかもしれません。本当のことは誰も知らなかった。佐藤・ニクソン首脳会談は二人だけでやった。通訳は、わが方は赤谷源一さん、先方はジム・ウィツケル。「アンダー・フォー・アイズ」というやつです。

この首脳会談の際、佐藤総理がニクソンに繊維問題の解決を約束したかどうかについては、僕も関係者の一人として大分聞かれた。赤谷さんも佐藤総理はニクソン大統領になんと言ったのかと聞かれて、「いや、僕は、善処しますと総理が言うから、『I will do my best』と訳したんだ」というわけです。赤谷さんとしては、当然でしょう。だから、僕はそれを赤谷さんから直接聞いているから、そういう話をずつとしてきた。ところが、若泉君のあの手記が出て公然となった。ただ、外務省の次官以下は「覚書」の存在は誰も知らされてなかった。

これを外交的に見ますと、沖繩返還を決断した、しかも核抜き本土並みという決断をしたのがニクソン自身であって、事実大

統領自身以外はこういう決断はできないわけです。それに対して、ある程度の代償というものを払おうとした佐藤総理の気持ちというものもある程度わからないでもない。しかし、時の日本の繊維業界の反対は熾烈なるものがありました。「ニクソン大統領特別補佐官佐藤栄作」なんていう職が立った。あの頃の日本の業界は激昂していて、ことに旭化成の宮崎輝という人——京都大学の共産党委員の経験ありで反米——彼が急先鋒だった。

「糸と縄の取引」と揶揄される一つの大きな外交交渉。これにはいろんな解釈が成り立ち得ると思います。一つは、秘密外交はけしからんというもの。しかし、ああいう問題は秘密外交以外にできるはずがありません。ただ、結果を発表しないというのは、あるいはいけなかったかもしれない。それから、前にもお話ししたように、日本の外交では、例えば通産省の案件と運輸省の案件の交渉が同時並行的に進行している場合、日本の外務省は両方を睨んで「通産省の案件については譲ってもいいけども、運輸省の日本航空協定の点は、ぜひアメリカが譲ってくれないか」というような、各省を通じた利益（省益）の駆け引きということ、現在の体制では外務省はできない。これは総理にしてはじめてできることです。そういう外交の慣行がない日本では佐藤総理以外にできない。沖繩問題（外務省事項）と繊維問題（通産省事項）という二つの省に跨る問題を、関連させて解決しようとした試みは、感情を抜きにして、冷徹なディプロマシー（外交交渉）という見地からみれば、許されてしかるべきでしょう。現にこのような解決方法に関して、世論、マスコミも「佐藤けしからん」という声は聞かれなかった。もちろん業界は大反対でしたけれども、沖繩返還という結果が伴いましたから。

菊地 これは結果論ですけども、あれだけ輸出規制をしたら日本の繊維産業は潰れる、と行って規制に反対した業界はその後どう

なったかというところ、一つは、規制に應ずる代償として、関係業界に対して二千億円かなんかの設備廃棄のための補償が行われた。しかし実際業界は余剰機械を全部東南アジアに売却したため、あまり損害は受けなかった。もう一つは、せっかくながら輸出規定ができ、枠まで嚴重に決めたのが、結果は全部輸出枠の未達に終わった、ということからみれば、あれはそんなに悲劇ではなかったということになる。

井上 沖繩返還の際に、核抜きで返還されたということになっていくわけですが、普通で考えると、むしろ核抜きもやむを得ないという言い方はあれですけども、常識的に考えて、いちいち核搭載機能を持っている戦艦が、いちいち沖繩に来る前にどこかで下ろして、また入ってくるというのは普通わかりにくいでしょうし、合理的に考えた場合、あえて核抜きと言わなくても、沖繩が返ってくるのでいいし、核が付いていても、ある部分やむを得ないのかなど、あとからは思います。あの時、やっぱり核抜き、見方によっては無理だけれども、そういう形での返還にしたというのは、世論を考えるとということなんでしょうか。それとも、やはり返ってくる以上、核抜きなんだということなんでしょうか。

菊地 これは、いろんな回想録なんかに出てますけれども、はっきり言って下田次官も、その後の牛場次官も「核抜き」ということは考えていなかったようです。その頃、核抜きということでは、アメリカを返還交渉に引き込むことすらできないんじゃないかという見方をしていたようです。それが外務省の常識だったわけですから。ところが、それを核抜き本土並みと。その前に日本国内にはいろんな案があった。部分返還とか、教育権だけを返還してもらえばいいとか。楠田實の本を読んでもわかりませんが、佐藤首相がどこからかある心証を得て、とにかく核抜き本土並みで行こうと決断する。一つには、大浜さんという拓大の総長？

佐道 早稲田の総長。

菊地 あの人も沖繩出身で、あの委員会から出た報告書によって決心した、とも言われています。けれども、そこからのジャンプは大変なものだったと思います。これはやはり佐藤さんの偉いところ、先見の明があったと思います。例えば政調会長をやっていた大平さんなどは、批判的だったのですから。

■アメリカの二元外交に用心!

佐道 大使館の構成で、木内さん、浅尾さんという大変優秀な方々が政務班でやっておられたと。こういう方々は沖繩返還を巡るアメリカの政界の観測ですとか、そういったことの情報収集をやっておられたわけですか。

菊地 そうそう。彼らはアメリカの国務省によく喰い入ってました。デイク・フィンという日本部長がいたし、スナイダーなんかもその下にいたのかな。だいたい在京の大使館にいた人が国務省に帰っているわけです。ゴルフをやったり、食事をしたりしながら情報を集めていた。ただ、国務省の連中の情報は、いま議会はこう動いているとか、むしろ日本に警告を発するほうに傾きます。「俺は日本のために思っているんだけど、議会がどうもね」というのが、彼らのいつもの口癖です。七〇年（一九七〇）七月、牛場大使が着任した時も、六九年（一九六九）に返還に関する合意、共同声明はできたけれども、これからアメリカ議会の批准にかかる。「批准のためには、牛場大使、どうぞ、一人一人のセネター（上院議員）に会って説得してください」というようなことをジョンソン国務次官からも言われる。それほどアメリカは二元外交——僕はよく「トウ・トラック・ポリシー」と名付けているんだけど、行政は行政でこういうことをやる。議会は議会で別のことでやる。アメリカは二人三脚で対外交渉するということ、うまいといえば、うまい、狡いといえば、狡い交渉をやるのです。

佐道 一方で、繊維の問題ですけれども、大使が着任されたのが六九年でいらつしゃいますね。さきほどの大使のお話に出てきましたけれども、五月にスタンズ商務長官が日本に来られる。そのあと、大平通産大臣と会われて、日本の調査団をアメリカによこすとか、これは通産大臣が取り組みをされて、調査団を出されたりするわけですけれども、こういう調査団のケアということも大使館のほうはなさるんじゃないですか。

菊地 それはもちろん。でも、それは一体です。ケアというものじゃなくて、政府代表団ですから、もちろん大使館員もメンバーに入ります。

佐道 通産省主管の問題ですけれども、アメリカに一歩行って現地ということになった場合には、すべて大使館に一本化するわけですね。

菊地 そうです。通産省は、繊維産業そのものは主管だけでも、対外交渉になると、外務省主管になるわけです。

佐道 この場合は、大使の下にいらつしゃる通産省の方々とかは、通産省からの指示とか、そういうのも受けるわけですか。

菊地 ああ、そういう話？ 親元の省と直接コミュニケーションをやっているかどうかですね。それはやっているとみたいね。原則をいえば、やつてはいかんということです。最初、外交関係を再開した時は、外務省は戦前の例に懲りて、それをやかましく言った。戦前の軍部の二元外交がありましたから。けれども、どうにもしようがなくなつて、結局、大蔵省は大蔵省で勝手に電報を打ちます。財務官というのは戦前から直接親元へ電報を打っている。それは二元外交もいところで、往年の日本陸軍と同じです。通産省は専ら私信連絡という形を取っていました。しかしそれも必ずしも悪いことじゃないんです。訓令ではわからない細かいところを、彼らは私信で直接繊維雑貨局長に照会したり、いま通産省はどういうふうな方向で動いているかということも聞いてもらつ

たほうが、われわれ外務省も助かるんです。二元外交ということは一頃問題になりましたけど、いまはそういうことはあまり問題になっていないと思います。ただ、もし通産省が出先の通産省のアタッシェ（商務官）に外務省からの訓令と別の訓令を出して、別個に交渉しろなんていうことになったら、これはもちろん論外です。だけど、政府代表団のなかでいろいろやっている限りは大丈夫です。

もう一つ、これは僕は非常にインポルプした（巻き込まれた）件なんですけど、ここに書いてあるように、ミルズ議員の提案というのがあるでしょう。それをもとにして、日本が一方的に自主規制宣言をしたということ。これは僕が帰ってきてからのことですから、このような傾向は僕の時からあった。牛場さんがフラニガンと交渉している間も、ずっとマイク・ダニエルズという弁護士は、宮崎輝氏等の指示を受けて別個にウイルバー・ミルズと接触していた。それで彼ら独自の規制案というのを作りました。もちろん、それは日本の業界の意向を受けてやっています。ウイルバー・ミルズは、自分の手柄をたてるため、政敵であるニクソン大統領の鼻をあかしてやろうと思つている。マイク・ダニエルズというのは若いユダヤ人の非常に有能な弁護士です。彼の日本語は完璧です。いまでこそ、アメリカのロビイストや金融アナリストなんかには日本語の目茶苦茶うまいのがたくさんいますけど、その頃は、日本語のできる生粋のアメリカ人弁護士というのは彼一人だったんです。彼は東大に留学しています。彼がウイルバー・ミルズと通じて宮崎輝の指揮の下に、結局合意ができた。牛場さんも、それでいいじゃないかということをやつたわけです。ただ、これはなんにも悪いことをしたわけでもなんでもないんです。アメリカ側の二元外交を、日本が利用した極めて稀な例です。それで「協定」をたんたんと実施に移せばよいものを、日本政府はここでちょっと屁間をやる。わざわざ保利官房長官談を発表して

「これをもって日米政府間の交渉は必要なくなったものと見なされる」と、そんなことを声明する必要はなかった。

米政府は激昂するが、その後、ケネディ前財務長官が訪日し、交渉を再開する。その時には、通産省が主となり、田中角栄通産相、大慈弥（嘉久）次官、山下英明通商局長あたりが交渉の衝にあたった。最終段階では、当時の安川経済担当外務審議官も加わってケネディ代表と交渉してまとめた。これは安川さんの本に書いてあることだけれども、最後までもめた点は、これは行政協定で、条約じゃない。行政協定にするためのいろんな法律的な要件がある。それを時の井川（克一）条約局長が強く主張して、最後の瞬間に安川さんとケネディとの間で——ジュリリックという補佐官も加えて——相談して、結局まとまった。ところが、これは大層出来の悪い協定でして、北米二課長、溝口君は僕に「菊地さん、あの最後にでき上がった協定というのはひどいものですよ。われわれが牛場・フラニガンで交渉していった、最終段階でアメリカ側が妥協したラインよりもさらに後退したものですよ」と。まさに「ハルノート」の二の舞。アメリカとの交渉では、時々そういうことがある。僕なんかはアメリカと何度も交渉をしますが、アメリカというのはいつも「取り得」の方です。アメリカはいつも日本から取るほうですから、取れば取れるほどいいにきまつている。しかし、これ以上絶対取れないと思ったらそこで彼等は降りる。あまり要求して、結局決裂したら、彼らの失敗になる。そこは日本の交渉者は心得ていなくちゃいかん。

佐道 大使はワシントンの大使館を離れるまで、仕事のうちの重要な部分は繊維問題の交渉でしたか。

菊地 そうですね。現実には、僕は六九年、七〇年と二年いたのですが、ほとんど繊維問題に明け暮れました。その他、テレビのダンピング問題があったことを一つ憶えています。ダンピング問題があっても、アメリカ側としては日本から輸出を規制してもらえば

それでいいわけですから、必ずしもダンピング課税を課することが目的じゃない。そこで今後ダンピングはやらないという約束をしてくれれば、ダンピング税は課さないとか、そういうような取り引きを言ってくる。下田大使は、ニューヨークからテレビ業界の代表者（社長）を呼んで——松下電器産業もいましたけど、そこで業界代表にオファーした。「今後、日本の業界は、現在のよいうな価格で輸出しないという誓約書を僕に入れてください。それを持って、自分はアメリカ政府と掛け合います。どうでしょうか」ということを提案した。日本のニューヨークにいる会社の出先社長というのは権限がないんですね。「大使、それは困ります」と。僕はそこに立ち会ってましたが、結局、法律用語でいう、ノロ・コンテンデール（同意審決）という形で妥結しました。僕は経済担当のお陰で、ずいぶんアメリカの法律、通商関係の法律に詳しくなりました。

私事になりますが、七〇年の三月に、僕は胆嚢炎になりました。胆石ですな。この病気はドイツにいる時からずっと抱えてました。ドイツ人には胆石の病気が多い。ドイツ語でガレンシユタインというんです。

佐道 そうですか。俗説で、ビールをたくさん飲むと、胆石にはいいんだと言われていますが（笑）。

菊地 それもそのとおり。

佐道 だから、私はせつせつとビールを飲んでるんです（笑）。

菊地 そう。僕はそれをワシントンまで持っていた。七〇年の三月にはもう我慢ができなくなって、ジョージタウン大学付属の大病院に入院しました。その時、治療代がなんと五千ドル。当時の五千ドルですから、百八十万円なんです。

佐道 すごいですね。

菊地 それを僕は健康保険で、外務省の厚生課に送ったところ、これはおかしいと。医者が五人も名前が挙がっていると。それは

アメリカの医療制度を知らないからです。アメリカでは手術する時は医者が高人もかわるんです。

佐道 じゃ、一人一人に全部お金がかかるんですか。

菊地 それぞれに報酬を払う。

佐道 それはお金がかかる。

菊地 当時、外務省の厚生課で払った最高の医療費だったと思います。アメリカでは、腹を切る時に横に切るんです。日本では縦に切る。

佐道 流儀があるんですね。

菊地 あるんです。

■ニクソン大統領の評価

菊地 沖縄の話。沖縄は、僕は直接関係しませんでしたから、何も申し上げられません。ニクソンという人の評価はいろいろ分かるわけです。これは本当に毀誉褒貶、相半ばします。ニクソンを褒める人もかなりいるんです。例えば牛場大使。ニクソンという人は、確かに最後にウォーターゲートとか悪いこともしたけども、貧乏な家庭に育ち大統領までなった。外交問題についてはグアム・ドクトリンも出したし、これはキッシンジャーの補佐もあるけども、大西洋憲章を打ち出し、中国との国交回復、沖縄の返還などかなり業績を上げている。五三年（一九五三）に日本に来て、「日本に憲法九条を押しつけたのは間違いだった」ということを副大統領としてはつきり言っています。非常に親日的だった。だから、極端に褒める人は、「ルーズベルト以来の偉大な業績を残した大統領だ」とさえます。他方、五〇年（一九五〇）に上院議員に当選し、マント・ニクソン法というので非米活動委員会を設置し、マッカーシー旋風の原動力になった。そういうことで、ニクソンは最右翼の政治家とみられていますが、同時にフ

ルシチヨフといわゆる「キッシン・デイベート」をやったりして、能力的に優れております。ただ、「ダーティ・ディック」なんて言われたように、そういう面も確かにあった。ただ、貧乏人の出身で娘さんを名門にお嫁さんにやって、やっと社会的なステータスを得た、そういうことを考えると、やはり彼には一抹の同情も禁じえません。

佐道 大使がいらした時は、ちょうどニクソンは当選して第一期目の時ですけれども、当時の国民的な人気というのはどうだったんですか。

菊地 それはやっぱり六〇年（一九六〇）に負けたわけですから。

佐道 ケネディに。

菊地 ケネディに負けたわけですから、今度はディックにチャンスを与えようという感じでした。別に人気はいいも悪いもなかったです。その頃はまだウォーターゲート事件のウの字も出てませんから。

佐道 そうですね。前ですね。その頃ですから、ベトナムに和平ということいろいろやっておられたわけです。

菊地 ベトナムとの和平協定を結んだことも大きなことです。

佐道 国民的にそんなに人気は高いわけではなかったということですか。

菊地 人気はないですね。だいたい人気が出るような人じゃないです。

佐道 政権全体の雰囲気と言いますか。大使はその前もいらつしやったわけですけども、そういうのはどうですか。

菊地 外交問題は専らキッシンジャー・ラインと。経済問題は専ら業界利益の代弁と。利益団体を代表するロピイストたちに振り回されるといふ状況。彼等から、政治献金を集めているというふうな感じが強かった。ニクソンの属していたローファーム（法律事務所）のペーカーという弁護士だったかな。僕は彼と親しくなりました。

ワシントンにある有力なローファームというのは、時として世界中のことに関する最高の情報を持っています。というのは、ローファームにいるシニア・パートナーという連中は、前国務長官であったり、前国防長官であったりする人が多いです。いまでは、例えば今、カーライル・グループなんていうのがあるでしょう。あれなんかはCIA以上の高度の情報を持っていると言われています。切った張ったの情報じゃなく、諸外国の最高の国策、機密情報、国の最高首脳、その家族の動きなどに関するものです。

■ キッシンジャー外交とは？

— 訪中問題・対日外交 —

菊地 中国問題。いわゆるニクソンショックの時、僕はもう日本に帰っていました。キッシンジャーの訪中に関しては、日本は直前までアメリカから報せられなかった。佐藤総理が七〇年（一九七〇）十月、国連総会のついでにワシントンに来ています。その時も、全然動きがわからないわけです。あの時は牛場大使のところに国務省から電話があつて、キッシンジャーが中国に入ったというようなことを報せてきたのは、ワシントンにおける公式発表の数分前だった。福田外相は虎の門病院に入院していたので、牛場次官は佐藤総理に直接報告した。その前の十月に佐藤総理の訪米の時も、安川大使も総理に付いていって、キッシンジャーに会っているんだけど、そういう動きは全然わからなかったらしい。この有名な話は僕が直接本人から聞いたんですが、当時、曾野明さんがパキスタンの大使でした。その時にキッシンジャーはサイゴン、カラチ経由で中国に入っているんです。曾野さんは情報の専門家で、情報収集にかけては、彼の右に出るものはないと言われた人でした。「あの時、キッシンジャー大統領補佐官の隠密旅行を、自分は現地に見抜けなかったことは一生の不覚であつた」とくやしがつて、彼の退官の挨拶状にもそのことが書

いてありました。これは外務省の情報関係に携わるものの心意気なんですね。ああいう大事件を現地において察知できなかったということは、最大の失策と感ずるような責任感というか、プロ意識というか、そういうものはいまや全然失われてしまったな。

佐道 有名な話で、朝海大使の悪夢というのが伝えられていますね。大使がいらつしやつた時の大使館の雰囲気として、朝海大使の悪夢は、実際の可能性としてどうだろうかというふうなことは、どうなんでしょうか。

菊地 ほかの人はどうか知りませんが、僕は朝海さんの見方には完全に同意見でした。アメリカという国はいつ変身するかわからない。中国問題などで下手に一連托生でついでにはだめだとかねがね思っていました。僕は退官してから（一九八八年）『サンサーラ』という雑誌に、第三国との外交関係でアメリカと一連托生でいいのかという論文を書いたことがあります。

武田 当時の大使館では、話題にもほらない。

菊地 話題にもならないです。僕は経済班ですから、政務班で、木内君とか、浅尾君がどの程度の情報をもつておつたかは知りません。ただ、あの当時は、国務省自身が完全に躰機敷に置かれていたのです。国務省を情報ソースとしている大使館は、全くわからなかつたんじゃないですか。キッシンジャー訪中後、マーシャル・グリーン国務次官補を帰途、申し訳的に日本政府に説明するため立ち寄らせましたけど。あの時のキッシンジャー外交というのは、アメリカの外交の一面を現しています。ルーズベルト大統領時代にもハリー・ホプキンスという特使がいました。

佐道 いま、キッシンジャーの問題が出ましたけれども、まさに大使館は国務省が中心になるわけですね。国務省は、ジョンソンさんのような駐日大使をされたような方が次官でいらつしやるわけですね。しかし、実際の外交の切り盛りのかんりの部分をキッシンジャーがやるというふうなことで、ニクソン政権の対日外交

といえますか。これは印象論になつてしましますが、大使は例えばキッシンジャーという存在をどういうふうにご覧になつていたのか。それから、ニクソン政権のなかでのホワイトハウスと国務省の関係について、当時の大使館ではどのように観測をされてたのか。

菊地 大使館がどうみたくということ、僕は経済班ですから言えません。全体的にみたら、例えばジョンソン国務次官などはキッシンジャーは大嫌い。ジョンソン次官のキッシンジャー評というのがあつて、その一つは、キッシンジャーほどメガロマニアック(誇大妄想)というか、自信家はいないということ。その二は、キッシンジャーというのは、日本は大嫌いである。これがキッシンジャーの特徴であるということ、ジョンソンが日本の外交官に話したと伝えられています。キッシンジャーのほうはジョンソンなんかは全然問題にしてない。ですからその頃、日本はキッシンジャー補佐官とのコンタクト(接触)はあまりなかったと思います。僕は牛場さんがキッシンジャーと仲良くしていたという話は聞いたことがあります。両方ともドイツ語がうまいですけど。佐道 そうすると、キッシンジャーへのパイプというのはなかなかなかったわけですか。

菊地 なかつたと思います。おそらくキッシンジャーのほうも避けたんじゃないですか。だって、彼は基本的に日本人を蔑視している。

さて、あの頃、わが方の大使館もホワイトハウスとの関係というのは非常に大事だということを自覚していた。僕は経済班ですので、ホワイトハウスのCEA(カウンシル・オブ・エコノミック・アドバイザーズ)というところによく出入りしてました。ポール・マツクラケンというシカゴ大学の教授が当時委員長だった。この人はうちも近かつたので、ホワイトハウスのエクゼクティブ・オフィスをよく彼を訪ねました。一般的に言えば、七〇年代の初めになり、ホ

ワイトハウスと直接接触しなければいけないという考えが強くなりました。伝統的に、古い型の外務省というのは、どこの国でもそうですが、外務省と付き合うのが筋であるというのが、一つの暗黙の了解になつていっているんです。というのは、これはお互いさまなんで、例えば日本の大使館が国務省じゃなくて、ホワイトハウスとかほかの省と直接付き合いを始めたら、今度は東京にいるアメリカの大使館も日本の外務省を飛ばして首相官邸と付き合いを始めて、外務省を相手にしなくなる。そうなる困る。お互いに仲間意識がありますから、お互いでやり合おうじゃないかという感じがあるわけです。ところが、アメリカでは、国務省というもののステータスは必ずしも高くない。まったくその時々、国務長官次第なんです。キッシンジャーみたいな剛腕な人が来れば、非常に強くなるし、ロジャーズとか、ラスクとかというおとなしい国務長官であると、全然ホワイトハウスに圧倒されてしまう。現在は、ただでさえ首脳外交の時代ですから、ホワイトハウスが主導権を取ろうとすればいつでも取れる状況にある。

ですから、二十一世紀というのは、ますます首脳外交の時代になり、首脳がボンボンお互いに電話するような時代です。ホワイトハウスとか、日本でいえば、総理官邸との連絡は非常に大事になります。そういう意味では、日本の外務省は、外務次官というのは総理官邸と常時アクセスを持って仕事をしてきているんです。一年ごとに替わるような外務大臣を戴いてははとも間に合わない。やっぱり時の総理、官房長官とパイプを通しておくことが絶対に必要。だから外務次官は毎週一回、ブリーフィングを官房長官にやつている。官房長官を通じて、総理へ。いまや、首脳外交の時代です、外務省はやめてしまえとかなんとか言っても、外務省はすでにそういう首脳外交・官邸外交に切り替えていると思います。

■ ニクソン政権とグアム・ドクトリン

佐道 大使の主管である経済とは直接の関係はないんですけども、ちょうど大使がいらつした時代、六九年（一九六九）から七一年（一九七一）ぐらいまでの間は、六九年七月にニクソンがグアム・ドクトリンを出して、アジア諸国のなかで自分のことをやれ、防衛は自分のほうでやれということをや。

菊地 ことに陸軍兵力は自ら責任を持つてというのがあのドクトリンの基本ですよ。

佐道 佐藤政権も自主防衛をちゃんとやらなきゃいけないということも国内でも言ったりするわけです。七〇年に、中曽根さんが防衛庁長官になって、ワシントンにも来られると思いますが、四次防ということ、軍備増強、防衛力増強をするんですけども、こういったことに対する国務省とか、あるいは国防省の何か反応とか、意見をお耳にしたことはありませんか。

菊地 知りません。大使館のなかで、政務班と経済班というのは分担当が画然と分かれてますから。

佐道 あまりそういうことで情報がというのはないわけですね。

菊地 木内とかなんとかは知っていたと思います。

佐道 それぞれの仕事が忙しくてという。

菊地 そうそう。お互いに干渉しないというようなことです。アメリカ大使館というのは、館内会議はないんです。例えばドイツ大使館ぐらいの中ぐらいの大使館だと、これは大使の趣味にもよるんですけど、定例の館内会議をやっている。しかし、アメリカ大使館みたいな大使館になり、多岐にわたる仕事をしていると、館内会議は成立しない。

佐道 そうですね。館内のことをお話しされたんですけども、質問にもありますけれども、ちょうど大使がいらつしやる間は、下田大使と牛場大使の代わり目です。

使からご覧になって、下田大使というのは大使としてどういう仕事の仕方とか。

菊地 非常に真摯な、堅実な方です。ものごとは条約的に考える。ただ、これは別に悪口でもないんですけども、下田さんのようなタイプの人、非常に真面目一方の人は、アメリカ人にはあまり合わない。やつぱり牛場さんみたいにパーッと、開けっ広げな人、会えばすぐ「ハイ、ジョー」というような人のほうが合う。僕なんかは、おつちよこちよいで割とアメリカ人とはうまくいった方だと思います。

佐道 何かわかるような気がします。

菊地 いくら能力があってもね。

佐道 下田さんは部下になんでも仕事を任せるタイプの人なんですか。

菊地 そうそう。任せるというか、公使は事実上、自分で仕事をやってられませんからね。ただ、さっきの吉野公使の場合は別です。吉野さんは経済専門家ですから。それから、下田大使というのは経済をやったことがないんです。ずっと条約です。繊維交渉では、僕はさっき言ったように、三月に胆石をやって、その後ちよつとスローダウンしたものですから、牛場さんとフラニガンとの交渉（十一月頃から始まった）はもちろん担当はしていました。牛場さんのノートテイカーには村田君が付いていました。

佐道 村田良平さん。

菊地 だから、村田良平君が帰ってきて、こういうことでしたという電報を起案して、その電報を僕がクリア（決裁）して発電するということでした。

井上 繊維交渉を通して、アメリカというのは、こんな国なんだというような印象を持たれたということはあるんでしょうか。

菊地 そうですね。さっき言ったように、あの当時のアメリカは、

ことにニクソン政権というのは、個別業界、別して、繊維業界に完全に振り回されておつたと。また、彼らとしては、それを利用してんだと思います。だから、非常に個別業界との癒着が酷い。スタンズもミッチェルもウォーターゲートに関連して訴追されています。あの頃のニクソン政権の一つの暗い面でした。これも一つのアメリカだなと感じました。つまり、ロビイ政治というかね。だから、戦後の日本の政治もある意味ではアメリカの縮図なんです。アメリカの国会議員——ことに下院議員がそうですけど——みんな選挙区のため、選挙区にある業界のために働いている。自分の選挙区に軍事基地を持つてくるとか、自分の選挙区に軍需産業があれば、一所懸命そこに発注させようとしたりする。

佐道 いま、ちょうど軍需産業のお話がありましたけれども、ニクソンの地元のカリフォルニアは、ボーイングもそうですけども、大きな軍需産業があるわけですね。それこそ例のロッキードの売り込みも、ニクソンの時代に田中さんと昭和四十二年（一九六七）八月にハワイで会つてという話もあるわけですけども、アメリカの政権と軍需産業というのはアイゼンハワーの頃からいろいろ言われてはいますが。

菊地 アイゼンハワーは批判的だった。

佐道 批判的に述べたということもありますが、ニクソンの時に何か従来とはちよつと違うなということをお感じになったことはありませんか。

菊地 ニクソンのグアム・ドクトリンというのは、僕は一つの整合性のある軍事戦略だと思えます。同盟国に援助はするけれども、セルフヘルプ（自立）が第一義的だ。それから、グアムまで防衛ラインを引き下げるとも言った。だから、あの段階でニクソン政権では沖縄返還というストラテジー（戦略）はもう決まっていたのかもしれない。核抜きといたつて、別に沖縄から核兵器を発射するわけじゃありませんからね。核攻撃をする場合、グア

ムとか、もつと遠くからでもICBMは発射できるわけです。また潜水艦搭載の核兵器（SLBM）だって、何も沖縄海域から発射する必要はないわけです。ただ、残念なことは、日本の戦略家がグアム・ドクトリンというのをあまり評価しない。クラークから飛行場を引き上げられて、沖縄から引き上げられないという理由は、僕にはわかりません。しかも、その後の一時期、それは国防省のクォーターリー・リポートで、グアム・ラインまで下げても、アメリカの戦略的地位は変わらないというような発表をしたように記憶しています。

これは在日米軍基地一般について言えることですが、日本の軍事専門家の考え方は、初めからアメリカにいてもらつたほうが都合がいいという前提に立っています。本当に戦略上アメリカが最小限必要なかどうかなんていうことは考えない。

■ 一九七〇年代前半のアメリカ

佐道 まるで話が違いますが、大使の六九年（一九六九）から七一年（一九七一）までの在勤の時ですけれども、帰られる前とか、かなりいろいろいるところにアメリカはいらっしゃいましたか。

菊地 ずいぶん旅行しました。

佐道 つまり、ベトナム戦争の真つ盛りといえますか。戦争の影響もあつてだいぶ暗くなつていくというようなアメリカがイメージされますが、大使ご自身はその前もご存じでいらつしやるわけですから、比べてみて、この時に行かれたアメリカについてはどのような印象でいらつしやいますか。もちろん地域差もいろいろあると思います。

菊地 日常生活そのものはそう変わらないのね。ベトナム戦争とというのは一万マイル彼方でやつた話ですからね。

佐道 戦争自体はそうですね。

菊地 ええ。

佐道 東海岸と西海岸というのはだいぶ雰囲気違いますか。

菊地 違うと思います。あの頃は、この前も言ったように、アメリカの国内の世論が割れてるし、政府部内でも割れている。それから、反ベトナム・デモが十万人規模で起こる。そういう時ですから、われわれは「アメリカさんは大変だな」というような感じ以外のなものでもなかったですね。ただあれでアメリカが潰れるとかという話じゃありませんからね。

佐道 ベトナム戦争もそうですけども、大使は五〇年代六〇年代といういちばん輝かしい時代に行かれたわけですね。留学もされて、七〇年代はベトナムの影もあり、ヒッピーとか、最もアメリカのいろんな流動的な時期に行かれたわけですね。おそらく前と比較していろいろご覧になっていたと思いますけども、アメリカは変わったなというご印象でしたか。それとも、基本的にはアメリカというのは変わらないなという感じですか。

菊地 僕はよくパーミシブ・ソサエティ（許容的社会）と言う

んだけど、アメリカは六〇年代の「許容的社会」からは少しずつ変わってしまいました。それは許容的社会とか、ヒッピーとか、ポットから学生運動とか、デモの方に変わりつつあった。七〇年代になると反ベトナム運動とか、そういうほうが社会運動としては強くなったんじゃないですか。ベトナム戦争に行くのは嫌だという、クリントンみたいな人もいた。ただベトナム戦争は、アメリカが国の存亡を賭けて戦ったという戦争じゃありません。自分で後手を縛りつけながらやったわけでしょう。北爆はするけれども、一定限度以上はやっちゃいかんとか、これ以上兵隊を送ってはいかんとか、自ら制限を課しながら戦った戦争です。

佐道 この時のアメリカ在勤時代で、七〇年代ですから、ずいぶん在米邦人も増えていると思いますし、ジャーナリストなんかもたくさんいて、特によくお会いになった方々はいらっしゃいますか。

菊地 この前話しましたね。渡辺恒雄君とかね。藤原作弥君、田久保忠衛君などがいました。

（終了）

平成15年度 文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2004年3月30日《無断転載禁》

政策研究大学院大学(政策研究院)
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2
Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446